

II 萩原遺跡の調査

D区23号土坑

図番号 写真図版	種類 器種	出土 位置	残存 状態	量目 (cm, g)	①胎土②焼成③色調	器形・整形・文様の特徴	備考
第175図 No6 P L-105	古銭	覆土	完形	径 2.53 厚 0.15 重 3.89	銅製	寛永通宝 (文銭)	5枚凝着、布付着状態で出土。 背紋「文」
第175図 No7 P L-105	古銭	覆土	完形	径 2.43 厚 0.12 重 2.39	銅製	寛永通宝 (新寛永)	5枚凝着、布付着状態で出土。
第175図 No8 P L-105	古銭	覆土	完形	径 2.35 厚 0.14 重 2.73	銅製	寛永通宝 (新寛永)	5枚凝着、布付着状態で出土。
第175図 No9 P L-105	古銭	覆土	完形	径 2.47 厚 0.12 重 2.77	銅製	寛永通宝 (古寛永)	7枚凝着、布付着状態で出土。
第175図 No10 P L-105	古銭	覆土	完形	径 2.54 厚 0.15 重 3.96	銅製	寛永通宝 (古寛永)	7枚凝着、布付着状態で出土。
第175図 No11 P L-105	古銭	覆土	完形	径 2.49 厚 0.12 重 3.01	銅製	寛永通宝 (古寛永)	7枚凝着、布付着状態で出土。
第175図 No12 P L-105	古銭	覆土	完形	径 2.41 厚 0.14 重 3.15	銅製	寛永通宝 (古寛永)	7枚凝着、布付着状態で出土。
第175図 No13 P L-105	古銭	覆土	完形	径 2.34 厚 0.17 重 2.87	銅製	寛永通宝	7枚凝着、布付着状態で出土。
第175図 No14 P L-105	古銭	覆土	完形	径 2.25 厚 0.12 重 2.03	銅製	寛永通宝 (古寛永)	7枚凝着、布付着状態で出土。
第175図 No15 P L-105	古銭	覆土	完形	径 2.20 厚 0.11 重 1.34	銅製	寛永通宝	7枚凝着、布付着状態で出土。
第175図 No16 P L-105	火打金	覆土	ほぼ 完形	長 2.6 幅 6.4 厚 0.85	鉄製	山型。頂部に穿孔。錆化が顕著。	
第175図 No17 P L-106	鉦	覆土	ほぼ 完形	径 3.2 高 3.0 重 15.45	銅製	頂部に環状の吊り金具を持つ。	
第175図 No18 P L-106	飾り金具	覆土	底部 1/2	径 3.2 厚 重 2.23	銅製	上部欠損。表面渡金。台座裏に金糸付着。輪宝状の飾り金具。	裏に金糸残存
第175図 No19 P L-106	飾り金具	覆土	上部 底部 3/5	径 3.2 厚 1.1 重 2.88	銅製	上部殆ど欠損。表面渡金。台座裏に金糸付着。輪宝状の飾り金具。	裏に金糸残存
第175図 No20 P L-106	飾り金具	覆土	ほぼ 完形	径 3.5 厚 1.3 重 3.0	銅製	台座一部欠損。表面渡金。台座裏に金糸付着。輪宝状の飾り金具。	裏に金糸残存
第175図 No21 P L-106	飾り金具	覆土	ほぼ 完形	径 3.3 厚 1.2 重 3.31	銅製	上部一部欠損。表面渡金。台座裏に金糸付着。輪宝状の飾り金具。	裏に金糸残存
第175図 No22 P L-106	飾り金具	覆土	完形	径 3.25 厚 1.3 重 3.83	銅製	表面渡金。台座裏に金糸付着。輪宝状の飾り金具。	裏に金糸残存
第175図 No23 P L-106	飾り金具	覆土	ほぼ 完形	径 3.2 厚 1.3 重 4.70	銅製	台座一部欠損。表面渡金。台座裏に金糸付着。輪宝状の飾り金具。	裏に金糸残存
第175図 No24 P L-106	鏡	覆土	ほぼ 完形	長 8.3 幅 5.9 厚 0.4	銅を主体とした合金	裏面に1対の紐を有し、中央「蔦と木瓜」の家紋を扶み右上に「玉」、左下に「川」の線文を施す。	重量35.81g

## 3 検出された遺構と遺物

## D区27号土坑

図番号 写真図版	種類 器種	出土 位置	残存 状態	量目 (cm, g)	①胎土②焼成③色調	器形・整形・文様の特徴	備考
第176図 No1 P L-106	古銭	覆土	ほぼ 完形	径 2.48 厚 0.13 重 3.06	銅製	寛永通宝 (古寛永)	

## D区31号土坑

第177図 No1 P L-106	古銭	覆土	ほぼ 完形	径 2.36 厚 0.16 重 2.82	銅製	寛永通宝 (新寛永)	3枚凝着、布付 着状態で出土。
第177図 No2 P L-106	古銭	覆土	ほぼ 完形	径 2.43 厚 0.17 重 3.23	銅製	寛永通宝 (新寛永)	3枚凝着、布付 着状態で出土。
第177図 No3 P L-106	古銭	覆土	ほぼ 完形	径 2.37 厚 0.16 重 2.55	銅製	寛永通宝 (新寛永)	3枚凝着、布付 着状態で出土。
第177図 No5 P L-106	古銭	覆土	ほぼ 完形	径 2.36 厚 0.14 重 3.56	鉄製	寛永通宝 (新寛永)	
第177図 No6 P L-106	古銭	覆土	ほぼ 完形	径 2.31 厚 0.13 重 2.90	銅製	寛永通宝 (新寛永)	
第177図 No7 P L-106	古銭	覆土	ほぼ 完形	径 2.32 厚 0.13 重 2.83	鉄製	寛永通宝 (新寛永)	
第177図 No8 P L-106	古銭	覆土	ほぼ 完形	径 2.46 厚 0.15 重 2.76	銅製	寛永通宝 (新寛永)	

## D区33号土坑

第179図 No1 P L-107	古銭	覆土	ほぼ 完形	径 2.53 厚 0.17 重 3.20	銅製	寛永通宝 (古寛永)	
第179図 No2 P L-107	古銭	覆土	ほぼ 完形	径 2.34 厚 0.14 重 2.58	銅製	寛永通宝 (新寛永)	
第179図 No3 P L-107	古銭	覆土	ほぼ 完形	径 2.63 厚 0.27 重 2.21	鉄製	寛永通宝	
第179図 No4 P L-107	古銭	覆土	ほぼ 完形	径 2.48 厚 0.19 重 3.82	銅製	寛永通宝 (新寛永)	
第179図 No5 P L-107	古銭	覆土	ほぼ 完形	径 2.32 厚 0.12 重 2.59	銅製	寛永通宝 (新寛永)	
第179図 No6 P L-107	古銭	覆土	ほぼ 完形	径 2.47 厚 0.14 重 3.54	銅製	寛永通宝 (新寛永)	
No7 P L-107	古銭	覆土	ほぼ 完形	径 2.62 厚 0.26 重 2.59	鉄製	寛永通宝	4枚凝着、布付 着状態で出土。 拓本不可
第179図 No8 P L-107	古銭	覆土	ほぼ 完形	径 2.35 厚 0.11 重 2.07	銅製	寛永通宝 (新寛永)	4枚凝着、布付 着状態で出土。
第179図 No9 P L-107	古銭	覆土	ほぼ 完形	径 2.46 厚 0.12 重 2.61	銅製	寛永通宝 (古寛永)	4枚凝着、布付 着状態で出土。
第179図 No10 P L-107	古銭	覆土	ほぼ 完形	径 2.42 厚 0.11 重 2.77	銅製	寛永通宝 (新寛永)	4枚凝着、布付 着状態で出土。 布付着
第179図 No11 P L-107	鎌	覆土	部分	長 幅 4.4 厚 0.2	鉄製	端部は欠損。全体的に錆化が顕著。	



II 萩原遺跡の調査

D区35号土坑

図番号 写真図版	種類 器種	出土 位置	残存 状態	量目 (cm, g)	①胎土②焼成③色調	器形・整形・文様の特徴	備考
第180図 No1 P L-107	古銭	覆土	ほぼ 完形	径 2.44 厚 0.11 重 2.55	銅製	寛永通宝 (新寛永)	
No2 P L-107	古銭	覆土	ほぼ 完形	径 2.29 厚 0.12 重 2.07	銅製	寛永通宝 (結晶付着のため拓本不可)	6枚凝着、布付 着で出土。 表面に結晶。
第180図 No3 P L-107	古銭	覆土	ほぼ 完形	径 2.35 厚 0.14 重 2.54	銅製	寛永通宝 (新寛永)	6枚凝着、布付 着状態で出土。
第180図 No4 P L-107	古銭	覆土	ほぼ 完形	径 2.54 厚 0.13 重 2.76	銅製	寛永通宝 (新寛永)	6枚凝着、布付 着状態で出土。
No5 P L-107	古銭	覆土	ほぼ 完形	径 2.48 厚 0.15 重 2.84	銅製	寛永通宝 (結晶付着のため拓本不可)	6枚凝着、布付 着状態で出土。 表面に結晶。
No6 P L-107	古銭	覆土	ほぼ 完形	径 2.44 厚 0.145 重 3.28	銅製	寛永通宝 (結晶付着のため拓本不可)	6枚凝着、布付 着状態で出土。 表面に結晶。
第180図 No7 P L-107	古銭	覆土	ほぼ 完形	径 2.34 厚 0.15 重 2.02	銅製	寛永通宝 (新寛永)	6枚凝着、布付 着状態で出土。 裏面に布付着。

D区37号土坑

第181図 No1 P L-107	古銭	覆土	ほぼ 完形	径 2.40 厚 0.16 重 1.81	銅製	寛永通宝 (新寛永)	14枚凝着、布付 着状態で出土。 裏面に布。
第M181図 No2 P L-107	古銭	覆土	ほぼ 完形	径 2.32 厚 0.15 重 2.42	銅製	寛永通宝	14枚凝着、布付 着状態で出土。
第181図 No3 P L-107	古銭	覆土	ほぼ 完形	径 2.41 厚 0.12 重 2.23	銅製	寛永通宝 (新寛永)	14枚凝着、布付 着状態で出土。
第181図 No4 P L-107	古銭	覆土	ほぼ 完形	径 2.45 厚 0.13 重 3.24	銅製	寛永通宝 (新寛永)	14枚凝着、布付 着状態で出土。
第181図 No5 P L-107	古銭	覆土	ほぼ 完形	径 2.43 厚 0.14 重 3.04	銅製	寛永通宝 (新寛永)	14枚凝着、布付 着状態で出土。
第181図 No6 P L-107	古銭	覆土	ほぼ 完形	径 2.38 厚 0.14 重 3.00	銅製	寛永通宝 (新寛永)	14枚凝着、布付 着状態で出土。
第181図 No7 P L-107	古銭	覆土	ほぼ 完形	径 2.52 厚 0.12 重 2.65	銅製	寛永通宝 (新寛永)	14枚凝着、布付 着状態で出土。
第181図 No8 P L-107	古銭	覆土	ほぼ 完形	径 2.37 厚 0.13 重 2.62	銅製	寛永通宝 (新寛永)	14枚凝着、布付 着状態で出土。
第181図 No9 P L-107	古銭	覆土	ほぼ 完形	径 2.36 厚 0.21 重 3.60	銅製	寛永通宝 (新寛永)	14枚凝着、布付 着状態で出土。
第181図 No10 P L-107	古銭	覆土	ほぼ 完形	径 2.42 厚 0.15 重 3.14	銅製	寛永通宝 (新寛永)	14枚凝着、布付 着状態で出土。
第181図 No11 P L-107	古銭	覆土	ほぼ 完形	径 2.49 厚 0.18 重 3.92	銅製	寛永通宝 (新寛永)	14枚凝着、布付 着状態で出土。
第181図 No12 P L-107	古銭	覆土	ほぼ 完形	径 2.54 厚 0.19 重 2.59	鉄製	寛永通宝?	14枚凝着、布付 着状態で出土。

3 検出された遺構と遺物

D区37号土坑

図番号 写真図版	種類 器種	出土 位置	残存 状態	量目 (cm, g)	①胎土②焼成③色調	器形・整形・文様の特徴	備考
第181図 No13 P L-107	古銭	覆土	小片	径 2.55 厚 0.24 重 1.32	鉄製	寛永通宝?	14枚凝着、布付着状態で出土。
第181図 No14 P L-108	古銭	覆土	小片	径 2.39 厚 0.20 重 0.75	鉄製	寛永通宝?	14枚凝着、布付着状態で出土。
第181図 No18 P L-108	陶磁器 灯明皿	覆土	口縁 底部 2/5	口 9.2 底 1.7 高 1.7	①細粒砂 ②還元焰 ③2.5YR暗赤褐	ロクロ成形。外面体部にロクロ痕。外面口縁部及び内面全面に施釉。外面底部に僅かな回転系切り痕を残す。	

D区38号土坑

第183図 No1 P L-108	古銭	覆土	ほぼ 完形	径 2.47 厚 0.14 重 3.12	銅製	寛永通宝 (古寛永)	18枚凝着、布付着状態で出土。
第183図 No2 P L-108	古銭	覆土	ほぼ 完形	径 2.40 厚 0.13 重 2.47	銅製	寛永通宝 (新寛永)	18枚凝着、布付着状態で出土。 背紋「元」
第183図 No3 P L-108	古銭	覆土	ほぼ 完形	径 2.39 厚 0.13 重 2.68	銅製	寛永通宝 (新寛永)	18枚凝着、布付着状態で出土。
第183図 No4 P L-108	古銭	覆土	ほぼ 完形	径 2.49 厚 0.15 重 2.96	銅製	寛永通宝 (新寛永)	18枚凝着、布付着状態で出土。
第183図 No5 P L-108	古銭	覆土	ほぼ 完形	径 2.38 厚 0.11 重 2.47	銅製	寛永通宝 (新寛永)	18枚凝着、布付着状態で出土。
第183図 No6 P L-108	古銭	覆土	ほぼ 完形	径 2.48 厚 0.13 重 3.19	銅製	寛永通宝 (新寛永)	18枚凝着、布付着状態で出土。
第183図 No7 P L-108	古銭	覆土	ほぼ 完形	径 2.32 厚 0.13 重 2.44	銅製	寛永通宝 (新寛永)	18枚凝着、布付着状態で出土。
第183図 No8 P L-108	古銭	覆土	ほぼ 完形	径 2.45 厚 0.14 重 2.58	銅製	寛永通宝 (新寛永)	18枚凝着、布付着状態で出土。 背紋「元」
第183図 No9 P L-108	古銭	覆土	ほぼ 完形	径 2.52 厚 0.15 重 3.34	銅製	寛永通宝 (新寛永)	18枚凝着、布付着状態で出土。
第183図 No10 P L-108	古銭	覆土	ほぼ 完形	径 2.42 厚 0.12 重 2.57	銅製	寛永通宝 (新寛永)	18枚凝着、布付着状態で出土。
第183図 No11 P L-108	古銭	覆土	ほぼ 完形	径 2.49 厚 0.15 重 3.16	銅製	寛永通宝 (古寛永)	18枚凝着、布付着状態で出土。
第183図 No12 P L-108	古銭	覆土	ほぼ 完形	径 2.34 厚 0.15 重 2.47	銅製	寛永通宝 (新寛永)	18枚凝着、布付着状態で出土。
No13 P L-108	古銭	覆土	ほぼ 完形	径 2.31 厚 0.13 重 1.96	銅製	寛永通宝 (裏面にキャブライト及び白色結晶付着のため拓本不可)	18枚凝着、布付着状態で出土。
No14 P L-108	古銭	覆土	ほぼ 完形	径 2.50 厚 0.15 重 2.82	銅製	寛永通宝 (表面にキャブライト及び白色結晶付着のため拓本不可)	18枚凝着、布付着状態で出土。
No15 P L-108	古銭	覆土	ほぼ 完形	径 2.53 厚 0.15 重 2.98	銅製	寛永通宝 (裏面に白色結晶付着のため拓本不可)	18枚凝着、布付着状態で出土。
第183図 No16 P L-108	古銭	覆土	ほぼ 完形	径 2.35 厚 0.12 重 2.57	銅製	寛永通宝 (新寛永)	18枚凝着、布付着状態で出土。

II 萩原遺跡の調査

D区38号土坑

図番号 写真図版	種類 器種	出土 位置	残存 状態	量目 (cm, g)	①胎土②焼成③色調	器形・整形・文様の特徴	備考
第183図 No17 P L-108	古銭	覆土	ほぼ 完形	径 2.33 厚 0.12 重 2.50	銅製	寛永通宝 (新寛永)	18枚凝着、布付 着状態で出土。
第183図 No18 P L-108	古銭	覆土	ほぼ 完形	径 2.34 厚 0.14 重 2.60	銅製	寛永通宝	18枚凝着、布付 着状態で出土。

D区42号土坑

第184図 No1 P L-108	古銭	覆土	ほぼ 完形	径 2.30 厚 0.13 重 2.72	銅製	寛永通宝 (新寛永)	10枚凝着、布付 着状態で出土。 裏面に布付着。
第184図 No2 P L-108	古銭	覆土	ほぼ 完形	径 2.34 厚 0.14 重 2.69	銅製	寛永通宝 (新寛永)	10枚凝着、布付 着状態で出土。
第184図 No3 P L-108	古銭	覆土	ほぼ 完形	径 2.34 厚 0.12 重 2.33	銅製	寛永通宝	10枚凝着、布付 着状態で出土。
第184図 No4 P L-108	古銭	覆土	ほぼ 完形	径 2.28 厚 0.12 重 2.16	銅製	寛永通宝 (新寛永)	10枚凝着、布付 着状態で出土。
第184図 No5 P L-108	古銭	覆土	ほぼ 完形	径 2.44 厚 0.20 重 3.46	銅製	寛永通宝 (新寛永)	10枚凝着、布付 着状態で出土。
第184図 No6 P L-108	古銭	覆土	ほぼ 完形	径 2.34 厚 0.12 重 2.71	銅製	寛永通宝 (新寛永)	10枚凝着、布付 着状態で出土。
第184図 No7 P L-108	古銭	覆土	ほぼ 完形	径 2.36 厚 0.13 重 2.95	銅製	寛永通宝 (新寛永)	10枚凝着、布付 着状態で出土。
第184図 No8 P L-108	古銭	覆土	ほぼ 完形	径 2.44 厚 0.16 重 3.38	銅製	寛永通宝 (新寛永)	10枚凝着、布が 付着した状態で 出土。
第184図 No9 P L-108	古銭	覆土	ほぼ 完形	径 2.47 厚 0.13 重 2.77	銅製	寛永通宝 (新寛永)	10枚凝着、布が 付着した状態で 出土。
第184図 No10 P L-108	古銭	覆土	小片	径 2.48 厚 0.21 重 1.38	鉄製	寛永通宝	10枚凝着、布付 着状態出土。分 離作業中欠損

D区43号土坑

第185図 No1 P L-109	かわらけ	覆土	完形	口 10.65 底 4.8 高 2.75	①粗粒砂 ②酸化焰 ③7.5YR鈍い橙	口縁非水平。ロクロ成形。外面底部に回転糸切り後の 敷物圧痕が残る。	底部拓本
第185図 No2 P L-109	かわらけ	覆土	完形	口 10.9 底 2.5 高 2.65	①粗粒砂 ②酸化焰 ③5YR橙	口縁非水平。ロクロ成形。外面底部に回転糸切り後の 敷物圧痕が残る。	底部拓本

D区44号土坑

第186図 No1 P L-109	古銭	覆土	ほぼ 完形	径 2.45 厚 0.22 重 2.80	鉄製	寛永通宝	錆化が著しい。
第186図 No2 P L-109	古銭	覆土	ほぼ 完形	径 2.43 厚 0.23 重 2.65	鉄製	寛永通宝	錆化が著しい。
第186図 No3 P L-109	古銭	覆土	ほぼ 完形	径 2.36 厚 0.13 重 2.69	銅製	寛永通宝 (新寛永)	
第186図 No4 P L-109	古銭	覆土	ほぼ 完形	径 2.36 厚 0.13 重 2.61	銅製	寛永通宝 (新寛永)	

3 検出された遺構と遺物

D区44号土坑

図番号 写真図版	種類 器種	出土 位置	残存 状態	量目 (cm, g)	①胎土②焼成③色調	器形・整形・文様の特徴	備考
第186図 No5 P L-109	古銭	覆土	ほぼ 完形	径 2.38 厚 0.12 重 2.49	銅製	寛永通宝 (新寛永)	

D区52号土坑

第187図 No1 P L-109	古銭	覆土	ほぼ 完形	径 2.30 厚 0.15 重 2.21	銅製	寛永通宝	13枚凝着した状態 で出土。
第187図 No2 P L-109	古銭	覆土	ほぼ 完形	径 2.33 厚 0.14 重 2.63	銅製	寛永通宝 (新寛永)	13枚凝着した状態 で出土。
第187図 No3 P L-109	古銭	覆土	ほぼ 完形	径 2.31 厚 0.16 重 2.76	銅製	寛永通宝	13枚凝着した状態 で出土。
第187図 No4 P L-109	古銭	覆土	ほぼ 完形	径 2.33 厚 0.13 重 3.07	鉄製	寛永通宝 (新寛永)	13枚凝着した状態 で出土。
第187図 No5 P L-109	古銭	覆土	ほぼ 完形	径 2.39 厚 0.15 重 2.95	銅製	寛永通宝 (新寛永)	13枚凝着した状態 で出土。
第187図 No6 P L-109	古銭	覆土	ほぼ 完形	径 2.50 厚 0.15 重 3.93	鉄製	寛永通宝 (新寛永)	13枚凝着した状態 で出土。 錆化が顕著。
第187図 No7 P L-109	古銭	覆土	凝着	径 厚 重	鉄製	寛永通宝 (凝着)	13枚凝着した状態 で出土。 錆化が顕著。
第187図 No8 P L-109	古銭	覆土	凝着	径 厚 重	鉄製	寛永通宝 (凝着)	13枚凝着した状態 で出土。 錆化が顕著。
第187図 No9 P L-109	古銭	覆土	凝着	径 厚 重	鉄製	寛永通宝 (凝着)	13枚凝着した状態 で出土。 錆化が顕著。
第187図 No10 P L-109	古銭	覆土	凝着	径 厚 重	鉄製	寛永通宝 (凝着)	13枚凝着した状態 で出土。 錆化が顕著。
第187図 No11 P L-109	古銭	覆土	凝着	径 厚 重	鉄製	寛永通宝 (凝着)	13枚凝着した状態 で出土。 錆化が顕著。
第187図 No12 P L-109	古銭	覆土	凝着	径 厚 重	鉄製	寛永通寶 (凝着)	13枚凝着した状態 で出土。 錆化が顕著。

D区53号土坑

第188図 No1 P L-109	陶器 椀	覆土	ほぼ 完形	口 10.1 底 2.0 高 6.4	①微～細粒砂 ②還元焰 ③7.5YR鈍い褐	刷毛目白土掛け全面施釉。	江戸時代後期 唐津
-------------------------	---------	----	----------	--------------------------	-----------------------------	--------------	--------------

D区57号土坑

第189図 No1 P L-109	陶磁器 皿	覆土	口縁 底部 1/5	口 10.0 底 2.1 高 2.1	①細粒砂 ②還元焰、施釉 ③2.5YR暗赤褐	ロクロ成形。外面体部にロクロ痕。外面口縁部、内面 全面に施釉。	
-------------------------	----------	----	-----------------	--------------------------	------------------------------	------------------------------------	--

D区58号土坑

第190図 No1 P L-109	古銭	覆土	ほぼ 完形	径 2.54 厚 0.24 重 2.39	銅製	寛永通宝	表面に布付着。
第190図 No2 P L-109	古銭	覆土	ほぼ 完形	径 2.57 厚 0.17 重 2.9	銅製	寛永通宝	表面に布付着。
第190図 No3 P L-109	古銭	覆土	ほぼ 完形	径 2.46 厚 0.15 重 3.08	銅製	寛永通宝 (古寛永)	11枚凝着、布付 着状態で出土。 白色結晶付着。

II 萩原遺跡の調査

D区58号土坑

図番号 写真図版	種類 器種	出土 位置	残存 状態	量目 (cm, g)	①胎土②焼成③色調	器形・整形・文様の特徴	備考
第190図 No4 PL-109	古銭	覆土	ほぼ 完形	径 2.38 厚 0.12 重 2.41	銅製	寛永通宝 (新寛永)	11枚凝着、布付 着状態で出土。 白色結晶付着。
第190図 No5 PL-109	古銭	覆土	ほぼ 完形	径 2.44 厚 0.16 重 3.59	銅製	寛永通宝 (古寛永)	11枚凝着、布付 着状態で出土。 白色結晶付着。
第190図 No6 PL-109	古銭	覆土	ほぼ 完形	径 2.33 厚 0.12 重 2.38	銅製	寛永通宝 (新寛永)	11枚凝着、布付 着状態で出土。 白色結晶付着。
第190図 No7 PL-109	古銭	覆土	ほぼ 完形	径 2.26 厚 0.13 重 2.41	銅製	寛永通宝 (新寛永)	11枚凝着、布付 着状態で出土。 白色結晶付着。
第190図 No8 PL-109	古銭	覆土	ほぼ 完形	径 2.34 厚 0.13 重 3.01	銅製	寛永通宝 (新寛永)	11枚凝着、布付 着状態で出土。 白色結晶付着。
第190図 No9 PL-109	古銭	覆土	ほぼ 完形	径 2.35 厚 0.12 重 2.61	銅製	寛永通宝 (新寛永)	11枚凝着、布付 着状態で出土。 白色結晶付着。
第190図 No10 PL-109	古銭	覆土	ほぼ 完形	径 2.56 厚 0.16 重 4.05	銅製	寛永通宝 (新寛永)	11枚凝着、布付 着状態で出土。 白色結晶付着。
第190図 No11 PL-109	古銭	覆土	ほぼ 完形	径 2.29 厚 0.12 重 2.75	銅製	寛永通宝 (新寛永)	11枚凝着、布付 着状態で出土。 白色結晶付着。
No12 PL-109	古銭	覆土	ほぼ 完形	径 2.36 厚 0.14 重 2.93	銅製	寛永通宝 (キャブライト結晶付着のため拓本不可)	11枚凝着、布付 着状態で出土。 裏面結晶付着。
No14 PL-109	古銭	覆土	ほぼ 完形	径 2.39 厚 0.13 重 2.74	銅製	寛永通宝 (キャブライト結晶付着のため拓本不可)	11枚凝着、布付 着状態で出土。 裏面結晶付着。

D区59号土坑

第191図 No1 PL-109	古銭	覆土	ほぼ 完形	径 2.38 厚 0.12 重 2.70	銅製	元豊通宝	北宋 1078年
第191図 No2 PL-109	かわらけ	覆土	完形	口 9.6 底 6.2 高 2.2	①粗粒砂 ②酸化焰 ③不明	ロクロ成形。外面底部及び口縁部全周に厚く油煙が付 着する。かなり使い込まれており内全面に有機物付着。	

C区1号土坑

第252図 No36 PL-102	弥生土器 鉢	C区 1土 覆土	口縁 胴 小片	口 29.4 底 高	①細礫細砂多い ②均一 ③黄橙	口縁は不整形で小さく波打つ。外面全体に斜～縦位へ ラ削り。口縁～内面はナデ。	II期 (中期前半) 墓に使う物か
-------------------------	-----------	----------------	---------------	------------------	-----------------------	---	-------------------------

遺構外遺物

第255図 No1 PL-110	打製石鏃	A区 21号 住居	ほぼ 完形	長 3.2 幅 1.85 厚 0.4	黒色頁岩	無茎凹基。幅広の剥片素材。片脚を欠損。押圧剥離に よる周辺調整が少ない。I類	重さ2.23g
第255図 No2 PL-110	打製石鏃	855- 450G	ほぼ 完形	長 2.6 幅 1.65 厚 0.45	黒色頁岩	有茎。縦長剥片素材。右側の返し部分の様子から再調 整の可能性がある。茎部の欠損は新しい。II類	重さ1.38g
第255図 No3 PL-110	削器	A区 32号 住居	ほぼ 完形	長 4.5 幅 7.7 厚 1.4	黒色頁岩	一縁辺に両面への調整。縦長剥片素材。礫面残存。 I a類	重さ51.27g
第255図 No4 PL-110	削器	A区 14号 住居	ほぼ 完形	長 4.1 幅 6.9 厚 1.0	黒色頁岩	一縁辺に片面への調整。裏面側は使用による痕跡。横 長剥片素材。礫面打面。礫面残存。I b類	重さ35.09g
第255図 No5 PL-110	削器	A区 13号 住居	ほぼ 完形	長 5.75 幅 7.0 厚 1.1	黒色頁岩	隅丸の四角形の三つの縁辺に調整。礫面打面。礫面残 存。II a類	重さ53.05g

## 3 検出された遺構と遺物

## 遺構外遺物

図番号 写真図版	種類 器種	出土 位置	残存 状態	量目 (cm, g)	①胎土②焼成③色調	器形・整形・文様の特徴	備考
第255図 No6 P L-110	削器	A区 表採	ほぼ 完形	長 5.0 幅 6.8 厚 0.83	黒色頁岩	二縁辺に片面のみの調整。裏面側は使用による痕跡。横長剥片素材。礫面打面。礫面残存。II b類	重さ23.11g
第255図 No7 P L-110	削器	A区 6号 住居	部分	長 4.0 幅 5.2 厚 0.9	黒色頁岩	二縁辺に片面のみの調整。裏面側は使用による痕跡。横長剥片素材。礫面打面。礫面残存。II b類	重さ27.64g
第255図 No8 P L-110	削器	B区 表採	ほぼ 完形	長 3.7 幅 4.8 厚 1.3	黒色安山岩	二縁辺に片面のみの調整。横長剥片素材。礫面打面か。礫面残存。II b類	重さ21.50g
第255図 No9 P L-110	削器	A区 表採	ほぼ 完形	長 5.3 幅 9.3 厚 1.1	黒色頁岩	二縁辺に片面のみの調整。横長剥片素材。礫面打面か。礫面残存。II b類	重さ80.04g
第255図 No10 P L-110	削器	A区 表採	ほぼ 完形	長 6.35 幅 6.5 厚 1.5	黒色頁岩	周縁に片面のみの調整。剥片素材。礫面打面。礫面残存。III a類	重さ96.23g
第255図 No11 P L-110	削器	A区 6号 住居	ほぼ 完形	長 3.3 幅 5.3 厚 1.4	黒色頁岩	周縁に片面のみの調整。剥片素材。礫面残存。III a類だ	重さ27.88g
第256図 No12 P L-110	削器	A区 表採	ほぼ 完形	長 9.7 幅 8.7 厚 1.8	黒色頁岩	周縁に片面のみの調整。剥片素材。礫面打面。礫面残存。III b類	重さ190g
第256図 No13 P L-110	削器	B区 表採	ほぼ 完形	長 6.1 幅 1.3 厚 8.6	黒色頁岩	周縁に片面のみの調整。剥片素材。礫面打面。礫面残存。III b類	重さ87.58g
第256図 No14 P L-111	打製石斧	B区 7層	部分	長 10.6 幅 3.8 厚 0.9	変質玄武岩	両縁辺が平行な短冊形。刃部を欠損。分割礫素材。礫面打面。礫面残存。I a類	重さ45.73g
第256図 No15 P L-110	打製石斧	D区 6号 住居	部分	長 7.4 幅 4.0 厚 1.1	黒色頁岩	両縁辺が平行な短冊形。刃部を欠損。頭部も一部欠損か。横長剥片素材。I a類	重さ51.46g
第256図 No16 P L-110	打製石斧	A区 18号 住居	部分	長 7.8 幅 3.7 厚 1.0	黒色頁岩	両縁辺が頭部側が平行で、刃部側が撥形。横長剥片素材。礫面打面。礫面残存。II a類	重さ40.37g
第256図 No17 P L-110	打製石斧	854- 453G	部分	長 8.1 幅 5.1 厚 2.0	粗流輝石安山岩	両縁辺が頭部側が平行で、刃部側が撥形。分割礫素材。礫面打面。礫面残存。II a類	重さ88.56g
第257図 No18 P L-111	打製石斧	A区 6号 住居	部分	長 8.7 幅 6.0 厚 1.9	灰色安山岩	撥形。頭部を欠損している。分割礫素材。礫面打面。礫面残存。II a類	重さ132g
第257図 No19 P L-111	削器	A区 表採	ほぼ 完形	長 10.0 幅 5.1 厚 2.7	黒色頁岩	両縁辺が平行な短冊形。分割礫素材。礫面打面か。礫面残存。I b類	重さ148g
第257図 No20 P L-111	打製石斧	A区 14号 住居	部分	長 10.4 幅 6.7 厚 3.1	黒色頁岩	両縁辺が平行な短冊形。分割礫素材。礫面打面か。礫面残存。I b類	重さ220g
第257図 No21 P L-111	石核	A区 35号 住居	ほぼ 完形	長 5.9 幅 8.6 厚 1.8	黒色頁岩	分割面を打面に一縁に連続した剥片剥離。分割礫素材。礫面打面。礫面残存。I a類	重さ138g
第257図 No22 P L-111	石核	A区 6号 住居	ほぼ 完形	長 7.4 幅 8.0 厚 3.0	畦質頁岩	小口面に連続した剥片剥離。礫面残存。上・下面に前段階の剥片剥離面と石理。I b類	重さ128g
第258図 No23 P L-111	石核	A区 6号 住居	ほぼ 完形	長 7.0 幅 7.6 厚 4.1	黒色頁岩	周縁から片面のみの求心的な剥片剥離。分割礫素材。礫面打面。礫面残存。II a類	重さ278g
第258図 No24 P L-111	石核	B区 表採	ほぼ 完形	長 6.8 幅 8.1 厚 1.7	粗流輝石安山岩	周縁からの求心的な剥片剥離。裏面に打面調整。分割礫素材。礫面打面。礫面残存。II a類	重さ109g

II 萩原遺跡の調査

遺構外遺物

図番号 写真図版	種類 器種	出土 位置	残存 状態	量目 (cm, g)	①胎土②焼成③色調	器形・整形・文様の特徴	備考
第258図 No25 PL-111	深鉢	A区 6号 住居	体部 破片	口 底 高	①細粒砂 ②良好 ③5YR鈍橙	体部下半か。器厚は薄手で内面凹凸が顕著。LRを斜位に施す。原体幅・施文幅は短い。	草創期 押圧縄文
第258図 No26 PL-111	深鉢	A区 6号 住居	体部 破片	口 底 高	①細石英 ②良好 ③7.5YR鈍橙	器厚薄手で内面の凹凸顕著。LRを縦位に施す	草創期 押圧縄文
第258図 No27 PL-111	深鉢	A区 6号 住居	体部 破片	口 底 高	①細石英 ②良好 ③10YR鈍黄色	外面剥落。内面の凹凸が顕著。	草創期 押圧縄文?
第258図 No28 PL-111	深鉢	A区 6号 住居	体部 破片	口 底 高	①細黒色粒 ②良好 ③7.5YR鈍橙	極僅かに彎曲を呈す体部形態。器厚薄手。内面凹凸顕著。LRの斜位施文	草創期 押圧縄文
第258図 No29 PL-111	深鉢	A区 6号 住居	体部 破片	口 底 高	①粗白色粒 ②良好 ③7.5YR鈍橙	体部上半か。口縁部にかけて僅かに肥厚し外反する。内面凹凸顕著。LRを斜位に施す	草創期 押圧縄文
第258図 No30 PL-111	深鉢	A区 14号 住居	体部 破片	口 底 高	①粗白色粒 ②良好 ③2.5YR赤褐	器厚やや厚手。3段の横位爪形文が施される。爪形の片側は押圧により僅かに盛り上がる	草創期 爪形文
第258図 No31 PL-111	深鉢	A区 28号 住居	口縁 部破 片	口 底 高	①粗白色粒 ②良好 ③10YR鈍黄橙	口縁部小径か。内面僅かな凹凸が見られる。爪形文は斜位施文で口唇部端部にまで達す	草創期 爪形文
第258図 No32 PL-111	深鉢	A区 32号 住居	口縁 部破 片	口 底 高	①粗白色粒 ②良好 ③7.5YR明褐	口唇部緩やかに外反し肥厚する。内面は平滑。撚糸文は口唇部直下より縦位に施される	早期 撚糸文系
第258図 No33 PL-111	深鉢	A区 6号 住居	体部 破片	口 底 高	①細粒砂 ②堅緻 ③5YR赤褐	体部上半か。若干外反気味の形態。横位RL縄文を施す諸磯B	前期 諸磯b
第258図 No34 PL-111	深鉢	A区 7号 住居	体部 破片	口 底 高	①細粒砂 ②良好 ③2.5YR淡黄	横位平行沈線と斜位平行沈線にD字状の連続刺突文を加える諸磯B	前期諸磯b
第258図 No35 PL-111	深鉢	A区 18号 住居	口縁 部破 片	口 底 高	①細粒砂 ②良好 ③5YR鈍い赤褐	口縁部内彎する。浮線文に矢羽状の刻みを加える。全体的に乱雑な施文。器厚厚手	前期諸磯b
第259図 No36 PL-111	深鉢	A区 28号 住居	口縁 部破 片	口 底 高	①細石英等 ②良好 ③7.5YR鈍褐	口縁部直下に横位平行沈線を施す。以下平行沈線による弧状意匠か	写真撮影・拓本
第259図 No37 PL-111	深鉢	A区 6号 住居	口縁 部破 片	口 底 高	①粗砂礫 ②良好 ③7.5YR褐	おそらく口唇部が双波状に内彎する形態か。横位平行沈線を主とし、波頂部下は菱形状構成か	前期諸磯b
第259図 No38 PL-112	深鉢	A区 6号 住居	体部 破片	口 底 高	①細石英 ②堅緻 ③10YR鈍黄橙	体部上位か。地文に縦位・斜位平行沈線を施し、ボタン状貼付文と棒状貼付文を付す	前期諸磯c
第259図 No39 PL-112	深鉢	A区 6号 住居	体部 破片	口 底 高	①細粒砂 ②堅緻 ③10YR鈍橙	平行沈線を対斜位に施す。菱形あるいは三角形の空白部を残す	前期諸磯c
第259図 No40 PL-112	深鉢	A区 10号 住居	体部 破片	口 底 高	①粗白色粒 ②軟質 ③10YR鈍黄橙	地文に横位平行沈線を密接に施す。小型のボタン状貼付文を2箇1対付す	前期諸磯c
第259図 No41 PL-112	深鉢	A区 6号 住居	体部 破片	口 底 高	①粗砂礫 ②堅緻 ③7.5YR鈍橙	結節浮線文による重弧状意匠文か	前期末 十三菩提
第259図 No42 PL-112	深鉢	A区 1号 住居	体部 破片	口 底 高	①粗石英 ②良好 ③10YR鈍黄色	体部下半か。厚手の器厚を呈す。縦位RL縄文を施す	中期 加曾利EIVか
第259図 No43 PL-112	深鉢	B-6 区覆 土	体部 破片	口 底 高	①粗白色粒 ②良好 ③2.5Y灰黄	分岐細沈線で画された、磨消部と縄文施文部の交互懸垂構成か。縄文は縦位LR充填施文	中期 加曾利EIV

## 遺構外遺物

図番号 写真図版	種類 器種	出土 位置	残存 状態	量目 (cm, g)	①胎土②焼成③色調	器形・整形・文様の特徴	備考
第259図 No44 P L-112	深鉢	B-6 区覆 土	口縁 部破 片	口 底 高	①粗石英 ②良好 ③10YR灰白	口唇部肥厚し、無文の口縁部以下横位細流線を付す。 体部は弧状隆線による渦巻状意匠か。縄文はLR充填 施文	中期 加曾利EIV
第259図 No45 P L-112	深鉢	A区 18号 住居	口縁 部破 片	口 底 高	①細粒砂 ②良好 ③10YR灰黄褐	口唇部内折。無文部以下に深い沈線によるJ字あるい は銚先状の意匠か。縄文はRL横位充填	後期 称名寺
第259図 No46 P L-112	鉢?	B-3 区表 探	口縁 部破 片	口 底 高	①粗粒砂 ②軟質 ③2.5Y灰黄	内外面とも器面摩滅するため、全容は判然としない。 体部は無文で口唇部端部に深い刺突を連続する。	後期後半
第259図 No47 P L-112	注口土器	D区 表探	底部 側面 2/5	口 底 高 9.8	①細白色粒 ②堅緻 ③7.5YR橙	大型の注口土器。体部中位で屈曲。底部は張り出す。 口部下端に8字状貼付文を付す。内外面研磨	後期 堀之内2式
第259図 No48 P L-112	鉢	A区 表探	口縁 小片	口 底 高	①輝石含む粗砂多い ②均一 ③黄橙	口縁は幅広い折り返し。外面は細密条痕。内面ナデ。	晩期
第260図 No49 P L-112	弥生土器 壺	A区 表土	口縁 小片	口 底 高	①輝石等粗砂多い ② ③鈍い黄橙	内湾する受け口状口縁。口唇にヘラ刻み、口縁外面に 4条のヘラ描波状文。内外面とも研磨。ボタン状貼付 文を付す。	IV期栗林式新
第260図 No50 P L-112	弥生土器 壺	A区 850- 500G	口縁 小片	口 底 高	①微細砂含む ②均一 ③黄褐色	内外面赤彩後研磨。	V期(樽式)
第260図 No51 P L-112	弥生土器 壺	A区 28号 住居	口縁 小片	口 底 高	①白岩片の粗～細砂 ②ややムラ ③鈍い橙	口縁方形の折り返し。外面は縦、内面は横刷毛目。	V期
第260図 No52 P L-112	弥生土器 高坏	A区 21号 住居	口縁 小片	口 底 高	①白岩片、粗～細砂 ②ややムラあり ③鈍い黄橙	2ヶ1対の瘤条貼付文を付し、内外面赤彩の後、横位 研磨。	IV～V期
第260図 No53 P L-112	弥生土器 壺	A区 表探	口縁 小片	口 底 高	①粗～細砂 ②均一 ③黄褐	断面涙滴状の折り返し。口唇部に櫛状具による刻み。	V期(樽式)
第260図 No54 P L-112	弥生土器 壺	A区 表探	頸部 小片	口 底 高	①粗～細砂 ②均一 ③橙～灰黒	頸部に横位沈線。肩に浅い斜条痕。内面は横条痕か。	(I～II期)
第260図 No55 P L-112	弥生土器 壺か	B-6 区表 探	頸部 小片	口 底 高	①輝石細砂目立つ ②均一 ③鈍い黄橙	底平な三角形モチーフの沈線文と茎状具沈線による 波状文を垂下する。	IV期か
第260図 No56 P L-112	弥生土器	A区 850- 490G	肩部 小片	口 底 高	①白岩片等粗砂多い ②均一 ③黄橙	細沈線による横線区画、その上に上向き鋸歯文を描く。	IV期(中期後半)
第260図 No57 P L-113	弥生土器 壺	A区 表探	頸部 小片	口 底 高	①細砂少量含む ②内面還元 ③外:明赤褐 内:R黒褐	横位の縄文帯(原体は撚糸複数を撚ったLR)を横沈 線で区画。	IV期(中期後半)
第260図 No58 P L-113	弥生土器 壺	A区 32号 住居	頸部 小片	口 底 高	①細砂多い ②黒斑部多い ③鈍い橙	縄文帯(RL)施文後、横沈線を4条廻らし縄文帯を 画す。焼成後回転穿孔。上部欠損部は摩耗しており、 そのまま擬口縁して用いられたらしい。	IV期(中期後半 栗林式)
第260図 No59 P L-113	弥生土器 壺	A区 6号 住居	肩部 小片	口 底 高	①赤粒、白岩片粗砂 ②均一 ③外:明赤褐 内:鈍い橙	横位縄文帯の上に横位の沈線文を廻す。内面ナデ。 (LR、O段多条、O段は撚糸)	IV期(中期後半)
第260図 No60 P L-113	弥生土器 壺	A区 35号 住居	肩 小片	口 底 高	①白岩片の粗～細砂 ②還元ぎみ ③灰黄褐	横位縄文帯を3段以上廻らす。原体はR(但しO段で 撚糸を使ったと思われる)。内面ナデ。	IV期(中期後半) 赤井土・吉ヶ谷 式
第260図 No61 P L-113	弥生土器 甕	A区 35号 住居	頸部 小片	口 底 高	①白岩片の粗～細砂 ②還元ぎみ ③鈍い黄褐	横位縄文帯(R)の下端に1条の横沈線を廻らす。	No60と同一個 体
第260図 No62 P L-113	弥生土器 壺	A区 850- 490G	頸部 小片	口 底 高	①白岩片細礫含む ②ややムラ ③赤褐	横位の縄文の上をやや太い沈線で帯状区画を描く(原 体LR O段多条、O段は撚糸と思われる)。内面ナデ。	IV期(中期後半)



II 萩原遺跡の調査

遺構外遺物

図番号 写真図版	種類 器種	出土 位置	残存 状態	量目 (cm, g)	①胎土②焼成③色調	器形・整形・文様の特徴	備考
第260図 No63 P L-113	弥生土器 壺	A区 13号 住居	口縁 小片	口 底 高	①白色細砂多い ②全体にムラ ③鈍い黄	植物茎状具による横位沈線区画内をオオバコ回転圧痕 と思われる擬細文を充填する。胴無文部は刷毛目状の ナデ。内面横位刷毛目。内面ナデ。	IV期(中期後半)
第260図 No64 P L-113	弥生土器 壺	A区 13号 住居	胴 小片	口 底 高	①輝石の細砂多い ②均一 ③鈍い黄橙	細く鋭い2本平行沈線文。文様モチーフは不明。内面 ナデ。	IV期 南関東系
第260図 No65 P L-113	弥生土器 壺	A区 13号 住居	胴 小片	口 底 高	①細砂多い ②一部黒斑 ③鈍い黄橙	細い2本平行沈線による渦文あるいは同心円文。	IV期(中期後半) 南関東系
第261図 No66 P L-113	弥生土器 壺	A区 表採	肩部 小片	口 底 高	①白岩片粗砂、輝石 細砂 ②一部黒斑 ③鈍い黄橙	波形の大きい櫛描波状文。無文部はヘラ削り後、ナデ。 内面ナデ。	V-1期か 樽式
第261図 No67 P L-113	弥生土器 壺	A区 5号 住居	肩部 小片	口 底 高	①輝石目立つ粗細砂 ②ややムラあり ③灰褐から褐灰	肩上位に等間隔連所婦文、その下位に1条の波状文を 廻す(原体5本櫛歯)。無文部研磨。内面ナデ。	V1~2期樽式
第261図 No68 P L-113	弥生土器 甗	A区 1号 住居	肩部 小片	口 底 高	①輝石細砂多い ②黒斑部多い ③黄灰色	頸部に等間隔簾状文、肩部に櫛描波状文	V期樽式か
第261図 No69 P L-113	弥生土器 壺か	A区 850- 450G	頸部 小片	口 底 高	①赤粒、白岩片の粗 ~細砂 ②均一 ③黒褐	頸部に等間隔簾状文(6本)、肩に波状文を3段重ねる。 内面ナデ。	樽期1~2
第261図 No70 P L-113	弥生土器 壺か	A区 表採	胴部 小片	口 底 高	①赤粒、白岩片顕著 ②一部黒斑 ③鈍い橙	細かい刷毛目整形の後、櫛描波状文。内面ナデ。	
第261図 No71 P L-113	弥生土器 壺	A区 5号 住居	小片	口 底 高	①白岩片の粗~細砂 ②還元ぎみ ③鈍い黄褐	等間隔簾状文の下位に1条の櫛描波状文(櫛歯5本)	V期樽式か
第261図 No72 P L-113	弥生土器 甗	B区 870- 390G	頸部 小片	口 底 高	①白岩片、輝石の粗 細砂 ②器肉還元 ③灰白	外面ナデ。口縁内面は粗い研磨。体内面はヘラナデ。 無文。	IV期(中期後半)
第261図 No73 P L-113	弥生土器 壺	A区 表採	頸部 小片	口 底 高	①赤粒、白岩片多い ②器肉還元 ③黄褐色~灰	等間隔簾状文(反時計回り)。内面研磨。	V期(樽式)
第261図 No74 P L-113	弥生土器 壺か	B-6 区表採	肩部 小片	口 底 高	①輝石粗~細砂多い ②均一 ③鈍い黄橙	横位櫛描波状文を重ねる。無文部は研磨。内面ナデ。	V期 樽式
第261図 No75 P L-113	弥生土器 壺	A区 11号 住居	口縁 一部 欠	口 7.5 底 5.8 高 11.8	①輝石細砂多い ②均一 ③黄褐色	頸部に櫛描波状文。5カ所均等に櫛状具と同一の植物 茎を束ねた物で刺突した円形ボタン状貼付文を付す。 外面は横位研磨。内面ナデ。底面ナデ。	V期 樽式
第261図 No76 P L-114	弥生土器 蓋	A区 850- 490G	ほぼ 完形	口 7.7 底 高 4.1	①輝石細砂 ②一部攪拌 ③赤褐	裾部に相対する2ヶ対、計4個の穿孔。外面に赤彩 後研磨を施す。天井部を「鈕」状に潰す。	
第261図 No77 P L-114	弥生土器 甗	A区 32号 住居	口縁 1/4	口 底 高	①細砂少量含む ②一部黒斑 ③鈍い黄橙	内湾気味の口縁。頸部に等間隔簾状文(反時計回り)、 無文部刷毛目とナデ。内面ナデ。	V-1期併行か
第261図 No78 P L-114	弥生土器 壺	A区 表採	頸部 小片	口 底 高	①白岩片粗砂、輝石 微細砂 ②一部黒斑 ③鈍い黄橙	内湾気味口縁。頸部は等間隔簾状文。口縁に大波形の 櫛描波状文(櫛歯5本)いずれも反時計回りに施文。	V-1期か
第262図 No79 P L-114	弥生土器 甗	A区 850- 490G	体部 小片	口 底 高	①白岩片細粒多い ②煤付着 ③黒~灰褐	横位の櫛描波状文(4本)	IV期(中期後半) 栗林式
第262図 No80 P L-114	弥生土器 甗	A区 28号 住居	胴 小片	口 底 高	①白岩片、輝石多い ②還元ぎみ、煤付着 ③10YR鈍い黄橙	縦位の櫛描波状文、内面ナデ。	IV期(中期後半) 栗林式

## 遺構外遺物

図番号 写真図版	種類 器種	出土 位置	残存 状態	量目 (cm, g)	①胎土②焼成③色調	器形・整形・文様の特徴	備考
第262図 No81 P L-114	弥生土器 甕	A区 850- 500G	頸部 小片	口 底 高	①白岩片の粗～細砂 ②内面黒ずむ ③鈍い橙	頸部に等間隔籐状文（時計回り）。体部刷毛目後、単沈線を重ねて三角文と横線文の充填。内面研磨。	IV期
第262図 No82 P L-114	弥生土器 甕	A区 5号 住居	肩 小片	口 底 高	①白岩片の粗～細砂 ②還元ぎみ ③鈍い黄橙	頸部等間隔籐状文。肩部に沈線による上向き三角文。その両側を横線文で充填する。内面研磨。	IV期 No80と同一個 体
第262図 No83 P L-114	弥生土器 甕	A区 表採	頸部 小片	口 底 高	①白岩片の粗～細砂 ②還元ぎみ ③鈍い黄橙	沈線による横線充填文。	No80と同一個 体
No84 P L-114	土師器 甕	A区 表採	小片	口 底 高	①細粒砂 ②酸化焰 ③10YR鈍い黄橙	写真のみ掲載	刳痕拓本
第262図 No85 P L-114	土師器 杯	A区 28号 住	小片	口 底 高	①細粒砂 ②酸化焰 ③5YR明赤褐	内外面に墨書。	墨書土器
第262図 No86 P L-114	土師器 杯	B区 表採	小片	口 底 高	①細粒砂 ②酸化焰 ③5YR明赤褐	外面底部に墨書。	墨書土器
第262図 No87 P L-114	土師器 ミニチュ ア	B区 道下	ほぼ 完形	口 4.7 底 3.4 高 4.0	①細粒砂 ②酸化焰 ③10YR鈍い黄橙	手捏ね成形。底部肉厚平底。内外面指ナデ。	
第262図 No88 P L-114	土製 土錘	B区 表採	ほぼ 完形	長 6.45 幅 2.6 孔 0.5	焼物	全出土例の中では大型の土錘。質は土師器質。両端一部欠損。	
第262図 No89 P L-114	土製 土錘	D区 表採	ほぼ 完形	長 4.25 幅 2.0 孔 0.45	焼物	全出土例の中では細い土錘。質は土師器質。端部欠損。	
第262図 No90 P L-114	土製 土錘	A区 表土	完形	長 4.15 幅 2.75 孔 0.4	焼物	全出土例の中では太い土錘。質は土師器質。	
第262図 No91 P L-114	土製 土錘	B区 表採	完形	長 4.3 幅 2.75 孔 0.25	焼物	全出土例の中では太い土錘。質は土師器質。側面一部欠損。	
第262図 No92 P L-114	土製 土錘	D区 表採	完形	長 5.6 幅 2.2 孔 0.35	焼物	全体的に器形は歪み粗雑な造りで、全出土例の中では細い土錘。質は土師器質。側面一部欠損。	
第262図 No93 P L-114	土師器 鉢	A区 21号 住居	口縁 底部 2/5	口 18.0 底 6.1 高 10.0	①細粒砂 ②酸化焰 ③5YR明赤褐	底部肉厚平底気味。外面胴部ヘラ削り。内面胴部ヘラナデ。口縁部内外面横ナデ。	
第262図 No94 P L-115	土師器 甕	A区 表採	口縁 胴 1/5	口 19.4 底 高	①細粒砂 ②酸化焰 ③5YR橙	口縁部は高く、低い段を有する。外面胴部ヘラ削り。内面胴部ヘラナデ。口縁部内外面横ナデ。	
第262図 No95 P L-114	土師器 高坏	覆土	口縁 1/3	口 24.0 底 高	①細粒砂 ②酸化焰 ③10YR褐灰	内外面に丁寧な正放射状のヘラ磨きを施す。	D区55号土坑 出土
第263図 No96 P L-115	青磁	D区 7号 住居	小片	口 底 厚 0.5	①細粒砂 ②還元焰 ③7.5GY緑灰	龍泉窯系	
第263図 No97 P L-115	かわらけ	D区 2号 住居	口縁 底部 3/5	口 12.25 底 5.0 高 3.7	①細粒砂 ②還元焰 ③10YR浅黄橙	ロクロ成形。成形時ロクロ右回転。外面底部ナデ調整、回転系切り痕を僅か残す。	底部拓本
第263図 No98 P L-115	須恵器 皿	A区 表土	口縁 底部 2/5	口 12.65 底 7.6 高 3.1	①粗粒砂 ②還元焰 ③2.5YR灰黄	ロクロ成形。成形時ロクロ右回転。付け高台。外面底部に回転系切り痕を僅か残す。	底部拓本
第263図 No99 P L-115	須恵器 皿	A区 30号 住居	口縁 底部 2/5	口 16.1 底 7.8 高 4.3	①粗粒砂 ②還元焰 ③2.5Y灰白	ロクロ成形。成形時ロクロ右回転。付け高台は高い。外面底部に回転系切り痕を僅か残す。	

II 萩原遺跡の調査

遺構外遺物

図番号 写真図版	種類 器種	出土 位置	残存 状態	量目 (cm, g)	①胎土②焼成③色調	器形・整形・文様の特徴	備考
第263図 No100 P L-115	須恵器 椀	A区 表探	口縁 底部 3/5	口 13.7 底 高	①粗粒砂 ②還元焰 ③5Y灰	ロクロ成形。付け高台。成形時ロクロ右回転。外面底部に回転糸切り痕を僅か残す。	底部拓本
第263図 No101 P L-115	須恵器 椀	A区 表探	口縁 底部 3/5	口 14.4 底 7.5 高 6.0	①粗粒砂 ②酸化焰・還元焰 ③外:10YR鈍い黄褐色 内:N黒2	ロクロ成形。付け高台。成形時ロクロ右回転。内面に黒色処理を施す。外面底部に回転糸切り痕を僅か残す。	底部拓本
第263図 No102 P L-115	須恵器 椀	C区 表探	ほぼ 完形	口 17.0 底 9.1 高 7.4	①粗粒砂 ②酸化焰 ③外:7.5YR明赤褐色 内面:N黒2	ロクロ成形。付け高台は高い。内面は黒色処理後、底部から体部に掛けて3対の波状ヘラ磨き、口縁部は横方向のヘラ磨きを施す。	
第263図 No103 P L-115	土師器 甃	A区 35住 居	口縁 小片	口 14.1 底 高	①細粒砂 ②酸化焰 ③7.5YR鈍い橙	外面胴部ヘラ削り。内面胴部ヘラナデ。口縁部内外面横ナデ。	No104と同一個体か?口縁・底部個々に実測
第263図 No104 P L-115	土師器 甃	A区 35住 居	底部 小片	口 底 高	①細粒砂 ②酸化焰 ③7.5YR鈍い橙	底部は平底と思われる。外面ヘラ削り、内面ヘラナデ。	No103と同一個体か?口縁・底部個々に実測
第263図 No105 P L-115	土師器 甃	A区 35住 居	口縁 小片	口 20.2 底 高	①細粒砂 ②酸化焰 ③5YR明赤褐色	外面胴部ヘラ削り。内面胴部ヘラナデ。口縁部内外面横ナデ。	
第263図 No106 P L-115	土師器 甃	A区 35住 居	口縁 胴 2/5	口 20.8 底 高	①細粒砂 ②酸化焰 ③2.5YR明赤褐色	外面胴部ヘラ削り。内面胴部ヘラナデ。口縁部内外面横ナデ。	
第263図 No107 P L-115	土師器 甃	A区 35住 居	口縁 小片	口 19.4 底 高	①細粒砂 ②酸化焰 ③7.5YR鈍い橙	外面横方向のヘラ削り。内面ヘラナデ。口縁部内外面横ナデ。	
第263図 No108 P L-115	須恵器 羽釜	A区 35住 居	口縁 底部 4/5	口 20.1 底 7.0 高 26.7	①粗粒砂 ②還元焰 ③5Y灰5/1	外面胴部鍔下は横ナデ、中位より下は縦方向のヘラ削り。内面胴部横ナデ、底部ヘラナデ。口縁部内外面横ナデ。	35住居と重複する10C頃の住居の土器。
第264図 No109 P L-116	かわらけ	E区 1面	完形	口 9.8 底 5.1 高 2.3	①粗粒砂 ②酸化焰 ③7.5YR鈍い橙	ロクロ成形。成形時ロクロ左回転。外面底部に回転糸切り痕を残す。	底部拓本
第264図 No110 P L-116	灯明皿	B区 表探	口縁 底部 2/5	口 10.0 底 5.2 高 1.9	①細粒砂 ②還元焰 ③2.5YR暗赤褐色	ロクロ成形。成形時ロクロ右回転。外面底部に回転糸切り痕を残す。外面底部を除き施釉。	口唇部内面に煤付着。底部拓本
第264図 No111 P L-116	須恵器 灯明皿	C区 表探	口縁 底部 2/5	口 10.05 底 4.4 高 1.8	①細粒砂 ②還元焰 ③5Y灰白	ロクロ成形。成形時ロクロ左回転。外面口唇部から内面全面に施釉。外面底部に回転糸切り痕を残す。	
第264図 No112 P L-116	陶磁器 椀	B区 出土	底部 側面 1/5	口 底 7.3 高	①細粒砂 ②還元焰 ③7.5YR鈍い橙	ロクロ成形。成形時ロクロ右回転。付け高台は扁平・肉厚。外面体部に施釉。	内面底部に付着物残存。物質は不明。
第264図 No113 P L-116	陶磁器 皿	B区 出土	口縁 底部 小片	口 22.2 底 高	①細粒砂 ②還元焰 ③5YR灰黄	見込みにトチンと思われる痕跡を残す。底面に回転糸切り痕を残す。削り出し高台。内外面に淡緑色の透明釉、口縁下に銅緑釉を施す。	瀬戸美濃
第264図 No114 P L-116	焼締陶器 播鉢	B区 出土	口縁 小片	口 34.0 底 高	①粗粒砂 ②還元焰 ③10YR暗褐色	口縁部は段を有す。体部内面に12条1単位の目を刻み、内外面に施釉。	
第264図 No115 P L-116	焼締陶器 播鉢	B区 出土	底部 小片	口 底 15.6 高	①粗粒砂 ②還元焰 ③2.5YR浅黄	15状1単位の細かい目が底部から胴部に掛けて刻まれる。底部付近は使用による摩耗が認められる。	
第264図 No116 P L-116	砥石	B区 表探	破片	長 (7.1) 幅 2.8 厚 (2.5)	流紋岩	手持ち砥。1面使用、両側面削りによる工具痕、裏全面破損。両端欠損。	重さ73.85g
第264図 No117 P L-116	砥石	B区 表探	破片	長 (7.3) 幅 2.8 厚 2.4	砥沢石	手持ち砥。表裏2面使用、小口・両側整形。端部欠損。	重さ88.51g
第264図 No118 P L-116	砥石	B区 表探	完形	長 12.1 幅 3.0 厚 2.1	砥沢石	手持ち砥。5面使用、小口1面に削りによる工具痕。	重さ115.15g

## 3 検出された遺構と遺物

## 遺構外遺物

図番号 写真図版	種類 器種	出土 位置	残存 状態	量目 (cm, g)	①胎土②焼成③色調	器形・整形・文様の特徴	備考
第264図 No119 P L-116	砥石	B区 表探	破片	長(8.5) 幅 3.1 厚 2.3	流紋岩	手持ち砥。3面使用、裏面削り。両端欠損。	重さ107.82g
第264図 No120 P L-116	砥石	B区 表探	破片	長(4.8) 幅 3.8 厚 1.1	砥沢石	手持ち砥。2面使用。端部欠損。	重さ18.34g
第265図 No121 P L-116	砥石	B区 表探	破片	長(4.8) 幅 3.8 厚 1.1	流紋岩	手持ち砥。2面使用。端部欠損。	重さ29.25g
第265図 No122 P L-116	砥石	B区 表探	破片	長(10.4) 幅 3.3 厚(1.75)	砥沢石	手持ち砥。表・両側面3面使用するが、削りによる工具痕が残存しており、使用は短期間。	重さ105.64g
第265図 No123 P L-116	砥石	B区 表探	完形	長11.8 幅 2.5 厚 2.65	砥沢石	手持ち砥。表・裏2面使用するが、裏面の使用は短期間。裏・側面に削痕。	重さ115.55g
第265図 No124 P L-116	砥石	B区 表探	破片	長(10.2) 幅 3.25 厚 2.2	砥沢石	手持ち砥。1面使用、両側面削りによる工具痕。端部欠損。	重さ122g
第265図 No125 P L-116	砥石	B区 表探	破片	長(2.4) 幅 2.6 厚 2.1	砥沢石	手持ち砥。4面使用。端部欠損。	重さ17.42g
第265図 No126 P L-116	砥石	B区 表探	破片	長(5.2) 幅 2.75 厚 1.7	砥沢石	手持ち砥。4面使用。端部欠損。	重さ42.94g
第265図 No127 P L-116	砥石	B区 表探	破片	長(5.4) 幅 4.4 厚 2.7	流紋岩	手持ち砥。6面使用。端部欠損。	重さ93.57g
第265図 No128 P L-116	砥石	B区 表探	破片	長(4.9) 幅 2.5 厚 1.8	砥沢石	手持ち砥。3面使用、裏面削り。端部欠損。	重さ32.81g
第265図 No129 P L-116	砥石	B区 表探	破片	長(4.1) 幅 2.9 厚 0.75	流紋岩	手持ち砥。4面使用。端部欠損。	重さ15.85g
第265図 No130 P L-116	砥石	B区 表探	破片	長(6.6) 幅 2.5 厚 2.2	砥沢石	手持ち砥。4面使用するが、裏面の使用は短期間。端部欠損。	重さ36.58g
第265図 No131 P L-116	砥石	B区 表探	破片	長(3.4) 幅 3.0 厚 2.4	砥沢石	手持ち砥。4面使用。両端欠損。	重さ37.68g
第265図 No132 P L-116	砥石	B区 表探	破片	長(2.4) 幅(3.2) 厚(1.0)	珪質粘板岩	手持ち砥。3面使用。端部・側面・底部欠損。	重さ8.51g
第265図 No133 P L-116	砥石	B区 表探	破片	長(5.5) 幅 2.7 厚 1.15	流紋岩	手持ち砥。4面使用。両端欠損。	重さ29.88g
第265図 No134 P L-116	砥石	C区 表探	破片	長(8.2) 幅 4.0 厚 2.8	流紋岩	手持ち砥。4面使用。側面一部残存。	重さ95.58g
第266図 No135 P L-116	擦り石	B区 表探	完形	長12.1 幅 11.4 厚 7.6	2ヶ岳軽石	平滑な底面ほぼ中央には度重なる毟打による不整形な窪みを有し、対面頂部にも毟打による浅い窪みを有する。	重さ579g
第266図 No136 P L-116	擦り石	B区 表探	完形	長 9.0 幅 8.4 厚 4.8	粗流輝石安山岩	側面に比し滑らかな表面ほぼ中央に円形状の窪み。裏面は非常に滑らかで長期間の擦り使用が伺える。	重さ549g
第266図 No137 P L-117	擦り石	B区 表探	完形	長 8.6 幅 8.1 厚 3.6	粗流輝石安山岩	表裏面は側面に比し滑らか。表裏2面のほぼ中央に円形状の窪み。	重さ240g

II 萩原遺跡の調査

遺構外遺物

図番号 写真図版	種類 器種	出土 位置	残存 状態	量目 (cm, g)	①胎土②焼成③色調	器形・整形・文様の特徴	備考
第266図 No138 PL-117	擦り石	B区 表探	完形	長 8.6 幅 8.5 厚 3.8	2ヶ岳軽石	表裏面は側面に比し滑らか、特に裏面は平滑で長期間の擦り使用が伺える。	重さ160g
第266図 No139 PL-117	擦り石	B区 表探	完形	長 19.2 幅 11.2 厚 4.5	変質安山岩	表裏面は側面に比し滑らか。扁平・平滑な表面のほぼ中央に円形状の窪み。	重さ1630g
第266図 No140 PL-117	多孔石	B区 表探	完形	長 15.25 幅 10.3 厚 8.65	粗流輝石安山岩	全面に小円形状の窪みを穿つ。	重さ1100g
第267図 No141 PL-117	敲き石	A区 表探	完形	長 11.3 幅 9.1 厚 2.55	黒色頁岩	扁平・楕円磔。表裏面は側面に比し滑らか。	重さ348g
第267図 No142 PL-117	擦り石	B区 表探	部分	長(12.7) 幅(12.9) 厚 7.1	粗流輝石安山岩	表裏面は側面に比し滑らかで、表面に不整形な窪み。	重さ1000g
第267図 No143 PL-117	石臼	D区 表探	部分	径 34.5 厚 8.3	粗流輝石安山岩	上面及び底面は比較的丁寧な磨き整形。供給口の一部を残す。挽面には荒目の目が残る。	重さ2300g
第267図 No144 PL-117	五輪塔 空風輪	不明	完形	高 29.9 幅 16.1 厚	粗流輝石安山岩	やや摩滅。形状は均一で空風の境のくびれが深い。整形は表面を磨く。	重さ6900g
第267図 No145 PL-117	石皿	B水 田下 面	部分	長 11.3 幅 9.1 厚 2.55	粗流輝石安山岩	使用面は窪み表面は滑らか。裏面に多数の不整形形状の窪み。	重さ3400g
第267図 No146 PL-106	鏡	D区 表探	ほぼ 完形	長 4.35 幅 6.9 厚 0.4	銅を主体とした合金	裏面に左右1対の紐を有し、右に「竹」左に「虎」の文様と左上隅に「天下一」の線文を施す。線文以外は細かい突起物を浮き出させた魚子細工。	裏面に少量の布付着。 重量32.06g
第267図 No147 PL-117	簪	出土 位置 不明	ほぼ 完形	長 12.0 幅 重 2.47	銅製	飾りは欠損するが、円形状耳搔きは残存し、表は僅かに窪み裏に縦一条の線刻を施す。本体と飾り部とはハンダにより接合される。	
第267図 No148 PL-117	簪	B-6 区 出土	ほぼ 完形	長 14.4 幅 重 7.56	銅製	飾り部、耳搔き端部共に欠損。本体表面上方に松葉と木を模した彫金模様を施す。	

## (11) 掲載外出土遺物

表は萩原遺跡出土の土器片の内、報告書に掲載し得なかった遺物を各調査区・各遺構毎に一覧表にしたものである。縄文土器・弥生土器以外は重量（グラム）で表記してある。多くの遺構から石器剥片が出土しているA区では、特に微高地西寄りに石器剥片や縄文土器片が多く、圃場整備以前該期に関わる遺構がこの辺りに存在していた可能性が窺える。B区出土の石器剥片・縄文土器・弥生土器は、主にAs-B下水田耕作土下から発見されている。その多

くは微高地縁辺部に集中していることから微高地からの流れ込みと考えられ、弥生時代の竪穴住居跡が発見されたA区寄りでは弥生土器が多く発見されている。逆に東縁辺部では弥生土器の出土は無く縄文土器のみとなる。B区に続くD区・E区からも石器剥片、縄文土器、弥生土器が数点出土している。左記調査区では縄文時代や弥生時代の遺構の発見はなかったが、前述したように該期の遺物が散在する状況から圃場整備以前何らかの遺構が存在した可能性は否定できない。

第3表 掲載外遺物一覧表

(単位：グラム 但し縄文土器、弥生土器は点数)

区	遺構名	石器剥片	縄文(点)	弥生(点)	土師杯	土師甕	須恵杯	須恵甕	須恵壺	軟質陶器	灰釉	陶磁器	瓦	ガラス	鉄
A	1号住居跡	1676	7		500	2050		100							
	2号住居跡	355	2		460	2740	10	130							
	3号住居跡	176	2		160	2530	10	60							
	4号住居跡	20					10								
	5号住居跡	90			550	2480		1810							
	6号住居跡	873	5		2950	13350	50	230							
	7号住居跡	1120	2		260	1410									
	8号住居跡				1230	810	50	500							
	9号住居跡	45				410	30								
	10号住居跡	18	1		90	350									
	11号住居跡					100									
	12号住居跡	265				860	2745	120	120			10			
	13号住居跡	148				60	2670	70							
	14号住居跡	141	1		70	1600		90							
	15号住居跡	5			200	1855	150								
	16号住居跡	58	1		470	1400	42	20							
	17号住居跡				20	900	60	180				40			
	18号住居跡	28			180	930	310	930							
	19号住居跡	30			80	630	70	110				10			
	20号住居跡	453			460	3000	830	900				10			
	21号住居跡	110			690	3710	1290	317				90			
	22号住居跡	8			240	1390	70								
	23号住居跡	15			20	540	10	40							
	24号住居跡	5			550	2420		60							
	25号住居跡				15	40	30								
	26号住居跡				70	750		190							
	27号住居跡	229	1		1020	4205	1090	75				8			
	28号住居跡				310	2150	290	75							
	29号住居跡	145			190	1180	70	110							
	30号住居跡	100			100		100	160				10			
	31号住居跡				65	315	23	363							
	32号住居跡	335			1310	10030	212	770				5			
	33号住居跡				170	390		140							
	34号住居跡				215	1450									
	35号住居跡	114			590	2990	140	310							
	36号住居跡			1	0	60									
	37号住居跡	9			10	620	20	60							
	38号住居跡				125	440	5	10							
	39号住居跡				255	312	133	20							
2号土坑	9			610	2390		410								
6号土坑					80		3								

II 萩原遺跡の調査

区	遺構名	石器剥片	縄文(点)	弥生(点)	土師杯	土師甕	須恵杯	須恵甕	須恵壺	軟質陶器	灰釉	陶磁器	瓦	ガラス	鉄	
A	7号土坑				10	40										
	8号土坑	582			20	520										
	9号土坑					30										
	10号土坑				20	90										
	11号土坑	35	1													
	12号土坑				30	160		10								
	13号土坑	54														
	14号土坑				50	360		5								
	16号土坑				35	55										
	17号土坑				45	540		190								
	850-500G		1													
	842-510G		1													
	850-510G		1													
	840-520G			1												
	840-520G		1													
	840-540G		1													
	表採		14	13	4505	26340	2220	3530	220		260	240				
	B	1号住居跡				220	2005	210	150							
		2号住居跡				2220	1190	820	800			15	19			
3号住居跡					75	430	90	55								
4区住居跡																
1号土坑					10	12		5	25	15		30	48			
2号土坑									82	115	12	150	480			
6号土坑		21			10	93		5								
7号土坑						30										
8号土坑						50		5								
9号土坑					20	12						15				
10号土坑					26	50		10	20							
11号土坑												23				
12号土坑										20						
2号溝						20			50			10	530			
5号溝					30				30		10					
850-360G		70														
860-360G			1													
847-370G		35														
830-370G			1													
830-380G			1													
825-380G		10														
825-385G		20														
830-390G		20														
865-395G			1													
830-395G		60														
865-400G				1												
845-405G				1												
830-415G			1													
842-432G		9														
848-435G		51														
842-439G		78														
848-440G			1													
860-450G			1													
856-451G			2													
850-453G			1													
846-455G	86															
860-455G			1													
845-456G	10															
840-456G			1													
855-456G	10															
840-457G		1														
846-457G			1													

3 検出された遺構と遺物

区	遺構名	石器剥片	縄文(点)	弥生(点)	土師杯	土師甕	須恵杯	須恵甕	須恵壺	軟質陶器	灰釉	陶磁器	瓦	ガラス	鉄
B	851-458G			1											
	845-460G		1												
	855-460G	47													
	855-460G			1											
	854-470G		1												
	840-470G			1											
	As-B下		13												
	FP上		2												
	3区	55													
	4区			11											
	5区			3											
	6区			11											
表探					600	7580	1470	1660	8260		140	2040	3700	100	
C	表探				220	290		65	2570		10	625			
D	1号住居跡		1		75	2290	40								
	2号住居跡				110	2380	25					45			
	3号住居跡				190	2710	20								
	4号住居跡				30	1360									
	5号住居跡					805									
	6号住居跡	2			330	1730	43	18							
	7号住居跡	130	1		230	2470	12								
	8号住居跡					348									
	9号住居跡				610	2110	60	45							
	10号住居跡				40	175	35								
	11号住居跡				310	1320	120	30				50			
	12号住居跡				35	865									
	13号住居跡				125	1350	25					310			
	14号住居跡														
	1号溝	23			150	450	50								
	2号溝				120	740	8	25					5		
	3号溝				98	750	30	75							
	5号溝	50			200	1070	65	83		19	10				
	6号溝	40				45									
	1号土坑		1												
	3号土坑						9								
	5号土坑						22						4		
	7号土坑		1												
	8号土坑						38			5					
	11号土坑												25		
	14号土坑		1												
	21号土坑					4	33	4							
	26号土坑						28								
	28,29号土坑					8	345	12	35		14	10			
	30号土坑														3
	33号土坑						3	9							
	39号土坑					9	30			55					
52号土坑						94		8							
55号土坑						65									
59号土坑						20									
1号井戸						35									
表探			4		260	4195	480		1590			715			
E	1号住居跡														
	2号住居跡				40	800									
	1号溝			1	60	900			28		510				
	2号溝					440			15		205				
	6号溝	78			40	185					875				
	2号土坑							15							
	4号土坑				6	80			4				4		
表探			3	50	220	30		449			560				



## (12) 自然化学分析

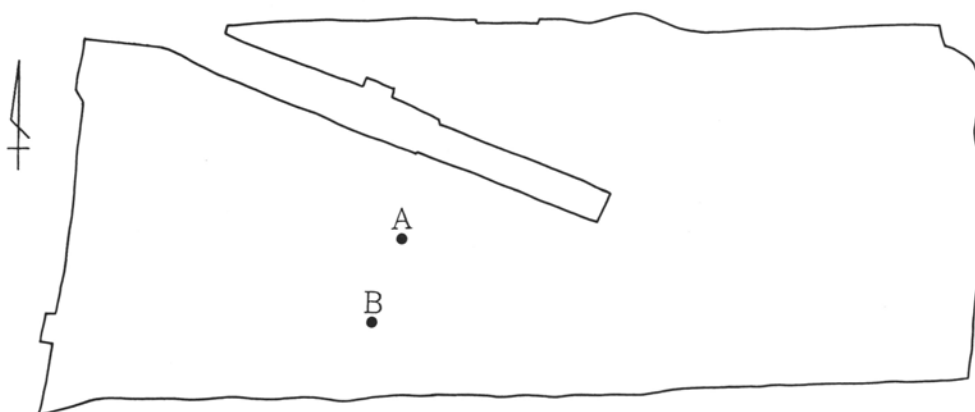
株式会社 古環境研究所

### I. 萩原遺跡の土層とテフラ

#### 1. はじめに

群馬県域に分布する後期更新世以降に形成された地層の中には、浅間、榛名、赤城など北関東地方とその周辺の火山のほか、中部地方や中国地方さらには九州地方などの火山に由来するテフラ（火山砕屑物、いわゆる火山灰）が多く認められる。テフラの中には、噴出年代が明らかにされている示標テフラがあり、これらとの層位関係を遺跡で求めることで、遺構の構築年代や遺物包含層の堆積年代を知ることができるようになっている。

そこで、年代の不明な土層が認められた萩原遺跡B区においても、地質調査を行って土層の層序を記載するとともに、採取された試料を対象にテフラ検出分析を行って、示標テフラの層位を把握し、土層の年代に関する資料を収集することになった。調査分析の対象となった地点は、A地点およびB地点の2地点である。



第268図 テフラ分析サンプル採取地点 (1/1000)

#### 2. 土層の層序

##### (1) A地点

A地点では、下位より黒灰色粘質土（層厚10cm以上）、灰色粗粒火山灰混じり暗灰色土（層厚8cm）、白色粗粒軽石混じりで若干色調の暗い灰色土（層厚9cm、軽石の最大径12mm）、灰色がかった暗褐色土（層厚9cm）、褐色粗粒軽石混じり黄灰色粗粒火山灰層（層厚5cm、軽石の最大径5mm）、青灰色細粒火山灰層（層厚0.5cm）、若干色調の暗い灰褐色土（層厚23cm）、灰褐色表土（層厚27cm）が認められる（図1）。発

これらのうち、褐色粗粒軽石混じり黄灰色粗粒火山灰層は、層相から1108（天仁元）年に浅間火山から噴出した浅間Bテフラ（As-B, 新井, 1979）に同定される。またその上位の青灰色細粒火山灰層は、層位や層相から1128（天仁元）年に浅間火山から噴出したと考えられている浅間粕川テフラ（As-Kk, 早田, 1991, 1996）に同定される。

## (2) B地点

B地点では、下位より暗褐色粘質土（層厚5cm以上）、黒灰色粘質土（層厚11cm）、灰色粗粒火山灰混じり暗灰色土（層厚8cm）、白色軽石混じり黄色細粒火山灰層（層厚0.6cm、軽石の最大径3mm）、暗灰褐色土土（層厚6cm）、白色軽石混じり灰褐色土（層厚5cm、軽石の最大径8mm）、暗褐色土（層厚5cm）、成層したテフラ層（層厚7.1cm）、青灰色細粒火山灰層（層厚0.6cm）、若干色調の暗い灰褐色土（層厚21cm）、灰褐色土（層厚28cm）が認められる（図2）。これらのうち、成層したテフラ層は、下位より灰色細粒火山灰層（層厚0.1cm）、黄灰色粗粒火山灰層（層厚6cm）、桃色細粒火山灰層（層厚1cm）からなる。このテフラ層は、その層相からAs-Bに同定される。また、その直上の青灰色細粒火山灰層は、その層位や層相からAs-Kkに同定される。

## 3. テフラ検出分析

## (1) 分析試料と分析方法

A地点およびB地点において採取された試料のうち、6点についてテフラ検出分析を行い、テフラの降灰層準およびテフラ粒子の特徴の把握を行った。分析の手順は次の通りである。

- 1) 試料15gを秤量。
- 2) 超音波洗浄により泥分を除去。
- 3) 80°Cで恒温乾燥。
- 4) 実体顕微鏡下で、テフラ粒子の量や特徴を観察。

## (2) 分析結果

テフラ検出分析の結果を表1に示す。A地点では、試料3によく発泡した細粒の白色軽石（最大径1.6mm）が含まれている。また試料2や1には、スポンジ状に比較的よく発泡した灰白色軽石が含まれている。とくに試料1に、多くの軽石（最大径2.9mm）が含まれている。この軽石の班晶には斜方輝石や単斜輝石が認められ、その特徴から4世紀中葉に浅間火山から噴出した浅間C軽石（As-C、新井、1979）に由来すると考えられる。その産状から、試料1付近にAs-Cの降灰層準があると考えられる。

B地点では、試料3にAs-Cに由来する軽石（最大径3.8mm）が多く含まれている。また試料2には、あまり発泡の良くない白色軽石（最大径3.2mm）が多く含まれている。この軽石の班晶としては、角閃石や斜方輝石が認められる。この軽石は、その特徴から6世紀初頭に浅間火山から噴出した榛名二ツ岳渋川テフラ（Hr-FA、新井、1979、坂口、1986、早田、1989、町田・新井、1992）に由来すると考えられる。以上のことから、試料3付近にAs-Cの、また試料2付近にHr-FAの各々の降灰層準があると考えられる。

なお、A地点の試料1の直上の土層中に含まれる白色軽石も、Hr-FAに由来すると考えられる。またB地点の試料1にも、As-CやHr-FAに由来する軽石が多く含まれている。

## 4. まとめ

萩原遺跡B区において、地質調査とテフラ検出分を行った。その結果、下位より浅間C軽石（As-C、4世紀中葉）、榛名二ツ岳渋川テフラ（Hr-FA、6世紀初頭）、浅間Bテフラ（As-B、1108年）、浅間粕川テフラ（As-Kk、1128年）を検出することができた。

## 文献

新井房夫（1979）関東地方北西部の縄文時代以降の示標テフラ層．考古学ジャーナル，no.53，p.41-52.

町田 洋・新井房夫（1992）火山灰アトラス．東京大学出版会，276p.

II 萩原遺跡の調査

坂口 一 (1986) 榛名二ツ岳起源FA・FP層下の土師器と須恵器. 群馬県教育委員会編「荒砥北原遺跡・今井神社古墳群・荒砥青柳遺跡」, p.103-119.

早田 勉 (1989) 6世紀における榛名火山の2回の噴火とその災害. 第四紀研究, 27, p.297-312.

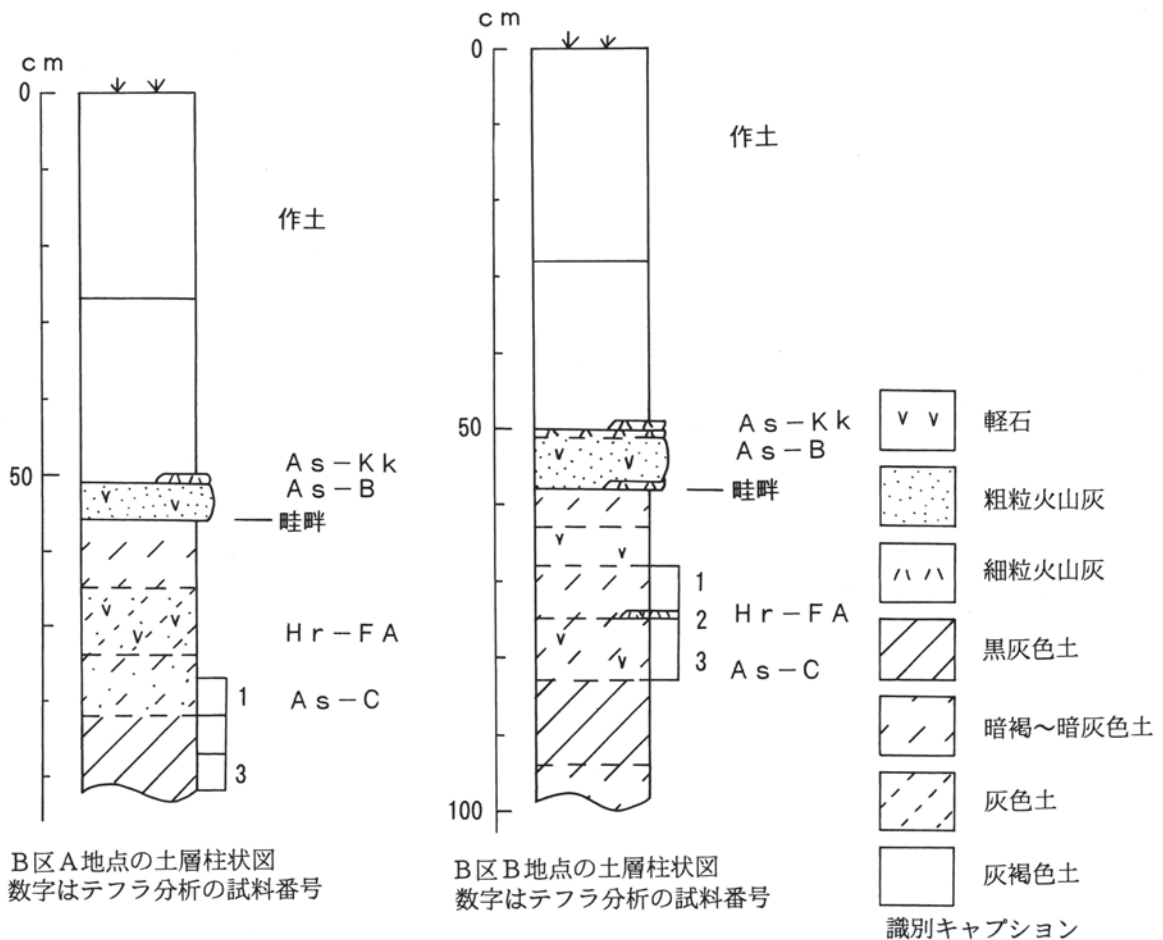
早田 勉 (1991) 浅間火山の生い立ち. 佐久考古通信, no.53, p.2-7.

早田 勉 (1996) 関東地方～東北地方南部の示標テフラの諸特徴—とくに御岳第1テフラより上位のテフラについて—. 名古屋大学加速器質量分析計業績報告書, VII, p.256-267.

第4表 B区低地部テフラ検出分析結果

地点	試料	軽石の量	軽石の色調	軽石の最大径
A	1	+++	灰白	2.9
	2	+	灰白	1.2
	3	+	白	1.6
B	1	+++	灰白>白	1.3,2.1
	2	+++	白	3.2
	3	+++	灰白	3.8

++++: とくに多い, +++: 多い, ++: 中程度, +: 少ない, -: 認められない. 最大径の単位は, mm.



第269図 B区テフラ検出分析結果

## II. 萩原遺跡におけるプラント・オパール分析

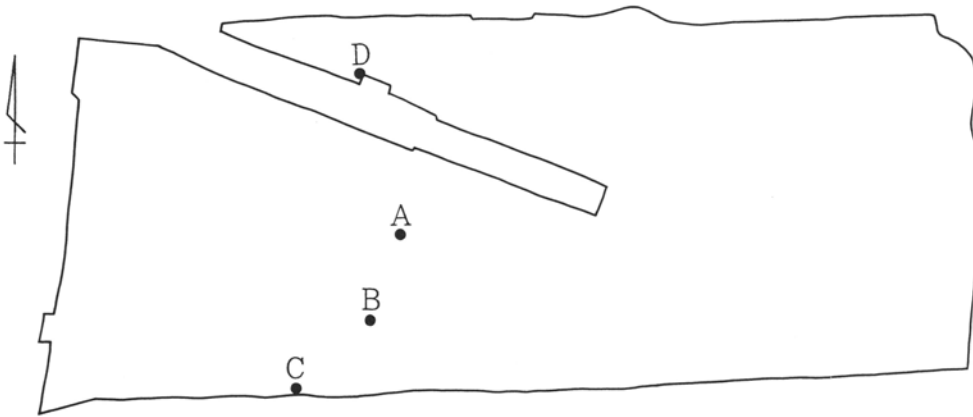
## 1. はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内にガラスの主成分である珪酸 ( $\text{SiO}_2$ ) が蓄積したものであり、植物が枯れたあとも微化石 (プラント・オパール) となって土壤中に半永久的に残っている。プラント・オパール分析は、この微化石を遺跡土壌などから検出する分析であり、イネの消長を検討することで埋蔵水田跡の検証や探査が可能である (藤原・杉山, 1984)。

萩原遺跡B区の発掘調査では、As-B直下から畦畔遺構が検出された。ここでは、同遺構における稲作の検証およびその他の層準における水田跡の探査を主目的として分析を行った。

## 2. 試料

試料は、B区のA地点、B地点、C地点、D地点から採取された計14点である。試料採取箇所を分析結果の柱状図に示す。



第270図 B区プラント・オパールサンプル採取地点 (1/1000)

## 3. 分析法

プラント・オパールの抽出と定量は、プラント・オパール定量分析法 (藤原, 1976) をもとに、次の手順で行った。

- 1) 試料を105℃で24時間乾燥 (絶乾)
- 2) 試料約1gに対し直径約40 $\mu\text{m}$ のガラスビーズを約0.02g添加 (電子分析天秤により0.1mgの精度で秤量)
- 3) 電気炉灰化法 (550℃・6時間) による脱有機物処理
- 4) 超音波水中照射 (300W・42KHz・10分間) による分散
- 5) 沈底法による20 $\mu\text{m}$ 以下の微粒子除去
- 6) 封入剤 (オイキット) 中に分散してプレパラート作成
- 7) 検鏡・計数。

同定は、イネ科植物の機動細胞に由来するプラント・オパールをおもな対象とし、400倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は、ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。試料1gあたりのガラスビーズ個数に、計数されたプラント・オパールとガラスビーズ個数の比率をかけて、試料1g中のプラント・オパール個数を求めた。

## II 萩原遺跡の調査

また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重、単位：10-5g）をかけて、単位面積で層厚1cmあたりの植物体生産量を算出した。イネ（赤米）の換算係数は2.94、ヨシ属（ヨシ）は6.31、ススキ属（ススキ）は1.24、タケ亜科は0.48である。

### 4. 分析結果

水田跡（稲作跡）の検討が主目的であることから、同定および定量はイネ、ヒエ属型、ヨシ属、ススキ属型、タケ亜科の主要な5分類群に限定した。これらの分類群について定量を行い、その結果を表1および図1に示した。写真図版に主要な分類群の顕微鏡写真を示す。

### 5. 考察

水田跡（稲作跡）の検証や探査を行う場合、一般にイネのプラント・オパールが試料1gあたり5,000個以上と高い密度で検出された場合に、そこで稲作が行われていた可能性が高いと判断している。ただし、密度が3,000個/g程度でも水田遺構が検出される事例があることから、ここでは判断の基準を3,000個/gとして検討を行った。

#### 1) A地点

As-B直下層（試料1）からAs-Cの下層（試料5）までの層準について分析を行った。その結果、As-B直下層（試料1）からAs-C直下層（試料4）までの各層からイネが検出された。このうち、畦畔遺構が検出されたAs-B直下層（試料1）では密度が4,500個/gと比較的高い値である。また、Hr-FA混層（試料2）では密度が6,800個/gと高い値であり、As-C混層（試料3）でも3,000個/gと比較的高い値である。したがって、これらの層準では稲作が行われていた可能性が高いと考えられる。

As-C直下層（試料4）では密度が700個/gと低い値である。イネの密度が低い原因としては、稲作が行われていた期間が短かったこと、土層の堆積速度が速かったこと、洪水などによって耕作土が流出したこと、採取地点が畦畔など耕作面以外であったこと、および上層や他所からの混入などが考えられる。

#### 2) B地点

As-B直下層（試料1）からAs-Cの下層（試料5）までの層準について分析を行った。その結果、As-B直下層（試料1）からAs-C混層（試料4）までの各層からイネが検出された。このうち、畦畔遺構が検出されたAs-B直下層（試料1）では密度が5,200個/gと高い値である。また、Hr-FA直下層（試料4'）でも6,000個/gと高い値であり、As-Bの下層（試料2、3）やAs-C混層（試料4）でも3,000個/g以上と比較的高い値である。したがって、これらの層準では稲作が行われていた可能性が高いと考えられる。

#### 3) C地点

As-B直下層（試料1）について分析を行った。その結果、イネが5,200個/gと高い密度で検出された。したがって、同層では稲作が行われていた可能性が高いと考えられる。

#### 4) D地点

As-B直下層（試料1）について分析を行った。その結果、イネが4,500個/gと比較的高い密度で検出された。したがって、同層では稲作が行われていた可能性が高いと考えられる。

### 6. まとめ

プラント・オパール分析の結果、畦畔遺構が検出された浅間Bテフラ（As-B, 1108年）直下層からはイネが多量に検出され、同層で稲作が行われていたことが分析的に検証された。また、榛名二ツ岳渋川テフラ（Hr-FA, 6世紀初頭）混層、Hr-FA直下層、浅間C軽石（As-C, 4世紀中葉）混層などでもイネが多量に検出され、稲作が行われていた可能性が高いと判断された。さらに、A地点のAs-C直下層でも少量ながらイネ

が検出され、稲作が行われていた可能性が認められた。

#### 文献

藤原宏志 (1976) プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)－数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法－. 考古学と自然科学, 9, p.15-29.

藤原宏志・杉山真二 (1984) プラント・オパール分析法の基礎的研究(5)－プラント・オパール分析による水田址の探査－. 考古学と自然科学, 17, p.73-85.

第5表 B区低地部プラントオパール分析結果

検出密度 (単位: ×100個/g)

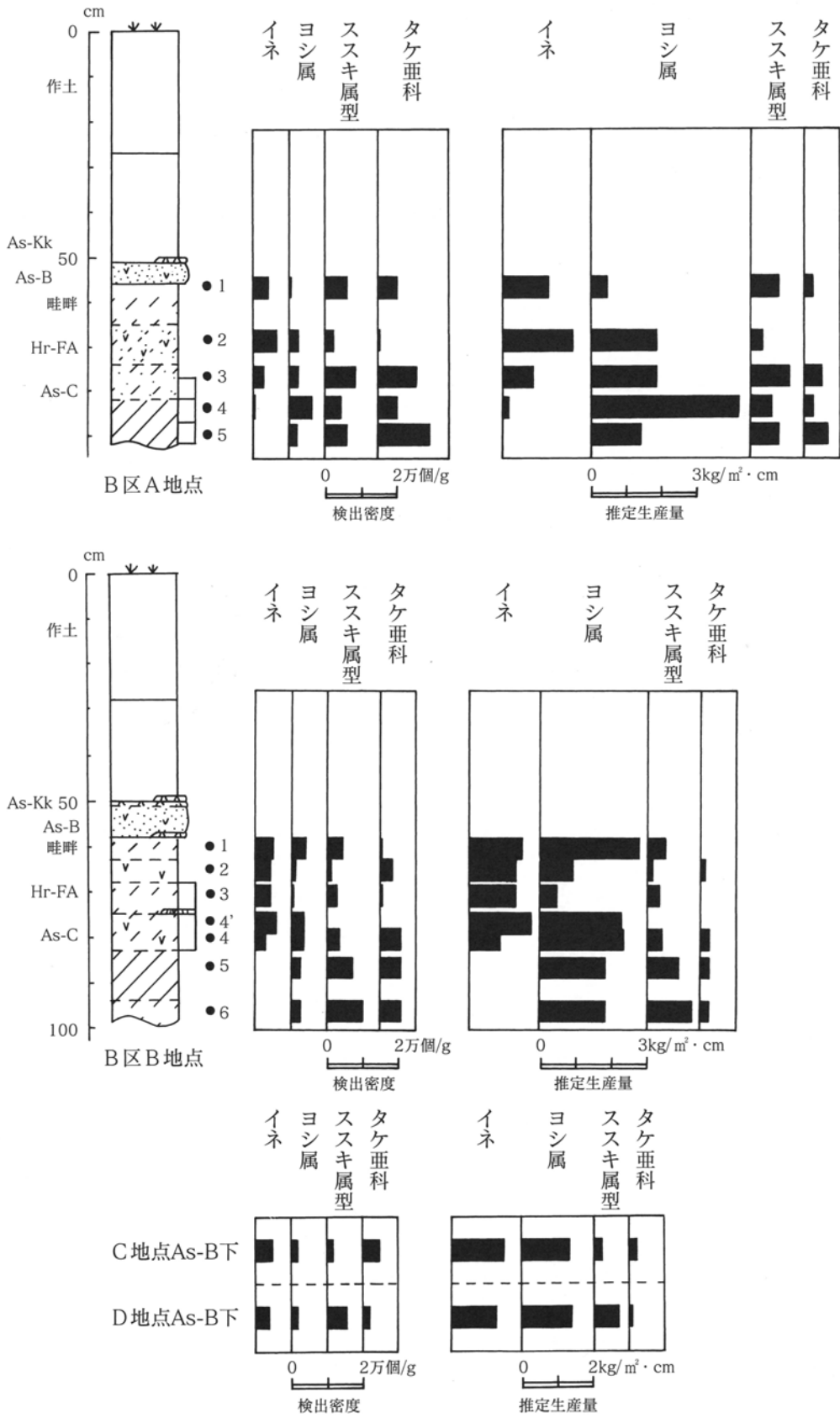
分類群	学名	A地点					B地点						C地点	D地点	
		1	2	3	4	5	1	2	3	4	5	6	1	1	
イネ	<i>Oryza sativa</i> (domestic rice)	45	68	30	7		52	45	45	60	30			52	45
ヨシ属	<i>Phragmites</i> (reed)	8	30	30	67	23	45	15	8	37	38	30	30	22	23
ススキ属型	<i>Miscanthus</i> type	68	30	90	52	68	45	15	30		38	76	105	22	60
タケ亜科	Bambusoideae (Bamboo)	60	8	112	60	150	7	37	8		61	60	60	52	23

指定生産量 (単位: kg/m<sup>2</sup>・cm)

イネ	<i>Oryza sativa</i> (domestic rice)	1.32	2.00	0.88	0.22		1.54	1.32	1.32	1.76	0.89			1.54	1.32
ヨシ属	<i>Phragmites</i> (reed)	0.47	1.91	1.89	4.25	1.42	2.83	0.94	0.47	2.37	2.39	1.91	1.90	-1.41	1.42
ススキ属型	<i>Miscanthus</i> type	0.84	0.38	1.11	0.65	0.84	0.56	0.19	0.37		0.47	0.94	1.31	0.28	0.74
タケ亜科	Bambusoideae (Bamboo)	0.29	0.04	0.54	0.29	0.72	0.04	0.18	0.04		0.29	0.29	0.29	0.25	0.11

※試料の仮比重を1.0と仮定して算出。

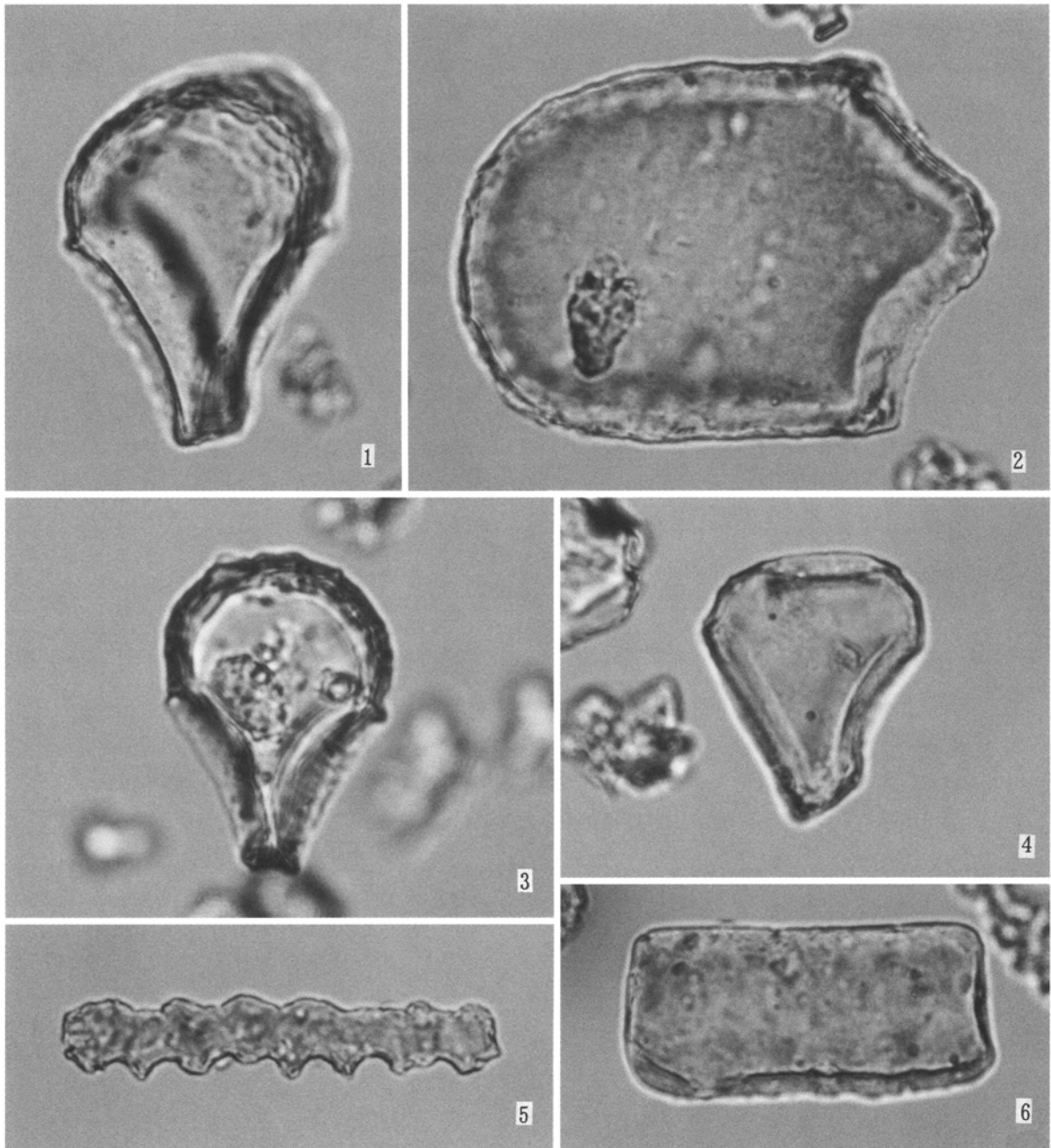
II 萩原遺跡の調査



第271図 B区プラントオパール分析結果

第6表 プラントオパール識別一覧表 (倍率は全て 400倍)

写真No	分類群	地点	試料名
1	イネ	B区B	1
2	ヨシ属	B区B	2
3	イネ	B区A	3
4	ススキ属型	B区B	3
5	棒状珪酸体	B区B	5
6	キビ属型	B区B	2



B区 プラントオパール顕微鏡写真



萩原遺跡A区1号住居跡出土炭化材の樹種同定

埴田弥生 (パレオ・ラボ)

1 はじめに

ここでは、古墳時代後半のA区1号住居跡から出土した炭化材(13試料)の樹種同定結果を報告する。住居跡から出土する炭化材は主に建築材と捉えることができ、各地域において各時期の建築材樹種を明らかにすることは、建築材を伐採したであろう森林環境や木材利用の変化過程を理解する上で重要な資料蓄積となる。

2 方法

採取されていた一部破片を基に、まず炭化材の横断面(木口)を手で割り新鮮な面を実体顕微鏡で予察した。管孔配列が特徴的な広葉樹林は、実体顕微鏡下の観察で同定を決定した。そして代表的試料の3方向(横断面・折線断面・放射断面)を走査電子顕微鏡で写真撮影した。

走査電子顕微鏡用の試料は、材の3方向断面の小ブロックを5mm角以下の大きさに整え、直径1cmの真鍮製試料台に両面テープで固定し、試料を充分乾燥させた後、金蒸着を施し、走査電子顕微鏡(日本電子(株)製JSM-T100型)で観察と写真撮影を行った。なお材の接線断面(板目)と放射断面(柃目)は、片歯の剃刀を各方向に軽く当て弾くように割り作成した。

3 結果

13試料は全てクヌギ節であり、1年輪幅が2mm前後の破片が多かった(表1)。クヌギ節の属するアベマキとクヌギは、材組織が類似しているため材から種を識別できないが、2種とも暖温帯落葉広葉樹林に多く生育する落葉高木で、二次林にも多い。クヌギ節の材は現在は主要建材としては利用されていないが、県内においても古墳時代は代表的な建築材樹種として知られており、当住居でも多用されていたことが確認された。13試料は、住居内の東半分から出土し、住居中央部に向かい材の長軸が伸びるように横たわっている炭化材が多く、垂木材の可能性が高い。

クヌギ節と同定した根拠は、以下に示す特徴が観察されたことによる。

コナラ属コナラ亜属クヌギ節 *Quercus* subgen. *Quercus* sect. *Cerris* ブナ科 図版1

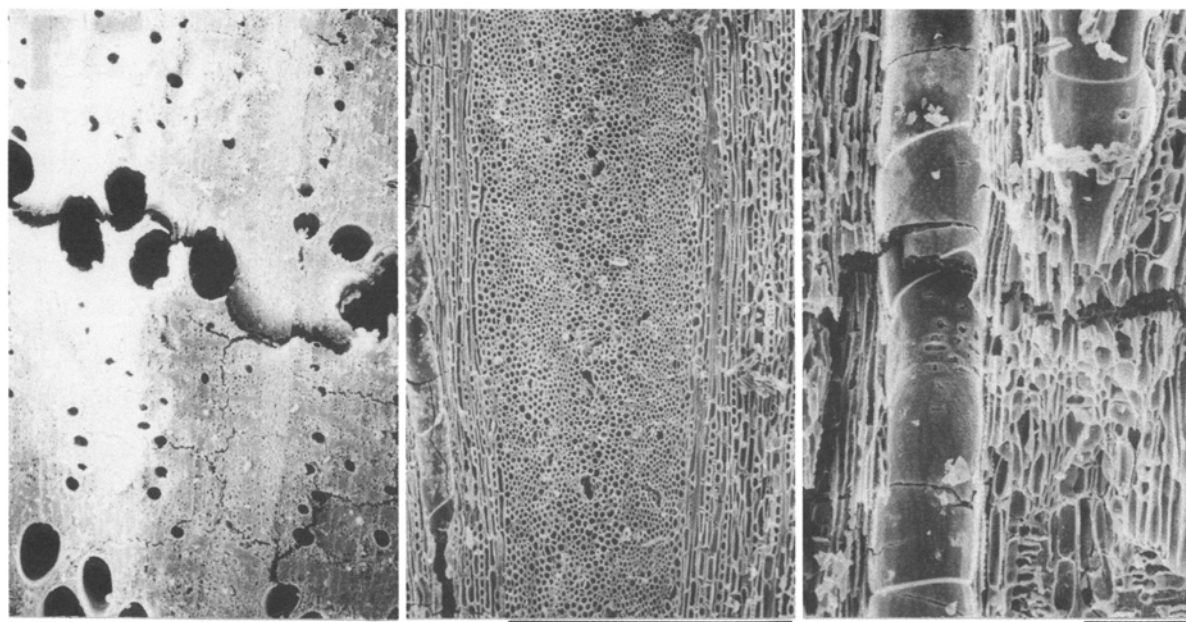
1a-1c (遺物番号63)

年輪の始めに大型の管孔が1~3層配列し、その後は小型で孔口は丸く厚壁の管孔が単独で放射方向に配列し、広放射組織をもち、放射状・網状の柔組織が顕著な環孔材である。道管の壁孔は交互状、穿孔は単穿孔である。放射組織は同性、単列のものと集合状のものがあり、道管との壁孔は柵状である。

第7表 A区1号住居跡(古墳時代後期)出土炭化材

遺物番号	樹種	1年輪幅	遺物番号	樹種	1年輪幅
41	クヌギ節	2mm前後	57	クヌギ節	3mm前後
48	クヌギ節	2~4mm	58	クヌギ節	2mm前後
49	クヌギ節	2mm前後	61	クヌギ節	
52	クヌギ節	3mm前後	63	クヌギ節	2mm前後
54	クヌギ節	2~3mm	64	クヌギ節	
55	クヌギ節	2mm前後	68	クヌギ節	
56	クヌギ節	2mm前後			

A区1号住居跡出土炭化材樹種走査電子顕微鏡写真



1 a クヌギ節(横断面)  
遺物番号63 bar : 1.0mm

1 b クヌギ節(接線断面)  
遺物番号63 bar : 0.5mm

1 c クヌギ節(放射断面)  
遺物番号63 bar : 0.1mm

## Ⅲ 成果とまとめ

### 1 萩原遺跡

#### (1) はじめに

荒砥川と神澤川に挟まれ前橋市二之宮地区は、西に流れる広瀬川より臨むと一段高い高台となっている。古代においては居住に良好な条件を有していると想像できる地形であり、上部国道や圃場整備等に関わる発掘調査では縄文時代から近世に至る遺構が数多く発見されている。

萩原遺跡の調査でも、最初に着手した微高地の調査では予想に違わず弥生時代から平安時代に至る竪穴住居跡が発見され、さらに東へと続く次年度以降の調査でも集落の延長が発見されることが期待された。しかし、微高地は途切れ、低地での水田・畑の検出のみで住居跡の発見には至らなかった。再び微高地となるC・D区は圃場整備等の削平からか遺構未検出地域が多く、調査面積に比し遺構数は少なかった。

途中中断も含め平成8年から平成11年、足掛け4年に及ぶ調査で弥生時代の竪穴住居跡3軒、古墳時代の竪穴住居跡22軒、平安時代の竪穴住居跡31軒、時期不明の竪穴住居跡3軒、平安時代の掘立柱建物2軒、平安時代の水田、時期不明の畑跡、平安時代の溝1状、中世の溝11状、近世・時期不明の溝7状、縄文時代の陥穴・土器埋設土坑3基、古墳時代の土坑7基、平安時代の土坑4基、中・近世の墓壇27基、近代・時期不明の土坑63基、時期不明の井戸2基等多くの遺構が発見され、周辺で行われてきた調査結果をさらに追証、補強する内容となったことは一つの成果と言える。各時代毎の遺構分布状況は、「Ⅱ萩原遺跡の調査、3検出された遺構と遺物(1)遺跡の概要」を、各遺構の詳細については本文をそれぞれ御覧頂きたい。

ところで、発見された竪穴住居跡59軒のうち古墳時代後期と思われるの住居跡は10を数え、遺存状況良好な住居跡や遺物出土の状況から該期の住居

跡の内部施設について示唆に富む情報を得ることが出来た。また、平安時代の住居跡と水田のからは居住域と生産域との関連を窺わせる資料を、近世の墓壇22基のうちD区23号土坑では、出土遺物の内容から行人塚を思わせる資料も得ることが出来た。ここでは前述した内容について若干の考察を述べ、まとめとしたい。

#### (2) 竪穴住居跡の内部施設

萩原遺跡で確認した古墳時代後期と思われる竪穴住居跡10軒のうち、焼失家屋が2軒あった。焼失家屋の中には焼失・廃棄という要因により、当時の家の内部施設が分かる住居跡もある。A区1号住居跡は北壁内側の床直上に、本住居跡の構築材と思われる木材が炭化した状態で一面に多量に検出された焼失住居跡である。そのため、住居跡に付設される竈は廃棄・破壊されることなく極めて良好な状態で発見され、古墳時代の竪穴住居跡竈の構造を知る上で良好な試料を得た。

竈袖は住居跡内側に約1.1mと大きく張り出し、焼き口部の天井に礫を渡し、袖部の芯材として土師器甕数個が入れ子状に重ねて据えられていた。焼き口部の天井石には粘土等の土が塗布された形跡は認められず、剥き出しの状態で使用されていた。入れ子状の土師器甕は芯材として利用されており、甕を包むように暗褐色土、褐色土、灰白色粘質土が被覆されていた。検出された竈の焼き口幅は約30cm、焼き口部の高さは土圧による影響であろうか4cmと狭い。竈内部は焼き口部付近が僅かに5cm程窪んではいるが、入り口から奥80cmまでは全体的には平坦な面が続き約45度の角度で煙道が立ち上がり、屋外へと続く。

また、焼き口部の奥約50cmの位置には長さ20cm、径10cm程の砲弾形をした丸礫が、支脚として貼床に設置した状態で検出された。支脚の直上の埋土は締まりの弱い暗褐色土が筒状に堆積している状況が看取され、甕等を設置する穴と推察された。また、竈袖の直下にはロームブロックを多量に含む貼床が

残存しており、床を張った後に竈を設置した状況も把握できた。

A区6号竪穴住居跡からは、甕を置き台として転用していたと思える状況が把握できた。本住居跡の竈右袖と住居跡壁に挟まれた区画は幅約16cm、高さ数cmの土手状の高まりで、ほぼ正方形に区画されている。区画内の手前には貯蔵穴、奥壁際には下部が欠損した甕が、上半部のみを上に出した状態で埋設されていた。埋設部分の甕胴部は2ヶ一對凸状に意図的に打ち欠かれ、甕口縁部が床と水平になるように水平に据えられている。この甕の左横には接合・復元の結果、完形となる甕が倒れた状態で検出されている。埋設されていた甕には甕胴部が収まることから、甕置き台として利用していたとも推測できる。

このように、竈右袖脇に甕等を置き台として転用していると思われる状況は、元総社西川遺跡4号竪穴住居跡（群埋文第288集2001年）にもある。元総社西川遺跡では甕は埋設されておらず、破損した甕口縁部を直接床に倒置し損失部分に丸底甕更に上に甕が重ねられていた。

遺物の出土状態から、住居跡壁際に棚等の施設が考えられる竪穴住居跡も発見された。A区6号住居跡とA区32号住居跡は、ともに6世紀前半に比定される竪穴住居跡である。2軒とも出土遺物が多く、調査時の番号付遺物は6号住で約400点、32号住居跡で約800点を数える。復元の結果、報告書に掲載する遺物も多く6号住居跡で40点、32号住居跡で55点に上る。出土遺物数・掲載遺物数がともに多い点は共通するが、遺物の出土状況から考えられる遺物観には違いがある。

6号住居跡の遺物は住居の中央付近、床より30cm以上浮いた地点に集中するのに対し、32号住居跡では住居壁際の貯蔵穴周辺に集中する。この出土状況の違いから考えられることは何か。

一般的に、竪穴住居跡が自然埋没する過程では埋土がレンズ状堆積を成し、壁際に比して中央付近が低い状況となる。このような埋没過程の竪穴住居跡は

ゴミ捨て場として利用されたり、畠として利用されたりするが、6号住居跡の遺物出土の状況はゴミ捨て場の様相を呈していた。投棄されたと思われる土器片は中央付近に集中・散在し、接合・復元率が高いものの完形ほぼ完形となる遺物は少なかった。もっとも、不要となった物を捨てる場所がゴミ捨て場であることを考えれば、それを裏付ける結果とも言えようか。

また、接合・復元不可能で未掲載となった遺物数も多く、本遺跡内で発見された竪穴住居跡では最大で土師器杯片2950g、土師器甕・壺片13350g、須恵器杯片50g、須恵器甕片230g、総重量で16580gを計る。それに反してA区32号竪穴住居跡の遺物出土地点を見ると、土師質遺物は住居跡の貯蔵穴付近に集中して発見されている。復元の結果、完形或いはほぼ完形となった遺物数は、他の住居跡に比べると数段多い。さらに、この貯蔵穴周辺では完形で発見された遺物も多く、床直上および床より浮いた地点にも数点の杯が発見されている。本住居跡は炭化材が床に広がる焼失家屋という要因を鑑みれば、突然の失火で土器等を持ち出すこと無く慌てて避難した状況も想像できそうである。

では、貯蔵穴周辺に集中するこれら多量の遺物は何を意味するのであろうか。明らかに6号住居跡の遺物出土状況とは異なるものである。竪穴住居跡には、土器等を収納する何らかの施設があったと考えられている。32号住居跡が焼失する際、棚状の施設から転落した土器が、今回多量に発見されたこれらの土器と考えることはできないだろうか。

再度、本住居跡の平面図を見ると、貯蔵穴から68cm離れた場所に幅20cm、長さ90cm、深さ20cmの住居跡内に張り出した、間仕切り跡と思われる溝がある。遺物は、この溝と貯蔵穴との間に集中している。想像を逞しくすれば、溝に壁状の仕切を設け、棚状の収納施設を構築していたと考えられないだろうか。

なお、6号住居跡から出土した遺物は、住居跡埋没過程で外部より投棄された土器が主体となると考

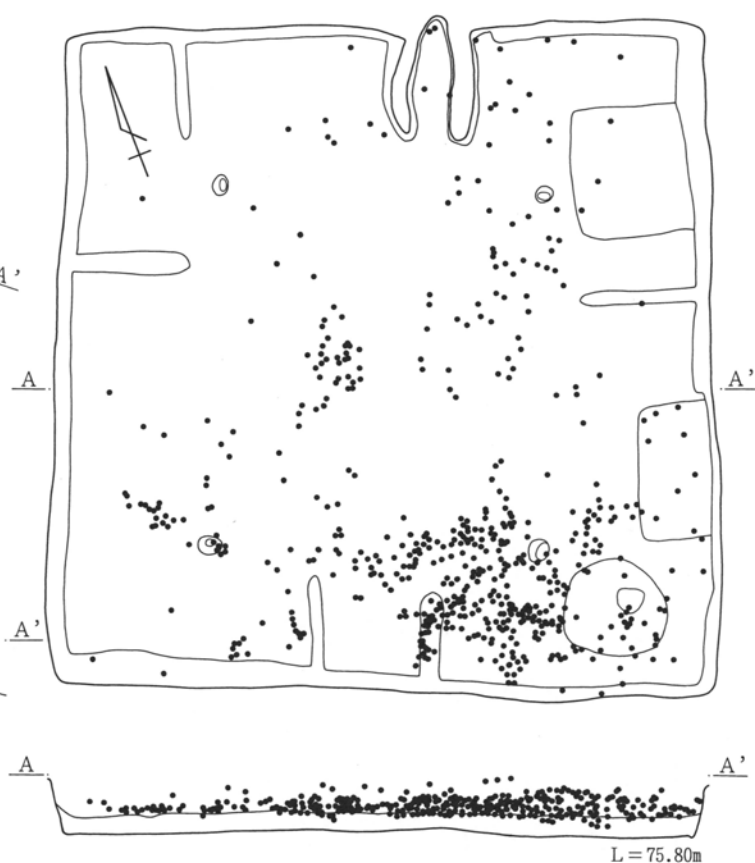
### III 萩原遺跡の成果とまとめ

えられる。6号住居跡出土遺物として掲載した土器は本来この住居跡で使用されていた土器とは異なり、6号住居跡より若干の時期差が生ずる。本住居跡の竈内や床直上で出土する遺物は6世紀前半を示唆する一方、若干新しいと思われる遺物も取り上げられている。時期差のあるこれらの土器が投棄された遺物であろう。

一方、32号住居跡より出土した遺物に時期差はさほど認められない。仮に棚等の収納施設より転落した土器が集中して出土したものと考えれば、出土地点の高低の相違はあったとしても、これらの土器は本住居に於いて使用されていた遺物と考えても良からう。



第272図 A区6号住居跡遺物出土地点



第273図 A区32号住居跡遺物出土地点

#### (3) 水田と居住域との関連

萩原遺跡で発見されたAs-B下水田は、いつ頃から始まったのであろうか。群馬県内のAs-B下水田の開発は地域による若干の差は認められるものの、全体的な傾向としては9世紀代より開発が本格化するとされている（「群馬県における平安時代の水田開発」新井 仁2001）。

本遺跡で発見された竪穴住居跡は、弥生時代中期

後半が3軒、古墳時代前期4世紀代が12軒、古墳時代後期6世紀代が10軒、平安時代9世紀代が21軒、平安時代10世紀代が11軒と、古墳時代の4世紀代と平安時代の9世紀代に大きなピークを迎える。7・8世紀代の遺構未検出時期を挟み、9世紀代に突如として多数の竪穴住居跡の出現をみることから、彼らにより律令期の開田が行われたと考えるのが妥当であり、A区の微高地が居住域、西側の低

地部に広がる水田が生産域として利用されていたと考えられる。

もともと、B区における自然化学分析の結果では、As-B下水田耕作土下位の土のプラントオパール数値は、FP或いはFAを含む黒色粘質土においては6,800個/g、As-C軽石含む黒色粘質土の数値は3,000個/gと、As-B下水田耕作土の自然科学分析値の4,500個/gと大差なく、古墳時代から水田が営まれていた可能性は否定できない（弥生時代の可能性もありうる）。

しかし、本来継続的に営まれる水田は、洪水や火山噴火に伴う降灰等の偶発的な自然災害等で畦畔等の遺構がパッキされない限り、良好な状態で遺構が発見されることは望めない。継続的に間断なく行われる耕作により畦畔等は破壊され、明瞭に残存する可能性は低くなる。本調査区における各層位毎の調査でも畦畔・水口等の水田経営に伴う遺構は発見されていない。

次に、As-B一次堆積直下で発見された水田を営んでいた人々について考えてみる。As-B下水田耕作土下にB区4号竪穴住居跡が検出されている。この住居跡からの出土遺物は少なく明確な時期特定を下すのは難しいが、僅かに出土した須恵器片や住居形態から平安時代の可能性は高く、微高地縁辺部に構築された住居を潰し水田の拡張・拡大が図られている。A区微高地で発見された平安時代10世紀代の竪穴住居跡が居住域で、今回の調査で発見された水田が生産域となるのであろう。

ところで、本遺跡西側の下増田越渡遺跡で発見されたAs-B下水田の標高は約71m、本遺跡で発見されたAs-B下水田の標高は約76mで、比高差にして約5mを測る。下増田越渡遺跡で発見された水田への水の供給は、おそらく旧荒砥川を利用したものであろうが、約5mの比高差を有し台地上に展開する本遺跡の水田に旧荒砥川の水を取水することは、かなり困難を伴うと考えられる。本遺跡の台地上に広がる水田への給水源を考えることが、今後の課題である。

#### (4) D区23号土坑出土遺物

D区23号土坑からは、人骨の出土は無いものの口絵写真にあるような輪宝を模した飾り金具・鉦・火打ち金・鏡・古銭といった遺物が墓壇底部より出土している。宋銭・明銭といった渡来銭や寛永通寶が伴うだけの他の墓壇に対し出土遺物が明らかに異なる。当初、鏡や飾り金具の裏に付着する金糸を伴う布等から、地域の有力者或いは僧侶が埋葬された墓を想定していたが、その出土遺物の内容から即身仏・行人塚の可能性が窺えた。

即身仏とは衆生救済を願い厳しい修行のすえ自らの肉体をミイラとし残しておくことである。即身仏となるためには木食修行と土中入定の2段階を踏む必要があると言われている。木食修行とは土中入定のための準備段階にあたり、米や麦等の五穀、十穀を絶ち木の実などで命を繋ぎながら身体の脂肪や水分を落とし、殆ど即身仏そのものの状態にまで身体を作っていくことである。土中入定とは、地面に深さ3m程の穴を掘り湿気や防虫のための石室を築き、呼吸のための節を抜いた竹筒の先が地上に出るようになっている木管を入れ、その中に生きてままで入定することである。入定した行人は鉦を鳴らし読教を続け、鉦の音が途絶えると息絶えたことの証となり、3年3ヶ月後に再び掘り出され即身仏（ミイラ）となると言われている。

死後も衆生救済に尽くすことを願い即身仏になる行人は江戸時代に多く、特に湯殿山系の行人が活躍していたようである。荒砥地区及び周辺の行人塚に関わると思われる資料を調べてみると、「上毛古墳総覧」に勢多郡荒砥村第236号行人塚が、明治14年編の「小字名調書」には、上野国南勢多郡二之宮村に大日塚の小字名が記載されている。また、木瀬村の下長磯字行屋には、その名の示す如く行人集団の籠り堂があったといわれ、荒砥村大字荒子の行人山の調査では大量の錫杖の頭が出土している。今回の調査で発見されたD区23号土坑に関連すると思われる史実は確認できなかったが、出土遺物から入定に関係する遺構の可能性も比定できない。

### Ⅲ 萩原遺跡の成果とまとめ

#### 引用・参考文献

『伊勢崎市史』自然編	伊勢崎市	1987年
『伊勢崎市史』通史編	伊勢崎市	1987年
『萩原遺跡Ⅱ』	前橋市埋蔵文化財発掘調査団	1998年
『新井大田関Ⅱ 萩原遺跡Ⅲ』	前橋市埋蔵文化財発掘調査団	1998年
『下増田越渡遺跡』	県埋蔵文化財調査事業団	2004年
『波志江中野面遺跡』	県埋蔵文化財調査事業団	2004年
『荒砥前原遺跡・赤石城址』	県埋蔵文化財調査事業団	1985年
『中組遺跡』	県埋蔵文化財調査事業団	2001年

## IV 新井大田関遺跡の調査

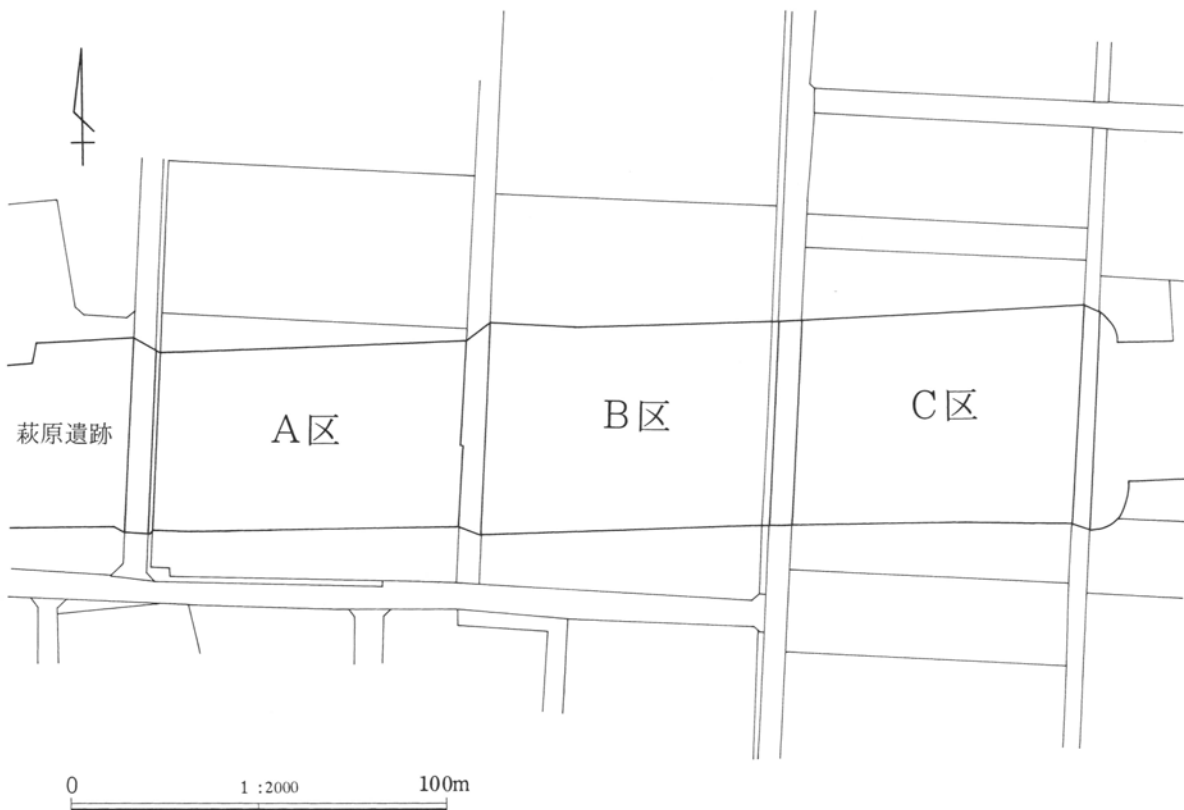
### 1 調査方法と調査経過

調査にあたっての方眼設定には、国家座標第IX系を用い10mを基準とし、各方眼の名称は、南東隅の座標値で表記した。表記の仕方についてはX軸・Y軸ともに座標値の下3桁の数値が重複しないことから、下3桁のみの表記とした。一例としてX=38840、Y=-59100の場合、X=840、Y=100となる。遺構名称は基本的に各調査区のアルファベットを冠し、遺構の種類別に算用数字を用いた通番とした。遺物注記は遺跡番号であるKT-180を使用した。

本遺跡では、発掘調査にあたり遺跡内を南北に横切る現道及び用水路を境として区切り、名称は便宜上対象地区を西からA・B・C区と3区画に分けて

調査を実施することで合意がなされた。発掘調査の対象表面積は8,800㎡、延面積12,400㎡であった。しかし、B、C区についてはその後の範囲確認調査の結果、遺構が認められず本遺跡発掘調査対象外となった。そのためA区のみが発掘調査となり対象地面積は当初見込みより大幅に減少し、表面積1,800㎡、延面積5,400㎡であった。

調査は平成8年12月2日より表土除去作業を実施し、As-B層下面を第1面とし発掘調査に着手した。遺構はAs-Bに覆われた12世紀初頭の水田、As-Bを掘り込んだ溝を検出し、12月末に1面の12世紀以降の調査を終了した。第2面は平成9年1月9日より開始し、9世紀代の住居、水田、溝を検出し、1月下旬に終了した。2月からは最終面である第3面のAs-C層下面の調査をおこない古墳時代の溝を検出し、平成9年2月15日をもってすべての発掘調査を終了した。

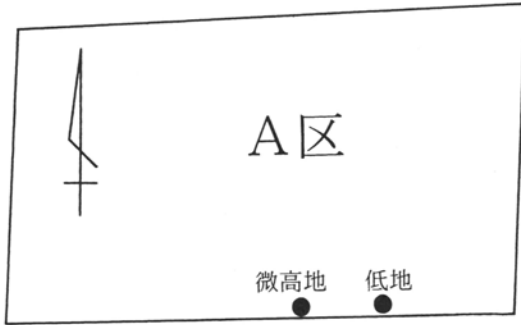


第274図 新井大田関遺跡調査区範囲図



## 2. 基本土層

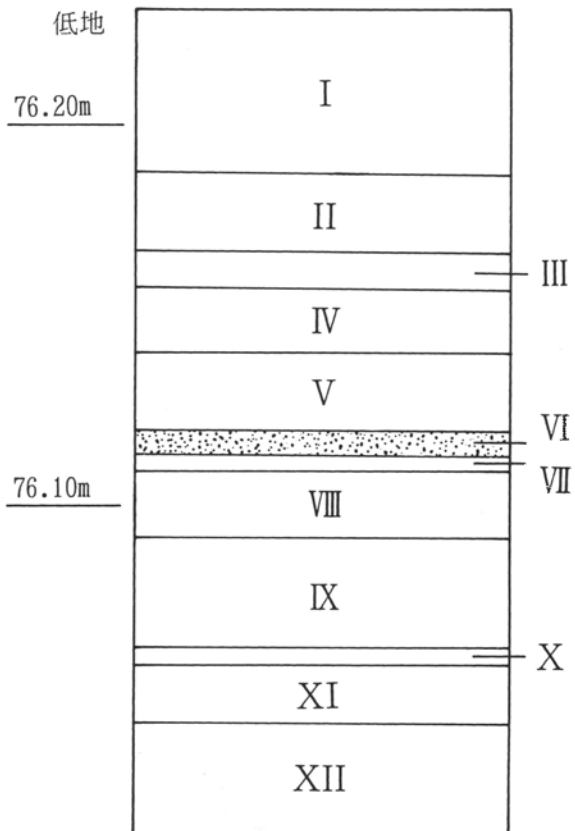
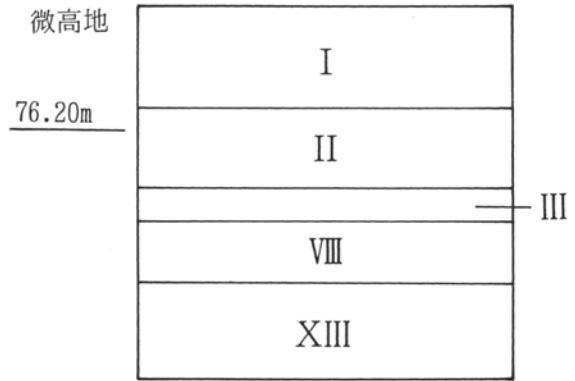
本遺跡は赤城山南麓の南端部にあり、地形・地質上赤城火山斜面と呼ばれる地形にある。この赤城火山斜面上は多数の中小河川が南下し、それら河川に



第275図 基本土層位置図 (1/1200)

- I 暗褐色土 表土
- II 暗褐色土 シルト質
- III 暗褐色土 II層よりやや明るいシルト質
- IV 暗褐色土 II層と同質
- V 暗褐色土 III層に類似するがAs-B粒を多く含み、全体に締まりがない
- VI As-B層
- VII 黒褐色土 As-B下の水田耕作土粘質性強い
- VIII 暗褐色土 白色粒、地山起源の黄色砂質土粒多く含む  
(9世紀の水田耕作地拡大層)
- IX 暗褐色土 VIII層に準ずるがより黒味が強く、白色粒を多く含む
- X As-C層
- XI 黒褐色土 植物遺体少量含む 粘質層あり
- XII 黒褐色土 XI層に準ずるが黒味が弱く、植物遺体を多く含む
- XIII 灰白色土 縄文時代の洪水層と考えられる砂質土

よる開折によって舌状台地を発達させている。本遺跡も神沢川・荒砥川などで形成された舌状台地の先端部分に位置している。このため本遺跡内においても微高地と低地では基本土層は大きく異なる。下図は本遺跡A区における微高地、低地部(谷地)の基本土層の堆積状況である。



第276図 新井大田関遺跡基本土層模式図

### 3 検出された遺構と遺物

#### (1) 遺跡の概要

新井大田関遺跡A区は、As-B層の直下では幅が30mほどで、北から南へ傾斜する開析谷が調査区の東側に存在する。この谷の西側は微高地で、地形は緩やかな上り勾配となる。また、谷の東側も一旦は微高地への緩斜面となるが、遺構が存在しなかったB区の低地へ向けて急激な下り勾配となる。

調査面は、谷の内部を中心として堆積した火山灰層と、後述する水田耕作土で分層が可能な3面を設定した。水田耕作土層についてはその上下面を調査したことから合計では4面の調査となったが、上面では遺構が認められなかったため、ここでは遺構を検出した3面について報告する。

第1面は天仁元（1108）年に降下した浅間B軽石層（As-B）の下面で、As-Bの一次堆積層が残存していた部分は平安時代（1108年）の旧地表面である。この面ではAs-Bの直下の水田の畦畔、As-Bを掘り込む溝4条と、微高地上で溝2条を検出した。

第2面は、As-Bの下位に位置する水田耕作土（Ⅷ層）の下面で、層位と出土遺物から平安時代の9世紀中葉以降に位置付けられる。この面では水田造成に伴う段差、竪穴住居4軒、用水路と考えられる溝1条を検出した。なお、先述のとおりこの層の上面も調査を実施したが、遺構は認められなかった。

第3面は3世紀後半に比定される浅間C軽石層（As-C）の下面で、同層の直下では遺構を検出できなかったが、同層を掘り込んだ用水路と考えられる溝1条を検出した。

#### (2) 第1面（平安時代面1、As-B層下面）

##### A 調査面の概要

この調査面は、天仁元（1108）年に降下した浅間B軽石（As-B）の一次堆積層を除去した面である。

この面は、東西の幅が30mほどで北から南へ傾斜

する浅い谷地形を呈しているが、As-Bはこの谷の中心部から肩部にかけてのみ残存し、谷の両側の微高地上には存在しない。したがって、As-Bの一次堆積層が残存していた部分のみが、1108年当時の旧地表面である。

##### B 水田

A区の北東部で、As-Bの一次堆積層の直下から、水田に伴う畦畔の一部を検出した。この畦畔は上幅20cm、下幅30cm、高さ数cmで、長さは東西方向に80cmである。確認した畦畔はこの部分のみであるが、As-Bの一次堆積層が残存していた谷の内部については、As-Bの直下の土壌はAs-B下面の水田に伴う耕作土である。

As-Bは、上位がおそらくその後の水田耕作と考えられる攪拌で乱され、下位の部分が僅かに残存していたにすぎない。検出した畦畔が極一部であったのは、このようなAs-Bの残存状況を反映した結果で、As-B下面の水田は少なくとも谷の全域に存在していたものと考えられる。これは、畦畔を検出した地点とは異なる地点のAs-B直下において、イネのプラント・オパール分析を行った結果、2,200個/gの値が得られ（255頁「自然科学分析」参照）、この分析結果が証左となる。

また、As-B層の下面は、下層の地形を反映した谷地形を呈し、検出した畦畔は谷の肩部にのみ遺存していた。水田面における1区画内のレベルは水平に近いはずであることから、当時のAs-B下水田はおそらく検出した畦畔の高さで水平であった可能性が高い。さらに、本来ならその後の攪拌を受けにくい谷の中心部にAs-Bの残存が少なく、したがって畦畔の遺存がないことから、この谷地形の内部は、As-B下水田の畦畔がその後の攪拌を受けた後に、下層の谷地形に沿って耕作土の全体が沈下したのと考えられる。

なお、検出した畦畔がほぼ真北に直交した東西方向に構築されていることから、この水田は条里制に伴う遺構の可能性が考えられる。

#### IV 新井大田関遺跡の調査

##### C 溝

###### 1号溝

立地 谷の東側の微高地上を北北西から南南東の方向に走行し、北から南にかけて傾斜。規模 上幅40cm、下幅20cm、深さ5cm。覆土 As-Bを掘り込み、As-Bの混土で埋没。出土遺物 なし。年代 覆土がAs-Bの混土であることから、As-B降下以降の比較的短い間に構築されたものと考えられるが、詳細な年代は不明。所見 As-B降下以降の中世の水田に伴う用水路の可能性はあるが、詳細は不明。

###### 2号溝

立地 谷の中央部を南北方向にやや蛇行して走行し、北から南にかけて傾斜。規模 上幅50cm、下幅30cm、深さ5cm。覆土 As-Bを掘り込み、As-Bの混土で埋没。出土遺物 なし。年代 覆土がAs-Bの混土であることから、As-B降下以降の比較的短い間に構築されたものと考えられるが、詳細な年代は不明。所見 As-B降下以降の中世の水田に伴う用水路の可能性はあるが、詳細は不明。

###### 3号溝

立地 谷の中央部を南北方向に走行し、北から南にかけて傾斜。規模 上幅30cm、下幅15cm、深さ3cm。覆土 As-Bを掘り込み、As-Bの混土で埋没。出土遺物 なし。年代 覆土がAs-Bの混土であることから、As-B降下以降の比較的短い間に構築されたものであるが、詳細な年代は不明。所見 As-B降下以降の中世の水田に伴う用水路の可能性はあるが、詳細は不明。

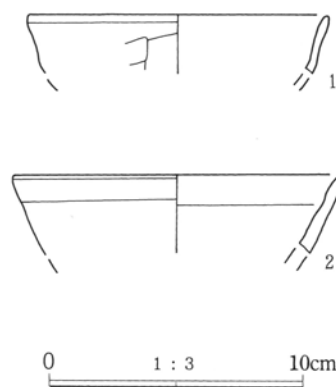
###### 4号溝

立地 谷の西側の微高地上を南北方向に走行し、北から南にかけて傾斜。規模 上幅30cm、下幅20cm、深さ6cm。覆土 As-Bを掘り込み、As-Bの混土で埋没。出土遺物 なし。年代 覆土がAs-Bの混土であることから、As-B降下以降の比較的短い間に構築されたものであるが、詳細な年代は不明。

所見 As-B降下以降の中世の水田に伴う用水路の可能性はあるが、詳細は不明。

###### 7号溝

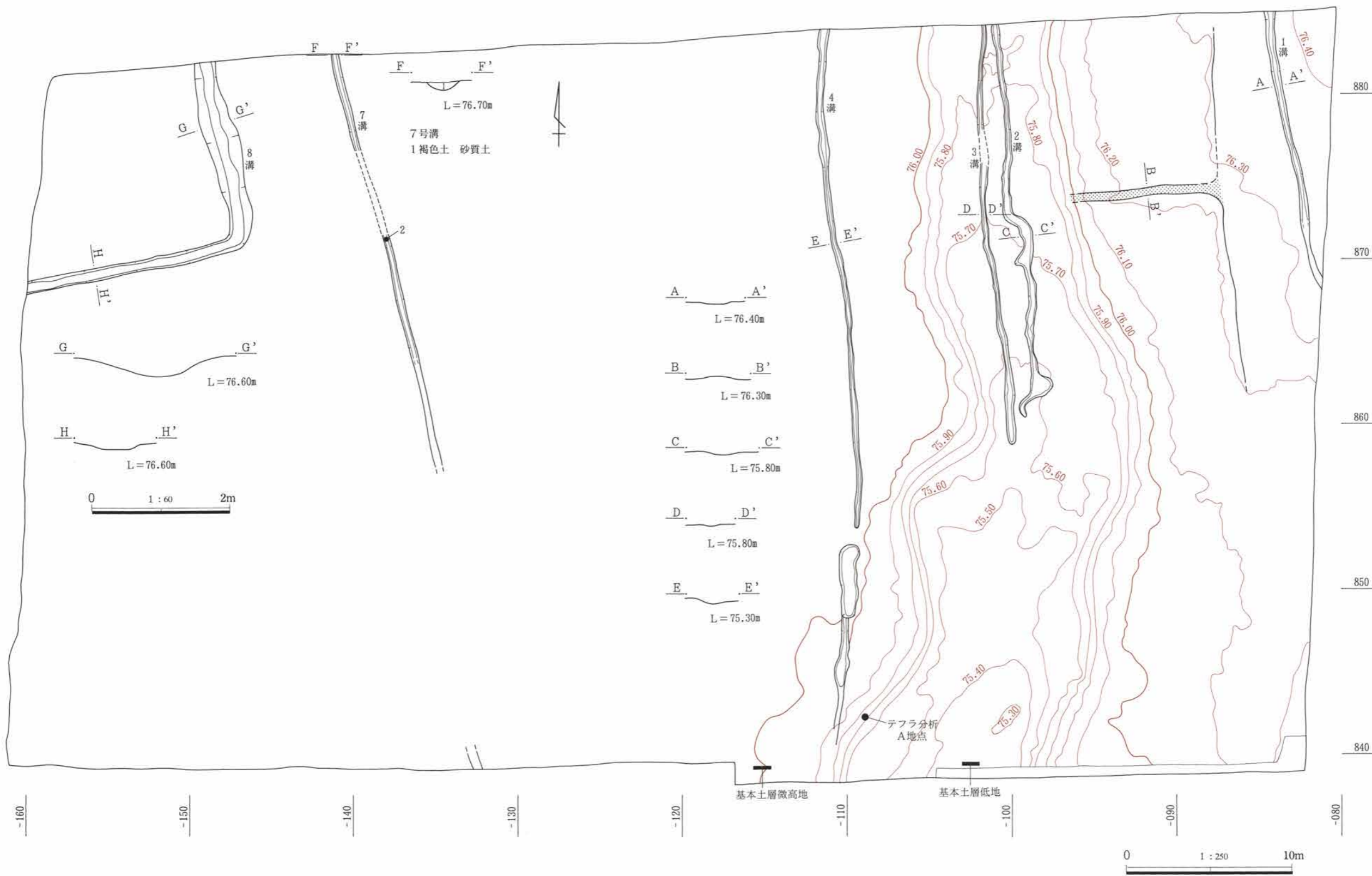
立地 谷の西側で、微高地から谷へ移行する緩傾斜地上を北北西から南南東の方向に走行し、北から南にかけて傾斜。規模 上幅30cm、下幅15cm、深さ5~10cm。覆土 砂質茶褐色土。出土遺物 土師器坏、須恵器坏の小破片が出土。年代 出土遺物が小破片で、遺構が微高地上に立地するため、層位による検証も不可能で確定的な年代は不明だが、出土遺物が遺構の年代を示すとすれば9世紀後半に比定できる。所見 性格及び年代は確定的ではないが、その立地から9世紀後半の用水路の可能性はある。



第277図 7号溝、出土遺物

###### 8号溝

立地 谷の西側の微高地上に立地。規模 上幅2.0m、下幅60cm、深さ26cmで北から南へ走行する溝が、上幅80cm、下幅40cm、深さ16cmに規模を減じ、ほぼ直角に折れて西側に走行。覆土 褐色土。出土遺物 なし。年代 伴出遺物が皆無で詳細な年代は不明だが、覆土の状況から近世以降と推定。所見 底面に水流を示す砂層の痕跡がなく、直角に折れて走行することから、水田に伴う用水路というより、何らかの区画を意図したものの可能性が考えられるが、詳細は不明。



第278図 新井大田関遺跡第1面 (平安時代1面)



## (3) 第2面 (平安時代面2)

## A 調査面の概要

この調査面は、As-B下面の水田耕作土層の下位に位置するⅧ層を除去した面である。この面は、As-B層の下面とほぼ同様に、東西の幅が30mほどで北から南へ傾斜した浅い谷地形を呈しているが、Ⅷ層はこの谷の中心部から肩部にかけてのみ残存し、谷の両側の微高地には存在しない。

調査面の年代は、上位にAs-Bが位置し、下位には後述する9世紀中葉の溝が存在することから、9世紀中葉以降で、1108年以前の平安時代に位置付けられる。

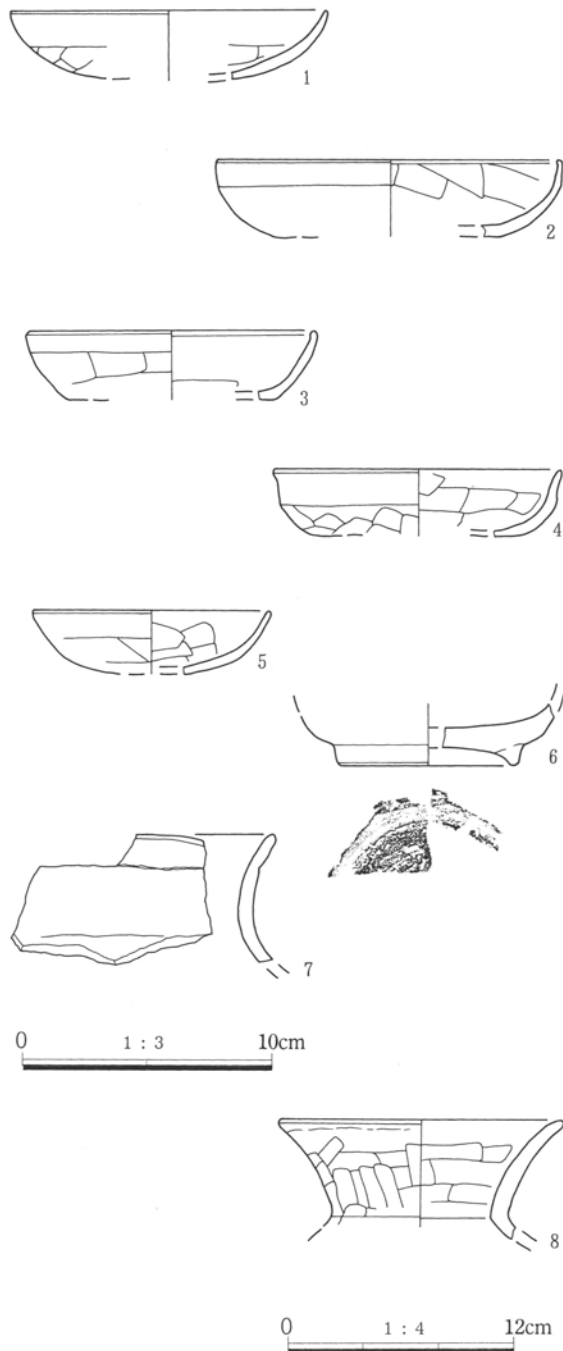
## B 水田及び水田造成による段差

Ⅷ層下面の調査に先立って、上面の調査を実施したが、掘り込まれた遺構は確認できず、畦畔も検出できなかった。しかし、同層のイネのプラント・オパール分析の結果、4,500個/gという高い値が出ており(255頁「自然科学分析」参照)、このことからⅧ層は水田耕作土と認定できる土壌である。Ⅷ層の上面で水田に伴う畦畔は確認できなかったのは、この年代に水田遺構を覆うテフラや洪水層が存在しなかったためであると考えられる。

Ⅷ層の水田耕作土内からは、土師器坏・甕・壺、須恵器碗がいずれも摩滅した状態の小破片で出土している。No.8の土師器壺は古墳時代に比定できるが、Ⅷ層の層位的な年代との矛盾から、鋤き込みによる混入と判断した。これを除いた全てが9世紀前半に位置付けられることから、Ⅷ層の年代は少なくとも9世紀前半以降に位置付けられる。

一方、この水田耕作土であるⅧ層を除去した結果、谷の両側の微高地の縁辺部に南北方向の明瞭な段差を検出した。以下に述べる竪穴住居は、このⅧ層を除去した面で検出できることから、竪穴住居はⅧ層より下層に位置している。つまり、Ⅷ層を耕作土とする水田は、それまで居住域であった微高地に造成されていると判断することができる。

調査面の微地形は、谷の中心部から微高地にかけて緩やかに高くなる地形を示している。谷から微高地に水田を拡張する場合、1区画内の水田面は基本的に水平な面が造成されることから、その微高地側の端部には段差が生じることになる(286図参照)。したがって、Ⅷ層を除去して検出した段差は、このような水田域の微高地への拡張に伴って生じたものと考えられる。



第279図 水田耕作土出土遺物

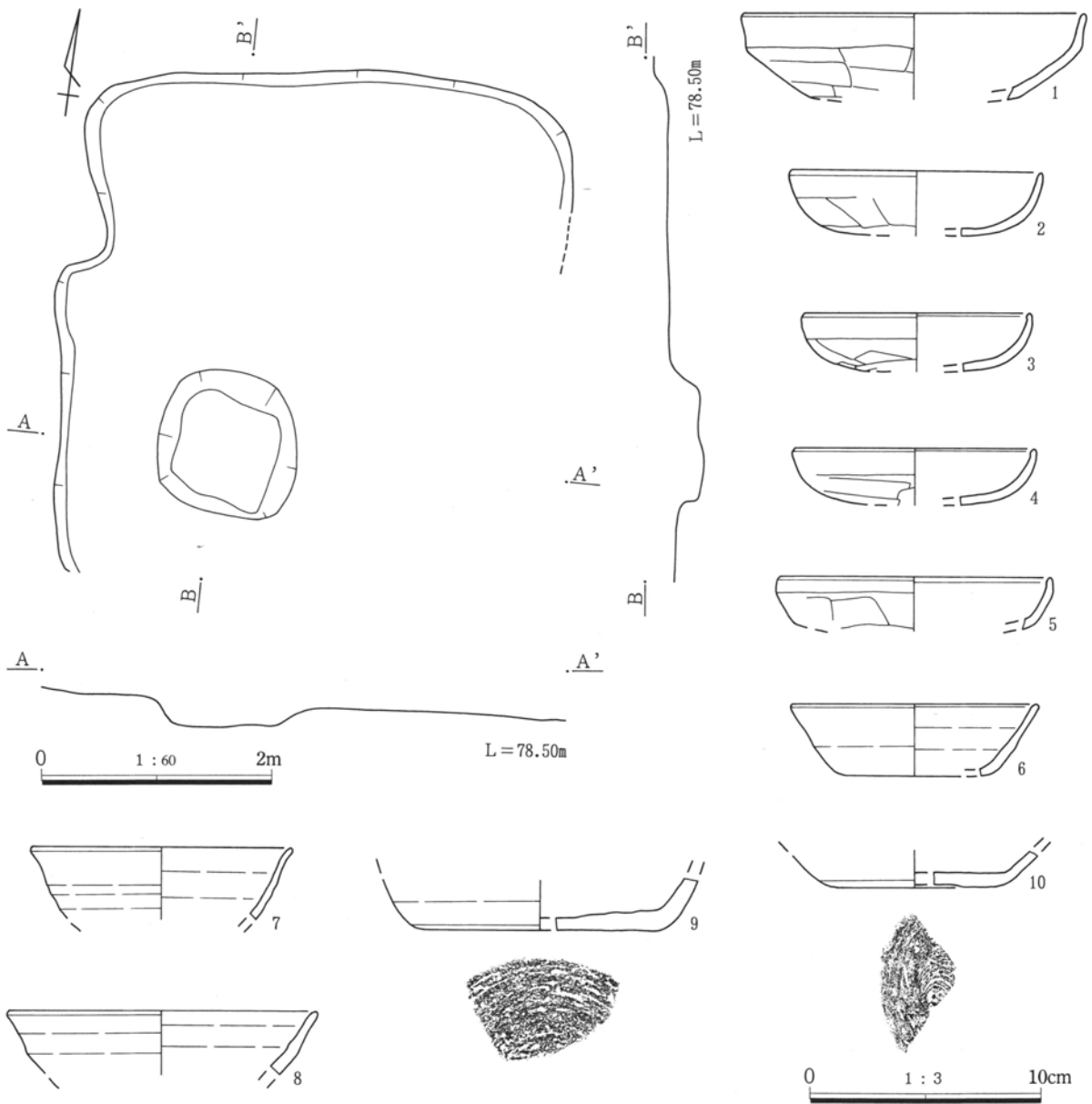
IV 新井大田関遺跡の調査

C 竪穴住居

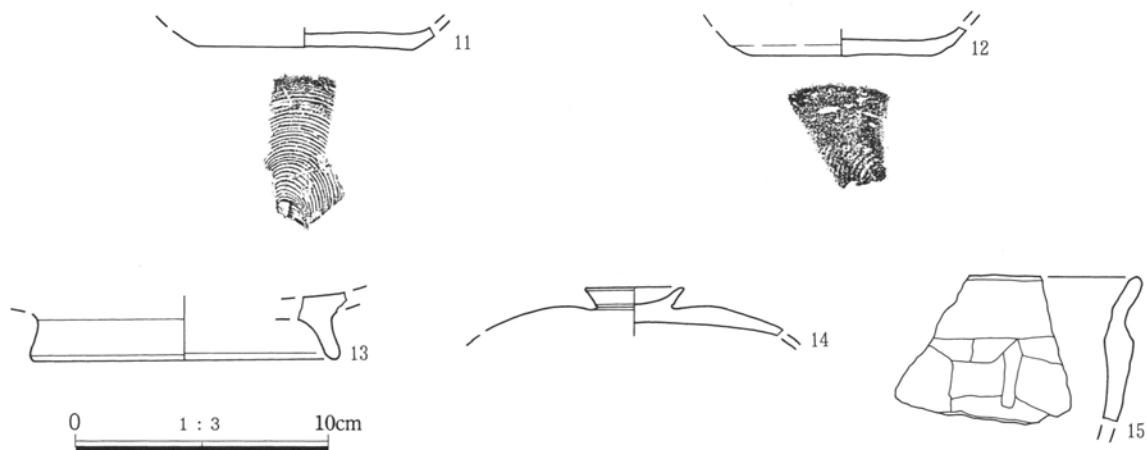
1・2号住居

立地 谷の西側の微高地縁辺部に立地。規模 西壁に屈曲する部分があり、出土遺物にも僅かな年代差が認められることから、重複した2軒の住居と考えられるが、壁高が浅いためいずれも規模は不明で、2軒の分離も不可能。北側に位置する1号住居は東西軸長4m。方位 N-82°-E。壁 残存壁高5cmで、住居覆土はⅧ層。床面 生活面は攪拌されて確認できず、構築面の基部が僅かに残存するのみ。南西部に一辺1.2m、深さ20cmの正方形ピットを検

出したが、その帰属及び性格は不明。柱穴 なし。貯蔵穴 なし。竈 確認した壁に竈の痕跡はないが、出土遺物から竈を伴う住居と推定。出土遺物 覆土内より土師器坏・鉢、須恵器坏・椀・蓋が、いずれも摩滅した状態の小破片で出土。No.1の土師器坏とNo.15の土師器鉢は古墳時代に比定できるが、遺構の層位的な年代との矛盾から、鋤き込みによる混入と判断。年代 出土遺物から8世紀後半と9世紀前半の2軒と推定。所見 Ⅷ層の水田耕作による攪拌を受け、住居構築面の基部のみが残存したものと判断。



第280図 1・2号住居跡、出土遺物

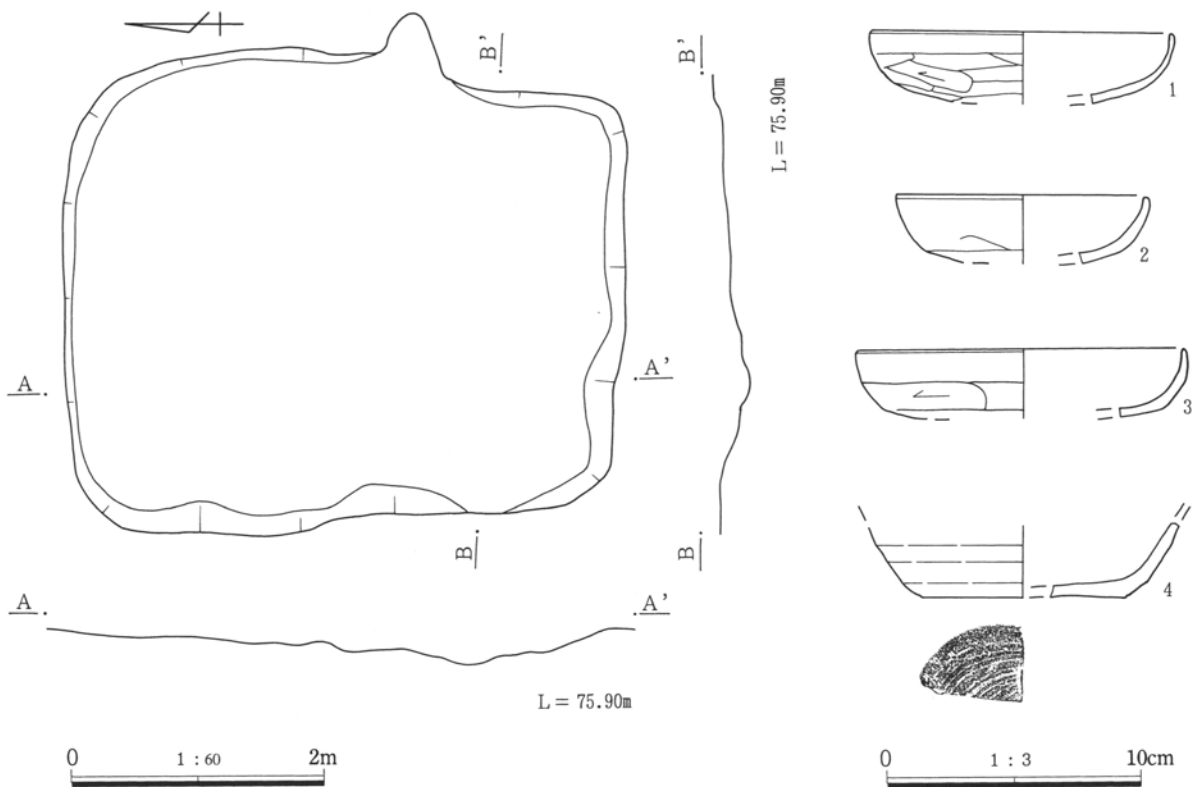


第281図 1号住居跡、出土遺物

3号住居

立地 谷の西側の微高地縁辺部に立地。規模 東西軸3.7m、南北軸4.4mで、南北に長軸をもつ長方形住居。方位 N-90° - E。壁 残存壁高5cmで、住居覆土はⅧ層。床面 生活面は攪拌されて確認できず、構築面の基部が僅かに残存するのみ。柱穴なし。貯蔵穴 なし。竈 東壁の中央よりやや南側に設置。壁高が浅いため詳細は不明だが、燃烧部は

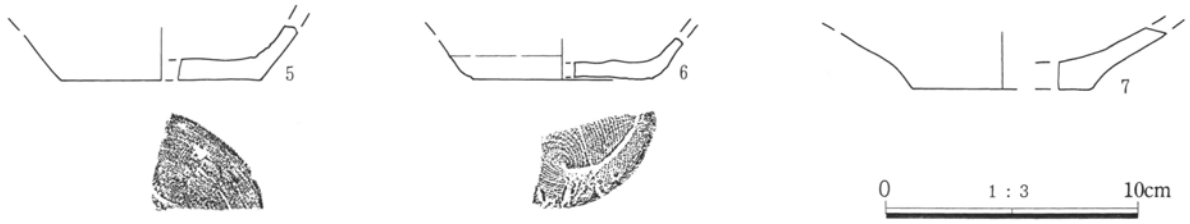
幅60cm、奥行き50cmの壁外型と推定。出土遺物 覆土内より土師器坏・壺、須恵器坏が、いずれも摩滅した状態の小破片で出土。No.7の土師器壺は古墳時代に比定できるが、遺構の層位的な年代との矛盾から、鋤き込みによる混入と判断。年代 出土遺物から8世紀末葉と推定。所見 Ⅷ層の水田耕作による攪拌を受け、住居構築面の基部のみが残存したものと判断。



第282図 3号住居跡、出土遺物



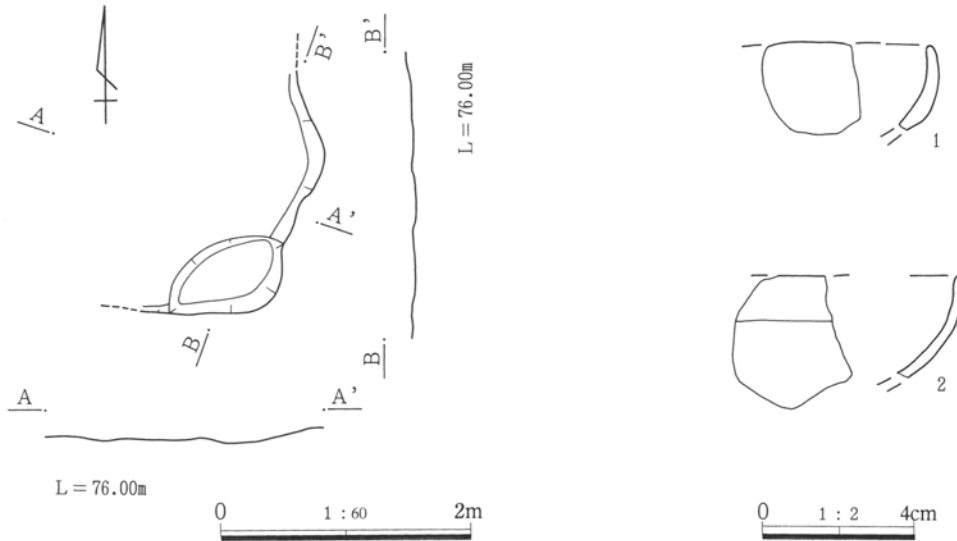
IV 新井大田関遺跡の調査



第283図 3号住居跡、出土遺物

4号住居  
**立地** 谷の西側の微高地縁辺部に立地。**規模** 壁高が浅いため、住居の南東隅を検出したのみで、全形は不明。**方位** N-88°-E。**壁** 残存壁高5cmで、住居覆土はⅧ層。**床面** 生活面は攪拌されて確認できず、構築面の基部が僅かに残存するのみ。**柱穴** なし。**貯蔵穴** 住居の南東隅に短軸50cm、長

軸90cmの楕円形状で設置。**竈** 東壁に設置すると考えられるが、壁高が浅いため詳細は不明。**出土遺物** 覆土内より土師器坏が、いずれも摩滅した状態の小破片で出土。**年代** 出土遺物から8世紀後半と推定。**所見** Ⅷ層の水田耕作による攪拌を受け、住居構築面の基部のみが残存したものと判断。



第284図 4号住居跡、出土遺物

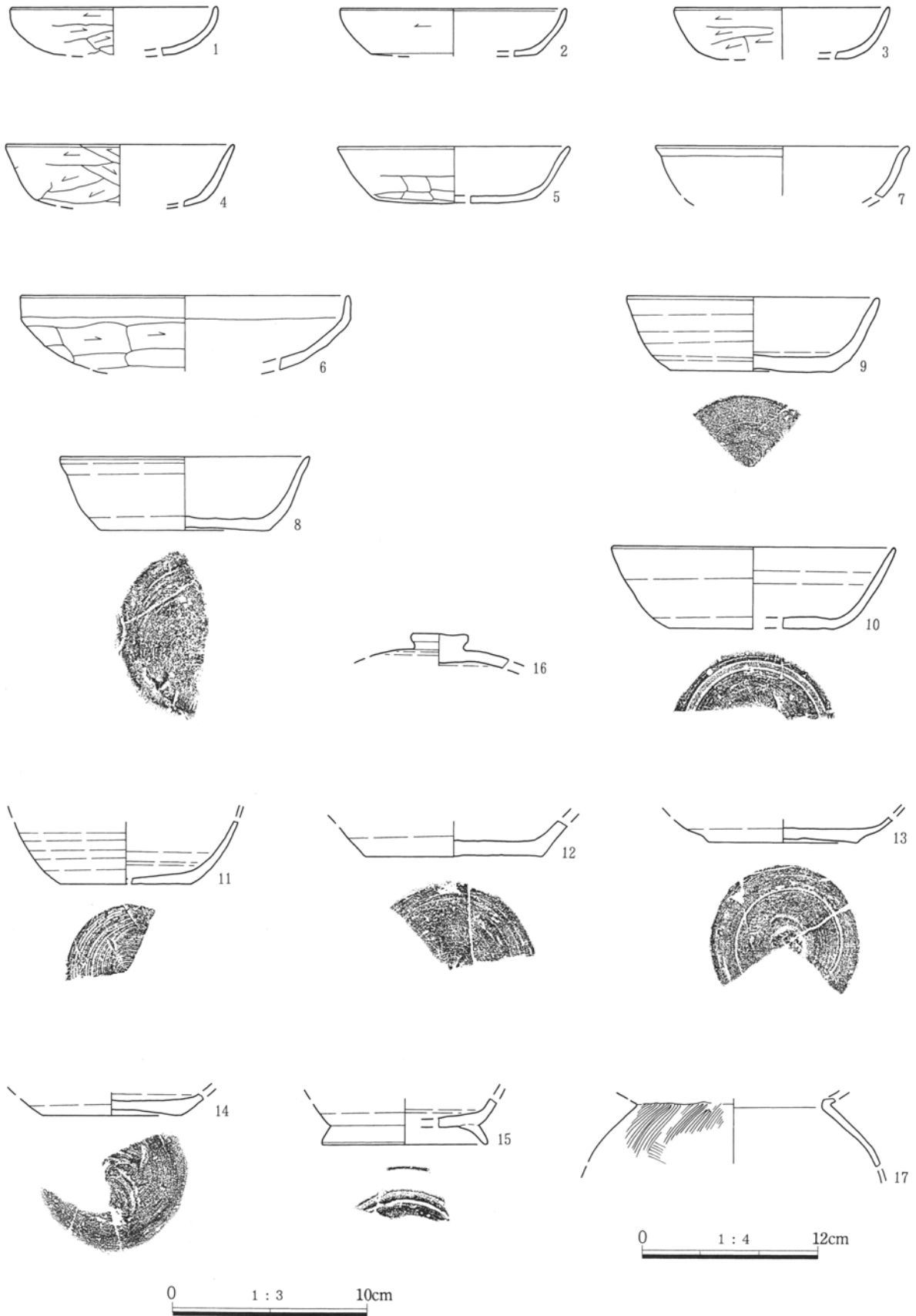
D 溝

5号溝

**立地** 谷の西側の微高地縁辺部に沿って南北方向に走行し、北から南にかけて傾斜。**規模** 上幅1.6m、下幅50cm、深さ15~20cmで、上位をⅧ層の水田耕作で削平されている。**覆土** 灰白色砂質土と黒褐色粘土の互層で、底面には水流の痕跡を示す砂層が僅かに認められる(図示不可)。**出土遺物** 溝の覆土内から土師器坏・台付甕、須恵器坏・椀・蓋が出土。No.17の土師器台付甕は古墳時代に比定できる

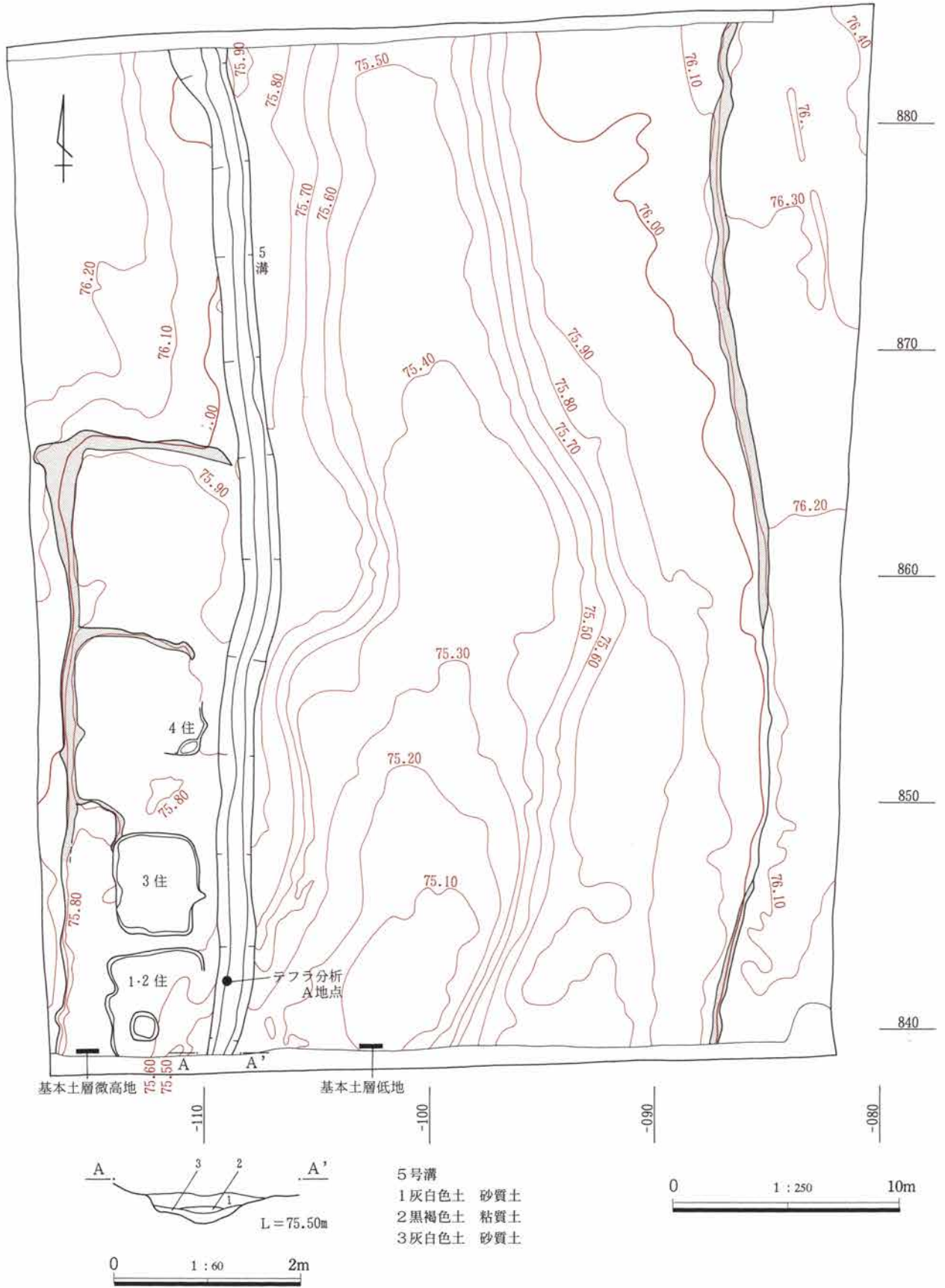
が、遺構の層位的な年代との矛盾から、鋤き込みによる混入と判断。**年代** 出土遺物に年代幅が認められ、8世紀後半から9世紀前半の年代幅をもつと推定。これは、上位のⅧ層が9世紀前半以降で、下位のⅨ層が6世紀初頭以降に位置付けられる、遺構の層位的な年代との矛盾がない。**所見** ①微高地の縁辺部に沿った立地を示すこと、②底面に水流の痕跡を示す砂層が認められることから、9世紀前半以前の用水路と判断。なお、覆土の状況から人為的に埋められた可能性が高い。

3 検出された遺構と遺物



第285図 5号溝、出土遺物

IV 新井大田関遺跡の調査



第286図 新井大田関遺跡第2面 (平安時代2面)

(4) 第3面 (古墳時代面、As-C層下面)

A 調査面の概要

この調査面は、3世紀後半に比定される浅間C軽石(As-C)の一次堆積層を除去した面である。

この面は、東西の幅が15mほどで北から南へ傾斜した浅い谷地形を呈しているが、As-Cはこの谷の中心部から西側の肩部にかけてのみ残存し、谷の両側の微高地上には存在しない。

また、As-Cが残存していない部分については、As-C直下のXI層となるが、このXI層もAs-Cと同様に谷の内部にのみ残存し、微高地上には存在しない。したがって、As-Cの一次堆積層が残存していた谷の中心部から西側の肩部のみが、3世紀後半の旧地表面である。

B 水田

As-C一次堆積層の直下では、水田遺構の一切は検出できなかった。これはイネのプラント・オパール分析の結果とも符合している(255頁「自然科学分析」参照)。また、As-Cの降下から、6世紀初頭に比定されるHr-FAまでの間の水田遺構も検出できない。

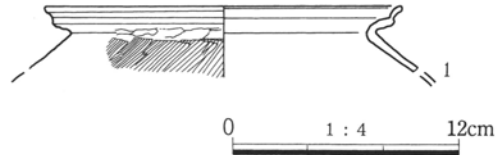
一方、この調査面では次に記述するAs-C降下以降の、古墳時代前期に比定できる用水路と考えられる溝を検出した。したがって、As-C直下及びAs-C降下以降の古墳時代前期に比定できる水田遺構の検出はないが、少なくともこの地点から下流の谷の内部では、As-Cの降下以降に水田が営まれていた可能性が高い。

また、As-C層の上層であるXI層中には、Hr-FAに伴う軽石が多量に含まれているとともに、プラント・オパール分析の結果、7,300個/gという高い値でイネのプラント・オパールが検出されている(255頁「自然科学分析」参照)。これは、水田遺構こそ検出できないものの、少なくともHr-FAの降下以降に水田が営まれたことを示唆している。

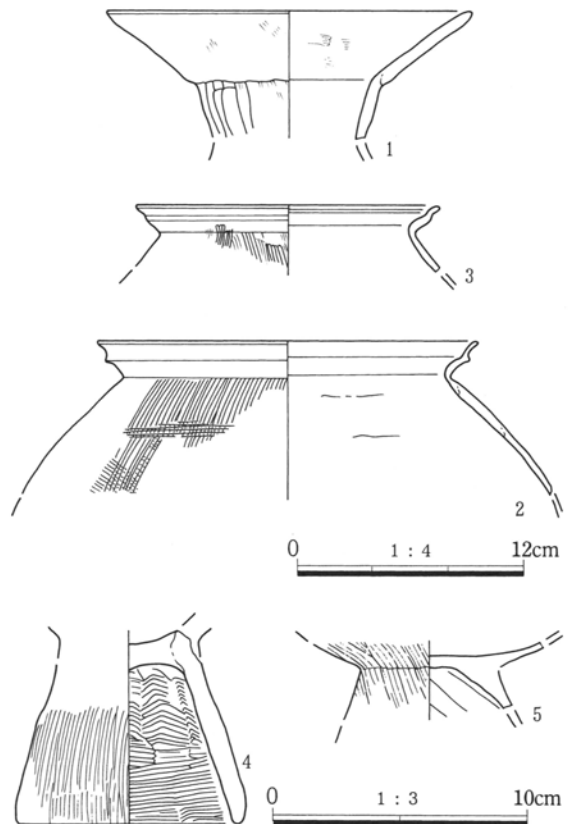
C 溝

6号溝

立地 谷の西側の微高地縁辺部に沿って南北方向に走行し、北から南にかけて傾斜。規模 上幅70cm、下幅30cm、深さ10~15cmで、上位をIX層の水田耕作で削平されている。覆土 底面に水流の痕跡を示す砂層が僅かに認められ(図示不可能)、砂質土を含む粘土層で埋没。出土遺物 溝の覆土内から土師器台付甕が出土。年代 出土遺物から4世紀前半と推定。これは、この遺構がAs-CとHr-FAを含むIX層の間に位置する、層的な年代との矛盾がない。所見 ①微高地の縁辺部に沿った立地を示すこと、②底面に水流の痕跡を示す砂層が認められることから、4世紀前半の用水路と判断。

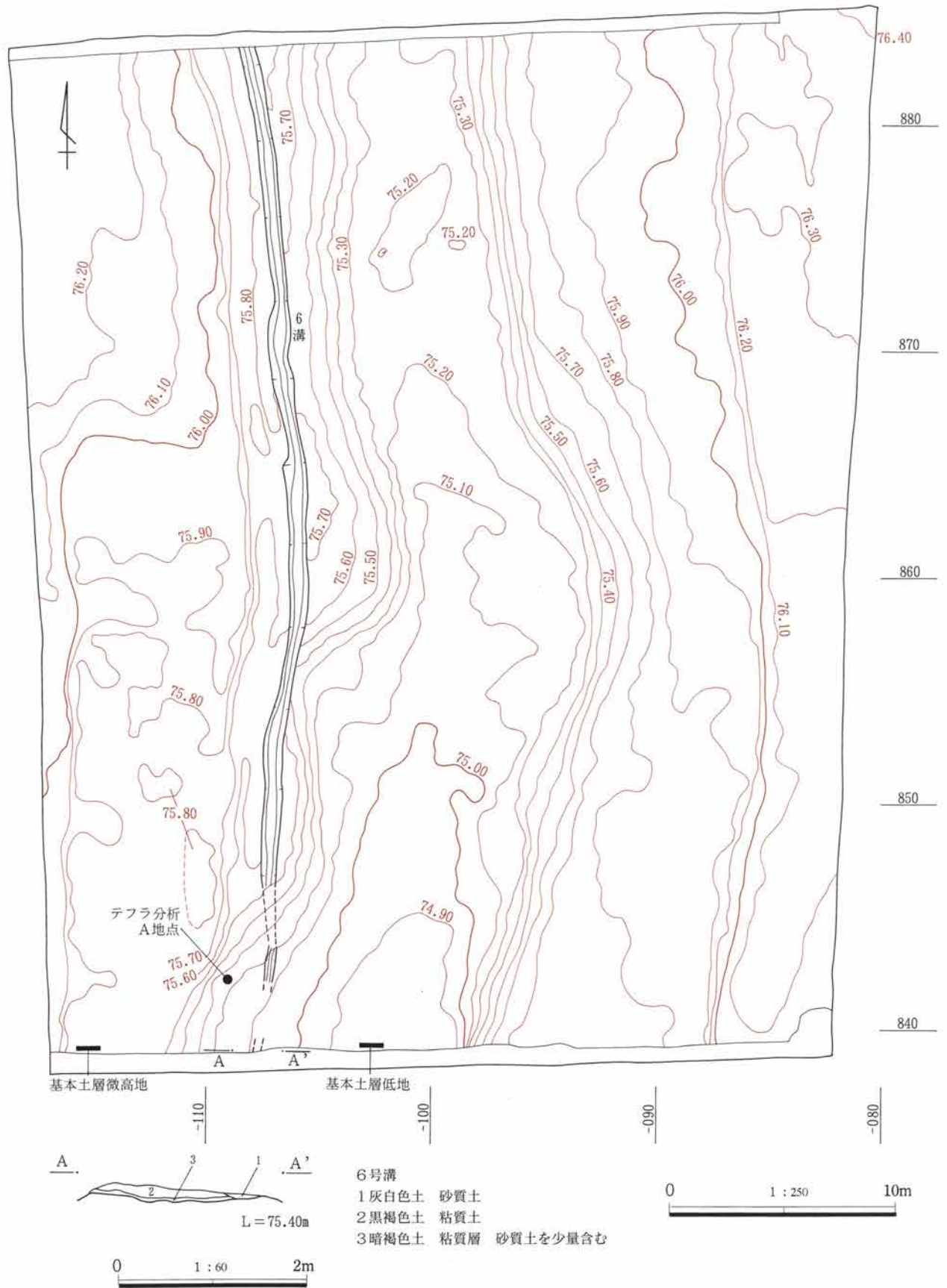


第287図 6号溝、出土遺物



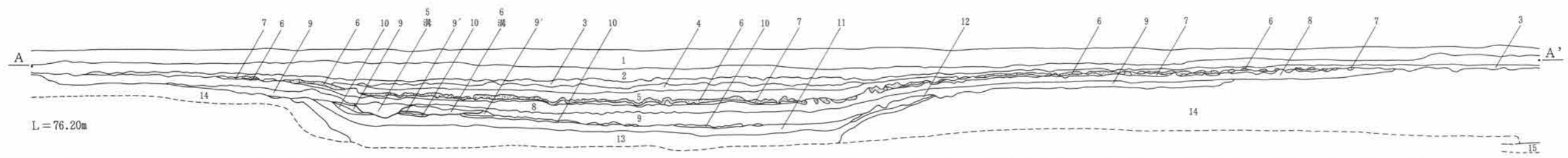
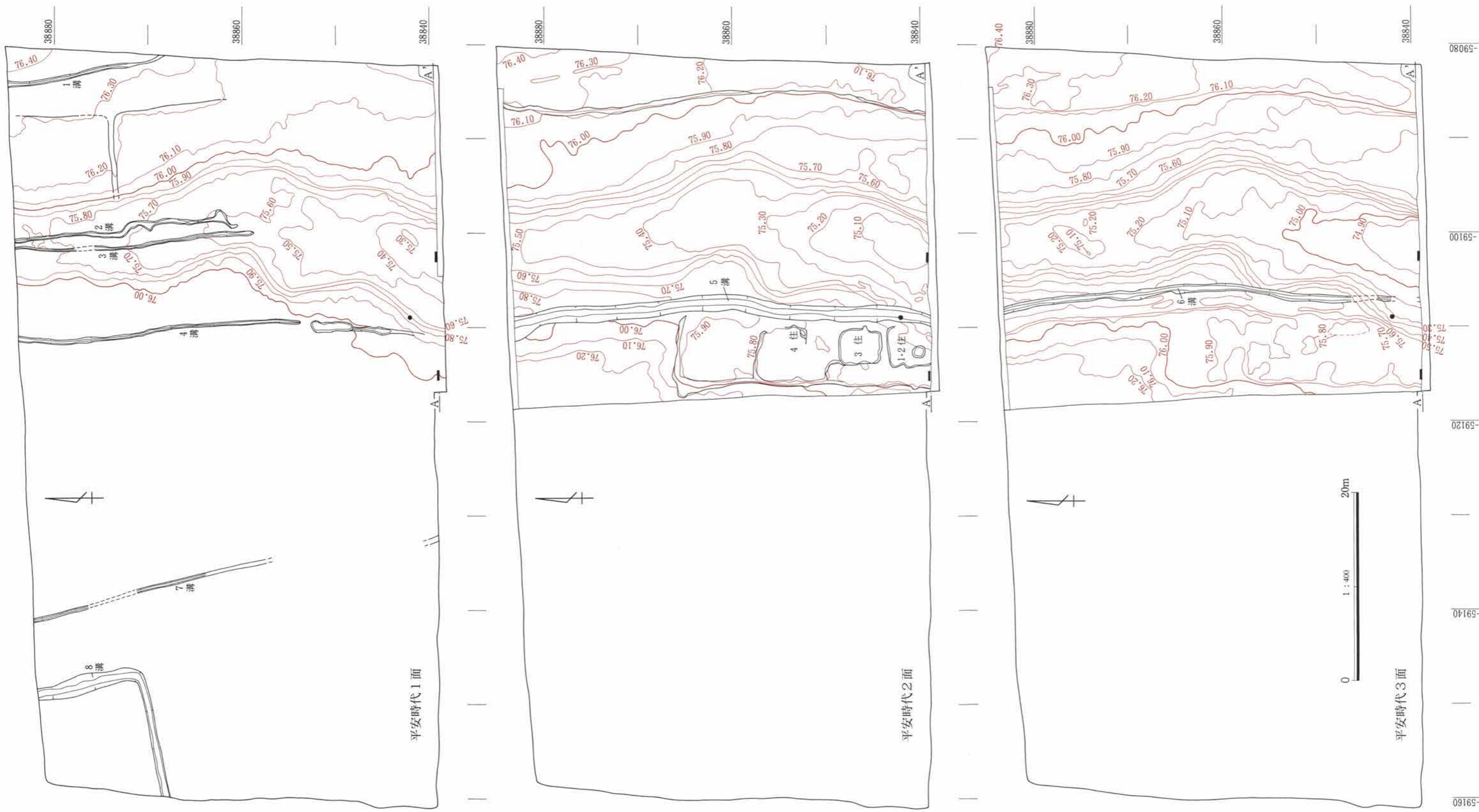
第288図 遺構外出土遺物

IV 新井大田関遺跡の調査



第289図 新井大田関遺跡第3面 (平安時代3面)





- |                      |  |                                |                                  |
|----------------------|--|--------------------------------|----------------------------------|
| 1 暗褐色土 表土            | 5 暗褐色土 3層に類似するがAs-B粒を多く含み、締まりがない         | 9 暗褐色土 8層に準ずるがより黒味が強く、白色粒を多く含む | 12 暗褐色土 14層灰白色シルト層を主体とし、黒色土を少量含む |
| 2 暗褐色土 シルト質          | 6 As-B層                                  | 9' 暗褐色土 9層に準ずるがより黒味が強く、粘質性が強い  | 13 黒褐色土 11層に準ずるが黒味が弱く、植物遺体を多く含む  |
| 3 暗褐色土 2層よりやや明るいシルト質 | 7 黒褐色土 As-B下の水田耕作土 粘質性強い                 | 10 As-C層                       | 14 灰白色土 縄文時代の洪水層と考えられる砂質土        |
| 4 暗褐色土 2層と同質         | 8 暗褐色土 白色粒、地山起源の黄色砂質土粒多く含む(9世紀の水田耕作地拡大量) | 11 黒褐色土 植物遺体少量含む 粘質性あり         | 15 黒褐色土 白色粒を含み、植物遺体を多く含む         |

第290図 新井大田関遺跡全体図



## (5) 新井大田関遺跡遺物観察表

第1面 7号溝

図番号 写真図版	種類 器種	出土 位置	残存 状態	法量 (cm)	①胎土②焼成③色調	器形・整形・文様の特徴	備考
第277図 No1 PL-125	土師器 坏	覆土	口縁部 破片	口 (13.0) 底 - 高 -	①細砂粒・角閃石 ②普通 ③橙色	外面 口縁部横撫で。 内面 口縁部横撫で。	
第277図 No2 PL-125	須恵器 坏	覆土	口縁部 破片	口 (13.0) 底 - 高 -	①細砂粒 ②還元 ③暗紫灰色	外面 体部轆轤整形。 内面 体部轆轤整形。	

第2面 VIII層 (9世紀水田耕作土内)

第279図 No1 PL-125	土師器 坏	耕作 土内	口縁~ 体部 1/6	口 (12.6) 底 - 高 (2.7)	①細砂粒・角閃石 ②普通 ③鈍い橙色	外面 口縁部横撫で、体部撫で。 内面 口縁部~体部撫で。	
第279図 No2 PL-125	土師器 坏	耕作 土内	口縁~ 体部 1/4	口 (13.7) 底 - 高 (3.0)	①細砂粒・角閃石 ②普通 ③橙色	外面 口縁部横撫で、体部撫で。 内面 口縁部横撫で、体部撫で。	
第279図 No3 PL-125	土師器 坏	耕作 土内	口縁~ 体部 1/4	口 (11.6) 底 - 高 (2.7)	①細砂粒・角閃石 ②普通 ③橙色	外面 口縁部横撫で、体部撫で。 内面 口縁部~体部横撫で。	
第279図 No4 PL-125	土師器 坏	耕作 土内	口縁~ 体部 1/4	口 (11.4) 底 - 高 (2.6)	①細砂粒・角閃石 ②普通 ③橙色	外面 口縁部横撫で、体部撫で。 内面 口縁部横撫で、体部撫で。	
第279図 No5 PL-125	土師器 坏	耕作 土内	口縁~ 体部 1/6	口 (9.5) 底 - 高 (2.5)	①細砂粒・角閃石 ②普通 ③橙色	外面 口縁部横撫で、体部撫で。 内面 口縁部横撫で、体部撫で。	
第279図 No6 PL-125	須恵器 椀	耕作 土内	口縁~ 高台部 1/4	口 - 底 (7.0) 高 -	①細砂粒・礫 ②還元 ③明青灰色	外面 体部轆轤整形、底部回転糸切り。 内面 体部轆轤整形。	
第279図 No7 PL-125	土師器 甕	耕作 土内	口縁部 破片	口 - 底 - 高 -	①細砂粒・角閃石 ②普通 ③橙色	外面 口縁部横撫で。 内面 口縁部横撫で。	
第279図 No8 PL-125	土師器 壺	耕作 土内	口縁~ 頸部 1/2	口 15.0 底 - 高 -	①細砂粒・角閃石 ②普通 ③鈍い赤色	外面 口縁部横撫で、頸部斜縦位刷毛目後撫で。 内面 口縁部横撫で、頸部横位刷毛目後撫で。	

第2面 1・2号住居

第280図 No1 PL-125	土師器 坏	覆土	口縁~ 体部 1/4	口 (15.0) 底 - 高 -	①細砂粒・角閃石 ②普通 ③鈍い橙色	外面 口縁部横撫で、体部篋削り。 内面 口縁部~体部横撫で。	摩滅
第280図 No2 PL-125	土師器 坏	覆土	口縁~ 体部 1/4	口 (10.0) 底 - 高 (2.9)	①細砂粒・角閃石 ②普通 ③鈍い褐色	外面 口縁部横撫で、体部撫で。 内面 口縁部横撫で、体部撫で。	摩滅
第280図 No3 PL-125	土師器 坏	覆土	口縁~ 体部 1/4	口 (10.0) 底 - 高 (2.6)	①細砂粒・角閃石 ②普通 ③鈍い褐色	外面 口縁部横撫で、体部撫で。 内面 口縁部横撫で、体部撫で。	摩滅
第280図 No4 PL-125	土師器 坏	覆土	口縁~ 体部 1/4	口 (10.6) 底 - 高 (2.5)	①細砂粒・角閃石 ②普通 ③鈍い褐色	外面 口縁部横撫で、体部篋削り。 内面 口縁部横撫で、体部撫で。	摩滅
第280図 No5 PL-125	土師器 坏	覆土	口縁~ 体部 1/6	口 (12.0) 底 - 高 -	①細砂粒・角閃石 ②普通 ③鈍い橙色	外面 口縁部横撫で、体部篋削り。 内面 口縁部横撫で、体部撫で。	摩滅
第280図 No6 PL-125	須恵器 坏	覆土	口縁~ 体部 1/8	口 (10.8) 底 (6.8) 高 (3.1)	①細砂粒 ②還元 ③灰白色	外面 体部轆轤整形。 内面 体部轆轤整形。	



IV 新井大田関遺跡の調査

第2面 1・2号住居

図番号 写真図版	種類 器種	出土 位置	残存 状態	法量 (cm)	①胎土②焼成③色調	器形・整形・文様の特徴	備考
第280図 No7 P L-125	須恵器 椀	覆土	口縁～ 体部 1/8	口 (11.4) 底 - 高 -	①細砂粒 ②還元 ③灰色	外面 体部轆轤整形。 内面 体部轆轤整形。	
第280図 No8 P L-125	須恵器 坏	覆土	口縁～ 体部 1/8	口 (13.6) 底 - 高 -	①細砂粒 ②還元 ③灰白色	外面 体部轆轤整形。 内面 体部轆轤整形。	
第280図 No9 P L-126	須恵器 坏	覆土	体部～ 底部 1/4	口 - 底 (10.0) 高 -	①細砂粒 ②還元 ③灰白色	外面 体部轆轤整形、底部回転篋切り後右回転篋削り。 内面 体部轆轤整形。	
第280図 No10 P L-126	須恵器 坏	覆土	体部～ 底部 1/5	口 - 底 (7.0) 高 -	①細砂粒 ②還元 ③灰色	外面 体部轆轤整形、底部右回転系切り後周辺部篋削り。 内面 体部轆轤整形。	
第281図 No11 P L-126	須恵器 坏	覆土	底部 1/8	口 - 底 (8.6) 高 -	①細砂粒 ②還元 ③灰色	外面 体部轆轤整形、底部右回転系切り。 内面 体部轆轤整形。	
第281図 No12 P L-126	須恵器 坏	覆土	底部 1/8	口 - 底 (7.0) 高 -	①細砂粒・角閃石 ②還元 ③灰白色	外面 体部轆轤整形、底部回転系切り後周辺部篋削り。 内面 体部轆轤整形。	摩滅
第281図 No13 P L-126	須恵器 椀	覆土	高台部 1/8	口 - 底 (12.2) 高 -	①細砂粒 ②還元 ③灰色	外面 轆轤整形。 内面 轆轤整形。	
第281図 No14 P L-126	須恵器 蓋	覆土	天井部 1/6	口 - 摘 4.0 高 -	①細砂粒・長石 ②還元 ③青灰色	外面 体部轆轤整形、天井部右回転篋削り。 内面 体部轆轤整形。	
第281図 No15 P L-126	土師器 鉢	覆土	口縁～ 体部上 1/6	口 - 底 - 高 -	①細砂粒・角閃石 ②普通 ③鈍い橙色	外面 口縁部横撫で、体部篋削り。 内面 口縁部横撫で、体部撫で。	

第2面 3号住居

第282図 No1 P L-126	土師器 坏	覆土	口縁～ 体部 1/6	口 (12.0) 底 - 高 (3.0)	①細砂粒 ②普通 ③橙色	外面 口縁部横撫で、体部篋削り。 内面 口縁部～体部横撫で。	摩滅
第282図 No2 P L-126	土師器 坏	覆土	口縁～ 体部 1/6	口 (10.0) 底 - 高 -	①細砂粒・角閃石 ②普通 ③灰黄色	外面 口縁部横撫で、体部篋削り。 内面 口縁部～体部横撫で。	摩滅
第282図 No3 P L-126	土師器 坏	覆土	口縁～ 体部 1/6	口 (13.0) 底 - 高 (2.9)	①細砂粒 ②普通 ③橙色	外面 口縁部横撫で、体部篋削り。 内面 口縁部～体部横撫で。	摩滅
第282図 No4 P L-126	須恵器 坏	覆土	体部～ 底部 1/7	口 - 底 (8.0) 高 -	①細砂粒 ②還元 ③灰色	外面 体部轆轤整形、底部篋撫で。 内面 体部轆轤整形。	
第282図 No5 P L-126	須恵器 坏	覆土	体部～ 底部 1/6	口 - 底 (8.0) 高 -	①細砂粒 ②還元 ③灰白色	外面 体部轆轤整形、底部左回転篋削り。 内面 体部轆轤整形。	
第282図 No6 P L-126	須恵器 坏	覆土	体部～ 底部 1/3	口 - 底 (7.0) 高 -	①細砂粒 ②還元 ③灰色	外面 体部轆轤整形、底部右回転系切り後周辺部篋削り。 内面 体部轆轤整形。	
第282図 No7 P L-126	土師器 壺	覆土	胴部下 位 1/3	口 - 底 (7.0) 高 -	①細砂粒・角閃石 ②普通 ③鈍い橙色	外面 不明。 内面 不明。	摩滅

第2面 4号住居

第284図 No1 P L-126	土師器 坏	覆土	口縁～ 体部 破片	口 - 底 - 高 -	①細砂粒・角閃石 ②普通 ③橙色	外面 不明。 内面 不明。	摩滅
-------------------------	----------	----	-----------------	-------------------	------------------------	------------------	----

## 3 検出された遺構と遺物

## 第2面 4号住居

図番号 写真図版	種類 器種	出土 位置	残存 状態	法量 (cm)	①胎土②焼成③色調	器形・整形・文様の特徴	備考
第284図 No2 P L-126	土師器 坏	覆土	口縁～ 体部 破片	口 - 底 - 高 -	①細砂粒・角閃石 ②普通 ③橙色	外面 不明。 内面 不明。	摩滅

## 第2面 5号溝

第285図 No1 P L-126	土師器 坏	覆土	口縁～ 体部 1/8	口 (10.7) 底 - 高 (2.5)	①細砂粒・角閃石 ②普通 ③橙色	外面 口縁部横撫で、体部篋削り。 内面 口縁部横撫で、体部撫で。	
第285図 No2 P L-126	土師器 坏	覆土	口縁～ 体部 1/8	口 (11.7) 底 - 高 (2.5)	①細砂粒・角閃石 ②普通 ③橙色	外面 口縁部～体部横撫で、底部篋削り。 内面 口縁部～体部横撫で、底部撫で。	
第285図 No3 P L-126	土師器 坏	覆土	口縁～ 体部 1/6	口 (11.5) 底 - 高 (2.7)	①細砂粒・角閃石 ②普通 ③鈍い橙色	外面 口縁部、体部篋削り。 内面 口縁部～体部横撫で。	
第285図 No4 P L-126	土師器 坏	覆土	口縁～ 体部 2/3	口 11.8 底 - 高 (3.2)	①細砂粒・角閃石 ②普通 ③橙色	外面 口縁部横撫で、体部撫で、底部篋削り。 内面 口縁部～底部横撫で。	
第285図 No5 P L-126	土師器 坏	覆土	口縁～ 底部 1/5	口 (12.0) 底 - 高 (2.9)	①細砂粒・角閃石 ②普通 ③鈍い橙色	外面 口縁部～底部撫で。 内面 口縁部～体部横撫で、底部撫で。	
第285図 No6 P L-126	土師器 坏	覆土	口縁～ 体部 1/4	口 (17.0) 底 - 高 -	①細砂粒・角閃石 ②普通 ③橙色	外面 口縁部横撫で、体部篋削り。 内面 口縁部～体部横撫で。	
第285図 No7 P L-127	須恵器 坏	覆土	口縁～ 体部 1/4	口 (13.0) 底 - 高 -	①細砂粒 ②還元 ③青灰色	外面 体部轆轤整形。 内面 体部轆轤整形。	
第285図 No8 P L-127	須恵器 坏	覆土	口縁～ 底部 1/4	口 (12.8) 底 (8.6) 高 3.8	①細砂粒 ②還元 ③紫灰色	外面 体部轆轤整形、底部右回転糸切り。 内面 体部轆轤整形。	
第285図 No9 P L-127	須恵器 坏	覆土	口縁～ 底部 1/6	口 (13.0) 底 (8.2) 高 3.8	①細砂粒 ②還元 ③暗青灰色	外面 体部轆轤整形、底部右回転篋削り。 内面 体部轆轤整形。	
第285図 No10 P L-127	須恵器 坏	覆土	口縁～ 底部 1/5	口 (14.5) 底 (8.4) 高 4.2	①細砂粒・礫 ②還元 ③灰色	外面 体部轆轤整形、底部右回転篋削り。 内面 体部轆轤整形。	
第285図 No11 P L-127	須恵器 坏	覆土	体部～ 底部 1/5	口 - 底 (6.7) 高 -	①細砂粒・礫 ②還元 ③灰色	外面 体部轆轤整形、底部右回転糸切り。 内面 体部轆轤整形。	
第285図 No12 P L-127	須恵器 坏	覆土	体部～ 底部 1/4	口 - 底 (9.0) 高 -	①細砂粒・礫 ②還元 ③褐灰色	外面 体部轆轤整形、底部右回転篋削り。 内面 体部轆轤整形。	
第285図 No13 P L-127	須恵器 坏	覆土	体部～ 底部 1/2	口 - 底 7.7 高 -	①細砂粒・礫 ②還元 ③灰色	外面 体部轆轤整形、底部回転篋削り後、 全面左回転篋削り。回転篋削りの回転方向は不明。 内面 体部轆轤整形。	
第285図 No14 P L-127	須恵器 坏	覆土	底部 1/2	口 - 底 7.2 高 -	①細砂粒・礫 ②還元 ③灰色	外面 体部轆轤整形、底部回転糸切り後周辺部右回転 篋削り。 内面 体部轆轤整形。	
第285図 No15 P L-127	須恵器 椀	覆土	体部～ 高台部 1/6	口 - 底 (8.5) 高 -	①細砂粒 ②還元 ③灰白色	外面 体部轆轤整形。 内面 体部轆轤整形。	
第285図 No16 P L-127	須恵器 蓋	覆土	天井部 残存	口 - 摘 2.9 高 -	①細砂粒・礫 ②還元 ③灰白色	外面 轆轤整形。 内面 轆轤整形。	

IV 新井大田関遺跡の調査

第2面 5号溝

図番号 写真図版	種類 器種	出土 位置	残存 状態	法量 (cm)	①胎土②焼成③色調	器形・整形・文様の特徴	備考
第285図 No17 P L-127	土師器 台付甕	覆土	胴部上 位 破片	口 - 底 - 高 -	①細砂粒・石英 ②普通 ③浅黄色	外面 胴部斜縦位刷毛目。 内面 胴部撫で。	

第3面 6号溝

第285図 No1 P L-127	土師器 台付甕	覆土	口縁～ 胴部上 1/6	口 (18.8) 底 - 高 -	①細砂粒 ②普通 ③鈍い橙色	外面 口縁部横撫で、胴部斜縦位刷毛目。 内面 口縁部横撫で、胴部撫で。	口縁部S字状
-------------------------	------------	----	-------------------	------------------------	----------------------	--	--------

第3面 遺構外

第288図 No1 P L-127	土師器 壺		口縁～ 頸部 1/4	口 (19.2) 底 - 高 -	①細砂粒・角閃石 ②普通 ③灰白色	外面 口縁部刷毛目後撫で、頸部縦位篋削り。 内面 口縁部～頸部刷毛目後縦位篋研磨。	
第288図 No2 P L-127	土師器 台付甕		口縁～ 胴部上 1/4	口 (20.0) 底 - 高 -	①細砂粒・石英 ②普通 ③淡橙色	外面 口縁部横撫で、胴部斜縦位刷毛目後肩部横位刷毛目。 内面 口縁部横撫で、胴部撫で。	口縁部S字状
第288図 No3 P L-127	土師器 台付甕		口縁～ 胴部上 1/6	口 (16.0) 底 - 高 -	①細砂粒・石英 ②普通 ③浅黄色	外面 口縁部横撫で、胴部斜縦位刷毛目。 内面 口縁部横撫で、胴部撫で。	口縁部S字状
第288図 No4 P L-127	土師器 台付甕		台部 1/2	口 - 底 8.8 高 -	①細砂粒・角閃石 ②普通 ③明赤灰色	外面 台部縦位刷毛目。 内面 台部横位刷毛目。	
第288図 No5 P L-127	土師器 台付甕		底部～ 台部上 残存	口 - 底 - 高 -	①細砂粒・石英 ②普通 ③鈍い橙色	外面 胴部～台部斜縦位刷毛目。 内面 胴部撫で、台部斜縦位指撫で。	

## (6) 自然科学分析

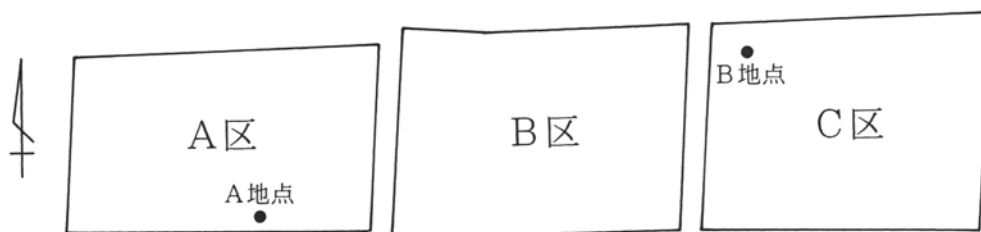
株式会社 古環境研究所

### 1. 新井大田関遺跡の土層とテフラ

#### 1. はじめに

群馬県域の後期旧石器時代以降に形成された堆積物中には、浅間火山や榛名火山をはじめとする関東地方とその周辺に分布する火山のほか、九州地方の始良カルデラや鬼界カルデラなど遠方の火山に由来するテフラ（火山砕屑物、いわゆる火山灰）が多く認められる。テフラの中には、噴出年代が明らかにされている示標テフラがあり、これらとの層位関係を遺跡で求めることで、遺跡の土層の年代のほか遺構の構築年代や遺物包含層の堆積年代を知ることができるようになっている。

そこで年代が不明な土層の認められた新井大田関遺跡において、地質調査とテフラ検出分析を合わせて行って土層の層序を記載するとともに、示標テフラの層位を把握して土層の年代に関する資料を収集することになった。調査の対象となった地点は、A地点およびB地点の2地点である。



第291図 テフラ分析サンプル採取地点 (1/2000)

#### 2. 土層の層序

##### (1) A地点

ここでは、下位より黒色泥炭層（層厚21cm）、葉理の発達した灰色砂層（層厚65cm）、黒泥層（層厚2cm）、灰色シルト層（層厚17cm）が認められる。これらの土層を斬って埋没谷が形成されている。谷の覆土は、下位より暗褐色泥炭層（層厚8cm）、黒色泥炭層（層厚15cm）、黒褐色泥炭層（層厚2cm）、灰色軽石層（層厚4cm、軽石の最大径8mm）、黒褐色泥炭層（層厚2cm）、灰色砂層（層厚1cm）、暗褐色泥炭層（層厚2cm）、灰色砂層（層厚3cm）、黒褐色泥炭層（層厚13cm）、亜円礫混じり灰色砂層（層厚5cm、礫の最大径12mm）、灰色粘質土（層厚8cm）、黄色がかった灰色粘質土（層厚6cm）、黒泥層（層厚3cm）、成層したテフラ層、灰色砂質土（層厚7cm）、灰褐色砂質土（層厚11cm）、黄灰褐色砂質土（層厚18cm）、灰褐色砂質土（層厚30cm）、暗褐色盛土層（層厚24cm）が認められる（図1）。

これらのうち、成層したテフラ層は、下部の桃色細粒軽石層（層厚2cm、軽石の最大径2mm）と上部の灰色細粒軽石層（層厚2cm、軽石の最大径2mm）から構成される。このテフラ層は、その層相から1108（天明3）年に浅間火山から噴出した浅間Bテフラ（As-B, 新井, 1979）に同定される。

#### IV 新井大田関遺跡の調査

##### (2) B地点

この地点では、下位より灰色粘土層（層厚10cm以上）、黄色軽石層（層厚7cm）、下位の黄色軽石混じり黒褐色土（層厚23cm）、黒褐色土（層厚27cm）、葉理の発達した灰色シルト層（層厚11cm）、葉理の発達した灰色砂層（層厚12cm）、灰色がかかった暗褐色作土（層厚29cm）が認められる（図2）。

##### 3. テフラ検出分析

###### (1) 分析試料と分析方法

A地点の灰色軽石層（試料番号2）およびその上位の灰色粗粒火山灰層（試料番号1）、さらにB地点の黄色軽石層の3点についてテフラ検出分析を行い、テフラ粒子の特徴などから示標テフラとの同定を試みた。テフラ検出分析の手順は次の通りである。

- 1) 試料10gを秤量。
- 2) 超音波洗浄装置により泥分を除去。
- 3) 80°Cで恒温乾燥。
- 4) 実体顕微鏡下でテフラ粒子の量や特徴を観察。

###### (2) 分析結果

テフラ検出分析の結果を表1に示す。A地点の試料番号2には、スポンジ状によく発泡した灰白色軽石（最大径3.3mm）が非常に多く含まれている。軽石の班晶としては斜方輝石や単斜輝石が認められる。この軽石は、その特徴から4世紀中葉に浅間火山から噴出した浅間C軽石（As-C, 新井, 1979）に由来すると考えられる。したがって試料番号2のテフラ層はAs-Cに同定される。

A地点の試料番号1には、あまり発泡のよくない白色軽石（最大径3.1mm）が多く含まれている。軽石の班晶としては角閃石や斜方輝石が認められる。この軽石は、その特徴から6世紀初頭に榛名火山から噴出した榛名二ツ岳渋川テフラ層（Hr-FA, 新井, 1979, 坂口, 1986, 早田, 1989, 町田・新井, 1992）に由来すると考えられる。

一方、B地点の試料番号1に含まれる軽石は風化が進んでおり、洗浄の後にはその原型をとどめないほどである。重鉱物としては斜方輝石や単斜輝石が含まれている。この軽石は、その特徴から約1.3-1.4万年前に浅間火山から噴出した浅間板鼻黄色軽石（As-YP, 新井, 1962, 町田・新井, 1996）に由来すると考えられる。

##### 4. 小結

新井大田関遺跡において、地質調査とテフラ検出分析を行った。その結果、下位より浅間板鼻黄色軽石（As-YP, 約1.3-1.4万年前）、浅間C軽石（As-C, 4世紀中葉）、榛名二ツ岳渋川テフラ（Hr-FA, 6世紀初頭）、浅間Bテフラ（As-B, 1108年）のテフラ層あるいはテフラ粒子を検出することができた。

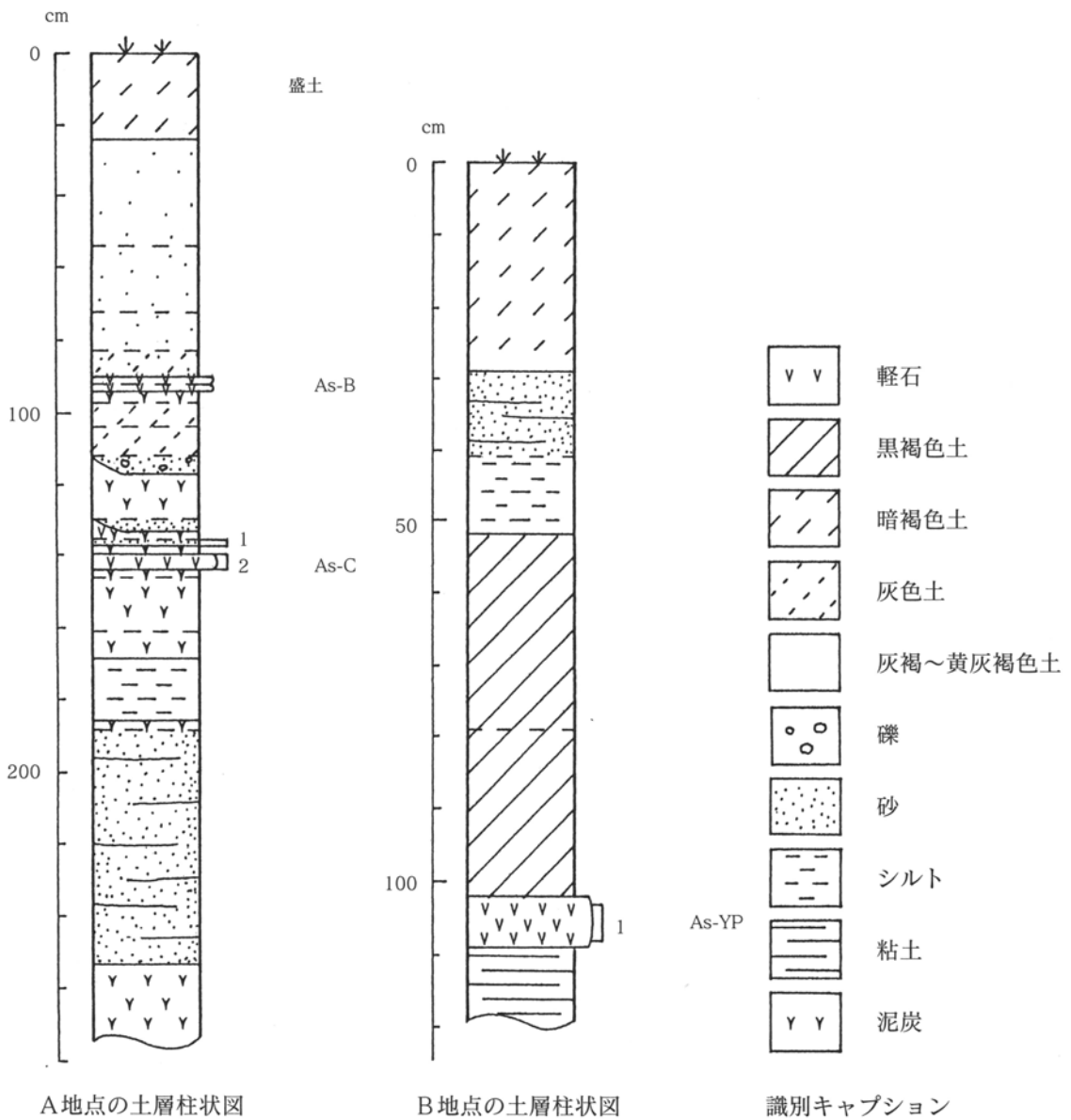
##### 文献

- 新井房夫（1962）関東盆地北西部地域の第四紀編年。群馬大学紀要自然科学編，10，p.1-79。
- 新井房夫（1979）関東地方北西部の縄文時代以降の示標テフラ層。考古学ジャーナル，no.53，p.41-52。
- 町田 洋・新井房夫（1992）火山灰アトラス。東京大学出版会，276p。
- 坂口 一（1986）榛名二ツ岳起源FA・FP層下の土師器と須恵器。群馬県教育委員会編「荒砥北原遺跡・今井神社古墳群・荒砥青柳遺跡」，p.103-119。
- 早田 勉（1989）6世紀における榛名火山の2回の噴火とその災害。第四紀研究，27，p.297-312。

第8表 新井大田関遺跡のテフラ検出分析結果

地点	試料	軽石の量	軽石の色調	軽石の最大径
A	1	+++	白	3.1
	2	++++	灰白	3.3
B	1	-	-	-

++++: とくに多い, +++: 多い, ++: 中程度, +: 少ない, -: 認められない. 最大径の単位は, mm.



第292図 テフラ検出分析結果

#### IV 新井大田関遺跡の調査

#### II. 新井大田関遺跡の放射性炭素年代測定

##### 1. 試料と方法

試料名	地点・層準	種類	前処理・調整	測定法
No.1	A地点最下層	泥炭	酸洗浄, ベンゼン合成	$\beta$ 線法

試料の層位を図3に示す。

##### 2. 測定結果

試料	$^{14}\text{C}$ 年代 (年BP)	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	補正 $^{14}\text{C}$ 年代 (年BP)	暦年代	測定No. beta-
No.1	8730 $\pm$ 60	-23.5	8760 $\pm$ 60	交点: BC7885,7795,7730 2 $\sigma$ : BC 7960~7590 1 $\sigma$ : BC 7925~7685	102381

##### 1) $^{14}\text{C}$ 年代測定値

試料の $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比から、単純に現在(1950年AD)から何年前(BP)かを計算した値。 $^{14}\text{C}$ の半減期は5,568年を用いた。

##### 2) $\delta^{13}\text{C}$ 測定値

試料の測定 $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比を補正するための炭素安定同位体比( $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ )。この値は標準物質(PDB)の同位体比からの千分偏差(‰)で表す。

##### 3) 補正 $^{14}\text{C}$ 年代値

$\delta^{13}\text{C}$ 測定値から試料の炭素の同位体分別を知り、 $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ の測定値に補正值を加えた上で算出した年代。

##### 4) 暦年代

過去の宇宙線強度の変動による大気中 $^{14}\text{C}$ 濃度の変動を補正することにより、暦年代(西暦)を算出した。補正には年代既知の樹木年輪の $^{14}\text{C}$ の詳細な測定値を使用した。この補正は10,000年BPより古い試料には適用できない。

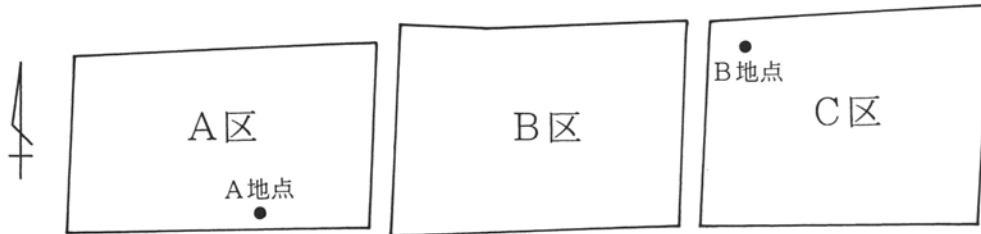
## III. 新井大田関遺跡におけるプラント・オパール分析

## 1. はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内にガラスの主成分である珪酸 ( $\text{SiO}_2$ ) が蓄積したものであり、植物が枯れたあとも微化石 (プラント・オパール) となって土壤中に半永久的に残っている。プラント・オパール分析は、この微化石を遺跡土壌などから検出する方法であり、イネの消長を検討することで埋蔵水田跡の検証や探査が可能である (藤原・杉山, 1984)。

## 2. 試料

試料は、A地点のAs-B直下層から最下層 (泥炭層) までの層準から採取された10点である。試料採取箇所を分析結果の柱状図に示す。



第293図 プラント・オパール採取地点 (1/2000)

## 3. 分析法

プラント・オパールの抽出と定量は、プラント・オパール定量分析法 (藤原, 1976) をもとに、次の手順で行った。

- 1) 試料の絶乾 (105℃・24時間)
- 2) 試料約 1 g を秤量、ガラスビーズ添加 (直径約 40  $\mu\text{m}$ ・約 0.02 g)  
※電子分析天秤により 1 万分の 1 g の精度で秤量
- 3) 電気炉灰化法による脱有機物処理
- 4) 超音波による分散 (300W・42KHz・10分間)
- 5) 沈底法による微粒子 (20  $\mu\text{m}$ 以下) 除去、乾燥
- 6) 封入剤 (オイキット) 中に分散、プレパラート作成
- 7) 検鏡・計数

同定は、イネ科植物の機動細胞に由来するプラント・オパールをおもな対象とし、400倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は、ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。試料1gあたりのガラスビーズ個数に、計数されたプラント・オパールとガラスビーズ個数の比率をかけて、試料1g中のプラント・オパール個数を求めた。

また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重と各植物の換算係数 (機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重、単位: 10<sup>-5</sup> g) をかけて、単位面積で層厚1cmあたりの植物体生産量を算出した。イネ (赤米) の換算係数は2.94、ヒエ属型 (ヒエ) は8.40、ヨシ属 (ヨシ) は6.31、ススキ属型 (ススキ) は1.24、タケ亜科 (ネザサ節) は0.48である。



#### Ⅳ 新井大田関遺跡の調査

##### 4. 分析結果

水田跡（稲作跡）の検討が主目的であることから、同定および定量はイネ、ヒエ属型、ヨシ属、ススキ属型、タケ亜科（おもにネザサ節）の主要な5分類群に限定した。これらの分類群について定量を行い、その結果を表1および図1に示した。写真図版に主要な分類群の顕微鏡写真を示す。

##### 5. 考察

###### (1) 稲作跡の検討

水田跡の検証や探査を行う場合、一般にイネのプラント・オパールが試料1gあたりおよそ5,000個以上と高い密度で検出された場合に、そこで稲作が行われていた可能性が高いと判断している。ただし、群馬県内では密度が3,000個/g程度でも水田遺構が検出されていることから、ここでは判断の基準を3,000個/gとして検討を行った。

A地点のAs-B直下層（試料1）から最下層の泥炭層（試料10）までの層準について分析を行った。その結果、As-B直下層（試料1）からHr-FAの上層（灰色砂層直下、試料4）までの層準からイネが検出された（図1）。このうち、Hr-FAの上層（灰色砂層直下、試料4）では密度が7,300個/g、As-Bの下層（灰色粘質土、試料2）でも4,500個/gと高い値である。したがって、これらの層では稲作が行われていた可能性が高いと考えられる。

As-B直下層（黒泥層、試料1）では密度が2,200個/gと比較的低い値であるが、直上をテフラ層で覆われていることから上層から後代のものが混入した可能性は考えにくい。したがって、同層の時期に調査地点もしくはその近辺で稲作が行われていた可能性が考えられる。

###### (2) 堆積環境の推定

ヨシ属は比較的湿ったところに生育し、ススキ属やタケ亜科は比較的乾いたところに生育している。このことから、これらの植物の出現状況を検討することによって、堆積当時の環境（乾燥・湿潤）を推定することができる。

Hr-FAより下位層およびAs-B直下層ではヨシ属が多く検出され、Hr-FAより上位層ではススキ属型やタケ亜科も比較的多く検出された。おもな分類群の推定生産量（図の右側）によると、Hr-FAより下位層およびAs-B直下層ではヨシ属が圧倒的に卓越していることが分かる。

以上の結果から、稲作が開始される以前の遺跡周辺は、ヨシ属などが繁茂する湿地の状況であったと考えられ、Hr-FAの上層の時期にそこを利用して水田稲作が開始されたものと推定される。なお、As-B直下層（泥炭層）では何らかの原因で一時的に水田が放棄され、ヨシ属などが繁茂する湿地の状況になっていた可能性が考えられる。このような状況は前橋市周辺などでも一般に認められており、比較的広い範囲に及ぶ現象として注目される。

##### 6. まとめ

プラント・オパール分析の結果、浅間Bテフラ（As-B, 1108年）の下層および榛名二ツ岳渋川テフラ（Hr-FA, 6世紀初頭）の上層からはイネが多量に検出され、それぞれ稲作が行われていた可能性が高いと判断された。また、As-B直下層などでも稲作が行われていた可能性が認められた。

本遺跡周辺は、稲作が開始される以前はヨシ属などが繁茂する湿地の状況であったと考えられ、Hr-FAの上層の時期にそこを利用して水田稲作が開始されたものと推定される。

## 参考文献

藤原宏志 (1976) プラント・オパール分析法の基礎的研究 (1) - 数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法 - . 考古学と自然科学, 9, p.15-29.

藤原宏志・杉山真二 (1984) プラント・オパール分析法の基礎的研究 (5) - プラント・オパール分析による水田址の探査 - . 考古学と自然科学, 17, p.73-85.

第9表 新井大田遺跡におけるプラント・オパール分析結果

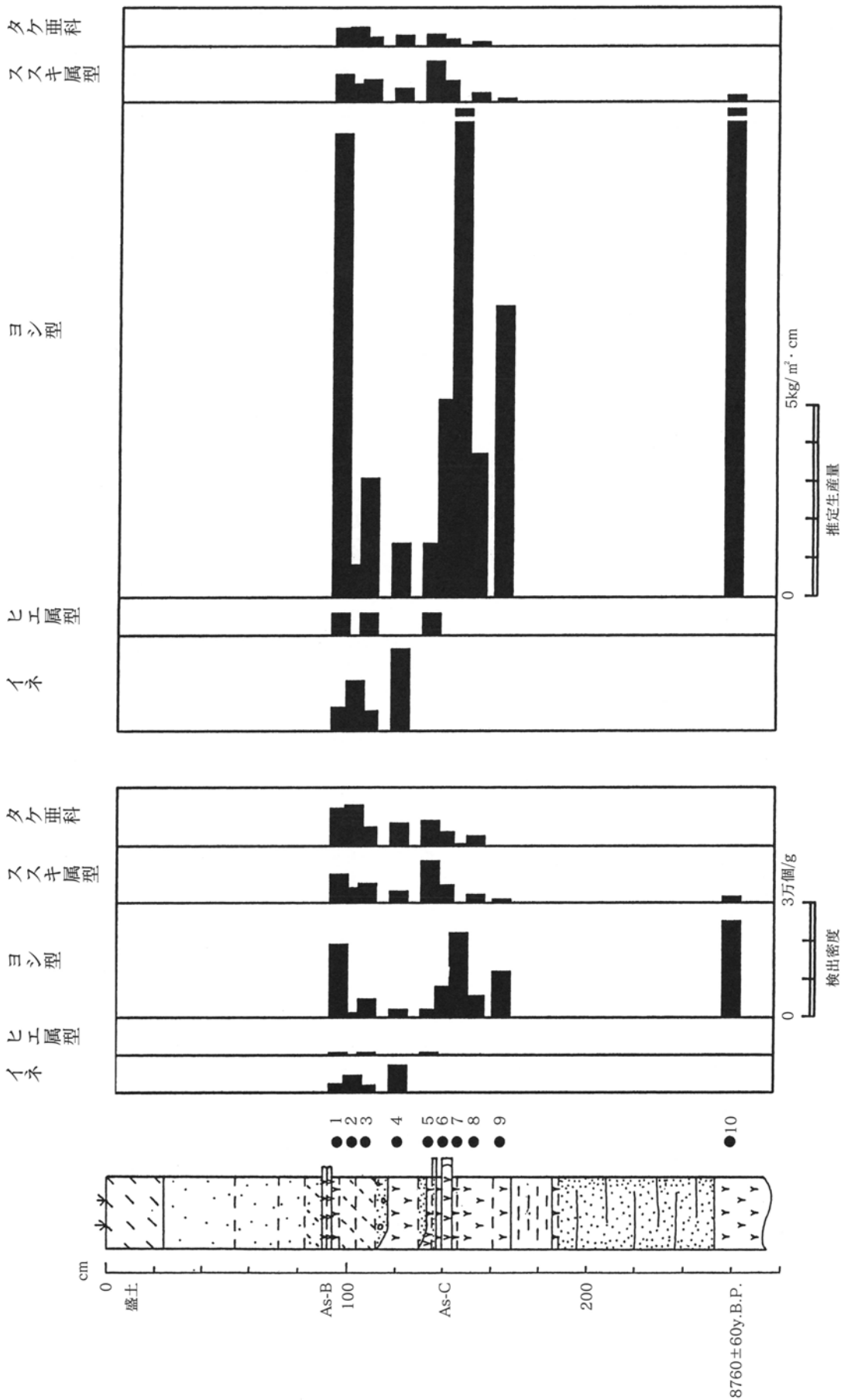
分類群\試料	A地点										B地点	
	1	1'	2	3	4	5	6	7	8	9	10	1
イネ	22	28	45	18	73							
ヒエ属型	7				7	7						
ヨシ属	193	63	13	49	22	22	82	223	59	121	254	175
ススキ属型	74	35	39	49	29	109	45		20	8	15	117
タケ亜科	97	21	104	49	59	66	37	7	26			

分類群\試料	A地点										B地点	
	1	1'	2	3	4	5	6	7	8	9	10	1
イネ	0.66	0.82	1.34	0.54	2.15							
ヒエ属型	0.62				0.61	0.62						
ヨシ属	12.21	3.98	0.82	3.09	1.39	1.38	5.15	14.08	3.69	7.63	16.04	11.07
ススキ属型	0.92	0.43	0.48	0.61	0.36	1.35	0.55		0.24	0.24	0.19	1.45
タケ亜科	0.46	0.10	0.50	0.23	0.28	0.31	0.18	0.04	0.12	0.12		

\* 試料の仮比重を1.0と仮定して算出。

IV 新井大田関遺跡の調査



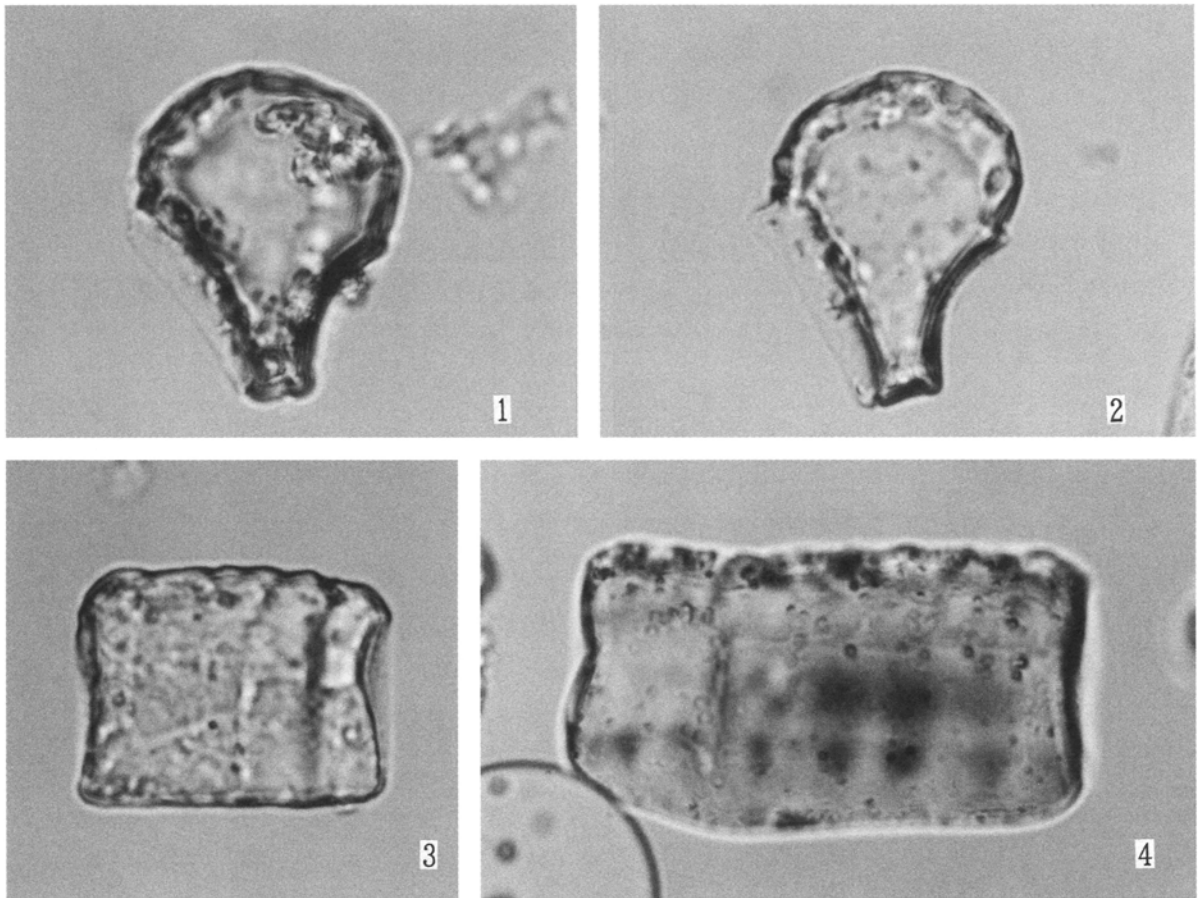
第294図 A地点におけるプラント・オパール分析結果

## 植物珪酸体の顕微鏡写真

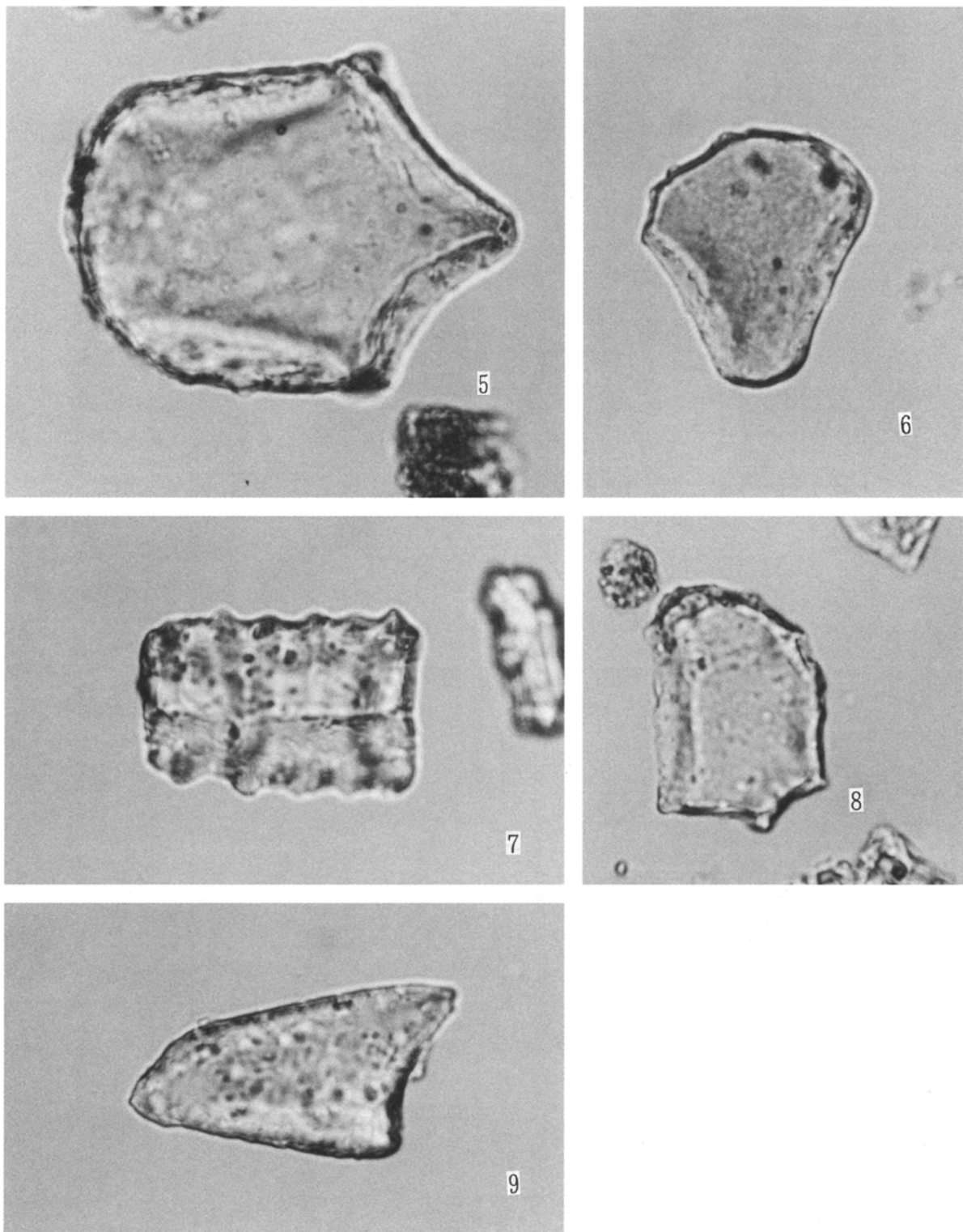
(倍率はすべて400倍)

No.	分類群	地点	試料名
1	イネ	A地点	1'
2	イネ	A地点	4
3	イネ (側面)	A地点	1
4	ヒエ属型	A地点	1
5	ヨシ属	A地点	1
6	ススキ属型	A地点	9
7	ネザサ節型	A地点	5
8	クマザサ属型	A地点	1
9	表皮毛起源	A地点	1'

第10表 プラントオパール識別一覧表



A区プラントオパール顕微鏡写真



0 50 100  $\mu$  m

A区プラントオパール顕微鏡写真

## V 新井太田関遺跡の調査成果

### (1) 水田耕作の継続性

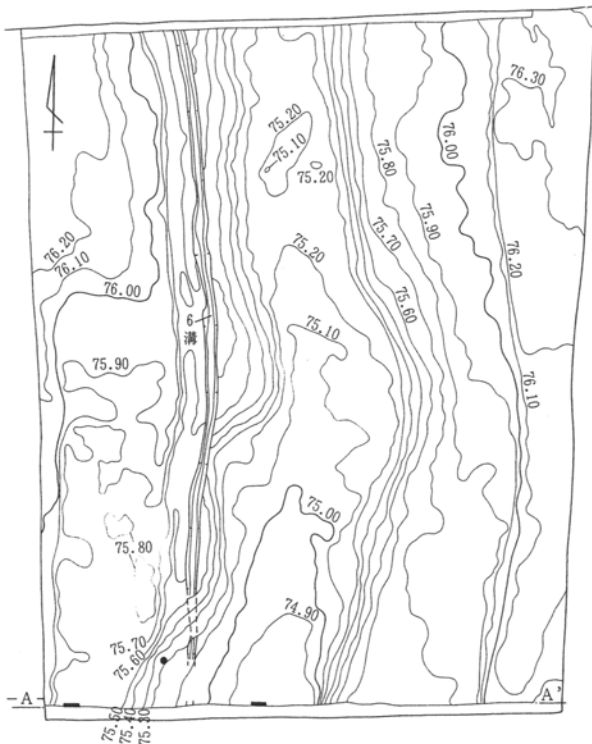
新井太田関遺跡では、古墳時代前期から平安時代までの3面の調査を実施し、4世紀から12世紀の間の水田遺構及びこれに付随する施設の他、イネのプラント・オパール分析から水田耕作土と考えられる土壤の検出を行った。ここではこれらの事象を年代に従って整理し、この遺跡における水田耕作の継続性について検討してみたい。

#### ①古墳時代前期

この遺跡で最も古い水田耕作の痕跡は、第3面で検出したAs-Cを掘り込む古墳時代前期、4世紀代の用水路と考えられる6号溝である(第295図)。この年代の水田遺構は検出できなかったが、これはこの年代に水田を被覆する火山灰や洪水が存在しなかったためである。

なお、As-Cの下面では水田遺構及びイネのプラント・オパールは検出できないことから、6号溝がこの遺跡における最古の遺構となる。

#### ②古墳時代後期



第295図 古墳時代前期の6号溝 (S=1:500)

古墳時代前期の後に水田耕作を想定できるのは、6世紀初頭以降に比定できるIX層である。この層でも、古墳時代前期と同じ理由で水田遺構は検出できなかったが、同層中に7,300個/gという高い値でイネのプラント・オパールが検出されていることから、水田耕作土と認定できる土壤である(241頁、「(4)第3面 B 水田」参照)。

IX層の年代は、この層中にHr-FAに伴う軽石が多量に含まれることから、Hr-FA降下以降の6世紀初頭以降で、下限は上位のVIII層が9世紀前半以降に位置付けられることから、9世紀前半と考えられる。

さて、この遺跡の谷部にはHr-FAの一次堆積層が存在せず、層中にHr-FAに伴う軽石が多量に含まれている。この事実は、少なくともHr-FAの降下以降に、水田耕作による攪拌が及んだことを示している。しかし、Hr-FA降下以前の5世紀代に水田が存在したか否かの判断は、この遺跡の資料のみでは不可能である。なぜなら、仮にHr-FAが被覆した水田遺構があったとしても、この地域に降下したHr-FAの層厚は10cmにも満たないことから、それ以降の攪拌で壊されてしまい、結果的としてHr-FA下面の水田遺構は検出できないことになるからである。

但し、周辺の集落遺跡の動向からみた水田耕作の、4世紀代に続くいわば再開時期は6世紀初頭以降と考えられ、これについては「(3)周辺遺跡における農耕地拡大の過程」で詳述する。

#### ③平安時代初期

古墳時代後期の後に水田耕作を想定できるのは、9世紀前半以降に比定できるVIII層である。この層でも水田遺構は検出できなかったが、層中に4,500個/gという値でイネのプラント・オパールが検出されていることから、水田耕作土と認定できる土壤である(第286図、240頁、「(3)第2面 B 水田及び水田造成による段差」参照)。この層位で水田遺構が検出できないのは、この年代に水田を被覆する火山灰や洪水が存在しなかったためである。

V 新井大田関遺跡の調査成果

なお、この遺跡の西方1.3kmに位置する荒砥川の低地では、弘仁九（818）年の地震に伴う山崩れに起因した洪水層が検出されている。しかし、この遺跡の谷は、おそらく上流の湧水点を起源とするため、

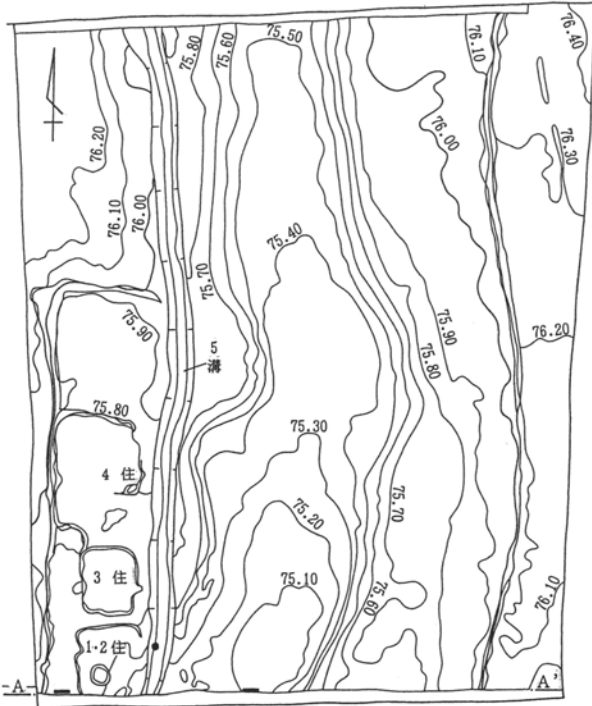
この洪水層の流路にはなっていない。

④平安時代後期

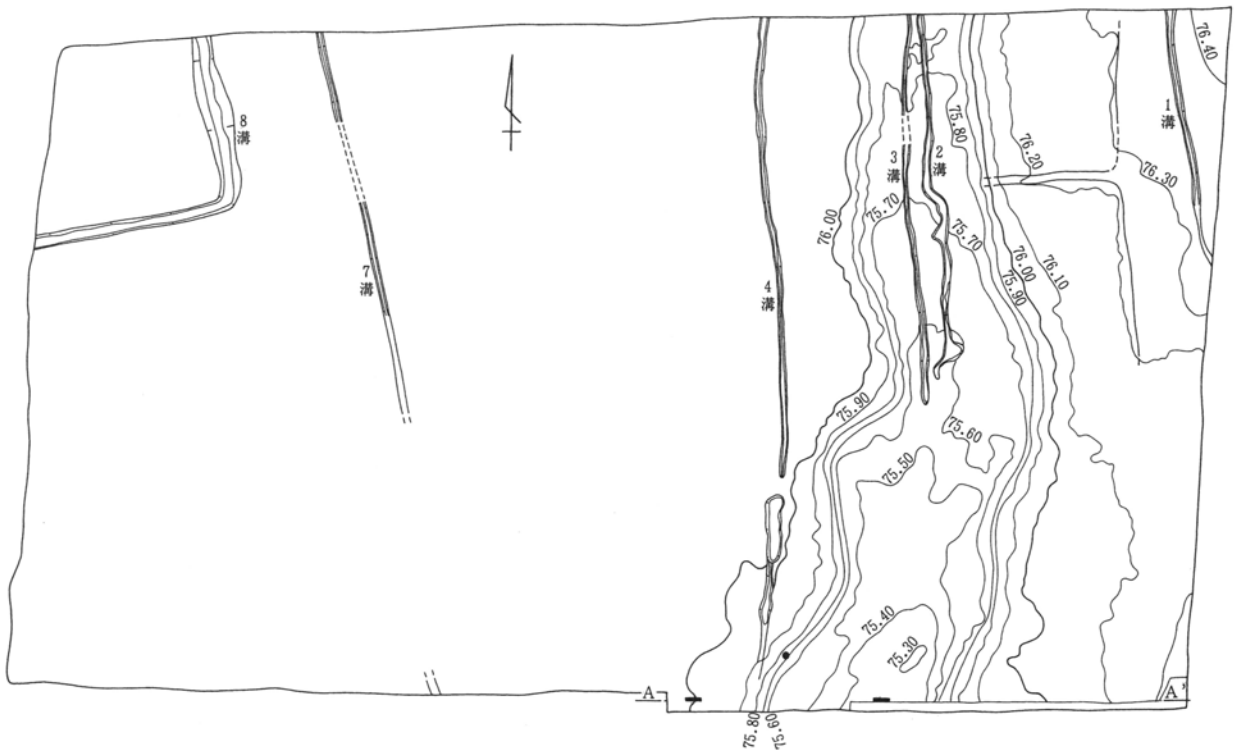
9世紀代の後に水田耕作を想定できるのは、天仁元（1108）年のAs-B下面から検出した、水田に伴う畦畔及び水田耕作土である（第278図、233頁、「（2）第1面 B 水田」参照）。検出した畦畔は極一部であったが、As-Bの直下の土壌であるⅦ層から、2,200個/gという値で検出されたイネのプラント・オパールが水田であることの証左となる。

以上のことから、この遺跡で検出できた水田に伴う畦畔は、平安時代（1108年）のAs-B下面のみであったが、古墳時代前期の4世紀前半、同後期の6世紀初頭以降、平安時代の9世紀前半以降、同12世紀初頭の各年代について、水田耕作の痕跡を確認することができた（第298図）。

但し、5世紀代、7世紀代、8世紀代について、少なくともこの遺跡の資料のみでは水田耕作の有無を確認することは不可能である。

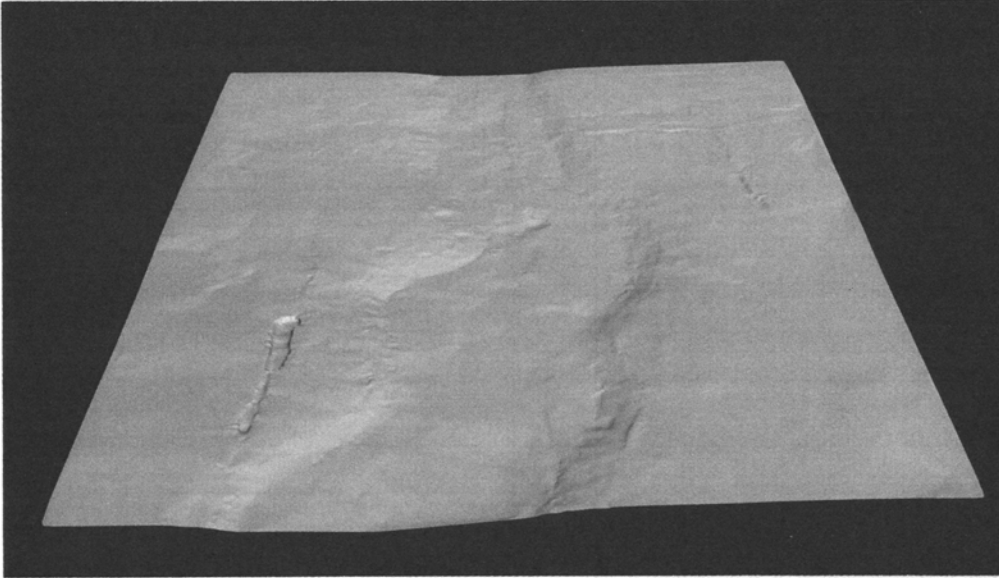


第296図 水田及び水田造成による段差 (S=1:500)

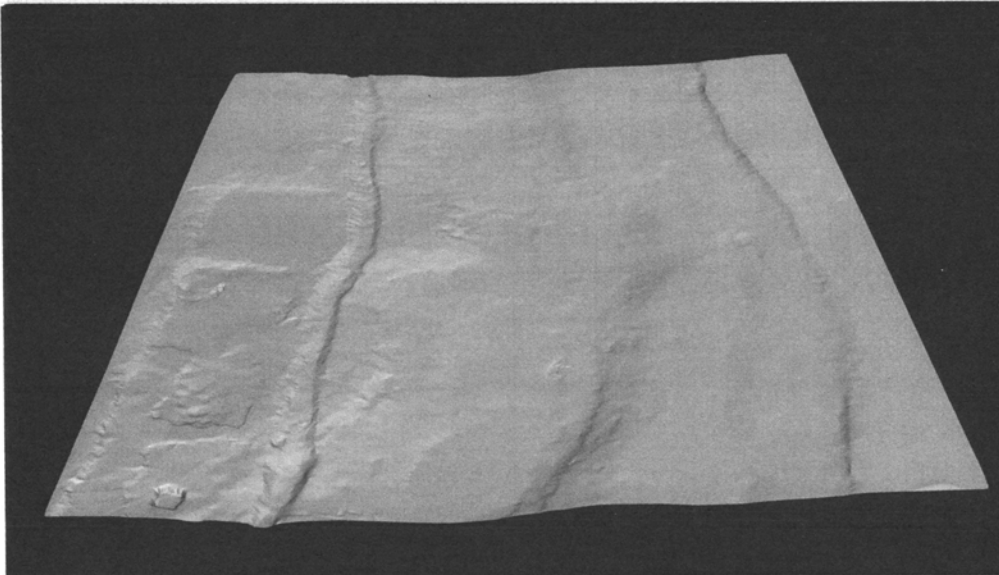


第297図 As-B下面の水田 (S=1:500)

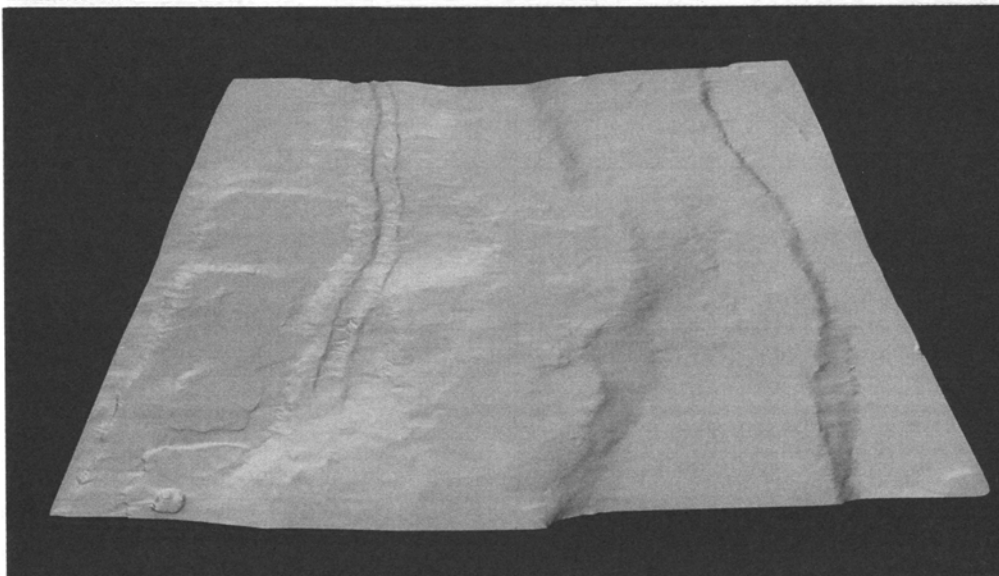




第1面  
(平安時代面1)



第2面  
(平安時代面2)



第3面  
(古墳時代面)

第298図 調査面のコンピュータ・グラフィック



(2) 9世紀における水田域の拡張

この遺跡では、9世紀前半以降に位置付けられる水田耕作土のⅧ層と、水田域を微高地へ拡張した際に生じた谷の傾斜に平行する段差を検出した(第286図、240頁、「(3)第2面 B 水田及び水田造成による段差」参照)。

水田耕作土であるⅧ層の下面では、8世紀後半から9世紀前半にかけて継続する竪穴住居4軒と(236頁、「(3)第2面 C 竪穴住居」参照)、覆土の状況から9世紀前半以前に人為的に埋められたと考えられる水路の5号溝を検出している(238頁、「(3)第2面 D 溝」参照)。

これらの水田耕作土、段差、竪穴住居、水路の関係を年代順に整理すると以下ようになる。

①8世紀後半に、微高地の縁辺部には竪穴住居が造られ、これらは9世紀前半まで継続する。

②9世紀前半以前には、竪穴住居群より谷側の微高地の縁辺部に水路が掘削される。

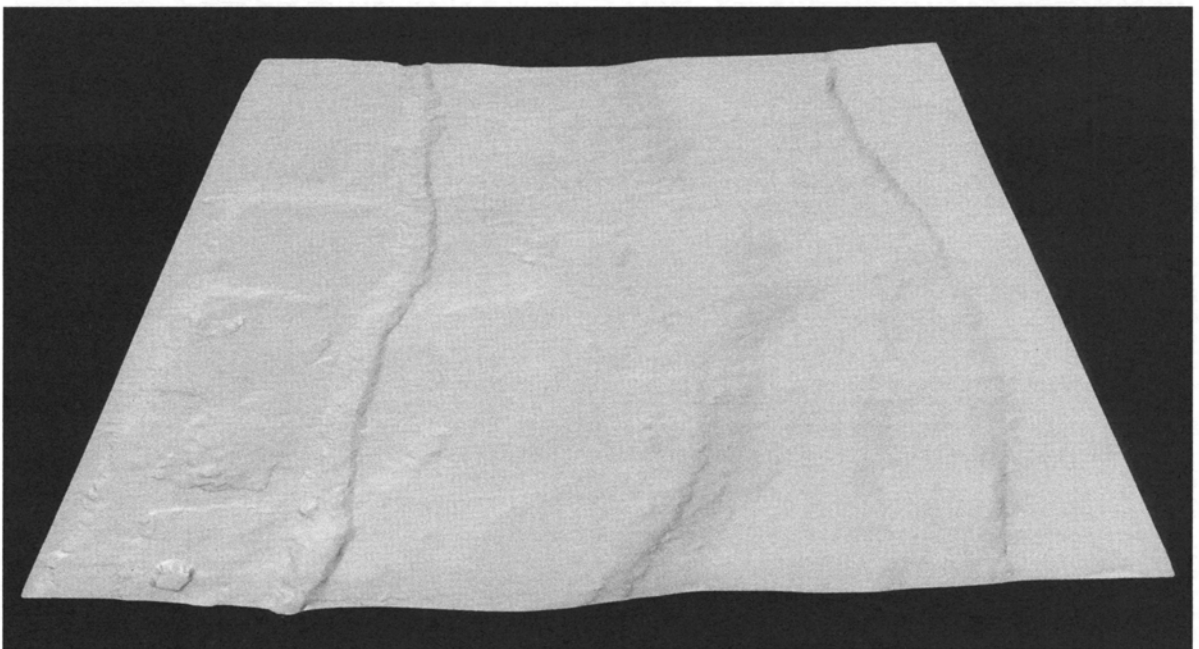
③9世紀前半以降には、①の竪穴住居と②の水路の上位、すなわち微高地の縁辺部まで広がる水田が造成され、その際に微高地の高い側に水田に伴う段差が生じる。

以上の経過から、9世紀前半以降には次のような

水田域の拡張現象が想定できる。すなわち、8世紀後半から9世紀前半までの間は、5号溝を水路とする水田が水路より谷側の低地に営まれ、竪穴住居は水路の際の微高地上に立地していた。

次に9世紀前半以降になると、水路を人為的に埋め、竪穴住居が立地していた微高地まで水田域を拡大した。その際にそれまで立地していた住居は、その基部のみが残存する程度にまで水田耕作による攪拌を受け、微高地の両側の高い側には水田の造成に伴う段差が生じた。さらに、水田域を微高地側に拡張するためには、水田域より高い側へ水路を掘削する必要があるが、これについては微高地上で検出した9世紀後半と推定される7号溝が、付け替えた水路である可能性が高いものと考えられる(232頁、「(2)第1面 C 溝」参照)。

以上、この遺跡では9世紀代における水田域の拡張現象を認めることができた。さて、この水田耕作土の上位は1108年のAs-B下水田の耕作土となる。しかし、9世紀代の水田耕作の継続性については、これが年代的な空白を置くことなくAs-B下水田まで継続したか否かは、この遺跡の資料のみでは判断することが不可能で、これについては「(3)周辺遺跡における農耕地拡大の過程」で述べる。



第299図 9世紀面のコンピュータ・グラフィック

### (3) 周辺遺跡における農耕地拡大の過程

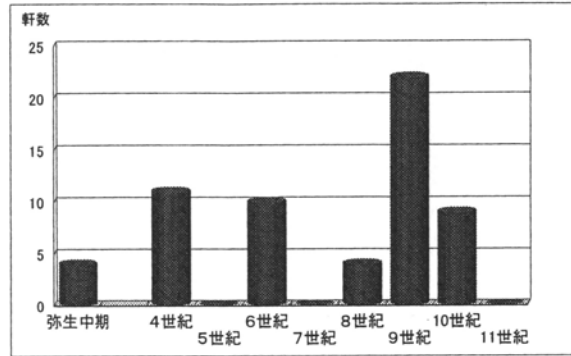
新井大田関遺跡で検出した竪穴住居は4軒であったが、この遺跡の西側に隣接する萩原遺跡では、弥生時代中期から平安時代に至る60軒の住居が検出されている(第8～11図、「II 萩原遺跡の調査」参照)。

これらの萩原遺跡と新井大田関遺跡の住居の変遷を見ると、初出の時代は弥生時代中期で、時間的な断絶を挟んだ古墳時代前期の4世紀代に住居は再び出現している。次に5世紀代の断絶を挟んで6世紀代に三度出現し、さらに7世紀代の断絶を挟んで8世紀代から10世紀代にかけて継続し、11世紀以降に住居は消滅するという変遷を辿る(第300図)。

当然のことながら、発掘調査で確認できる遺跡の範囲はその全体の極く限られた部分でしかなく、これらの変遷が必ずしもこの地域の変遷を代表的に示していると断定することは難しい。とは言え、合計では22,800㎡にもなる調査範囲の成果は、変遷の傾向の一端は示しているものと考えられる。したがって、ここではこれらの住居の変遷と、先述した新井大田関遺跡における水田耕作の継続性について、水田資料の得られない弥生時代を除いた古墳時代以降の関係を検討をしてみたい。

新井大田関遺跡における4世紀代の用水路に示される水田耕作は、4世紀代の住居に対応している。次に新井大田関遺跡の6世紀初頭以降に比定できる水田耕作も、住居変遷の6世紀代の住居に対応している。さらに、新井大田関遺跡における水田域の拡張期である9世紀代についても、住居変遷の9世紀代の住居に対応し、しかもこの年代に住居軒数の大幅な増加が認められる。

一方、12世紀初頭のAs-B下面の水田に対応する

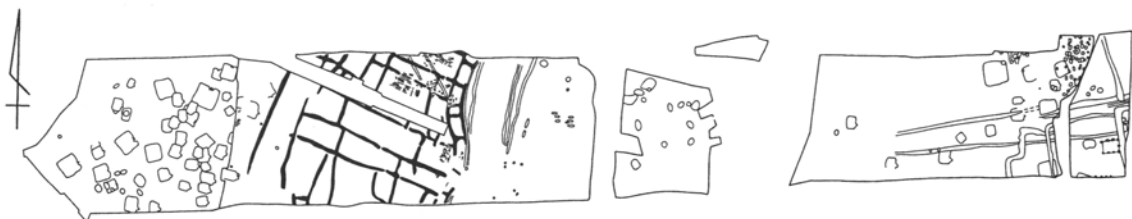


第301図 萩原・新井大田関遺跡の竪穴住居変遷図

住居は存在せず、これについては一見すると対応関係に矛盾があるかのように見える。しかし、群馬県下においては、9世紀代を頂点に竪穴住居は減少の傾向を示し、11世紀代で竪穴住居はほぼ消滅する。したがって、As-B下面の水田に対応する住居が検出できないのは、竪穴住居から他の住居への居住形態の変化がその背景にあるものと考えられる。

また、先述した水田耕作の再開期とも言える6世紀初頭については、これがHr-FA降下以前の5世紀代にも水田が存在したか否かの判断が、新井大田関遺跡の資料のみでは不可能であった。しかし、これについては、住居の変遷に5世紀代の空白期が存在することから、少なくともこの遺跡の周辺では5世紀代の断絶を認めざるを得ない。

さて、このように水田耕作の継続性と住居の変遷を見てみると、両者にはほぼ完全な対応関係が認められることになる。すなわち、この遺跡の周辺においては古墳時代前期の4世紀代に水田耕作を伴う集落が出現し、5世紀代の空白期を経て、6世紀初頭に再び再開する。さらに、7世紀代の空白期を経て8世紀代から三度再開し、これが9世紀代の拡張期へと継続するのである。



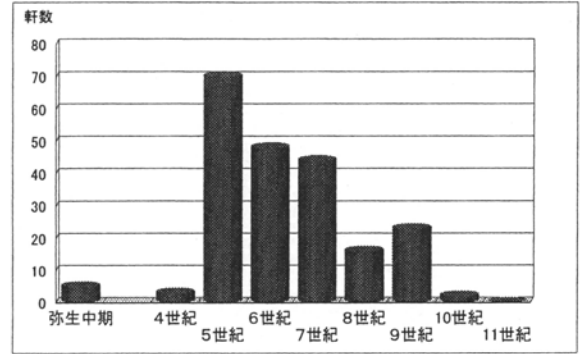
第300図 萩原遺跡全体図 (S=1:2500)

V 新井大田関遺跡の調査成果

但し、こうした9世紀代に拡張期を迎えた水田耕作が、12世紀初頭のAs-B下面の水田へ断絶することなく継続するか否かについては、不明であると言わざるを得ない。なぜなら、少なくとも萩原遺跡・新井大田関遺跡では11世紀代の住居が存在せず、As-B下面の水田におけるイネのプラント・オパールも少ない傾向を示しているからである。

As-B下面の水田において、イネのプラント・オパールが少ない現象は、県下でもほぼ同様な傾向にあるが、これはこの水田の継続期間の短さを反映している可能性がある。つまり、As-B下面の水田の開田時期は、As-Bの降下から余り遡らない年代の可能性があるのである。

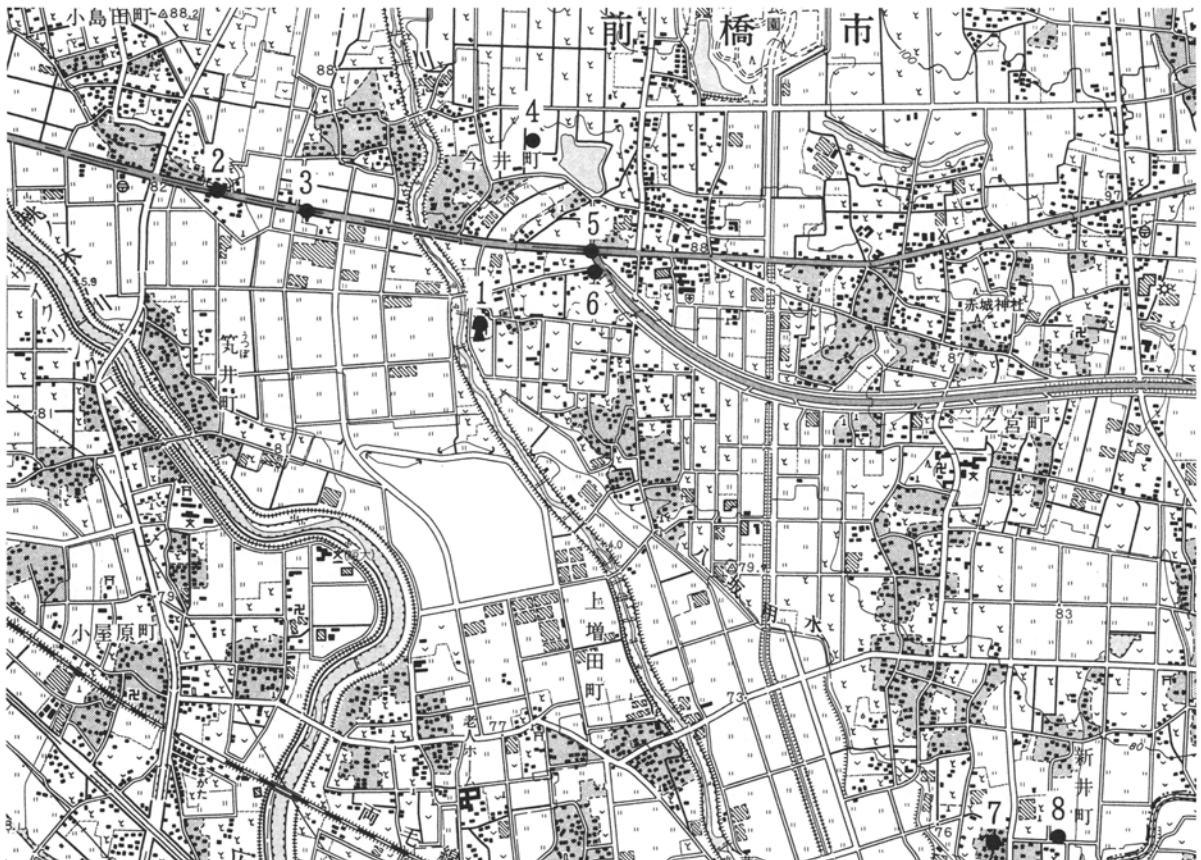
以上、この遺跡周辺における農耕地拡大の過程を、水田と竪穴住居から見てきた。ここでの検討結果は、広い赤城山の南麓地域のうちの、萩原遺跡、新井大田関遺跡という極く限られた範囲でものでしかなく、



第302図 今井神社古墳周辺の竪穴住居変遷図

赤城山の南麓地域においては、この遺跡とは明らかに変遷を異にする集落遺跡も存在する(坂口 1996)。

しかしその一方で、一遺跡において4世紀代、6世紀代、9世紀代の住居が検出される例も多く、これはこの遺跡の傾向とよく一致した現象を示している。したがって、ここでの変遷過程はあくまでも動向のひとつのパターンであり、今後は墳墓を含めた地域の検討による検証が必要となる。



第303図 関連遺跡位置図 (25,000分の1「大胡」)

- (1:今井神社古墳 2:筑井八日市遺跡 3:今井白山遺跡 4:荒砥北三木堂遺跡 5:今井道上遺跡  
6:今井道上道下遺跡 7:萩原遺跡 8:新井大田関遺跡)

# 写 真 图 版





A区全景（北から）



D区全景（東から）



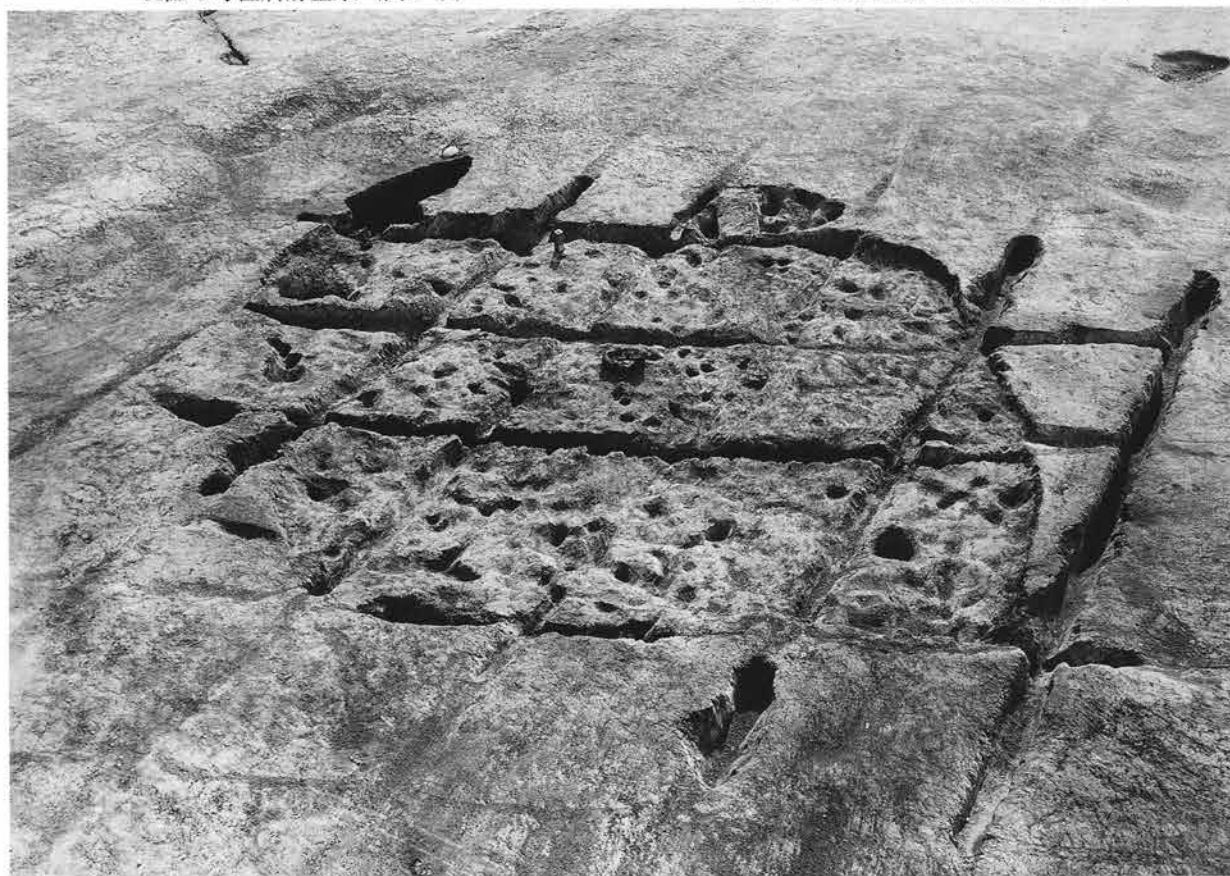
PL2 萩原遺跡



A区4号住居跡全景（西から）



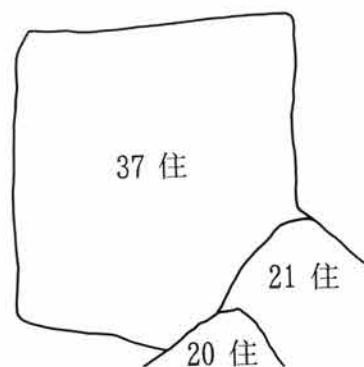
A区4号住居跡掘り方全景（西から）



A区11号住居跡全景（北から）



A区37号住居跡全景（南西から）





A区13号住居跡遺物出土状況



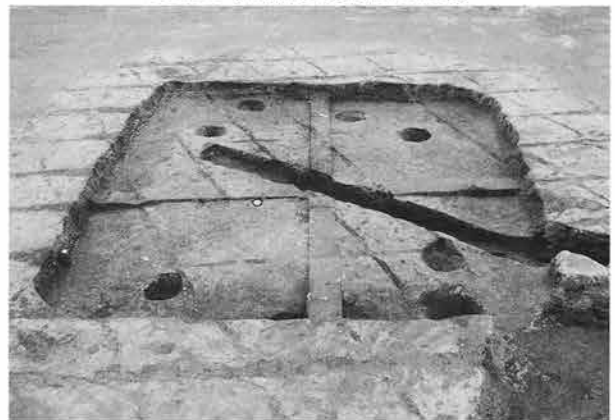
A区13号住居跡遺物出土近接



A区13号住居跡遺物出土近接



A区13号住居跡貯蔵穴遺物出土状況



A区13号住居跡掘り方全景





A区14号住居跡全景



A区14号住居跡貯蔵穴遺物出土状況



A区14号住居跡掘り方全景



A区25号住居跡セクション（南から）



A区25号住居跡出土遺物近接



A区25号住居跡全景（南から）



D区1号住居跡全景

PL6 萩原遺跡



D区1号住居跡柱穴



D区1号住居跡掘り方全景



D区2号住居跡全景



D区2号住居跡掘り方全景



D区2号住居跡調査風景





D区3号住居跡全景



D区3号住居跡セクション



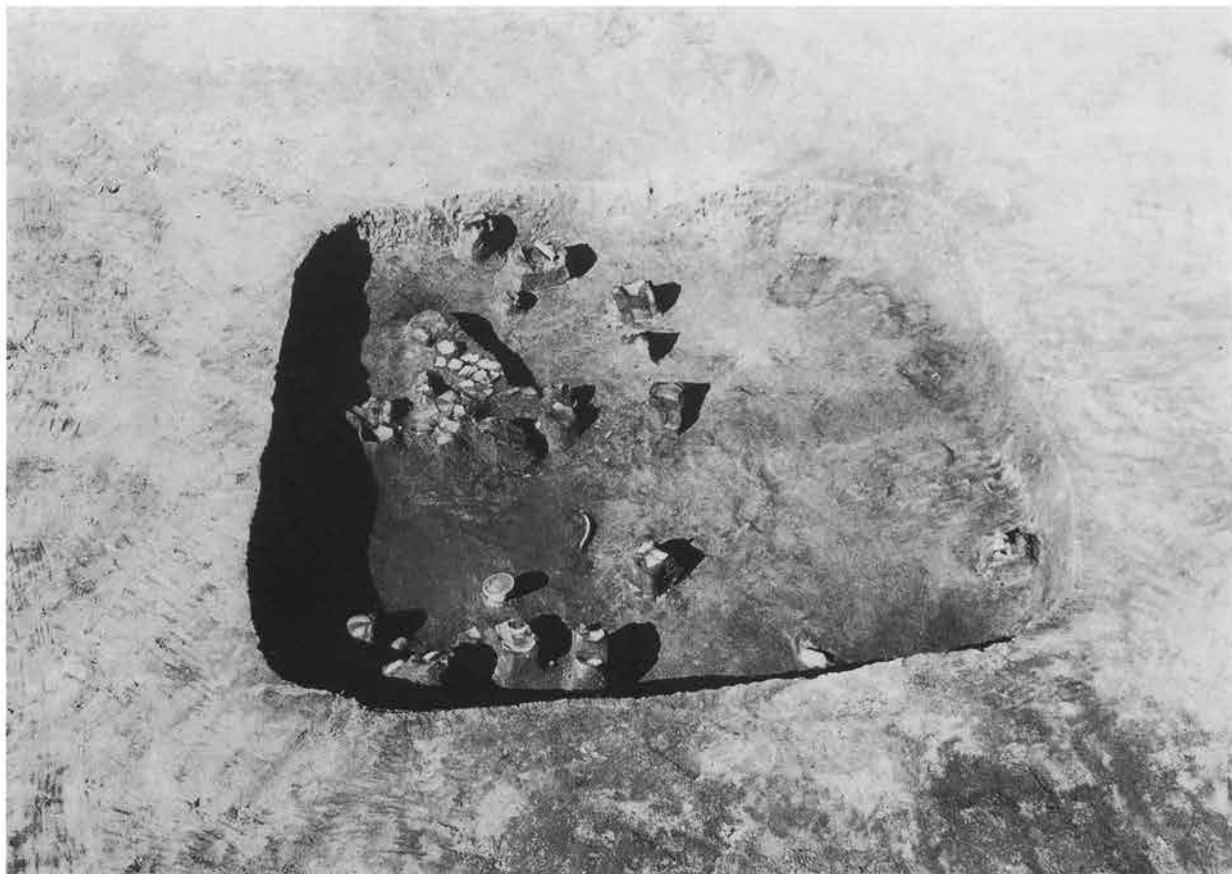
D区3号住居跡出土遺物近接



D区3号住居跡柱炭化物



D区3号住居跡掘り方全景



D区4号住居跡全景



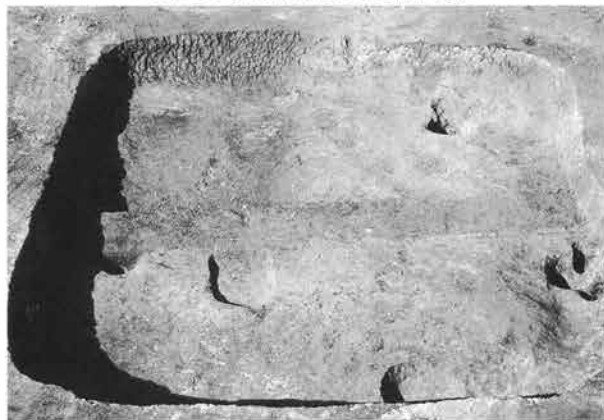
D区4号住居跡セクション



D区4号住居跡出土遺物近接



D区4号住居跡出土遺物近接



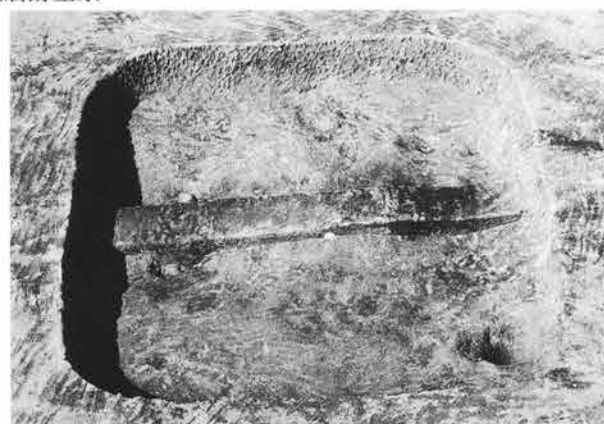
D区4号住居跡掘り方全景



D区5号住居跡全景



D区5号住居跡出土遺物近接



D区5号住居跡掘り方全景



D区12号住居跡セクション



D区12号住居跡遺物出土状況



P L10 萩原遺跡



D区12号住居跡全景（西から）



D区12号住居跡出土遺物近接



D区12号住居跡出土遺物近接



D区13号住居跡遺物出土状況



D区13号住居跡出土遺物近接



D区13号住居跡全景（北から）



D区14号住居跡全景（北から）



PL12 萩原遺跡



D区14号住居跡セクション (南から)



D区14号住居跡遺物出土状況



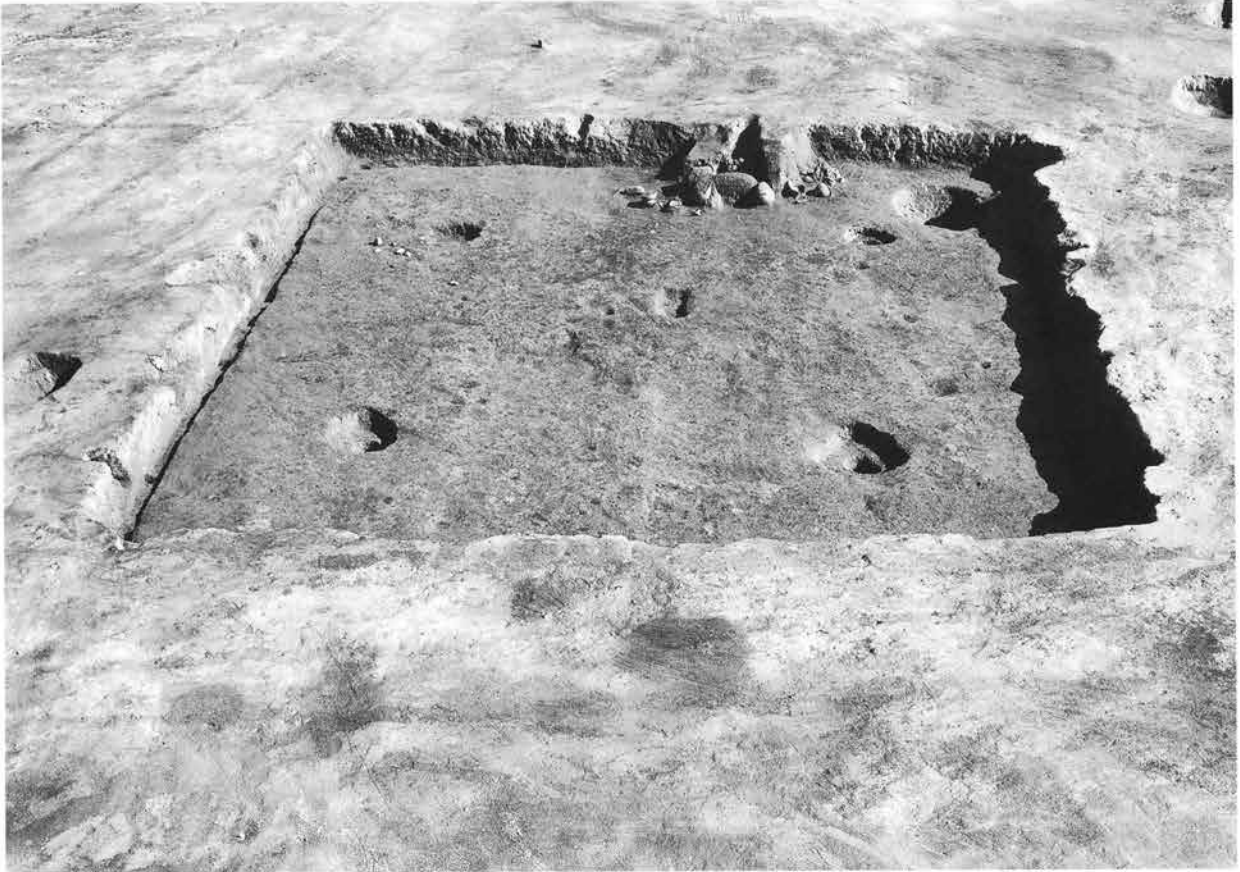
E区2号住居跡全景



A区1号住居跡遺物出土状況 (南から)



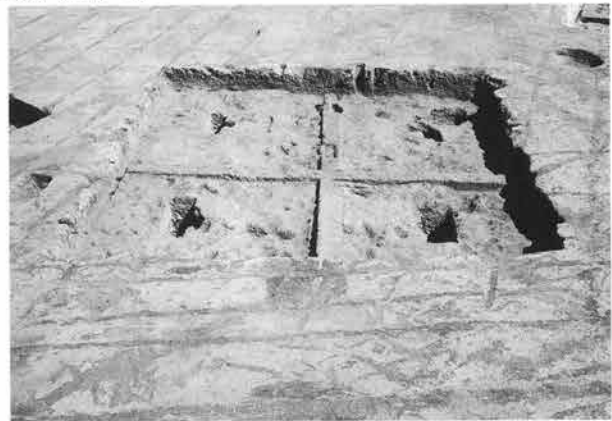
A区1号住居跡竈全景 (西から)



A区1号住居跡全景（南から）



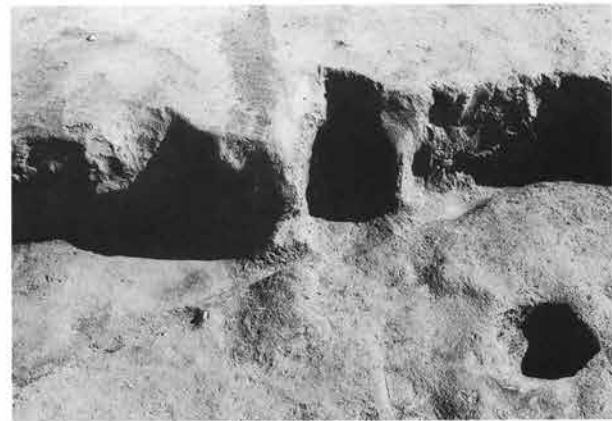
A区1号住居跡貯蔵穴セクション



A区1号住居跡掘り方全景（西から）



A区2号住居跡遺物出土状況（西から）



A区2号住居跡竈全景（西から）



A区2号住居跡全景（西から）



A区2号住居跡セクション（西から）



A区2号住居跡掘り方全景（西から）



A区3号住居跡竈セクション（南から）



A区3号住居跡竈全景（西から）





A区3号住居跡全景



A区3号住居跡貯蔵穴セクション (南から)



A区3号住居跡掘り方全景 (西から)



A区6号住居跡遺物出土状況 (西から)



A区6号住居跡西壁出土遺物近接

PL16 萩原遺跡



A区6号住居跡全景（西から）



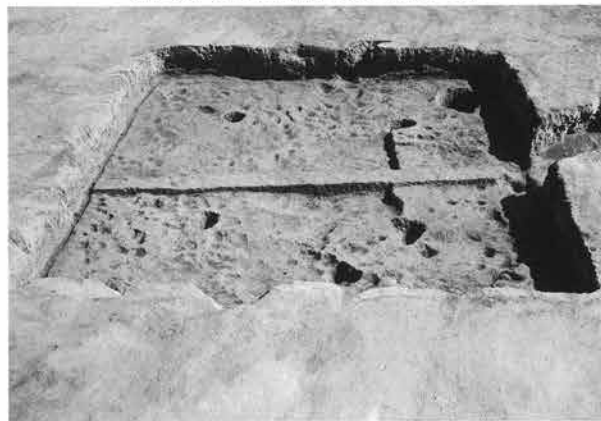
A区6号住居跡貯蔵穴遺物出土状況



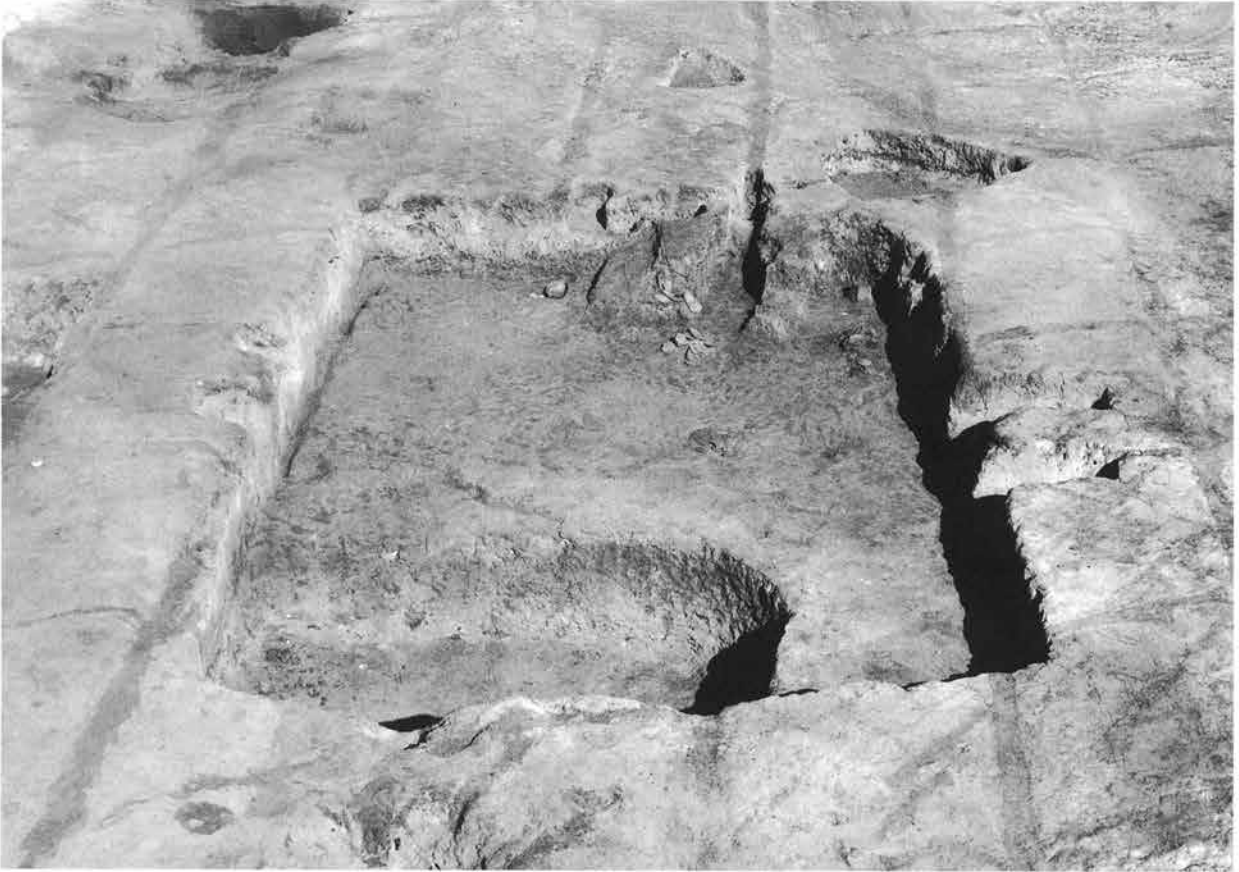
A区6号住居跡竈全景（西から）



A区6号住居跡竈掘り方遺物出土状況



A区6号住居跡掘り方全景（西から）



A区7号住居跡全景（西から）



A区7号住居跡セクション（南から）



A区7号住居跡竈全景（西から）



A区7号住居跡竈掘り方出土遺物近接（西から）



A区7号住居跡掘り方全景（西から）





A区29号住居跡全景（西から）



A区29号住居跡出土遺物近接



A区29号住居跡竈セクション（南から）



A区29号住居跡竈全景（西から）



A区29号住居跡掘り方全景（西から）





A区32号住居跡全景（南から）



A区32号住居跡遺物出土状況



A区32号住居跡炭化物出土状況（南から）



A区32号住居跡炭化物近接

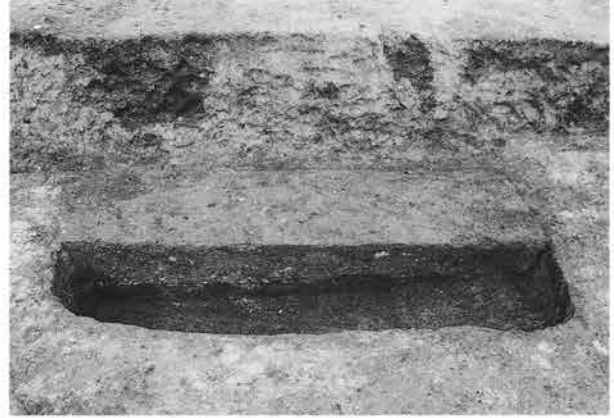


A区32号住居跡竈全景（南から）

PL20 萩原遺跡



A区32号住居跡貯蔵穴セクション



A区32号住居跡1号ピットセクション



A区32号住居跡杭状炭化物近接（白丸）



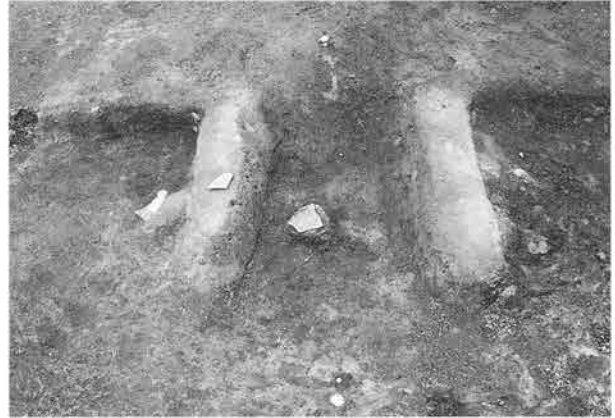
A区32号住居跡掘り方全景（南から）



A区34号住居跡全景



A区34号住居跡貯蔵穴遺物出土状況 (南から)



A区34号住居跡竈全景



A区34号住居跡竈出土遺物近接



A区34号住居跡竈袖セクション (南から)



A区35号住居跡全景 (南から)



PL22 萩原遺跡



A区35号住居跡竈全景（南から）



A区35号住居跡竈出土遺物近接



A区35号住居跡竈袖セクション



A区35号住居跡掘り方全景（南から）



A区36号住居跡全景



A区36号住居跡セクション (南から)



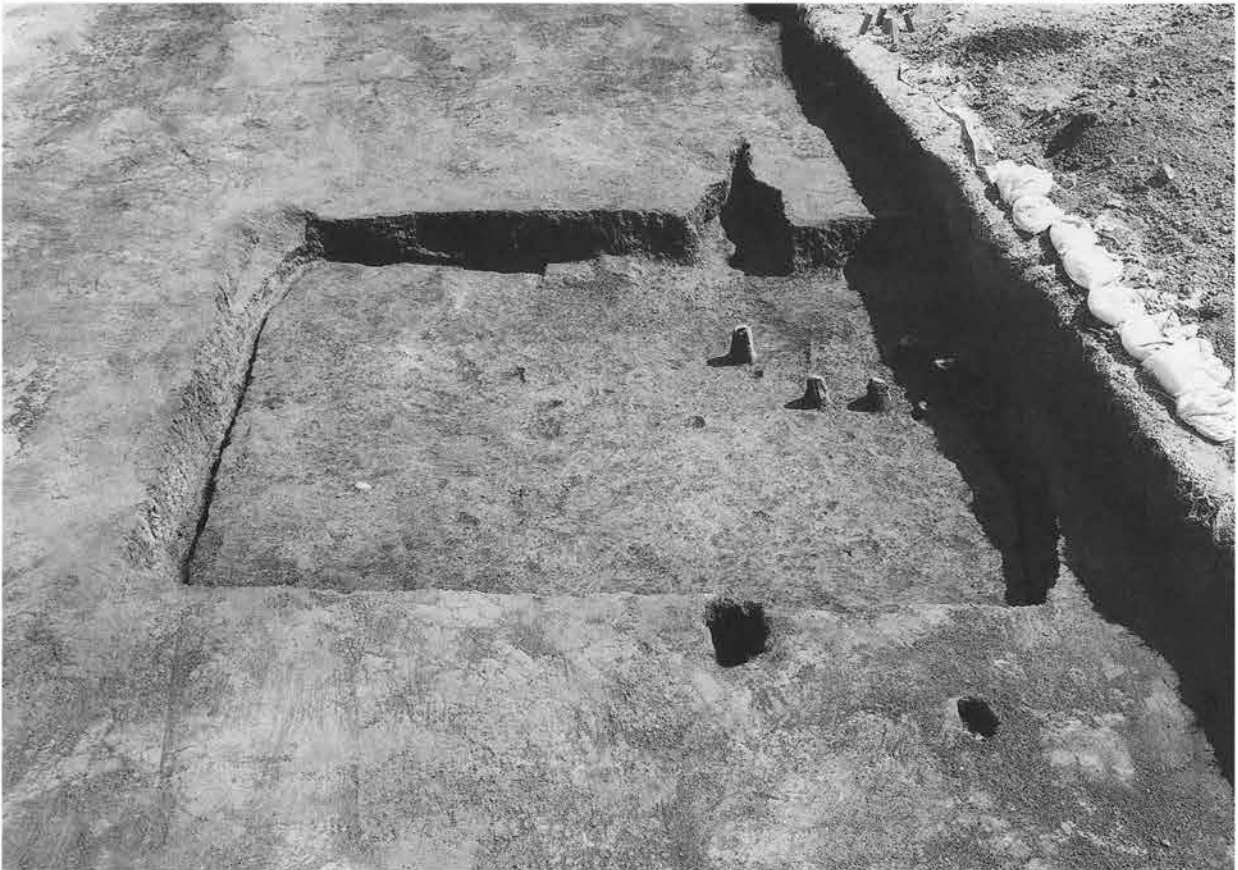
A区36号住居跡竈セクション



A区36号住居跡竈全景



A区36号住居跡竈出土遺物近接



A区10号住居跡全景 (西から)

PL24 萩原遺跡



A区10号住居跡竈セクション



A区10号住居跡竈全景（西から）



A区10号住居跡竈掘り方



A区10号住居跡掘り方全景（西から）

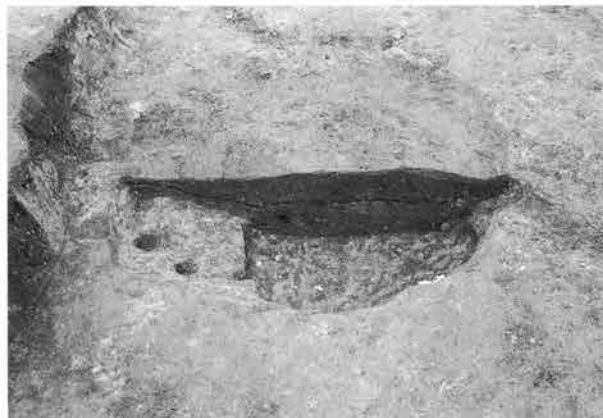


A区12号住居跡全景（西から）





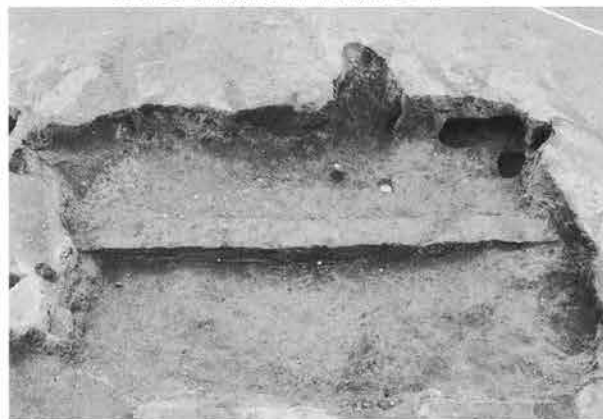
A区12号住居跡遺物出土状況



A区12号住居跡床下土坑セクション



A区12号住居跡竈全景（西から）

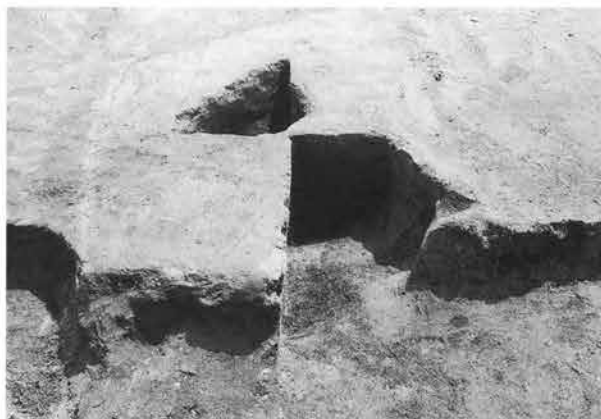


A区12号住居跡掘り方全景（西から）



A区15号住居跡全景





A区15号住居跡竈セクション



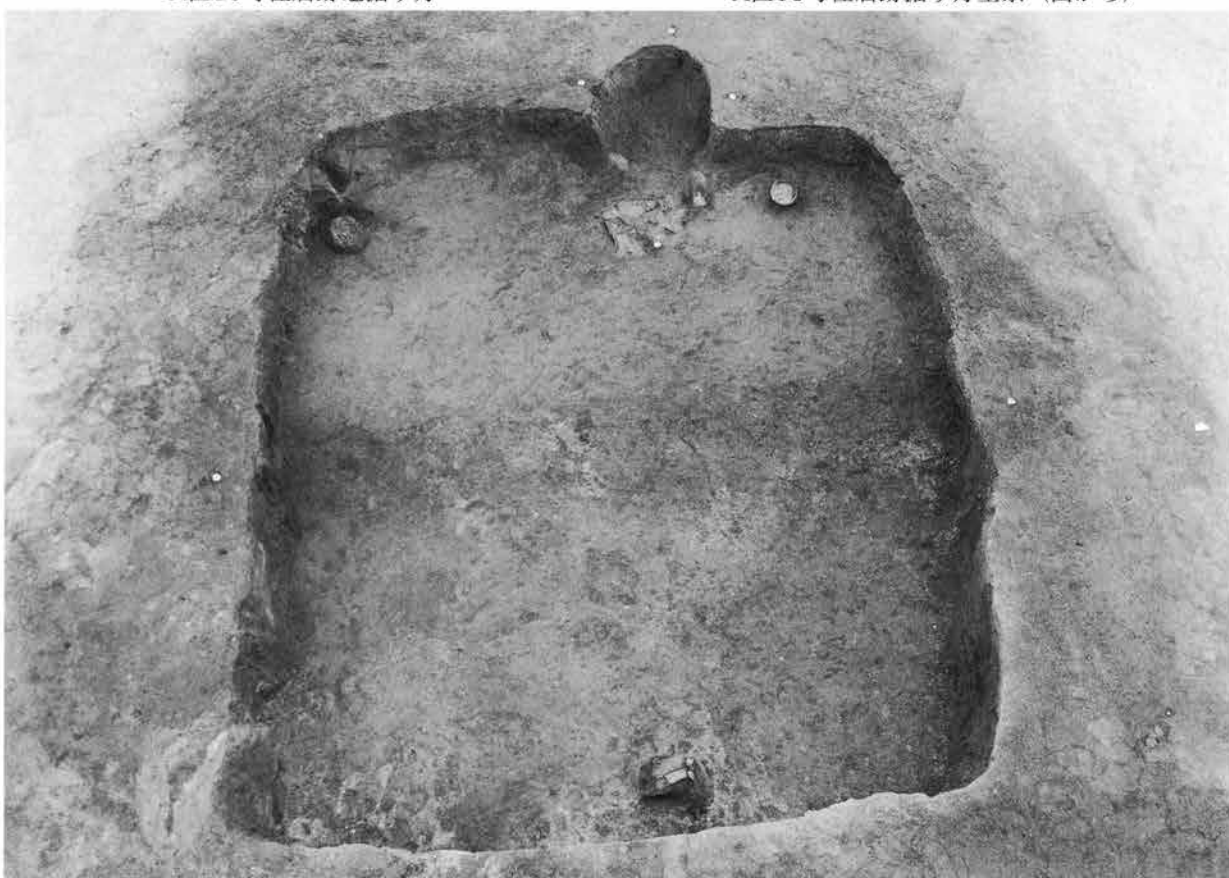
A区15号住居跡竈全景



A区15号住居跡竈掘り方



A区15号住居跡掘り方全景 (西から)



A区16号住居跡全景



A区16号住居跡竈セクション



A区16号住居跡竈全景



A区16号住居跡竈出土遺物近接



A区16号住居跡掘り方全景



A区19号住居跡全景（西から）

P L28 萩原遺跡



A区19号住居跡出土遺物近接



A区19号住居跡出土遺物近接



A区19号住居跡遺物出土状況



A区19号住居跡竈全景 (西から)



A区22号住居跡全景 (西から)





A区22号住居跡遺物出土状況



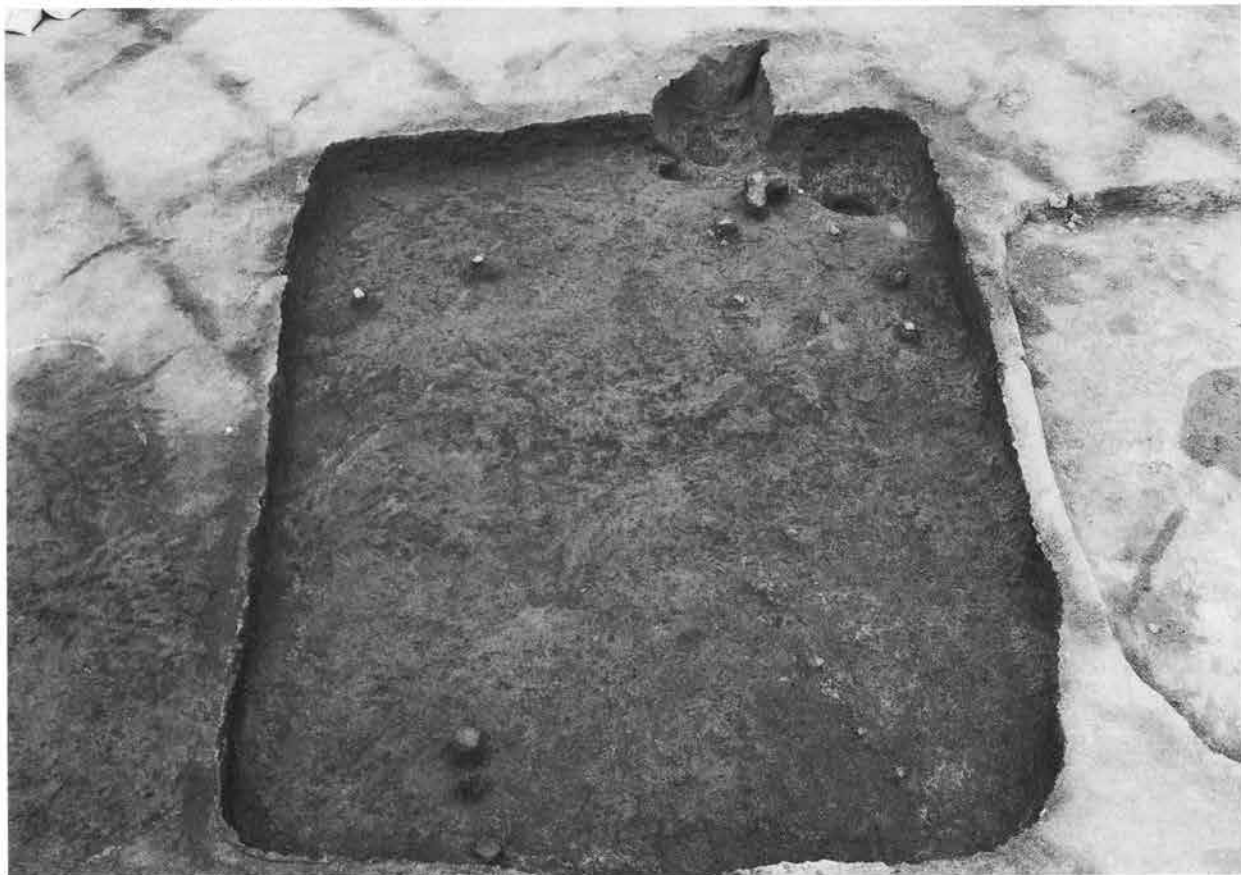
A区22号住居跡竈セクション



A区22号住居跡竈全景（西から）



A区22号住居跡掘り方全景（西から）



A区24号住居跡全景（西から）



A区24号住居跡セクション



A区24号住居跡床下土坑セクション



A区24号住居跡掘り方全景



A区24号住居跡竈掘り方



A区26号住居跡全景（西から）



A区26号住居跡竈全景



A区26号住居跡竈全景



A区27号住居跡全景



A区27号住居跡出土遺物近接



A区27号住居跡竈全景



PL32 萩原遺跡



A区27号住居跡掘り方全景



A区27号住居跡貯蔵穴遺物出土状況



A区28号住居跡全景



A区28号住居跡セクション



A区28号住居跡竈全景





A区28号住居跡竈セクション



A区28号住居跡掘り方全景



A区30号住居跡全景 (西から)

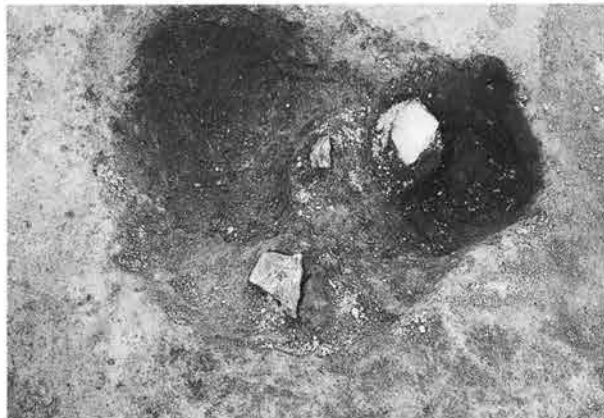


A区30号住居跡セクション (南から)



A区30号住居跡竈全景 (西から)

P L34 萩原遺跡



A区30号住居跡掘り方出土遺物近接



A区30号住居跡掘り方全景



A区33号住居跡全景（西から）



A区33号住居跡セクション



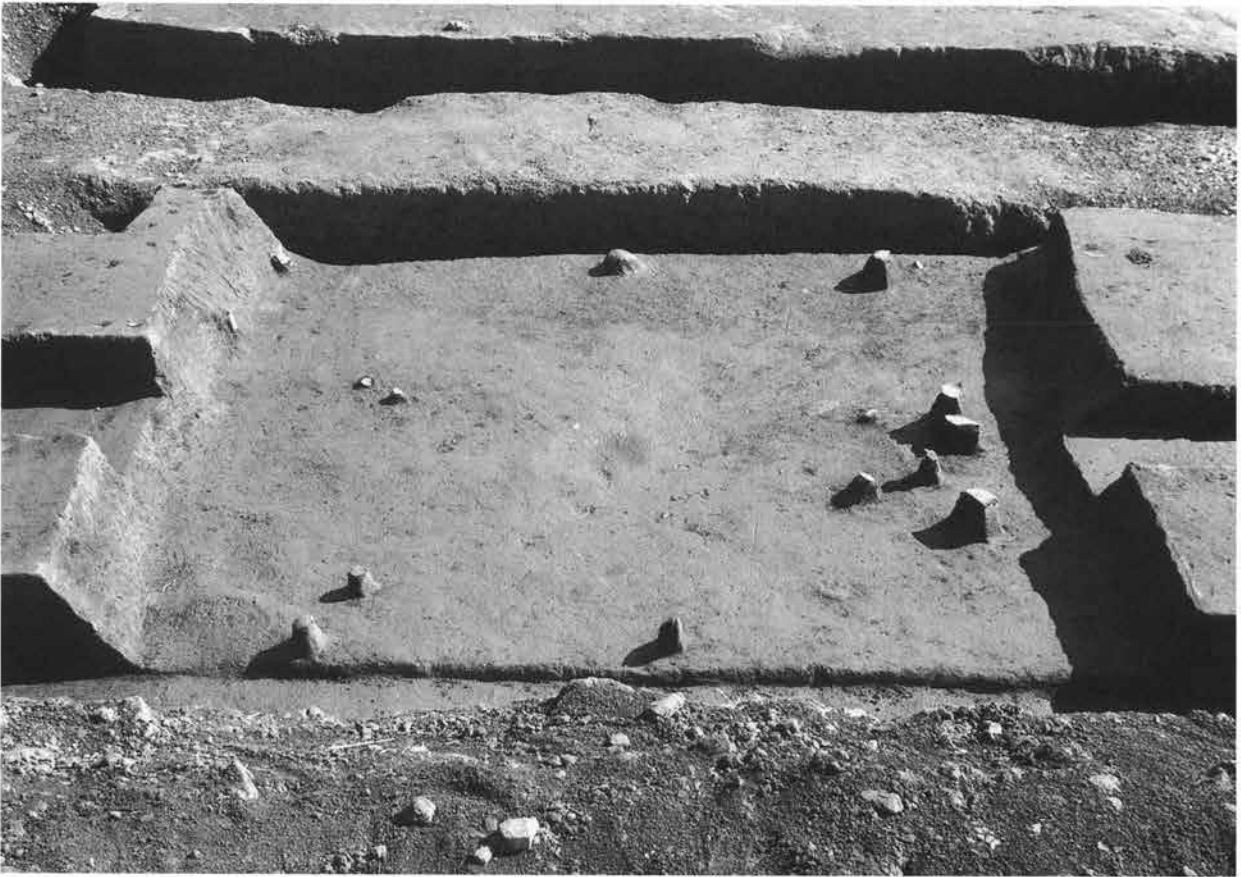
A区33号住居跡竈全景（西から）



A区33号住居跡竈



A区33号住居跡竈セクション



B区1号住居跡全景（東から）



B区1号住居跡出土遺物近接（鉄滓）



B区1号住居跡出土遺物近接





B区1号住居跡竈全景



B区1号住居跡掘り方全景



B区2号住居跡全景



B区2号住居跡竈全景 (西から)



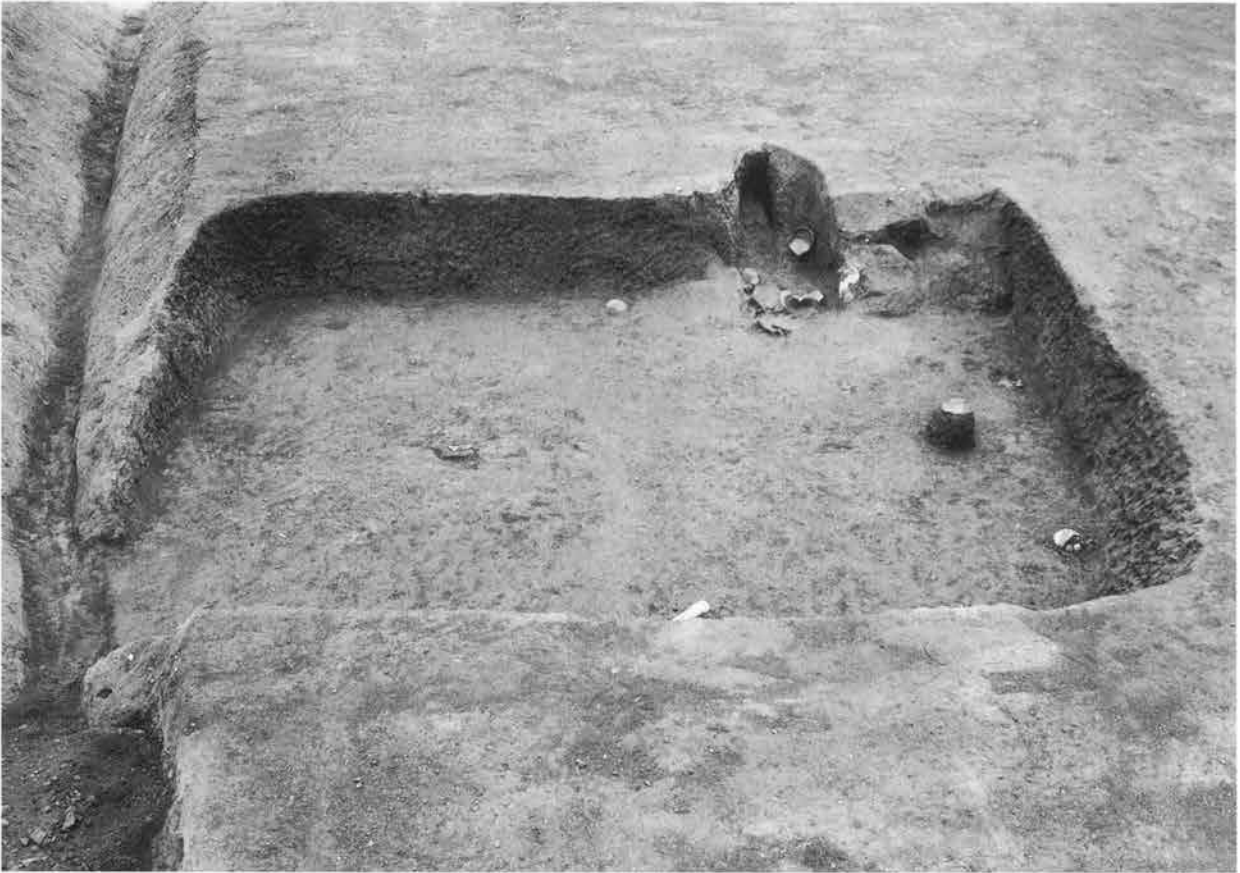
B区2号住居跡竈セクション



B区2号住居跡竈出土遺物近接



B区2号住居跡貯蔵穴遺物出土状況



D区6号住居跡全景



D区6号住居跡セクション



D区6号住居跡竈全景

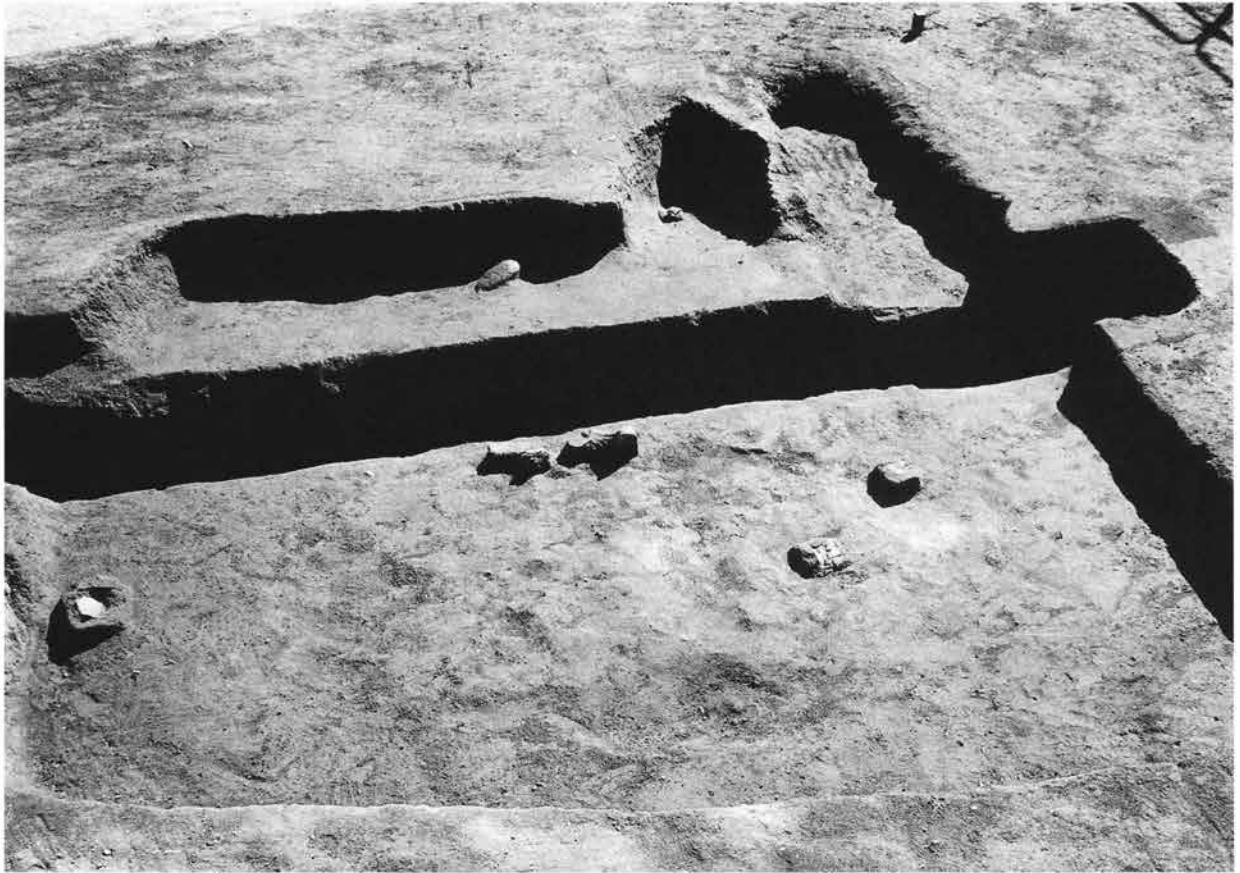
P L38 萩原遺跡



D区6号住居跡竈遺物出土状況



D区6号住居跡竈セクション



D区7号住居跡全景

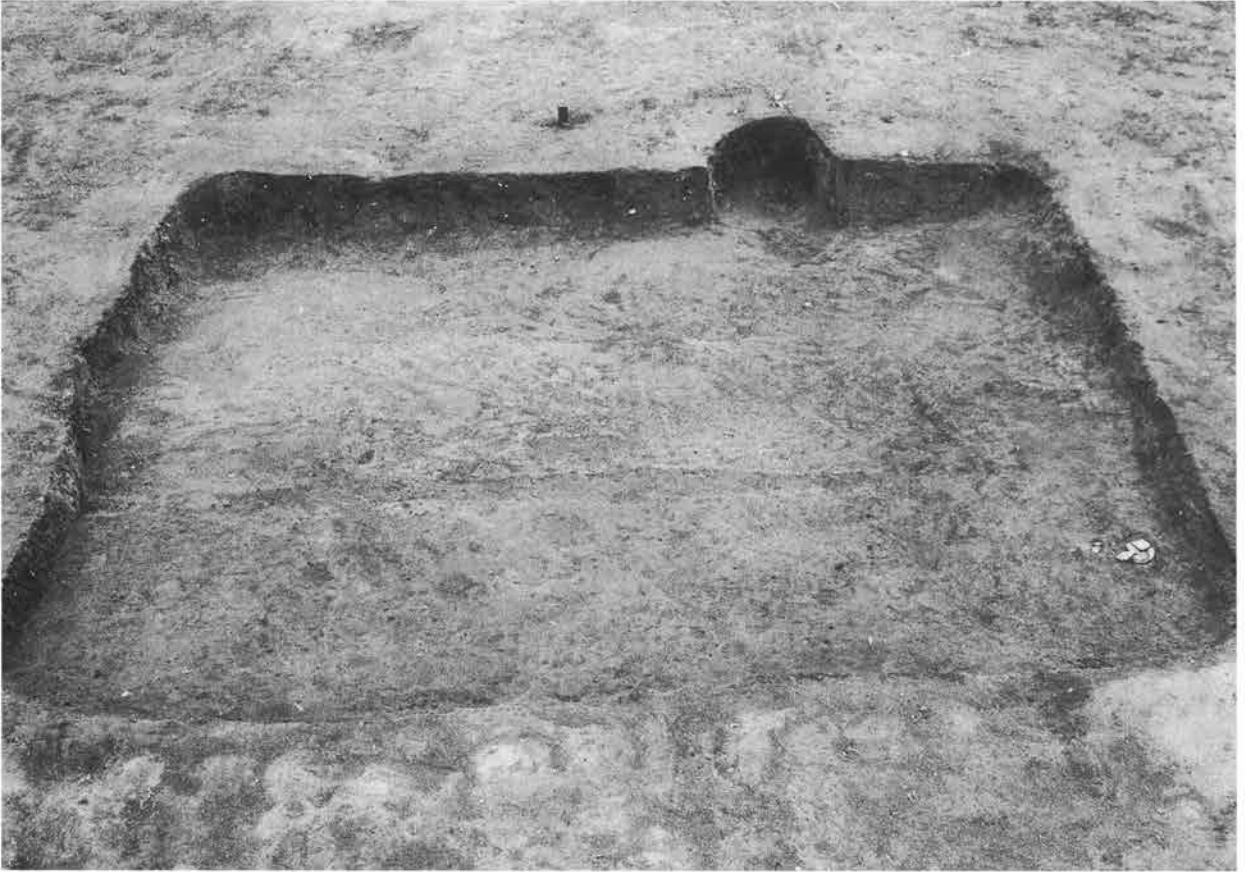


D区7号住居跡竈全景

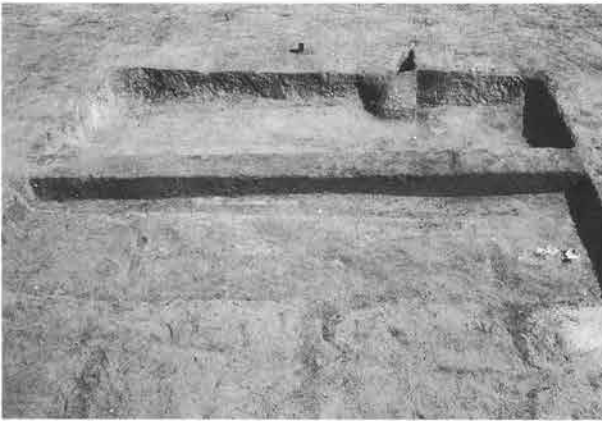


D区7号住居跡出土遺物近接





D区8号住居跡全景



D区8号住居跡セクション



D区8号住居跡竈



D区9号住居跡セクション



D区9号住居跡出土遺物近接



D区9号住居跡全景



D区10号住居跡全景



D区10号住居跡セクション



D区10号住居跡竈全景



D区11号住居跡全景



D区11号住居跡遺物出土状況



D区11号住居跡竈セクション



P L42 萩原遺跡



D区11号住居跡出土遺物近接



D区11号住居跡竈全景



A区5号住居跡全景



A区5号住居跡セクション



A区5号住居跡遺物出土状況



A区5号住居跡竈セクション



A区5号住居跡掘り方全景



A区8号住居跡全景（西から）



A区8号住居跡掘り方全景



A区9号住居跡竈遺物出土状況

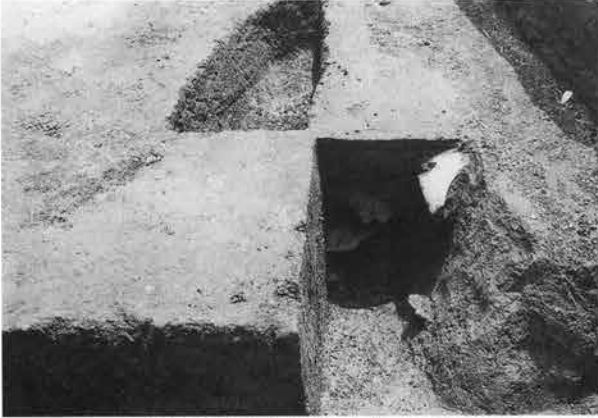




A区9号住居跡全景



A区17号住居跡全景



A区17号住居跡竈セクション



A区17号住居跡竈全景



A区17号住居跡床下土坑セクション



A区17号住居跡掘り方全景 (西から)



A区18号住居跡全景 (西から)



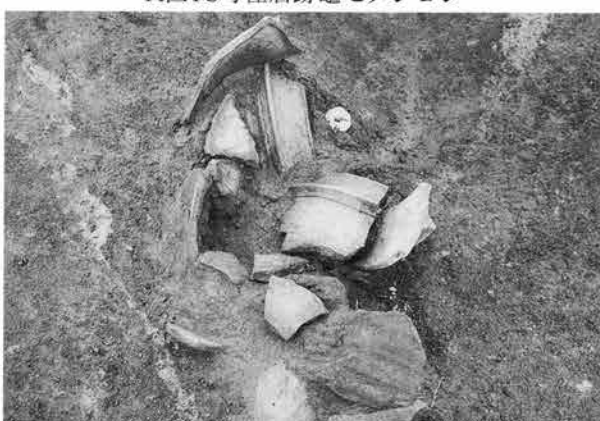
A区18号住居跡竈セクション



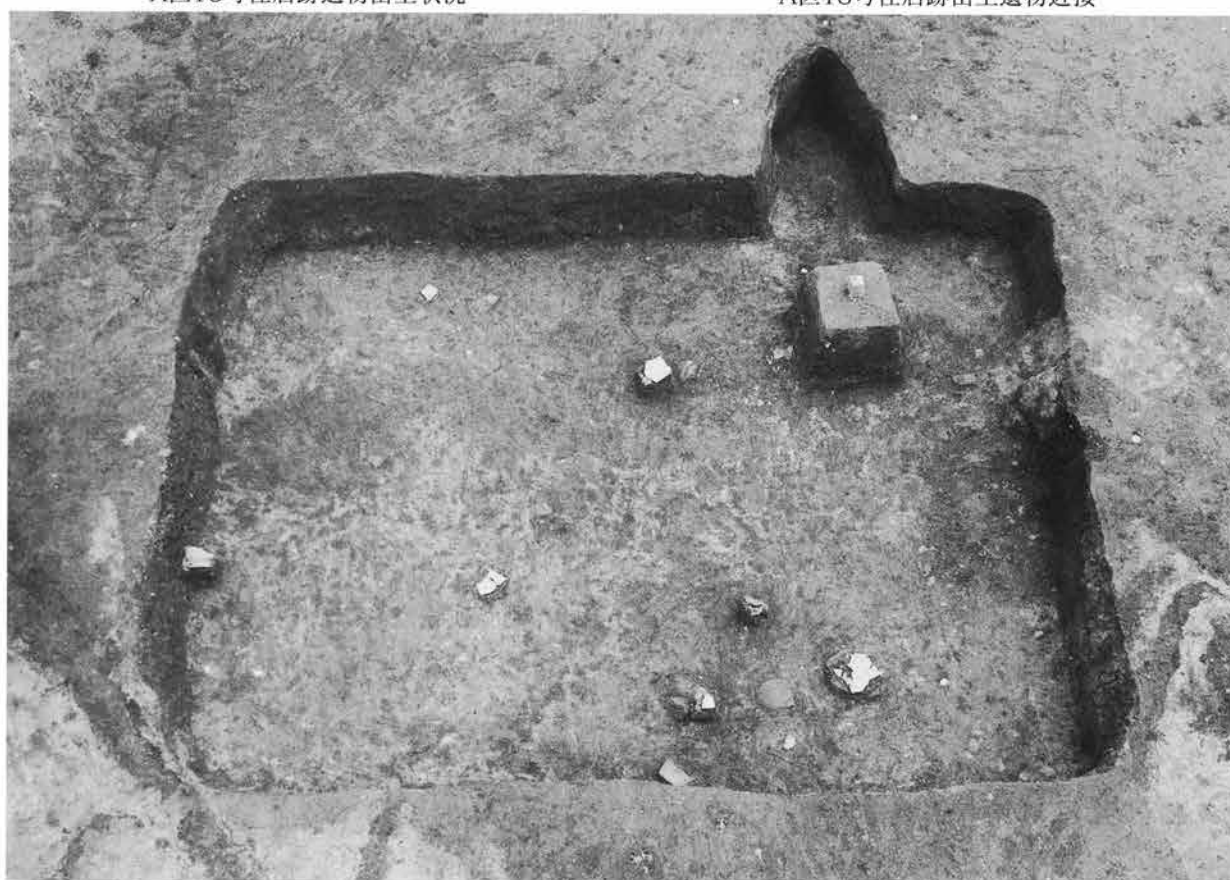
A区18号住居跡竈セクション



A区18号住居跡遺物出土状況



A区18号住居跡出土遺物近接



A区20号住居跡全景





A区20号住居跡セクション



A区20号住居跡遺物出土状況



A区20号住居跡出土遺物近接



A区20号住居跡竈全景



A区21号住居跡全景（西から）

PL48 萩原遺跡



A区21号住居跡竈全景



A区21号住居跡セクション



A区21号住居跡掘り方全景



A区21号住居跡竈



A区23号住居跡全景





A区23号住居跡遺物出土状況



A区23号住居跡竈セクション



A区23号住居跡竈セクション



A区23号住居跡竈全景



A区31号住居跡全景

PL50 萩原遺跡



A区31号住居跡出土遺物近接



A区31号住居跡出土遺物近接



A区39号住居跡全景



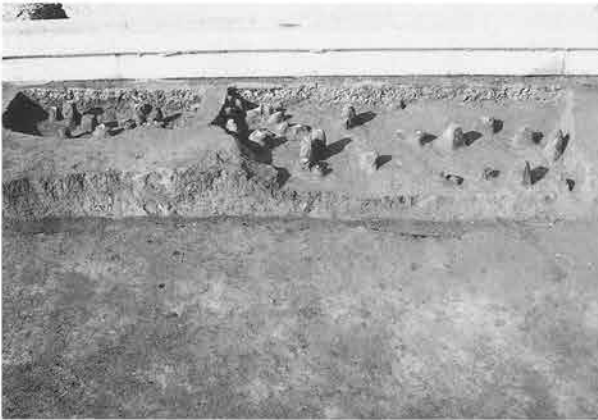
A区39号住居跡セクション



A区39号住居跡竈全景



B区3号住居跡全景（西から）



B区3号住居跡遺物出土状況



B区3号住居跡出土遺物近接



B区3号住居跡出土遺物近接



A区38号住居跡掘り方全景



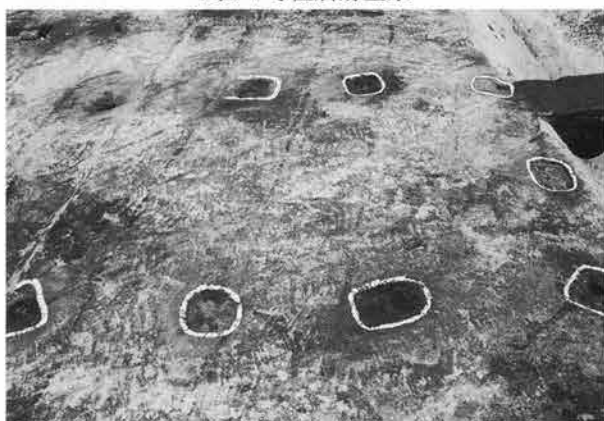
P L52 萩原遺跡



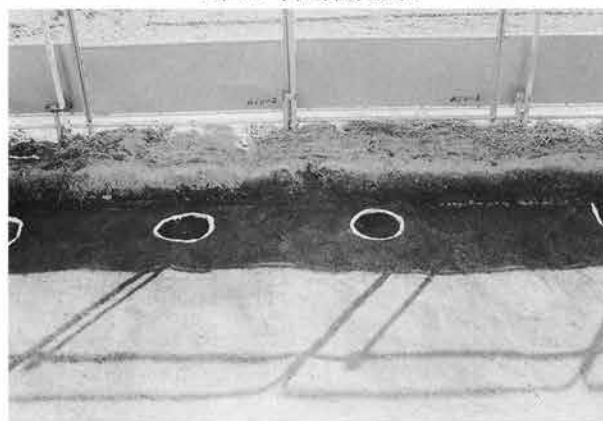
B区4号住居跡全景



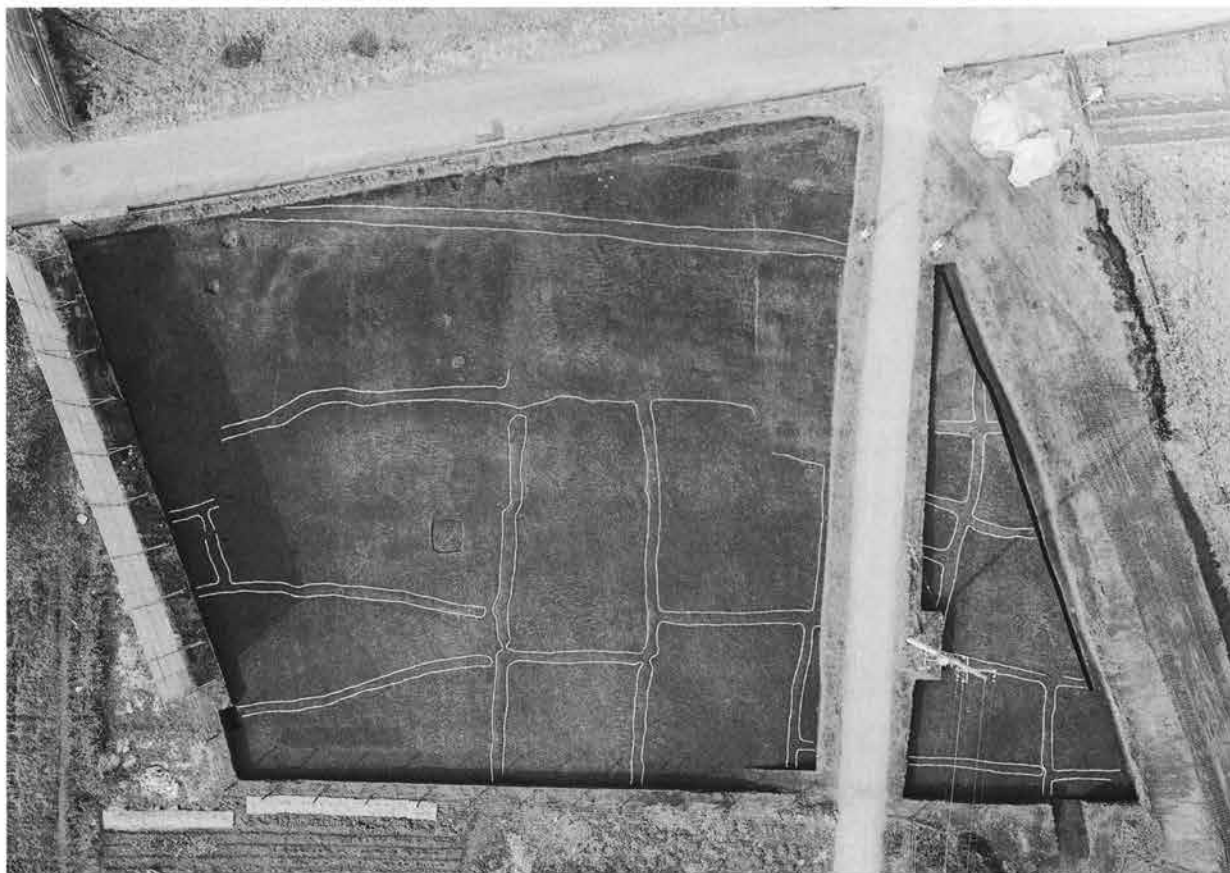
E区1号住居跡全景



E区1号掘立柱建物全景



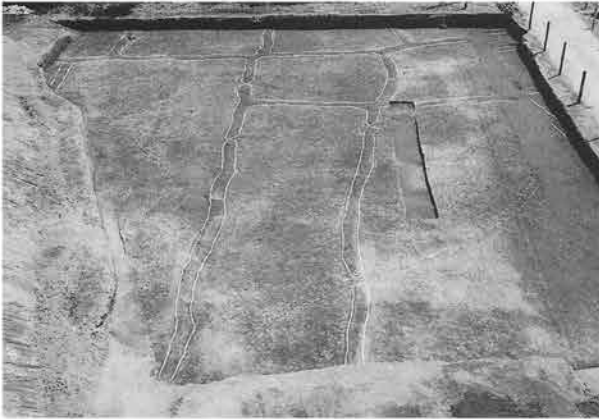
E区2号掘立柱建物全景



B-2区As-B下水田全景 (東から)



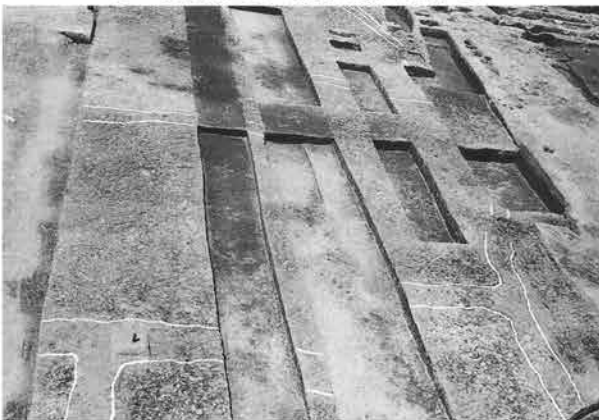
B-3・4区As-B下水田全景（北から）



B-3区As-B下水田全景（西から）



B-4区As-B下水田全景（北から）



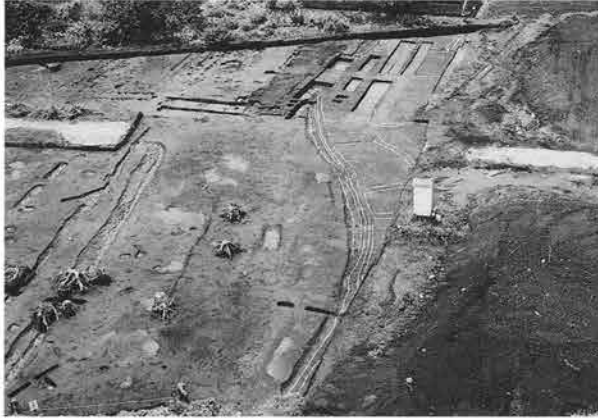
B-4区As-B下水田全景（南から）



B-5・6区As-B下水田全景（西から）



P L54 萩原遺跡



B-5・6区As-B下水田全景（北から）



As-B下水田畦畔



As-B下水田水口



As-B下水田水口



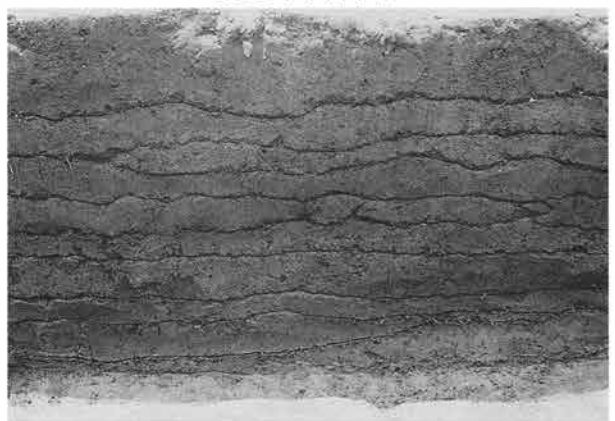
As-B下水田水口



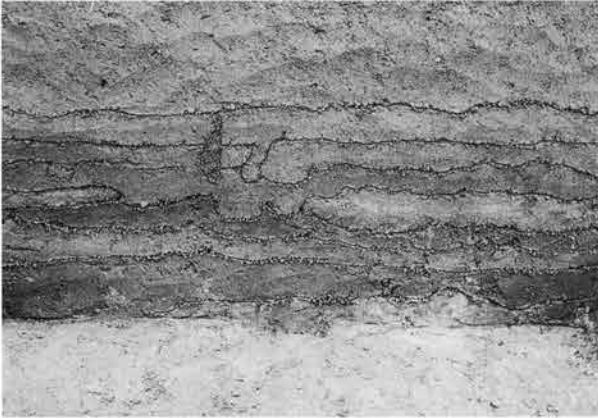
As-B下水田水口



B-3区南壁セクション（全体）



B-3区南壁セクション（部分）



B-3区東壁セクション



B-3区第1面畑サク跡確認状況



B-3区第1面畑サク跡全景 (西から)



B-4区第1面畑サク跡全景



C区D区境現道下掘削工事作業風景 (谷)



D区1号溝全景



B区1号溝 (左) 5号溝 (右) 全景 (北から)

P L56 萩原遺跡



D区2号溝全景



D区3号溝全景



D区5号溝全景



D区6号溝全景



D区7号溝全景



E区1号溝全景



E区1号溝セクション



E区3号溝全景





E区2号溝全景



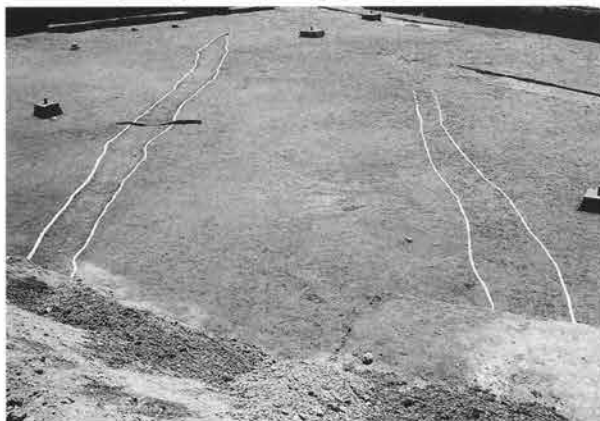
E区6号溝全景



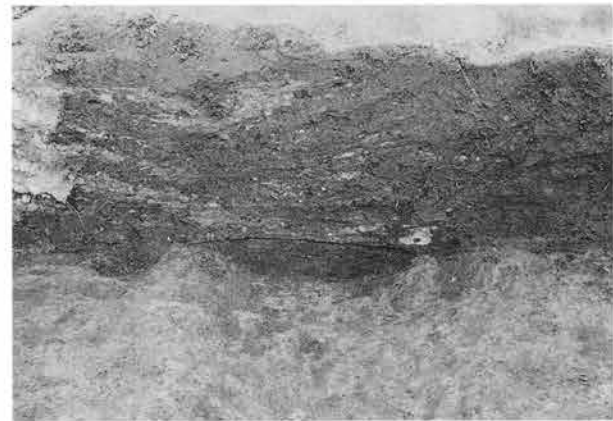
B区2号、3号、4号溝全景 (北から)



B区2号、3号溝セクション



B区6号、7号溝全景 (北西から)



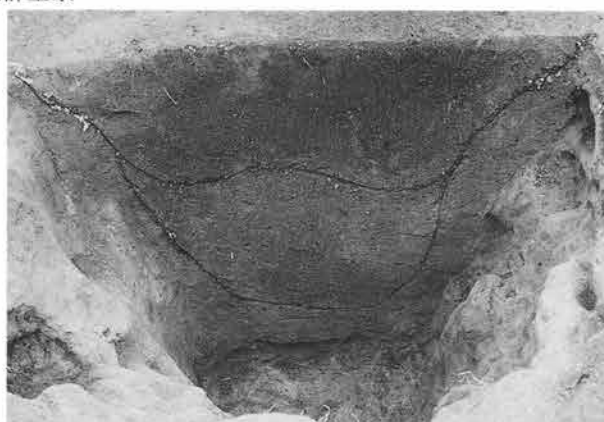
E区4号溝セクション



D区土坑群全景



A区3号土坑全景



A区4号土坑セクション



C区1号土坑セクション



D区5号土坑全景





A区2号土坑遺物出土状況



A区8号土坑全景



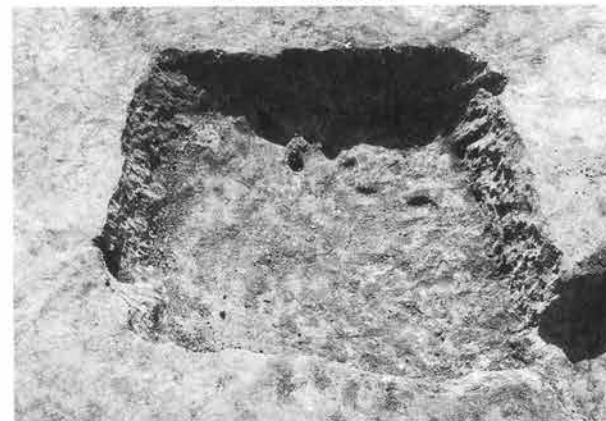
A区10号土坑遺物出土状況



A区10号土坑全景



A区14号土坑全景（西から）



A区16号土坑全景（北から）



A区17号土坑全景（西から）

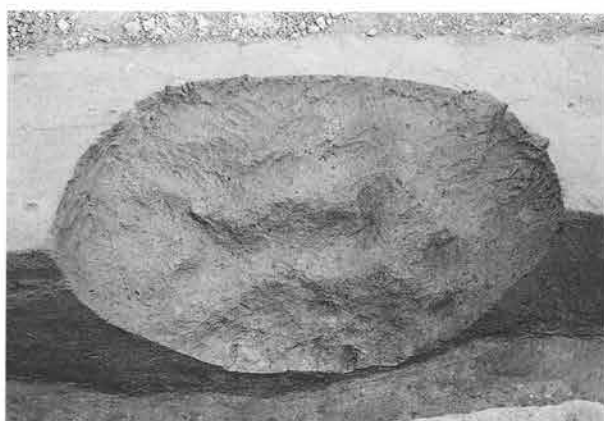


A区17号土坑出土遺物近接

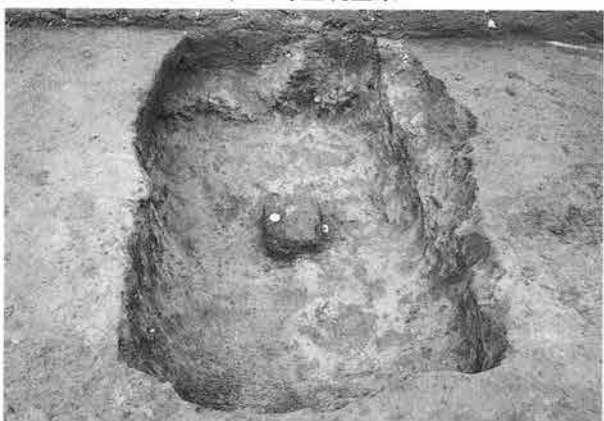
P L60 萩原遺跡



B区6号土坑全景



B区8号土坑全景



D区6号土坑遺物出土狀況



D区6号土坑出土遺物近接



D区55号土坑全景



B-5区1号土坑全景



B-5区2号土坑遺物出土狀況



D区8号土坑全景



D区8号土坑出土遺物近接



D区11号土坑遺物出土状況 (東から)



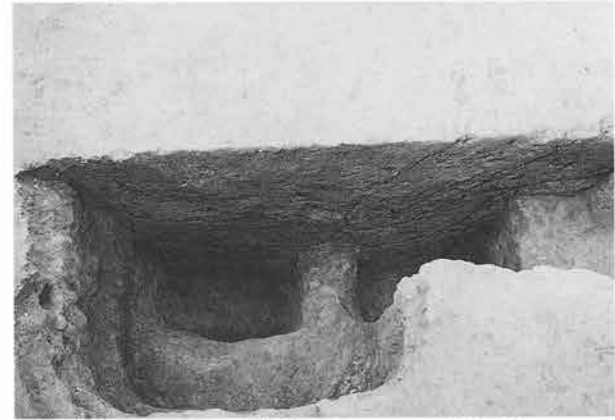
D区11号土坑出土遺物近接



D区17、18、19号土坑全景



D区17号土坑出土遺物近接



D区17、18号土坑セクション (南から)



D区22号土坑遺物出土状況 (北から)



D区22号土坑出土遺物近接





D区23号土坑セクション (南から)



D区23号土坑出土遺物近接



D区26、27号土坑全景 (南から)



D区31号土坑遺物出土状況



D区33号土坑遺物出土状況



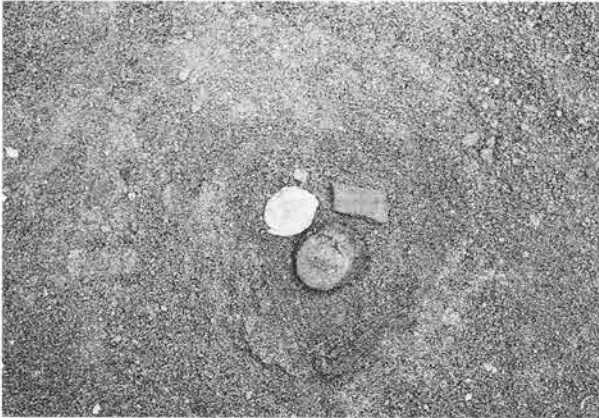
D区33号土坑遺物出土状況



D区35号土坑セクション (南から)



D区37号土坑遺物出土状況 (西から)



D区37号土坑出土遺物近接



D区38号土坑全景



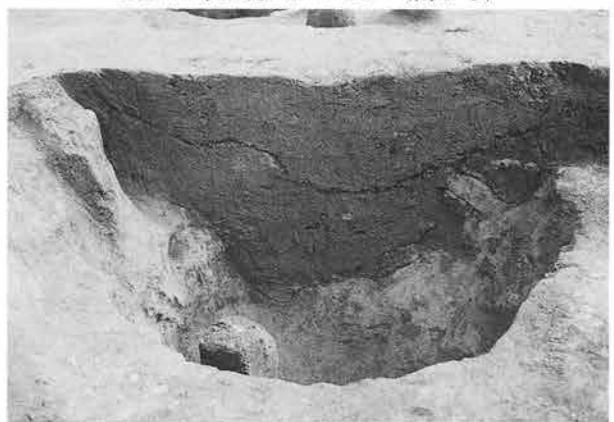
D区38号土坑出土遺物近接



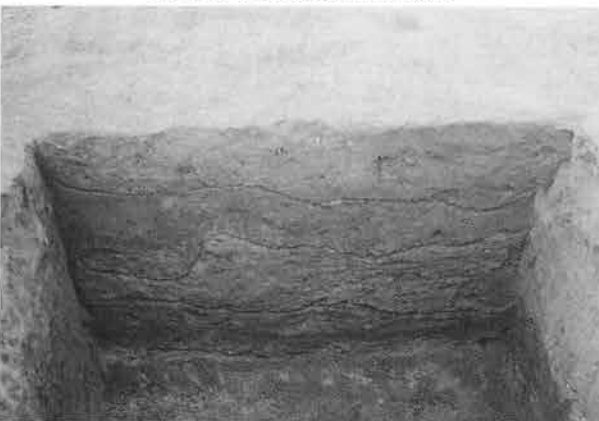
D区42号土坑セクション (南から)



D区43号土坑遺物出土状況



D区44号土坑セクション (北から)



D区52号土坑セクション (南から)



D区53号土坑セクション (南から)





D区57号土坑セクション (南から)



D区58号土坑全景 (西から)



D区58号土坑出土遺物近接



D区59号土坑遺物出土状況



D区59号土坑出土遺物近接



A区7号土坑全景 (南から)



B-2区1号土坑全景



B-2区2号土坑全景



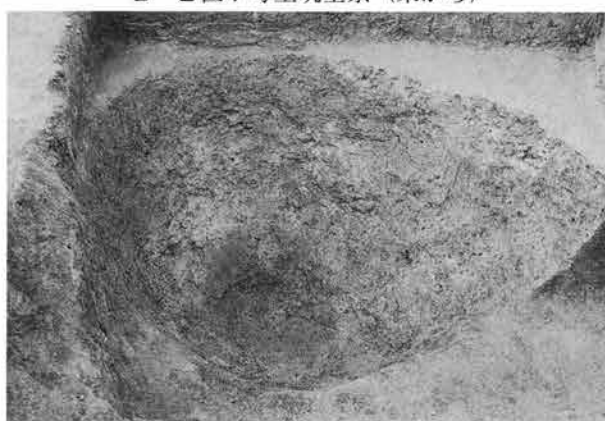
B-2区3号土坑全景



B-2区7号土坑全景 (東から)



B-2区9号土坑全景 (東から)



B-2区10号土坑全景 (南から)



B-5区3号土坑遺物出土状況 (西から)



B-5区4、5号土坑全景 (西から)



B-5区6号土坑全景 (西から)

PL66 萩原遺跡



B-5区6号土坑セクション (西から)



B-5区11号土坑全景 (南から)



B-5区12号土坑全景 (南から)



B-6区1号土坑遺物出土状況



B-6区2号土坑全景 (南から)



B-6区3号土坑全景 (南から)



B-6区4号土坑全景 (南から)



B-6区5号土坑全景 (南から)

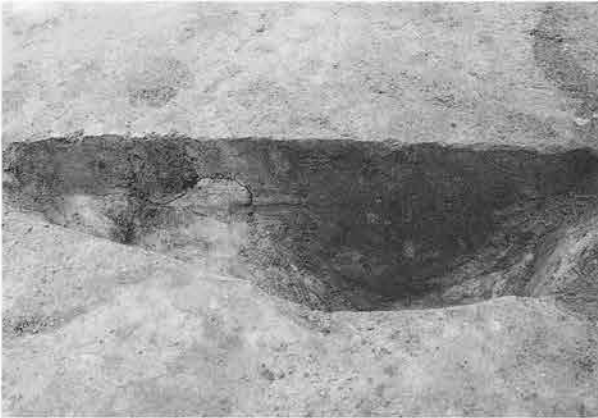




B-6区6号土坑全景 (南東から)



B-6区7号土坑セクション



B-6区8号土坑セクション (東から)



D区1号土坑セクション



D区2号土坑全景



D区3号土坑全景 (南から)

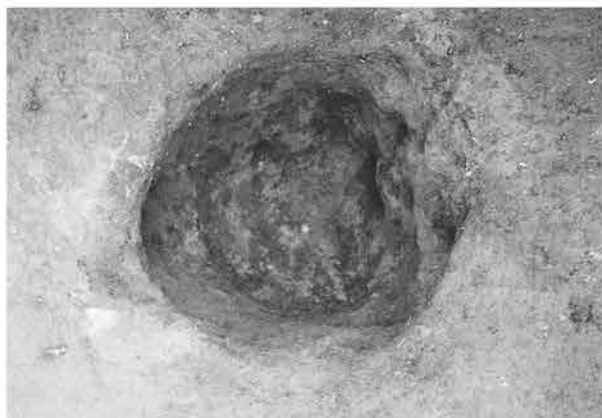


D区4号土坑全景 (南から)



D区7号土坑セクション (西から)

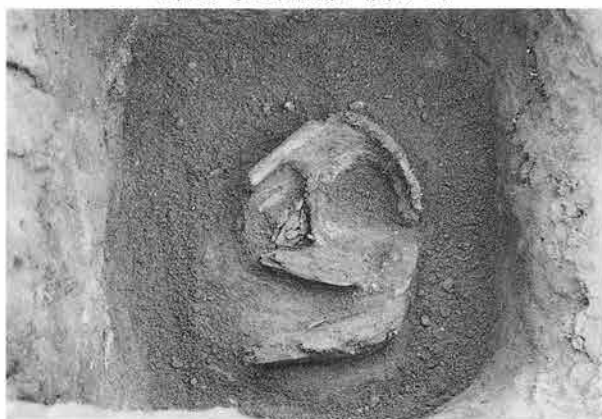




D区9号土坑全景 (西から)



D区10号土坑遺物出土状況



D区10号土坑出土遺物近接



D区12号土坑セクション (南から)



D区12号土坑全景 (南から)



D区14号土坑全景 (南から)



D区16号土坑全景 (東から)



D区19号土坑セクション (南から)



D区20号土坑セクション (南から)



D区20号土坑遺物出土状況 (南から)



D区21号土坑全景 (南から)



D区24号土坑全景 (南から)



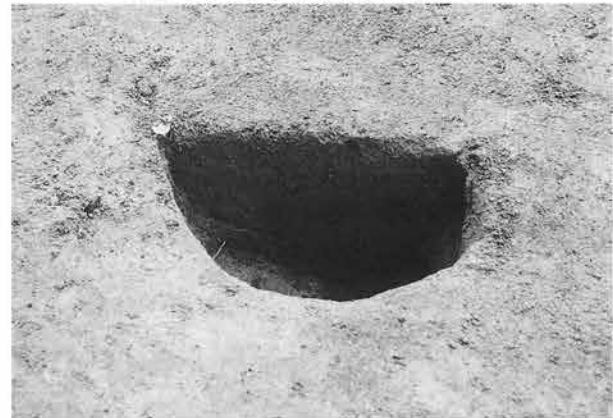
D区25号土坑セクション



D区28、29号土坑全景 (南から)



D区32号土坑遺物出土状況



D区36号土坑セクション (西から)

P L70 萩原遺跡



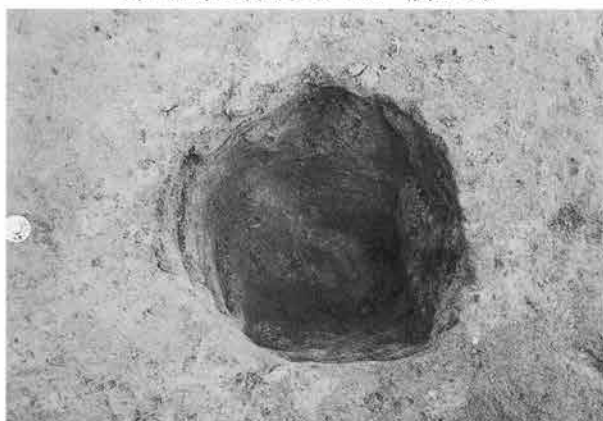
D区39号土坑全景 (西から)



D区45号土坑セクション (南から)



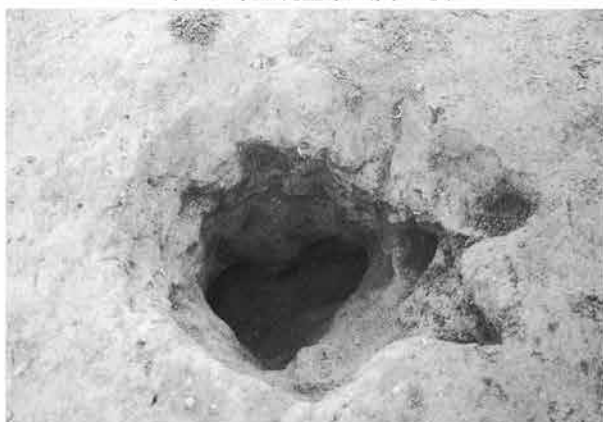
D区46号土坑全景 (西から)



D区47号土坑全景 (西から)



D区48号土坑全景 (西から)



D区49号土坑全景 (南から)



D区50号土坑全景



D区51号土坑全景 (南から)





D区54号土坑全景 (東から)



D区56号土坑全景 (西から)



E区1号土坑全景



E区5号土坑全景



E区2、3、4号土坑全景



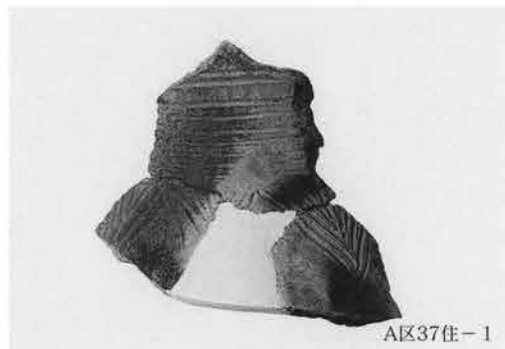
D区1号井戸全景 (南から)



E区1号井戸セクション



PL72 萩原遺跡





A区13住-7



A区13住-8



A区13住-9



A区13住-11



A区13住-10



A区13住-12



A区13住-13



A区13住-14



A区14住-1



A区14住-2



A区14住-3



A区25住-1



D区1住-1



D区1住-2



A区25住-2



D区1住-3

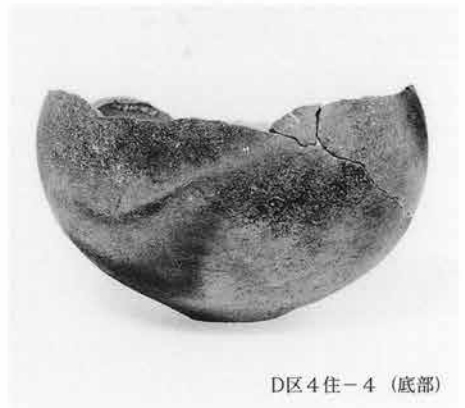
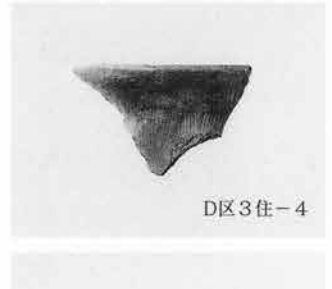


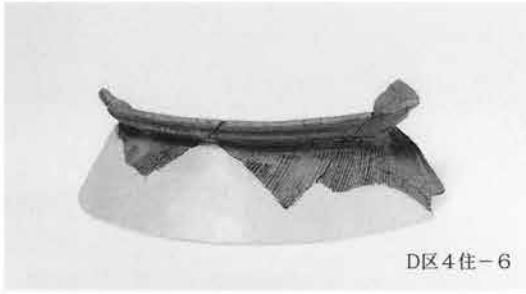
D区1住-4



D区1住-5

P L74 萩原遺跡





D区4住-6



D区4住-9 (口縁部)



D区4住-7



D区4住-9 (底部)



D区4住-8



D区5住-3



D区5住-1



D区5住-2



PL76 萩原遺跡



D区12住-1



D区12住-2 (口縁部)



D区12住-3



D区12住-4



D区12住-2 (底部)



D区13住-1



D区13住-2



D区13住-4



D区13住-3 (口縁部)



D区13住-3 (底部)



D区13住-5



PL78 萩原遺跡



A区1住-11



A区1住-12



A区1住-17



A区1住-13



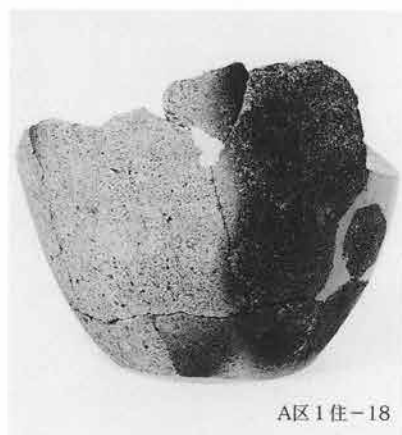
A区1住-14



A区1住-15



A区1住-16



A区1住-18



A区2住-1



A区2住-2



A区2住-3



A区2住-4



A区2住-5



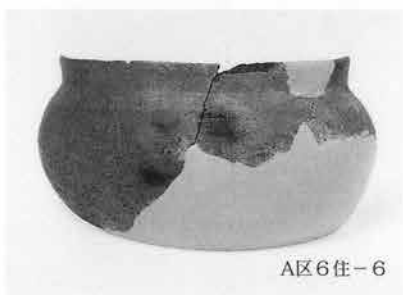
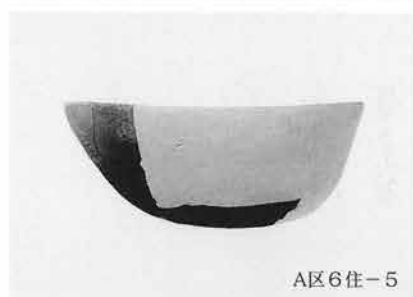
A区2住-6



A区2住-7



A区2住-8





P L80 萩原遺跡



A区6住-15



A区6住-16



A区6住-17



A区6住-18



A区6住-19



A区6住-21



A区6住-22



A区6住-20



A区6住-23



A区6住-24



A区6住-26



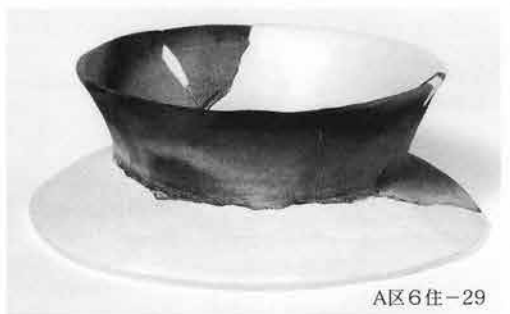
A区6住-27



A区6住-30



A区6住-31



A区6住-29



A区6住-34



A区6住-33



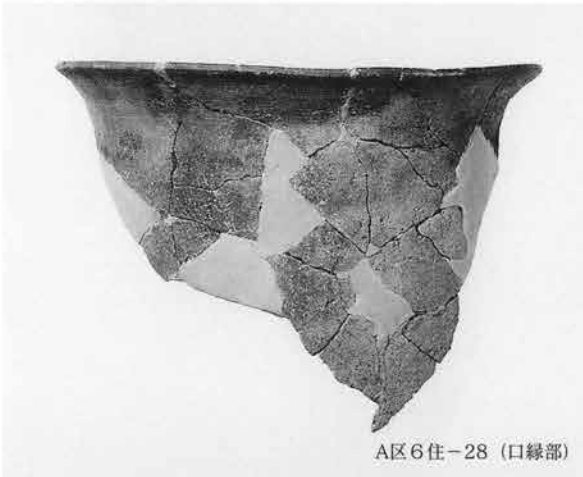
A区6住-35



A区6住-36



A区6住-37



A区6住-28 (口縁部)



A区6住-38



A区6住-28 (底部)



A区6住-39



A区6住-40

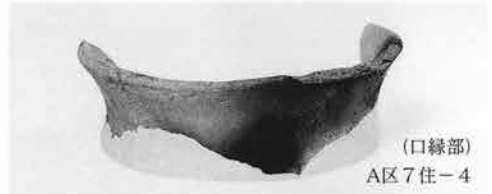
PL82 萩原遺跡



A区7住-1



A区7住-2



(口縁部)  
A区7住-4



A区7住-3



A区7住-4 (底部)



A区7住-6



A区7住-5



A区29住-1



A区29住-2



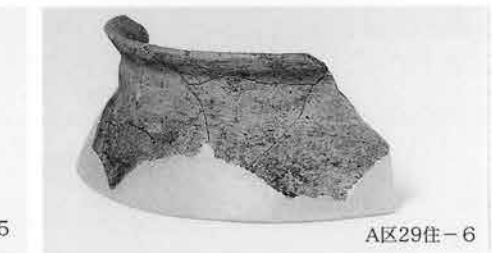
A区29住-3



A区29住-4



A区29住-5



A区29住-6



A区29住-7



A区29住-8



A区32住-1



A区32住-2



A区32住-3



A区32住-4



A区32住-5



A区32住-6



A区32住-7



A区32住-8



A区32住-9



A区32住-10



A区32住-11



A区32住-12



PL84 萩原遺跡



A区32住-13



A区32住-14



A区32住-15



A区32住-16



A区32住-17



A区32住-18



A区32住-19



A区32住-20



A区32住-21



A区32住-22



A区32住-23



A区32住-24



A区32住-25



A区32住-26



A区32住-27



A区32住-28



A区32住-29



A区32住-30



A区32住-31



A区32住-32



A区32住-33



A区32住-34



A区32住-35



A区32住-36



A区32住-37



A区32住-39



A区32住-38



A区32住-40



A区32住-41



A区32住-42

P L86 萩原遺跡



A区32住-43



A区32住-49



A区32住-44



A区32住-50



A区32住-47



A区32住-48



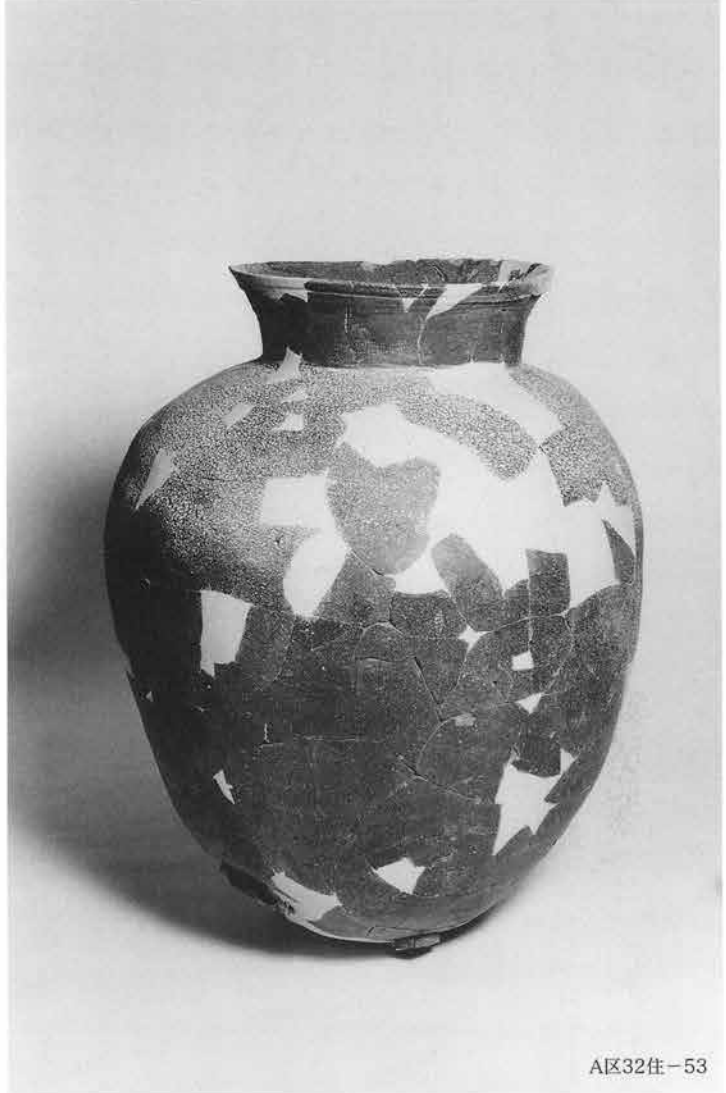
A区32住-45



A区32住-46



A区32住-52



A区32住-53



A区32住-54



P L88 萩原遺跡



A区32住-51



A区32住-55



A区32住-56



A区35住-1



A区34住-1



A区34住-2



A区35住-2



A区35住-3



A区35住-4



A区35住-5



A区35住-6



A区35住-7



A区35住-8



A区35住-9



A区35住-10



A区35住-11



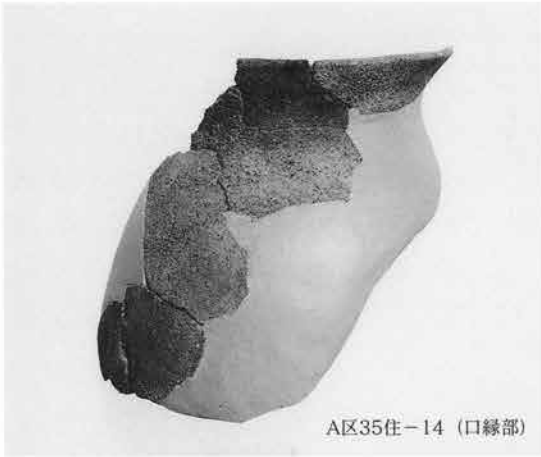
A区35住-12



A区35住-13



A区35住-15



A区35住-14 (口縁部)



A区36住-1



A区36住-2



A区35住-14 (底部)



A区10住-1



A区10住-2



A区10住-3



A区10住-5



A区12住-1



A区12住-2



A区10住-4



A区12住-3



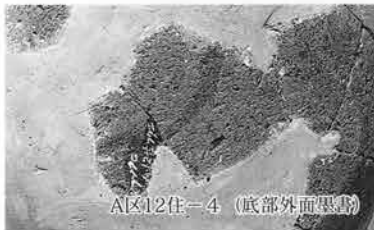
A区12住-4



A区12住-5



A区12住-8



A区12住-4 (底部外面黒書)

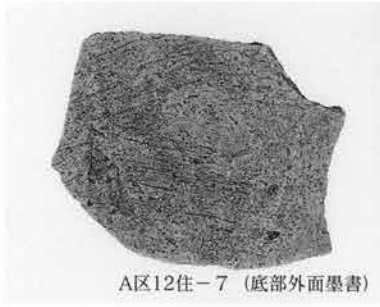


A区12住-9

P L90 萩原遺跡



A区12住-7 (底部内面墨書)



A区12住-7 (底部外面墨書)



A区12住-10



A区12住-6



A区12住-11



A区15住-1



A区15住-4



A区16住-1



A区15住-2



A区15住-3



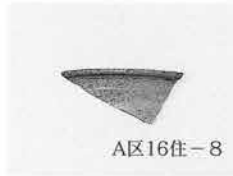
A区15住-5



A区16住-2



A区16住-6



A区16住-8



A区16住-9



A区16住-3



A区16住-7



A区16住-4



A区16住-12



A区16住-5



A区16住-10



A区16住-11



A区19住-1



A区19住-2



A区22住-1



A区22住-2



A区22住-3



A区22住-4



A区24住-1



A区24住-4



A区24住-5



A区24住-2



A区24住-3



A区27住-1



A区27住-2



A区26住-1



A区27住-3



A区27住-6



A区27住-4



A区27住-5



A区27住-9



A区27住-13



A区27住-7



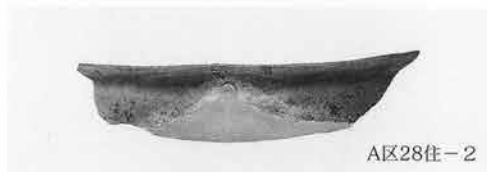
A区27住-8



A区27住-11



PL92 萩原遺跡





B区2住-1



B区2住-2



B区2住-3



B区2住-4



B区2住-5



B区2住-6



B区2住-7



B区2住-8



B区2住-9



B区2住-10



B区2住-11



B区2住-12



D区6住-1



D区6住-2



D区6住-3



D区6住-4



D区6住-5

P L94 萩原遺跡



D区6住-6



D区6住-7



D区6住-8



D区6住-9



D区6住-10



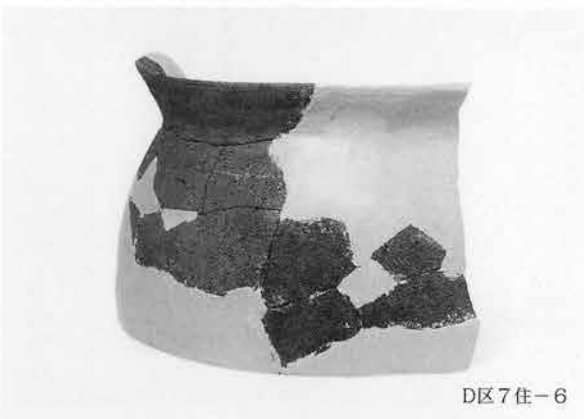
D区6住-11



D区7住-4



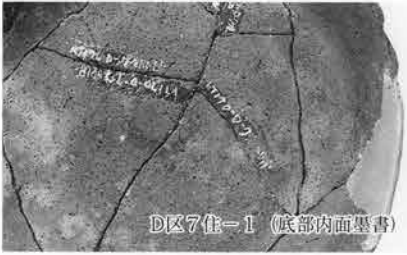
D区7住-3



D区7住-6



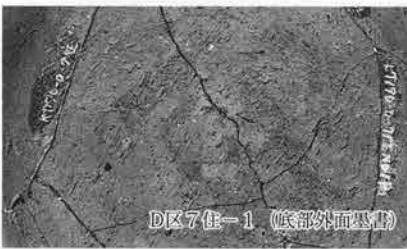
D区7住-5



D区7住-1 (底部内面墨書)



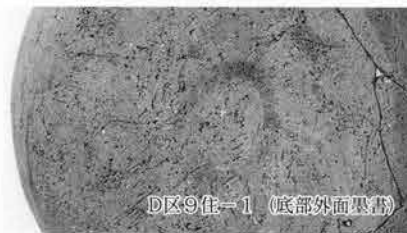
D区7住-1



D区7住-1 (底部外面墨書)



D区9住-1



D区9住-1 (底部外面墨書)



D区9住-6



D区9住-7



D区7住-2



D区7住-7



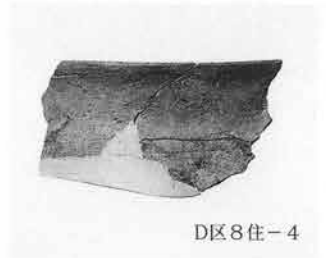
D区8住-1



D区8住-2



D区8住-3



D区8住-4



D区8住-5



D区9住-2



D区9住-8



D区9住-3



D区9住-9



D区9住-4

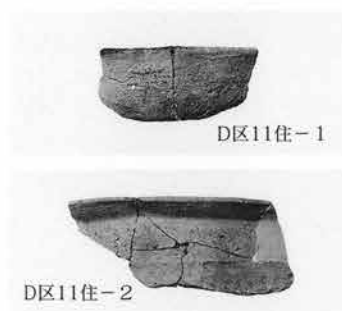


D区9住-5



D区9住-10

P L96 萩原遺跡







A区5住-8



A区5住-10



A区5住-11



A区9住-1



A区9住-3



A区8住-1



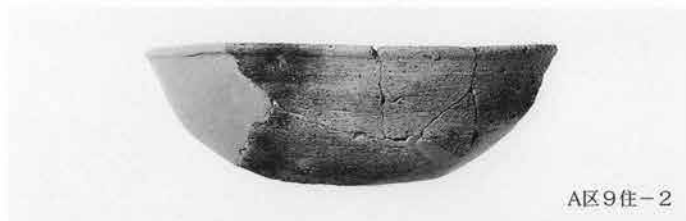
A区9住-4



A区9住-5



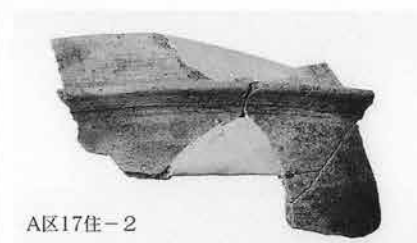
A区8住-2



A区9住-2



A区17住-1



A区17住-2



A区18住-1



A区17住-3



A区17住-4



A区18住-2 (口縁部)



A区18住-3



A区18住-4



A区18住-2 (底部)



A区18住-5

PL98 萩原遺跡



A区18住-7



A区18住-6



A区18住-8



A区20住-1



A区20住-2



A区20住-6



A区20住-4



A区20住-7



A区20住-5



A区20住-3



A区21住-1



A区21住-6



A区21住-2



A区21住-5



A区21住-3



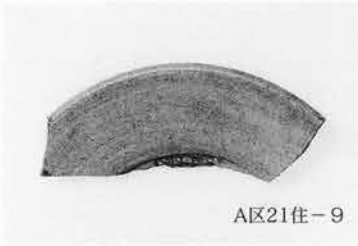
A区21住-4



A区21住-7



A区21住-8



A区21住-9



A区21住-12



A区21住-10



A区21住-11



A区23住-1



A区23住-2



A区23住-3



A区23住-6



A区23住-4



A区23住-5



A区31住-1



A区31住-2



A区39住-1



A区31住-3



A区31住-4



A区39住-2



A区39住-3



B区3住-2



A区39住-4



B区3住-1



B区3住-3



B区3住-4

PL100 萩原遺跡





E区1溝-5



E区1溝-6



E区1溝-7



E区2溝-1



E区2溝-5 表



E区2溝-5 側面



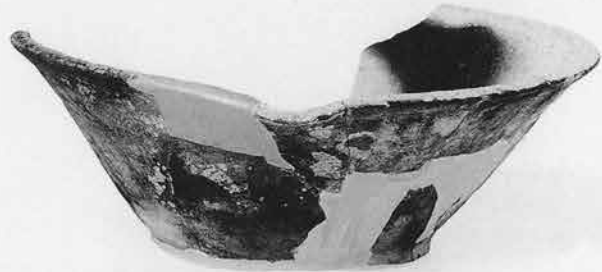
E区2溝-5 裏



E区2溝-2



E区2溝-3



E区2溝-4



E区6溝-1



E区6溝-2



B区2溝-1



PL102 萩原遺跡



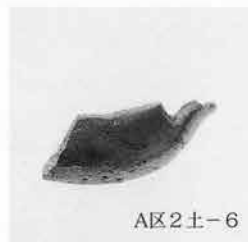
CK1±-1



AK2±-1



AK2±-2



AK2±-6



AK8±-1



AK2±-4



AK2±-5



AK8±-2



AK2±-3



AK2±-7



AK10±-3



AK10±-4



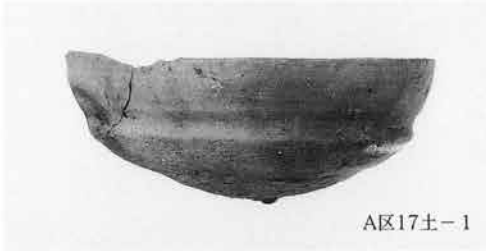
A区10土-1



A区10土-2



A区14土-1



A区17土-1



A区17土-2



A区17土-3



A区17土-4



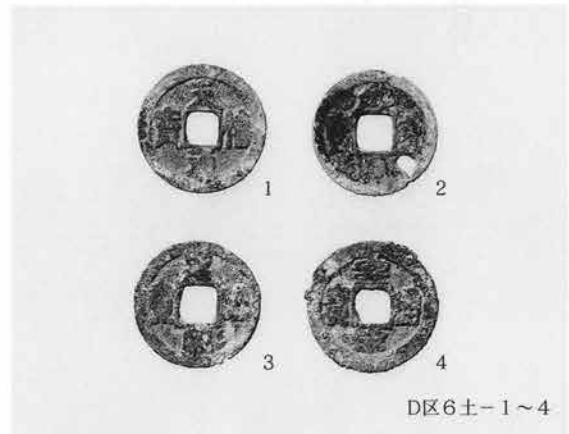
A区17土-5



A区17土-6



A区17土-9



D区6土-1~4



B-2区8土-1

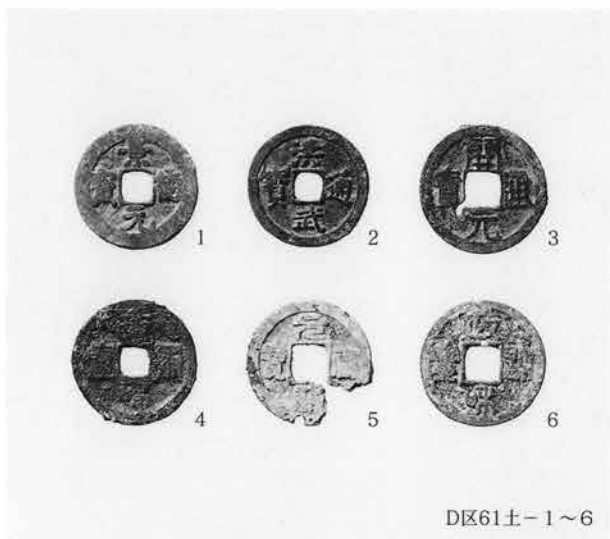


D区60土-1



D区62土-1

P L104 萩原遺跡



D区61土-1~6



B-5区2土-1

B-5区2土-2



B-5区2土-3

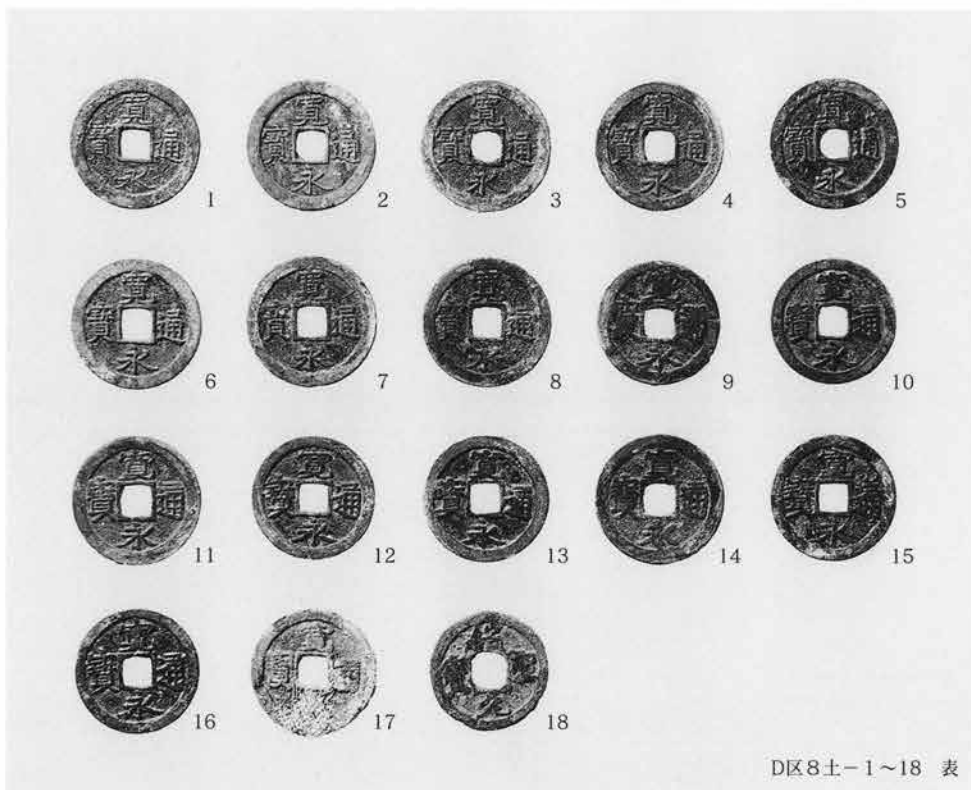
B-5区2土-4



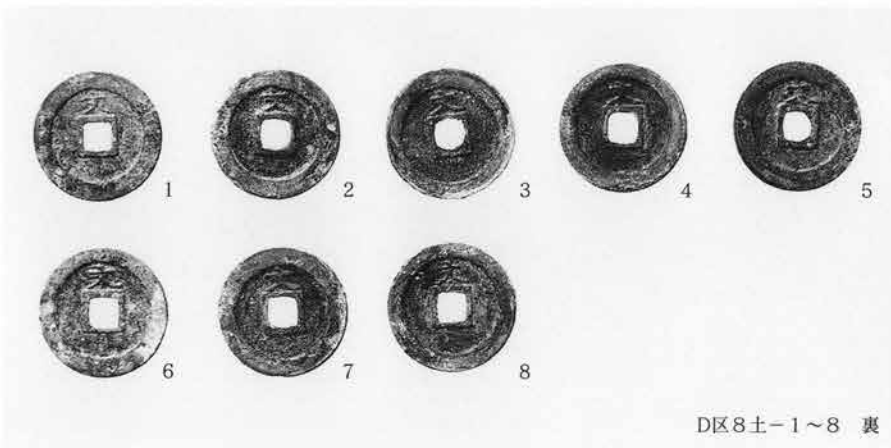
D区8土-古銭凝着 表



D区8土-古銭凝着 裏



D区8土-1~18 表



D区8土-1~8 裏



D区11土-1



D区18土-1



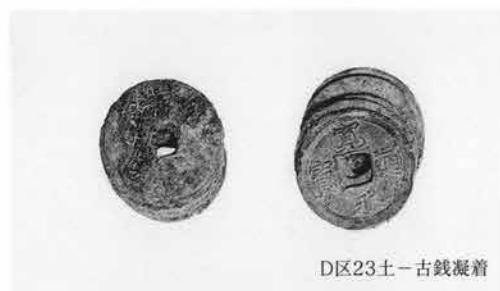
D区17土-1



D区22土-1



D区22土-2



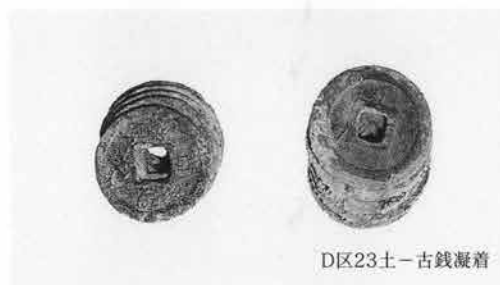
D区23土-古銭凝着



D区23土-古銭凝着



D区22土-3



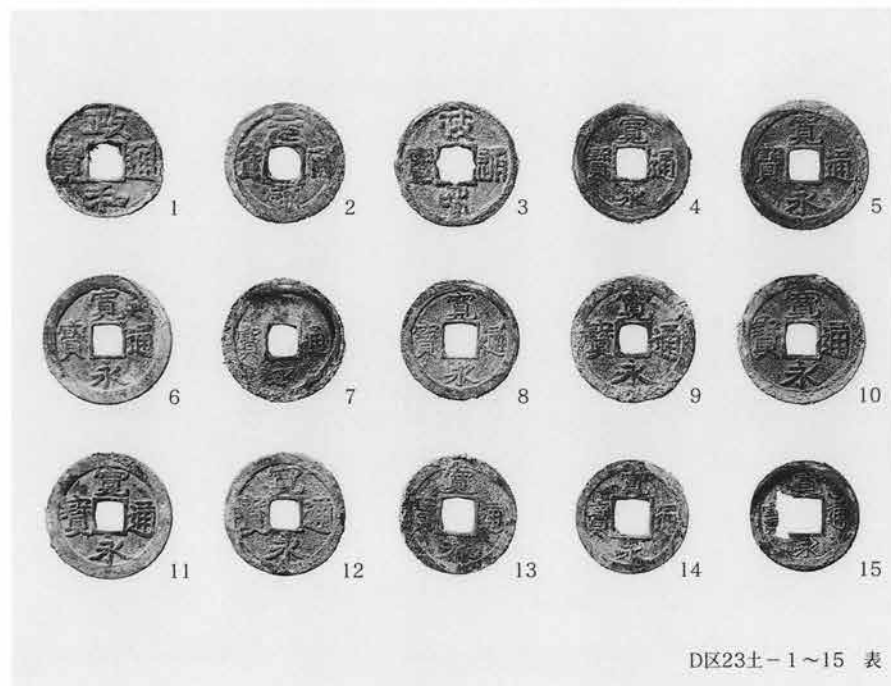
D区23土-古銭凝着



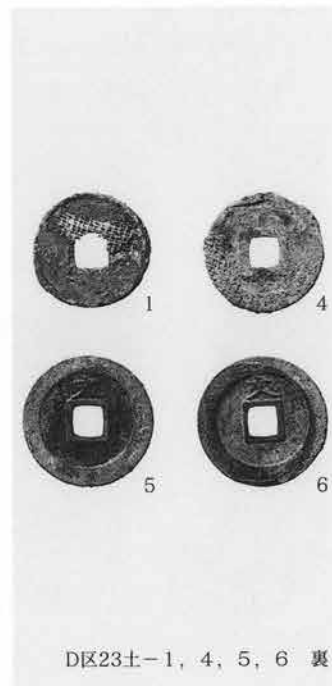
D区23土-古銭凝着



D区23土-16



D区23土-1~15 表

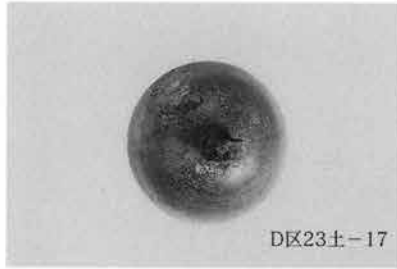


D区23土-1, 4, 5, 6 裏

P L 106 萩原遺跡



D区23土-17



D区23土-17



D区23土-18 表



D区23土-19 表



D区23土-20 表



D区23土-18 裏



D区23土-19 裏



D区23土-20 裏



D区23土-21 表



D区23土-22 表



D区23土-23 表



D区23土-21 裏



D区23土-22 裏



D区23土-23 裏



D区23土-24 表



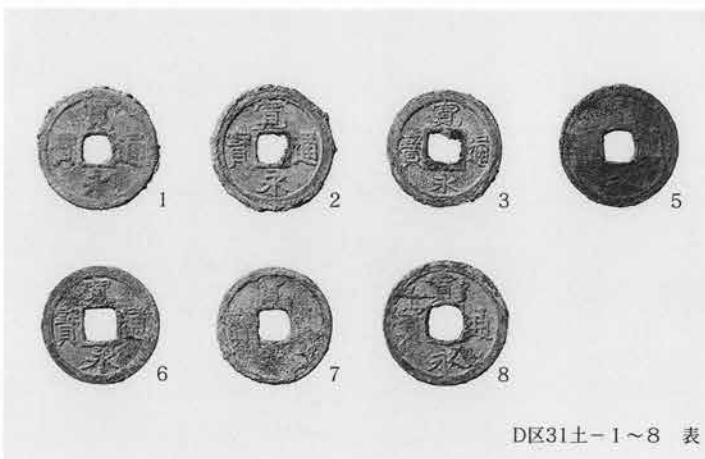
D区23土-24 裏



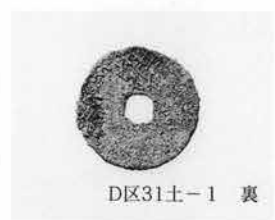
D区31土-古銭凝着 側面



D区31土-古銭凝着



D区31土-1~8 表



D区31土-1 裏



D区27土-1

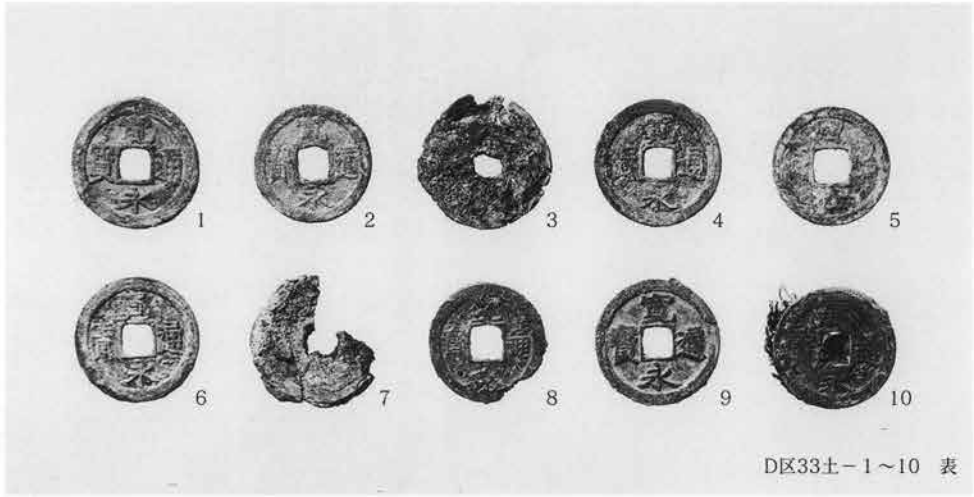




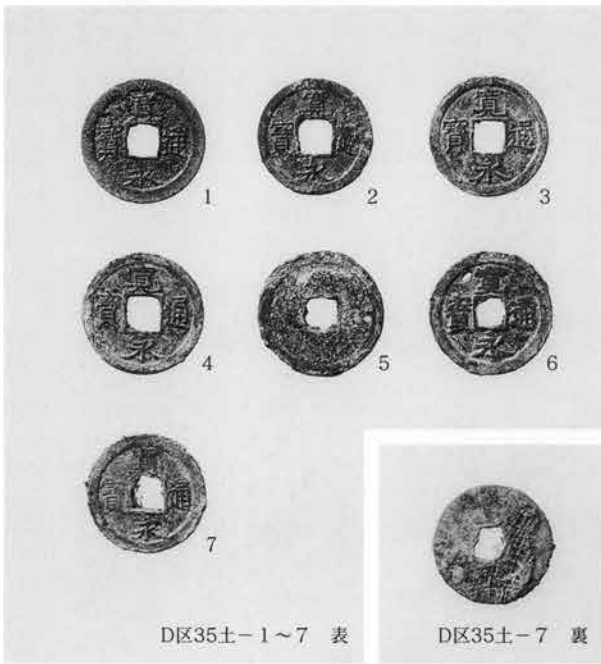
D区33土-古銭凝着



D区33土-古銭凝着



D区33土-1~10 表



D区35土-1~7 表

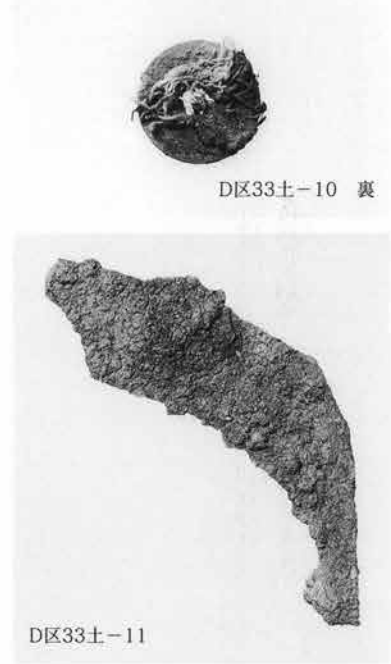


D区35土-7 裏



D区35土-古銭凝着

D区35土-古銭凝着



D区33土-10 裏

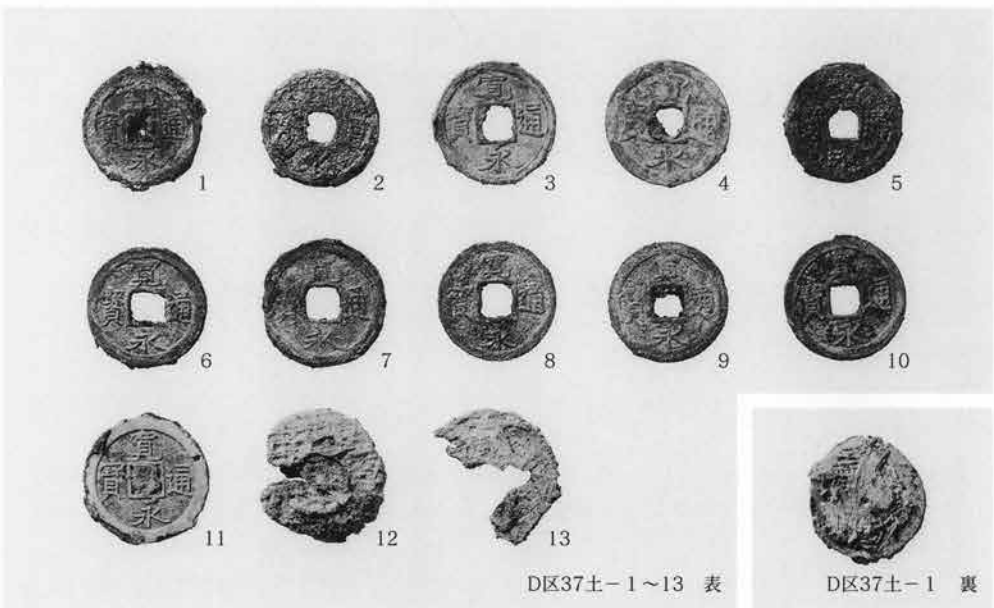
D区33土-11



D区37土-古銭凝着 側面



D区37土-古銭凝着

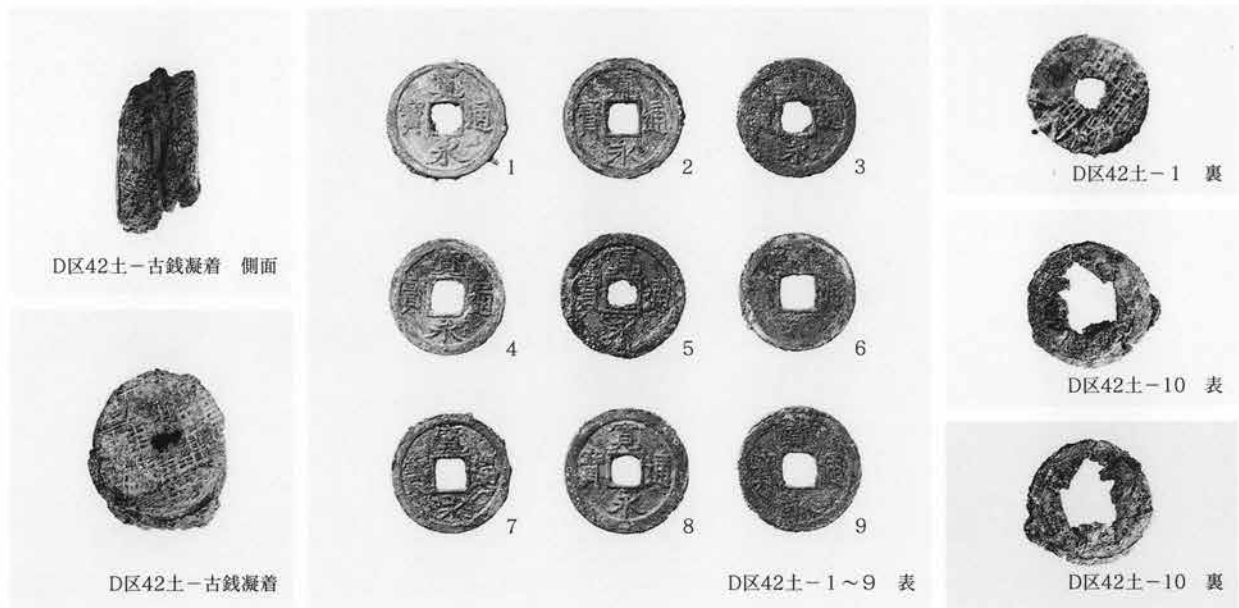
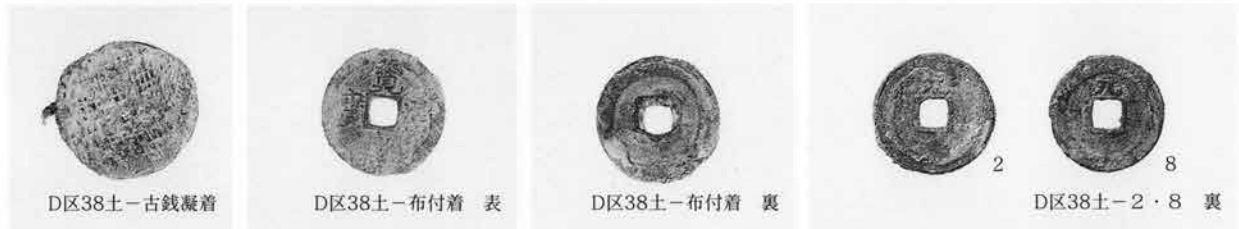
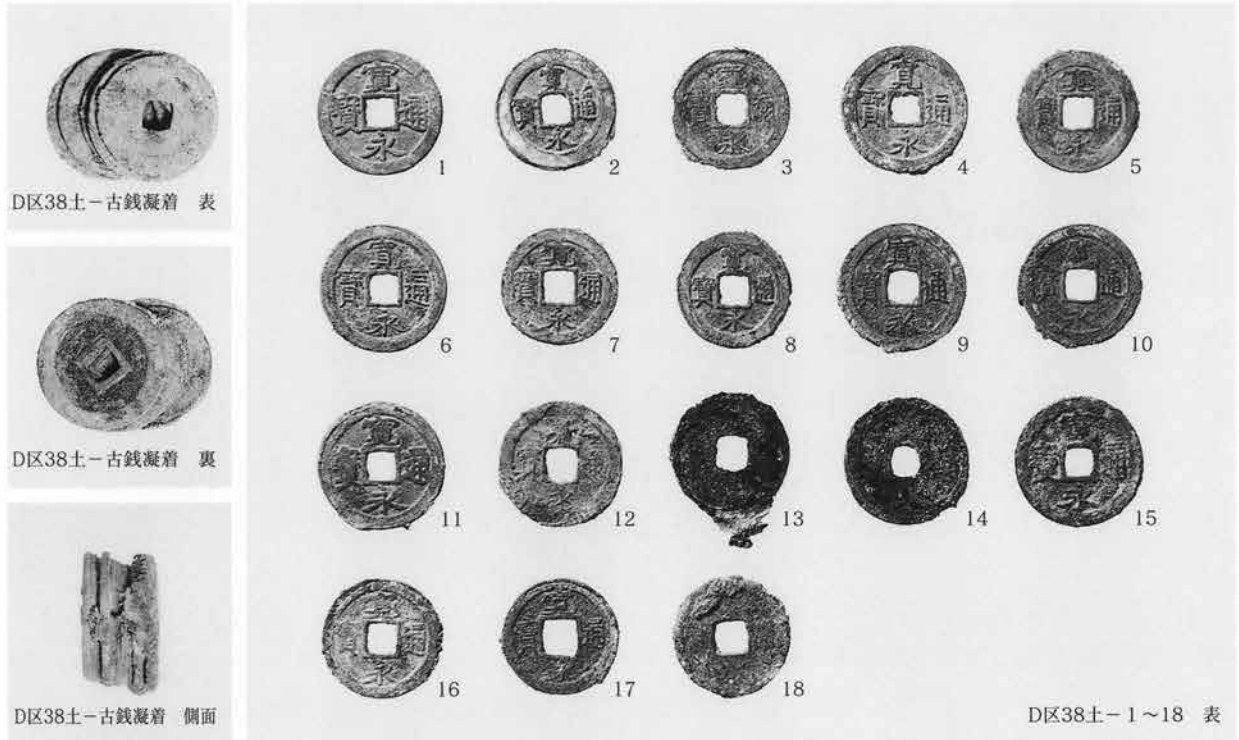


D区37土-1~13 表



D区37土-1 裏

P L108 萩原遺跡

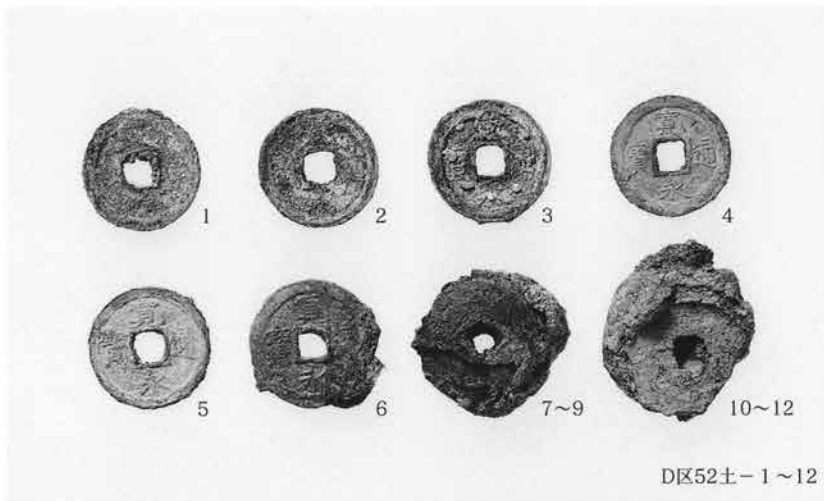




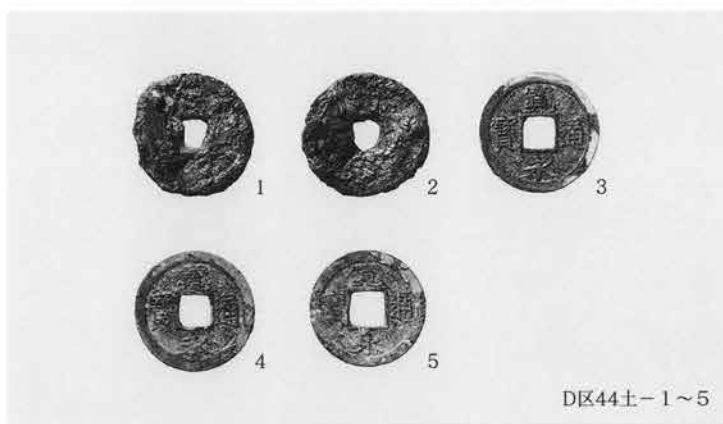
D区43土-1



D区43土-2



D区52土-1~12



D区44土-1~5



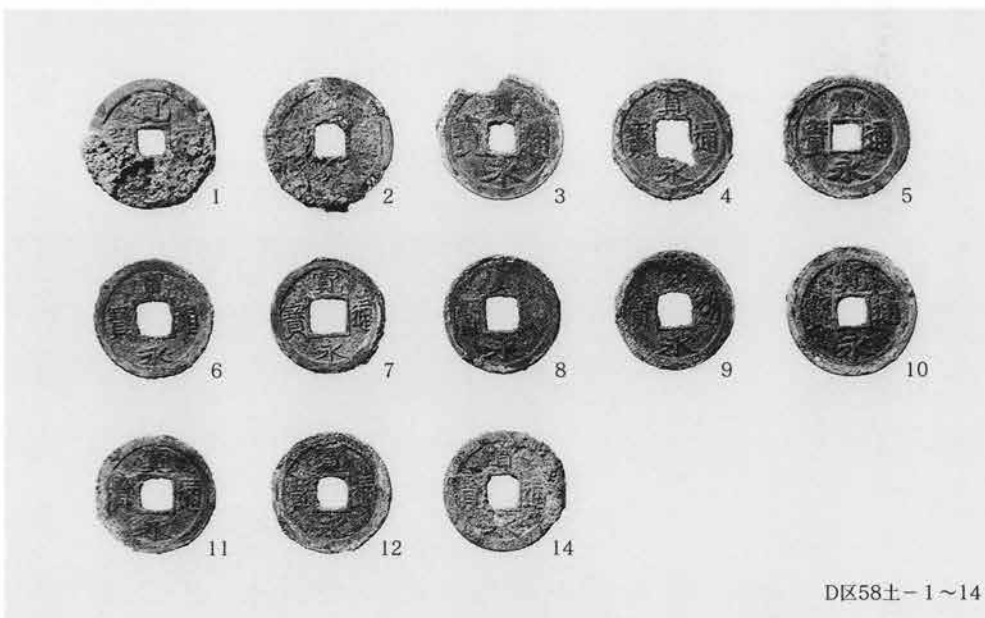
D区53土-1



D区58土-古銭凝着 側面



D区58土-古銭凝着 表



D区58土-1~14



D区57土-1



D区59土-1



D区59土-2

PL110 萩原遺跡



遺構外-1



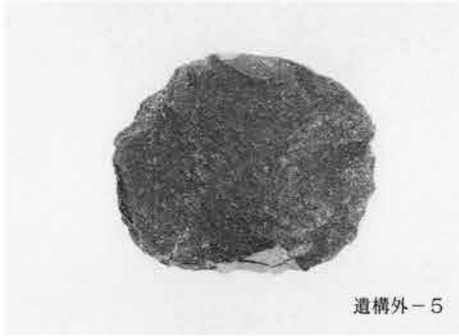
遺構外-2



遺構外-3



遺構外-4



遺構外-5



遺構外-6



遺構外-7



遺構外-8



遺構外-9



遺構外-10



遺構外-11



遺構外-12



遺構外-13



遺構外-14



遺構外-15



遺構外-16



遺構外-17



遺構外-18



遺構外-19



遺構外-20



遺構外-21



遺構外-22



遺構外-23



遺構外-24



遺構外-25



遺構外-26



遺構外-27



遺構外-28



遺構外-29



遺構外-30



遺構外-31



遺構外-32



遺構外-33



遺構外-34



遺構外-35



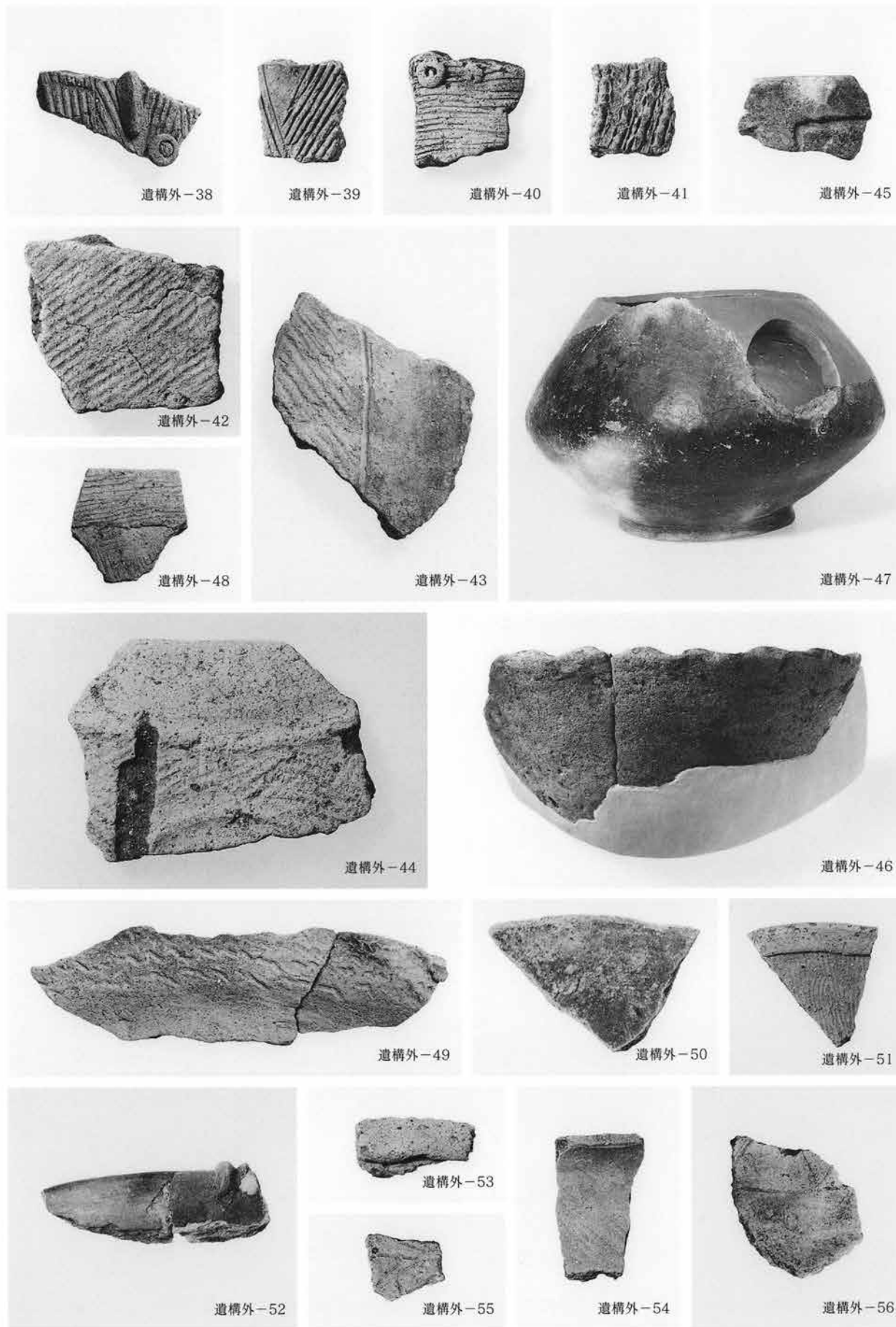
遺構外-36



遺構外-37



PL112 萩原遺跡





遺構外-57



遺構外-58



遺構外-59



遺構外-60



遺構外-61



遺構外-62



遺構外-63



遺構外-64



遺構外-65



遺構外-66



遺構外-67



遺構外-68



遺構外-69



遺構外-70



遺構外-71



遺構外-72



遺構外-73



遺構外-74



遺構外-75

PL114 萩原遺跡





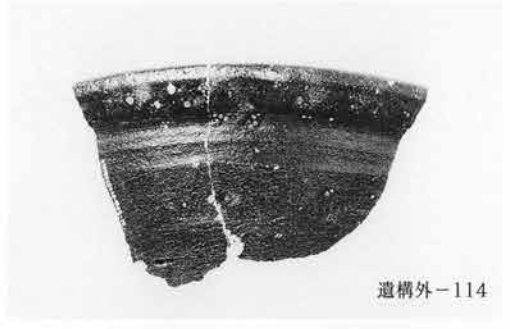
PL116 萩原遺跡



遺構外-109



遺構外-112



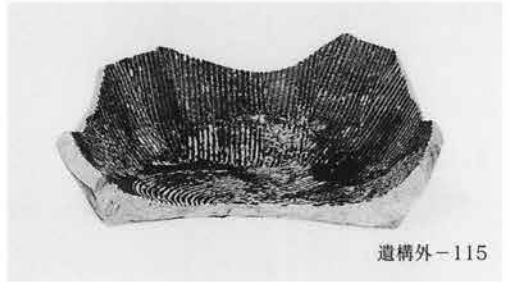
遺構外-114



遺構外-110



遺構外-113



遺構外-115



遺構外-111



遺構外-116



遺構外-117



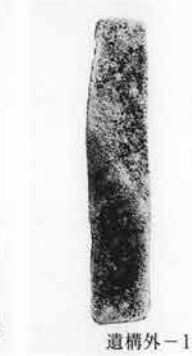
遺構外-118



遺構外-119



遺構外-122



遺構外-123



遺構外-124



遺構外-120



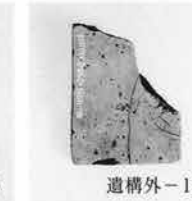
遺構外-121



遺構外-125



遺構外-126



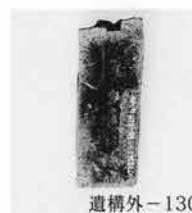
遺構外-127



遺構外-128



遺構外-129



遺構外-130



遺構外-131



遺構外-132



遺構外-133



遺構外-134



遺構外-135



遺構外-136





遺構外-137



遺構外-138



遺構外-143 上面



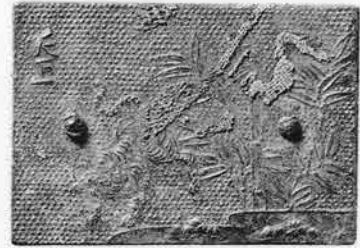
遺構外-143 底面



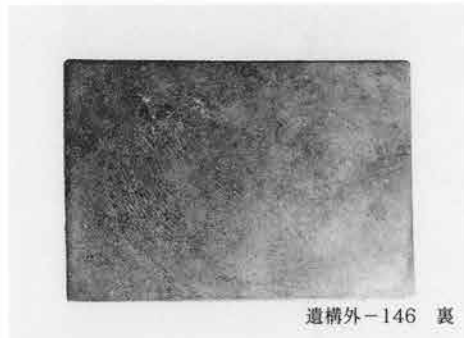
遺構外-140



遺構外-144



遺構外-146 表



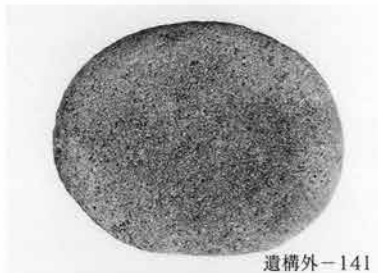
遺構外-146 裏



遺構外-139



遺構外-142



遺構外-141



遺構外-145 表面



遺構外-145 裏面



遺構外-147



遺構外-148

P L 118 新井大田関遺跡



As-B下全景（南から）



As-B下水田全景（南西から）



As-B下水田全景（南東から）



A区西台地部水田耕作下セクション（北から）

PL120 新井大田関遺跡



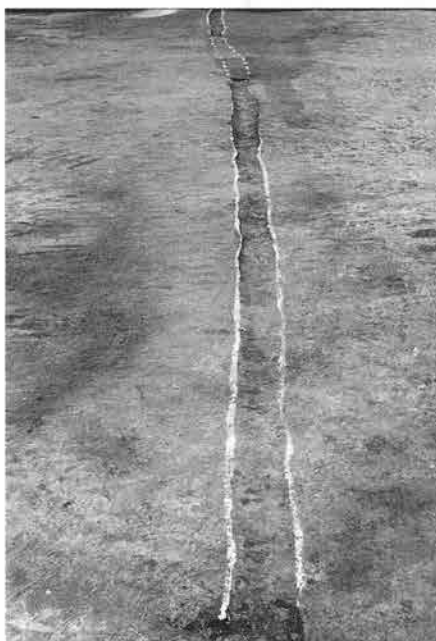
1号溝全景 (南から)



2、3号溝全景 (南から)



4号溝全景 (南から)



7号溝全景 (南から)



8号溝全景 (南から)



7号溝セクション (南から)





9世紀面全景（南から）



9世紀面全景？（南から）



PL122 新井大田関遺跡



現在の水田と道路の段差



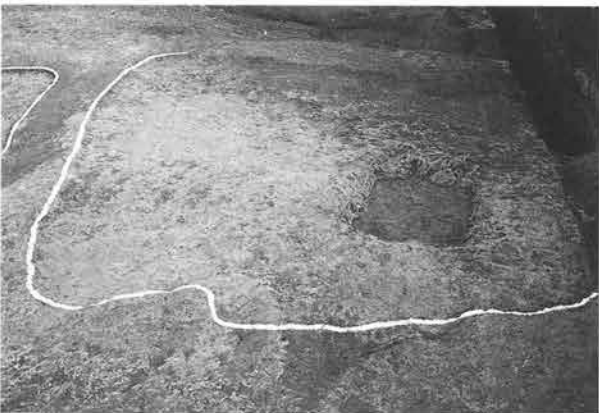
東微高地部段差



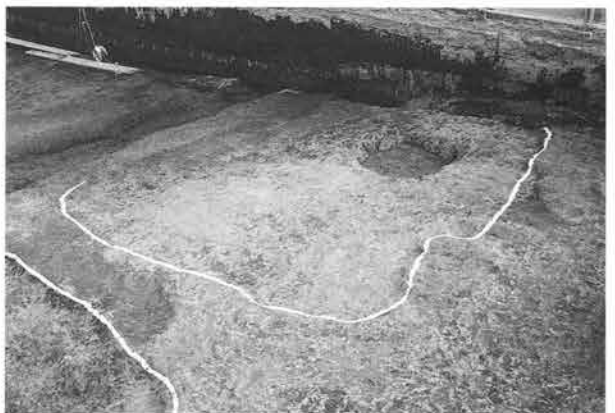
西微高地部段差



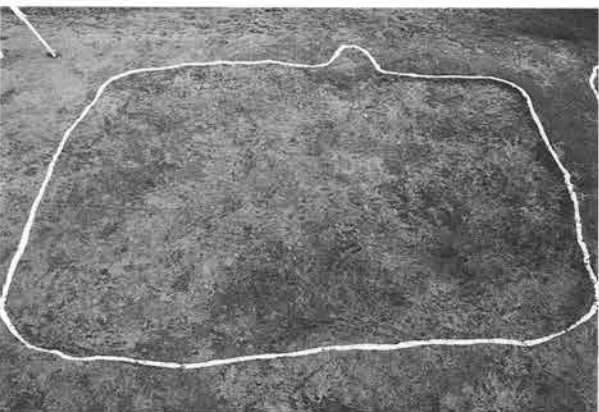
西微高地部段差



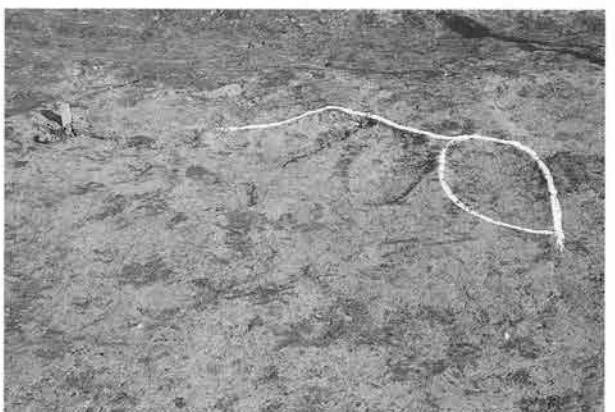
A区1、2号住居跡全景（西から）



A区1、2号住居跡全景（北西から）



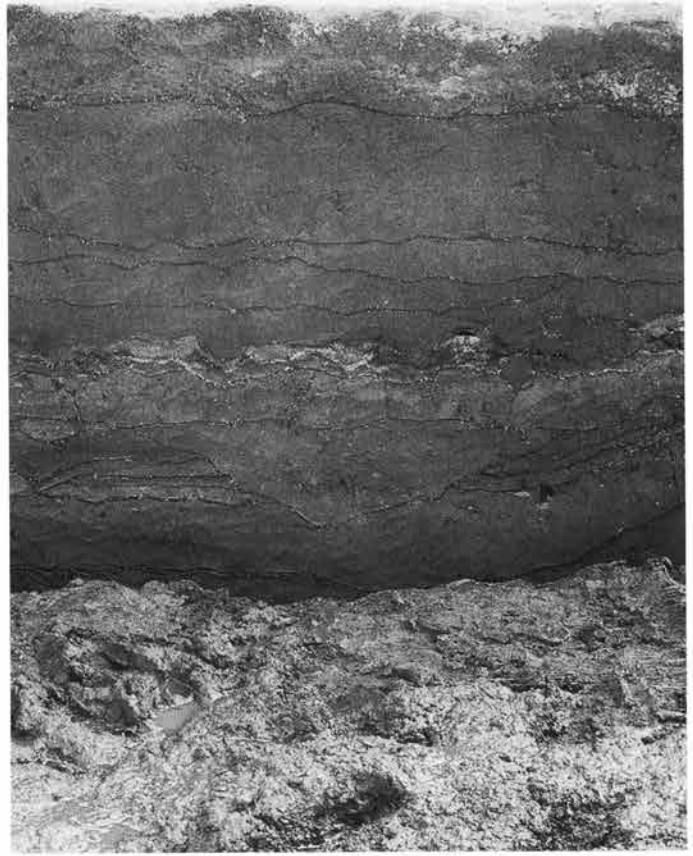
A区3号住居跡全景（西から）



A区4号住居跡全景（西から）



5号溝全景 (南から)



5、6号溝セクション (北から)



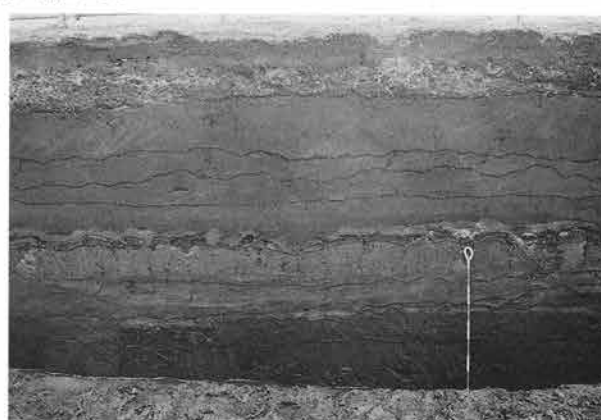
As-C下面全景 (南から)



As-C下面全景 (南から)



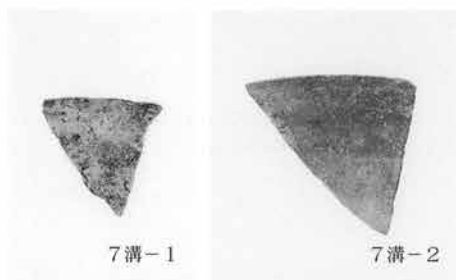
6号溝全景 (南から)



南壁土層断面 (北から)



5、6号溝セクション (北から)





P L 126 新井大田関遺跡



1住-9



1住-10



1住-11



1住-12



1住-14



1住-15



3住-6



3住-2



3住-3



3住-4



3住-5



3住-1



3住-7



4住-1



4住-2



5溝-1



5溝-2



5溝-3



5溝-4



5溝-6





5溝-5



5溝-7



5溝-8



5溝-9



5溝-10



5溝-11



5溝-12



5溝-13



5溝-14



5溝-15



5溝-16



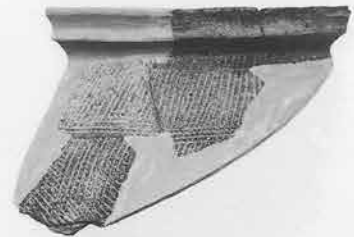
5溝-17



6溝-1



As-CT下-1



As-CT下-2



As-CT下-3



As-CT下-4



As-CT下-5





財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第337集

萩原遺跡・新井大田関遺跡 北関東自動車道建設に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告書

平成16年12月10日 印刷

平成16年12月17日 発行

編集／発行 財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

〒377-8555 勢多郡北橋村大字下箱田784番地の2

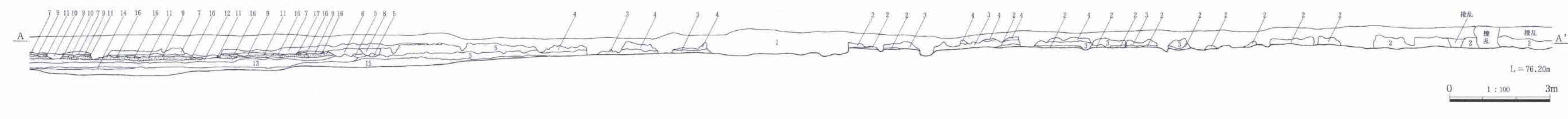
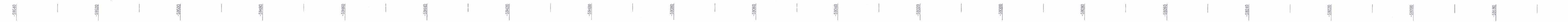
電話 0279(52)2511(代表)

ホームページアドレス <http://www.gunmaibun.org/>

印刷：/ 川島美術印刷株式会社



# 付図 萩原遺跡全体図



南壁セクション

1 褐色土	現耕作土	9 黒褐色土	As-B多く含む砂質土
2 黄褐色土	黄褐色砂質土主体	10 褐色土	7・9・11層士の混土
3 黒褐色土	白色軽石 (軽0.2mm前後多く含む)	11 褐色土	As-B一次堆積層
4 黒色土	As-C多く含む	12 褐色土	As-B下水田耕作土
5 黒色土	As-C多く含む黒色土主体、暗褐色土少し混じる	13 暗褐色土	As-C多く含む弱粘質土
6 褐色土	褐色土主体、砂・小礫・As-B少し含む (1号溝)	14 暗褐色土	As-C非常に多く含む
7 褐色土	砂礫主体	15 褐色土	ハマスを含まない弱粘質土
8 褐色土	砂・As-B主体 (5号溝)	16 紫色	As-Bアッシュ
		17 暗青灰色土	As-KK一次堆積層